
テイルズオブエクシリア ～異端の迷い人～

木葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア ～異端の迷い人～

【Nコード】

N0784X

【作者名】

木葉

【あらすじ】

普通の高校生の西風海斗は、ある日事故に遭ってしまふ。次に目を覚ました時、彼は何故かリーゼ・マクシアに居た。彼の存在は、リーゼ・マクシアにとって異端なのか？ それとも

更新は不定期になる可能性があります。

主人公設定1

《西風 海斗》

(にしかざ かいと)

年齢：17

身長：170

一人称：俺

武器：両刃直剣

この二次創作小説の主人公。とある公立の高校生だったが、事故に遭い何故かリーゼ・マクシアに飛ばされる。

困ってる人を見るとほっとけない程のお人好しで、よく厄介事に巻き込まれる。運動神経は可もなく不可もなく普通。

戦い方は剣士タイプ。速さはジュードより少し遅い。

特性は『連撃』。技を繰り出した後に追加で攻撃する。

固有サポートは『見切り』。相手の動きの予測や弱点を突く。

主人公設定1（後書き）

術技は別のページでまとめる予定です。

術技説明　　く基本編く（前書き）

主人公が初期段階から使用する術技です。

術技説明 基本編

《武身技》

- ・瞬突

手に持った剣の柄で敵を突く。

- ・魔神剣

剣を振り抜き地を這う衝撃波を飛ばす。

- ・瞬迅剣

素早く突進しながら行う突き攻撃。

- ・虎牙破斬

飛び上がりながら斬り上げ、落下しながら斬り落とす。

- ・真空破斬

高速で振り抜き鎌鼬で斬り裂く。

《昇華技》

- ・瞬牙突

瞬突から昇華。

瞬突で突いた後、刃で突き刺す。

- ・魔神剣・双牙

魔神剣から昇華。

2発同時に魔神剣を飛ばす。

・瞬迅回帰

瞬迅剣から昇華。

瞬迅剣で突いた後、後ろに飛び退きながら斬り上げる。

・虎牙連斬

虎牙破斬から昇華。

斬り上げてから空中で斬りと蹴りを行い最後に斬り落とす。

・龍爪旋空破

真空破斬から昇華。

鎌鼬によって出来た真空の空間に敵を閉じ込めて、さらに真空の刃で斬りつける。

術技説明 く基本編く（後書き）

基本の技は大体こんな感じですよ。

第1話 知らない街（前書き）

テイルズオブエクシリアの二次創作に挑戦してみました。

一応原作に沿っていくつもりですが、セリフが抜けていたり原作に無い事があつたりするので、そこはご了承ください。

第1話 知らない街

「うわああッツ！？ ひかれた！？ 絶対死んだあっ！？ って、あれ？」

確かにひかれた筈なのに、起き上がった俺の身体には傷一つ付いていない。

むしろ健康体そのものだ。

なら、ひかれたのは夢だろうか？ と言う疑問は一瞬で頭から消え去った。

何故なら、

「ここ、どこ？」

さっきまで昼だった筈なのに、今はもう暗くなっているし、街灯は見た事の無いデザインだ。

…… ええっと、大丈夫だよな？ 俺。

「名前は西風海斗。17歳。成績は中の上。趣味は読書…… うん、記憶は完璧だ」

で、確か下校途中に変な石を拾って、それが光ったと思ったら……
…トラックにひかれたんだよなあ……。

ブルーになりつつも、別に記憶障害になった訳ではない事が分かってから、俺はもう一度辺りを見回した。

見た事のない、結構綺麗な街並みだけど、近所にこんな場所は無かった筈だ。

「おいお前！ 何をしている？」

「え？」

そんな時、いきなり声を掛けてきたのは、赤い鎧を着た兵士（？）だった。

……何コレ？ ああ、これがあの有名なコスプレって奴か。ちゃんと剣みたいなのもあるし、結構凝ってんのな。

「怪しい服装だな。何者だ？」

怪しい格好の奴に怪しいって言われた！？

「俺のどこが怪しいんだよ？ ちゃんと制服着てるだろ？」

まあ、公立校では珍しくブレザーだけどさ。それでもこんな鎧を着た奴よりかは怪しくない筈だ。

と思っていると、兵士が剣を抜いてきた。

「抵抗しなければ痛い目に遭わずに済むぞ？」

めちゃくちゃだ！？

しかも何か、こいつが持つてる剣、マジモンっぽいんだけど？
こりゃあれだ……本当に逃げないとマジで捕まるらしい。

「あ、ああ……分かったよ、抵抗しない。だから剣を収めてくれよ」

数秒間があつてから、兵士が剣を鞘に入れようとした。良かった、分かってくれたようだ。バカめ。

「隙ありっ！」

「何っ！？」

俺は半分鞘に入っていた剣の柄を蹴り上げた。兵士が手を離れた瞬間、鞘ごと剣を盗った。

そして、

「じゃあな、二度と会いたくねえけど」

一目散に逃げ出した。

とにかく、この街みたいな所から出ないと。こんな物騒な所に長居していると、マジで殺られかねないからな。

* * * *

しばらく走って十字路のような場所に出て、後退りながら後ろを確認する。

「ふう……撒いたかな……。それにしても、俺が何やったってんだ？」

いきなり剣 確認したら本物だった 抜きやがって。殺す気か？

しかも走ってて思ったけど、どうやらここは俺の住む街 いや、日本ですらないみたいだ。看板とかいろいろあったけど、何一つとして日本語で書かれてる物が無かった。

……ならここは本当にどこなんだ？

「わっ、と……」

「あ、すいません」

考えながら歩いていたら、人とぶつかってしまった。

ぶつかった人を見てみると……な、何て露出度の高い格好で！？
しかもスタイルが良い、綺麗な女性だった。

……こんな人も世の中には居るんだなあ。

「どうした？ 私の顔に何か付いてるのか？」

「へー？ ああ、いや……そういう訳じゃ……」

身長もあまり変わらない女性が、首を傾げてきた。
何だか現実には居るような人な感じがしないな。

「ふむ、外にはこんな服装もあったのか？」

「ううん、僕もこの服装を見るのは初めてだよ」

女性の傍らに居た背が低い少年が首を横に振った。

今さらながら、この2人も見ない服装をしている。さらに女性の方は、腰に剣のような物があつた。

とは言え、さっきの兵士のように問答無用で抜いてくる様子はない。一安心だ。

多分、普通に話を聞いてくれるだろう。

「あの」

「ジュード、早く海停に行くぞ？ もたもたしている暇は無いのだからな」

「あ、そうだね」

ジュードと呼ばれた少年が頭を少し下げて、女性と一緒に歩いて行ってしまった。

……どうしよう、せっかくの常識人を逃がしてしまった。

「居たぞ！ あそこだ！」

呆けていると、後ろからそんな声が聞こえてきた。兵士が追い掛けてきたらしい。さらに、前の通路からも兵士が来ていた。

くっ……どうする。左は建物があるだけで逃げられそうにない。なら

俺は消去法で、そして偶然にも先ほど2人が姿を消した方の通路へ走り出した。

第1話 知らない街（後書き）

とりあえずこんな感じで進めていきます。

第2話 港の出逢い

2人を追い掛けた訳じゃないが、辿り着いた先は港で、そこに先ほどの2人も居た。

「その3人、止まれ！」

そして、2人にほとんど追いついたと同時に、後ろからそんな声が聞こえた。

3人つて……俺と、まさかこの2人だろうか？

「ん？ お前は先ほどの……。お前も追われていたのか？」
「……ども」

やっぱり、この2人も追われていたらしい。

「タリム医学校の、ジュード先生？」
「エデさん！？」

そして、追い掛けてきた兵士の1人と、ジュードと呼ばれた黒服の少年は顔見知りらしい。

医学校で先生つて……凄いな！？

「まさか、先生が要逮捕人だったなんて」
「エデさん、何が起きてるの？」

「ジュード・マティス、逮捕状が出ている。その女と、その怪しい服装の男もだ」

また怪しいって言われた！？

こつちとしてはお前らの方が数十倍怪しいっての！

「軍特法によって応戦許可も出ている。抵抗はしないでください」
「そんな……確かに迷惑掛けるような事はしたかもしれないけど、重罪だなんて！」

この2人、何したんだろう？ 話は見えないけど、何かヤバげな事やらかしたのか？

と言うか、俺に至っては何も悪い事なんかしてないんだけど……。強いて言うなら剣を盗った事だろうか？ でもあれは正当防衛で許される範囲内だよな、な？

「ジュード、私はここで捕まる訳にはいかない。抵抗させてもらう」

女性が剣を抜くと、エデと呼ばれた人が頷いた。

「応戦意思を確認。攻撃する」

兵士が身構え、1人の兵士の杖のような物が赤く光り、炎の球が飛び出した。女性とジュードが避けると、何かの売店みたいな所に命中した。

その途端、集まっていた野次馬が四散して行った。
てかあの炎は何！？ 某ゲームの初級単体魔法ですか！？
と、その時、船の方から汽笛が鳴り響いた。

「ジュード、世話になったな」

そう言い残して、女性は船に走って行った。ジュードの方は、女性を見送るだけだ。仲間じゃなかったのか、この2人。

「いいのか？ あの人行っちゃまうぜ？」

「僕は……」

「ジュード先生、抵抗すれば罪が重くなるだけですよ？」

ジュードが悩んでいる間に、既に兵士が間近に迫っていた。

ヤバイ、俺も逃げないと。と思った瞬間、コートを着た背の高い男性が兵士を殴り飛ばしていった。

また訳分らない状況になったなあ……。

「連れが行っちゃまうけどいいのか？」

「でも……」

「あー、んな悩んでる場合かよ！ 追われてるのにここに止まるのは、捕まえてくださいって言うてるようなもんだぞ！」

ハッキリしない態度についつい怒鳴ってしまった。
だって、早くしないと逃げられなくなりそうだし。

「そーそー、その少年の言う通りだ。君は既にSランク犯罪者。捕まったら極刑だぜ？」

「そんな……！？」

「ほら、悩んでる時間ねえぞ。また兵士が来た」

俺は言うつと船に向かって走り出した。こうなったら船に乗ろう。
後の事はそれから。まだ頑張れば乗れる距離だ。

ジュードと男性も走り出したみたいで、背後から声が聞こえた。

「つて、わっ！？」

「お2人さん、舌噛みたくなかったら喋るなよ」

男性は俺とジュードを抱えて、高く積まれた積み荷を足場に、船

に向かって飛翔した。

「だぶっ！？ ごっ……………ばっ！？」

「いってて……………」

船に着地した瞬間投げ出されて、転がって壁に激突してしまった。
後頭部が痛い。

「お、おい……………あんた達……………」

「いやあ、軍が重罪人を追ってるらしくてさ。でも、こんなイイ男と女子供が重罪人に見える？」

不審がっていた船員達に、男性がそう言っでごまかしていた。
俺とジュードは、同時に男性に近づいた。

「アルヴィンだ。君はジュードって言ったな？」

「あ、うん。こっちはミラ」

ジュードは女性を見ながらそう言った。あの露出度の高い女性はミラと言っらしい。

「で、おたくは？」

「俺？」

「そ、見慣れない服装のおたくだ」

知らない奴に名乗りたくはないけど、何だか助けられたみたいだし、いろいろ聞くにはやっぱり名乗った方が良いか。

「俺は西風海斗だ」

「ニシカザ？ 変な名前だな」

「いや、名前は海斗の方だ。西風は名字」

「見慣れない服装だけど、どこ出身なの？」

「どこって、東京」

「トウキョウ？ どこだそれ？」

……あれ？ 通じてないのか？

「いや、だから、日本の東京だよ」

「うーん、聞いた事無いけど……」

「うむ、私も聞いた事は無いな」

いつの間にかミラも話に加わっていた。
ってか、俺はそんな辺境の地に居るのか？

「じゃあ……ここはどこなんだ？」

「おいあんた達、ちょっといいか？」

やっと聞けると思ったのに、今度は船員に話し掛けられてしまった。

「途中で乗船してきたんだ。身元の確認をさせてくれ」

船長に拘束されてから数十分後。やっと解放されて甲板に出る事が出来た。

うん、太陽の光が眩しい……って太陽無いし！？

「あの船長、いつまで尋問する気だったんだ？」

「身分が分からなかったんだ。仕方なかるう？」

「そりやおたくがだろ。後少年だ」

「俺はちゃんと身分証あったっての」

「理解されなきゃ意味ねえよ」

そう、俺の身分証は何故か理解してもらえなかった。まあ、東京とか日本とか理解されなかった時点でおかしいと思ったけど。

「ア・ジュールなんて、外国だよ……」

甲板に戻ると、一番最初に解放されたジュードが黄昏ていた。

「それにしても、医学生だったとはね」

アルヴィンがそう言いながら空を仰いだ。

「ほら、イル・ファンの夜域が終わるぜ？」

刹那、空が夜から昼間の青色に変わった。
な、何のマジック！？

「アルヴィンは、何で助けてくれたの？」

「あ、確かに。普通はあんな所で助けないよな」

「それはな、金になりそうだからだ」

「何故私達を助ける事が金になる？」

「比較的ヤバイ感じの奴らってのは、大抵金を持ってるからな」

どんな理屈だそれは？

「僕……そんなにお金持っていないよ？」

「生憎、私もだ」

「右に同じ」

財布には300円しか入ってない。

そもそも、ここで日本の貨幣が使えるのか謎だしな。

「アルヴィンって、何の仕事してるの？ 軍みただけど、何か違う気がするし」

「お、いい線いつてる。傭兵だよ、オレは」

「傭兵って、『報酬に応じた仕事する』職業？」

よくゲームとかでもあるよな、そういう職業。

「そうそう、『金は貰うけど人助けする仕事』」

何故だろう。めちゃくちゃ胡散臭く聞こえるのは。

「ほう、いい心掛けだな。金は払えんが」

「まあ、無理なら金目の物でもいいぜ？」

渋々といった様子で言ったアルヴィンだったけど、俺達は首を振った。

「無いよ……あんな状況だったし」

「ニ・アケリアでなら、何か払えるかもしれんがな……」

「俺も無いかな」

学生に金目の物なんてある訳無いじゃないか。

「はあ……ボランティアかよ……仕方ねえ……」

アルヴィンは落ち込んだように、海を眺めた。

「あ、聞きたい事があるんだけど」

話が一段落した所で、手を上げながら言った。

「ここって、どこ？ 何て国？」

「どこって……今はラ・シュガルとア・ジュールの間。って所か」
「は？」

聞いた事が無い国名に驚いた。いや、もしかしたら俺が知らないだけで、そんな国もあるのかもしれないけど。

「そう言えば、さつきカイトが言ってたトウキョウとかニホンとか、
やっぱりリーゼ・マクシアには無いよ」

「……リーゼ、何？」

「リーゼ・マクシア。この世界の名称も知らないのか？」

3人から、凄く不審な視線を浴びた。

「ちょ、ちょっと待て」

もしかしたら常識的な事なのかもしれない。俺は携帯を取り出して検索ツールを立ち上げた。

「って、圏外かよ！」

調べられないじゃん！？

「ねえ、それ何？」

「見た事の無い物だな」

「ああ、オレも見た事ないな」

「え？」

今度は3人が聞いてくる番だった。

「携帯電話。知らないのか？」

問い掛けると、全員が頷いた。

これまでの事をまとめると、

ここはリーゼ・マクシアと言う世界。日本は存在しない。

携帯電話も存在せず。

国はラ・シュガルとア・ジュールの2国。

つまり……薄々感ずいてはいたけど、まさか……

「ここは……異世界？」

そう考えれば辻褄は合う。

あのトラックにひかれた時、何らかの原因でこの世界に来たんだ。信じられないけど。

「異世界とは……どういう事だ？」

「分からない。だって俺は、日本って国の東京に居た筈なんだ。リーゼ・マクシアなんか知らないよ」

「おいおい、マジか？」

「……でも、カイトの服装とか、持ってる携帯電話、身分証を見た限りじゃ辻褄は合うよ。信じられないけど」

まさか、異世界に来れるなんて。ゲームとかの世界じゃないか。

「つまり、カイトはこことは違う世界の住人で、何らかの原因でここに来た異世界人。と言う訳だな？」

「多分、そうなるね」

ミラがまとめて、ジュードが頷いた。

「つと、話は後だな。そろそろイラート海停に着くみたいだぜ？」

アルヴィンがそう言った先には、陸地が見えてきていた。

第2話 港の出逢い（後書き）

いろいろとセリフが抜けてたり違ったりしますが、温かい目で見守ってください。

感想も随時募集中です。

第3話 依頼と共鳴（前書き）

セリフが…何か違うかもしれないです。
すみません…。

第3話 依頼と共鳴

「外国って言っても、あんまり変わらないんだね」

船から降りた第一声は、ジュードのそれだ。俺には何が変わらないのか分らないけど、この世界の人が言っただ。きっとあまり変わらないんだろうな。

「ア・ジュールってもここらへんはな」

「そうなんだ。あ、地図がある。見てくるね」

そう言っで、ジュードは地図を見に行った。

「何だか、無理してるみたいだな。ジュード」

「空元氣ってやつだな」

「ふむ、見た目程幼くはないようだな」

「めちやくちや他人事みたいに言ってるけど、おたくが巻き込んだんじゃないか？」

「ジュードが決めた事だからな。私は再三帰れと言ったんだ」

「自分で決めたからミラに当たれない。だから空元氣か……」

自分の行動に後悔してないなら別にいいと思うけどな、俺は。みんなでジュードの所に行くと、ミラも地図を見始めた。

「ニ・アケリアは北か……。アルヴィン、傭兵と言う事は戦闘には自信があるんだな？」

「そりゃあな」

「なら、私に剣を教えてくださいませんか？ 今のままでは、魔物にすら勝てるか分からないからな」

「魔物!？」

出てきた単語に、再び驚いてしまった。

「ま、魔物なんか居るのか？」

「え、うん。街の外には大抵は居るよ」

マジか？ さっきの街で不用意に外に出ないで良かったなあ。

「剣ねえ……むしろオレを雇ってほしいぐらいなんだが」

「金は無いぞ？」

「なら、稼ぎながら教えるのはどうだ？」

アルヴィンの説明をまとめると、困ってる人を助けて金を稼ぎつつ、かつ剣の稽古をするらしい。

なるほど。それならミラの剣も上達するし、アルヴィンも稼げて一石二鳥って訳か。

そんな訳で、さっそく困ってる人を探してみると、本当に居た。

「海停の近くに魔物が住みついてしまつて、危険が広まる前に退治してもらえませんか？」

と言う話を受け、さっそく依頼をする事になった。

「ま、その前に、ある程度振れるようにはしとくか」

「うむ、よろしく頼む」

「あのさ、アルヴィン。俺にも剣教えてくれないか？」

「「え？」」

何故かアルヴィンとジュードに驚かれた。

「魔物が普通に居る世界なんだろう？　だったら、剣を扱えた方が何かと得だろ？」

「得かどうかは分からねーけど、じゃあ3人でやるとしますか」

こうして、剣の基礎をアルヴィンに教えてもらったのだった。

とりあえず、ミラは剣の振り方だけで、俺は基礎から簡単な技を教わった。

「ま、こんなもんか」

「それじゃ、早速行こうよ」

特訓が終わると、待っていたジュードが促して、俺達はようやく魔物退治に行くのだった。

イラート間道に出てすぐに、みんなが言う魔物の姿を発見した。少し、というかなんまり怖いけど、みんなが武器を出していたから、俺も剣を抜く。それとほとんど同時に、ポケットに入れていた拾った石が光り出した。

「わわっ、何これ!？」

「リアルオーブが光ってる？」

俺のと同じように、ジュード、ミラ、アルヴィンの持っていた石リアルオーブと言うらしい　が光っていた。

「みんなリアルオーブ持ってたのか」

「カイトまで持っているとはな」

ひかれる前に拾った石が、まさかこの世界のアイテムだとは……俺もびっくりだ。

「それなら、共鳴^{リンク}戦闘いつてみるか！」
「リンク？」

問い掛けたのは、俺ではなくジュードだった。
俺だけじゃなくて、ジュードとミラも知らないらしい。

「リアルオーブには仲間の意識を共有する力がある。それを利用すれば共鳴^{リンクアーツ}術技が発動するって訳だ」
「具体的にどうすれば？」
「ま、百聞は一見に如かずってな。リアルオーブに意識を集中しろ！」

アルヴィンの掛け声で全員がリアルオーブに集中すると、さらに光が増した。

それが合図となり、戦闘が始まった。
陣形としては、ミラとアルヴィンが特攻を仕掛け、ジュードがそれをサポートしていた。俺は言わずもがな足手まといだよ、悪いかっ！

仕方ないだろ、怖いんだから！

「そろそろ共鳴^{リンクアーツ}術技いけんじゃね？」

アルヴィンがそう言って、ジュードとミラが頷いた。

「行くよ、ミラ！」
「ああ、任せろ！」

ジュードが魔神拳、ミラがウインドランス 術名はさつき教えてもらった を放ち、タイミングが合った所で、共鳴術技リンクアーツが発動する！

「切り裂け真空！ 絶風刃！！」

2人が拳と剣を振り上げ、クロスに重なった風の刃が、魔物を一撃で切り裂いていった。

何と言うか、

「めちゃくちゃカッコイいな！ アルヴィン、俺達も出来るのか？」
「共鳴リンク出来てるからな。とりあえず、オレはおたくに合わせるぜ？」
「分かった！」

俺は足手まといにならない程度に前に出て、剣で魔物を斬りつける。

先程の特訓で教わった魔神剣を放ち、魔物が怯んだ。

「今だ、アルヴィン！」

「おっしゃ！」

「走れ衝撃！ 魔神連牙斬！！」

1発ずつ魔神剣を放ち、トドメに2人で大きな衝撃波を飛ばして、魔物を消し飛ばした。

出来たけど……さすが共鳴リンク。まさか技名まで重なるとは、少しビツクリだ。

ジュードとミラ、俺とアルヴィンの2組の共鳴術技リンクアーツによって、近くに居た魔物は全て片付いた。

「凄いな、共鳴！」^{リンク}

「いい感じだな」

「うん、1人じゃないって感じがして嬉しいね」

「良い事言っねえ、ジュード君」

戦いが一段落着いて、武器をしまう。

戦闘中に1人じゃないのが分かるだけでも、こんなに良いものだとは……。ジュードの言葉には賛成だな。

「そーいや、こちら辺になんとかいう村があったな。行ってみるか？」

魔物と戦いながらしばらく道を進み、一段落着いた所でアルヴィンが突然そんな事を言った。

「頼まれた仕事、まだ終わってないよ？」

「優等生、そんなんじゃ肩凝るぜ？」

「でも、アルヴィンに払う報酬の為にやってる仕事だろ？ 投げ出すとアルヴィンが困るんじゃないか？」

俺が言うと、アルヴィンが首を振った。

「依頼つてのは自分のペースでやりゃあいいの。そもそも、オレの報酬と2人の剣の指導が目的なんだし、良い仕事があるならそっち優先でいいんだよ」

「そういうものなの？」

「そついうもんだ。ま、雇い主はそつちだ。行くも戻るもおたくら次第つてな」

めちやくちゃアバウトだな。まあ、傭兵ってそういうもんなのかもな。

とりあえず、今受けている依頼をこなす事に決定し、魔物が居るらしいイラート間道を散策した。

「ねえ、あれじゃないかな？ 依頼された魔物って」

イラート間道の西の方を散策していると、ジュードがそんな事を言った。

「確かに、ここいらでは見ない魔物のような」

「んじゃ、パパツと片付けるか」

「ああ、サクツと行こうぜ」

みんなが武器を出した瞬間、魔物が襲いかかってきた。

亀のような魔物と……何だあれ、鹿？ まあ、ちよつと強そうな魔物だな。

「瞬迅剣！」

亀の魔物に高速の突きを放つ。が、

ガキンッ！

「っ！？ こいつ、堅いなやっぱり！」

「ガードはオレが崩すぜ！」

アルヴィンが銃で撃ち、亀の堅い甲羅を打ち破る。

「サンキュ、アルヴィン」

俺はガードの崩れた亀に、先ほどと同じように瞬迅剣を放つ。そして思い付いた。

「瞬迅、回帰！」

高速で突きを放ち、後ろに飛びながら斬り上げる二段攻撃。ちなみに、瞬迅剣もアルヴィンから教えてもらっていた。

「へえ、瞬迅剣を改良するなんてな。しかも戦闘中に」

「いや、ただの思い付きだよ」

「ふむ、カイト。今の技で共鳴術技だ」
リンクアーツ

「え？」

「遅れるなよ！」

ちよ、待つてよ！？ ミラさん強引過ぎ！

「「爆ぜろ！ 紅蓮回帰！！」」

ミラがファイアボールを放つと、俺はそれに続くように瞬迅回帰を放ち、最後に炎の球を投げつけ、魔物を爆破した。

今の魔物で最後だったらしく、みんな武器をしまっていた。

「よし、決まった！」

「意外に戦い慣れているのだな」

「なかなかいいんじゃないか？」

戦いは慣れてないんだけどな……何か、動きが感覚的に分かって言いますか……。

「じゃあ、報告しに行こうか」

魔物も倒したし、ジュードの一言で、俺達はイラート海停に向かった。

「そう言えば、何でカイトはリリアルオーブを持ってたの？」

「ん、これか？」

帰る途中、ジュードに尋ねられた俺は、ポケットからリリアルオーブと呼ばれた石を取り出した。

「道に落ちてたのを拾ったんだ」

……その後ひかれたんだよな。

「カイトの世界にもリリアルオーブは存在していたのか？」

「いや、無かった筈だけど」

今考えてみれば、何で落ちてたんだろう？ リーゼ・マクシアの物が。

「と言うかお前ら、あんまり異世界とか人に言うなよ？」

「ん、どうしてだ？」

アルヴィンの言葉に、ミラが首を傾げた。

「オレ達はその異世界の証拠となる物を見たから一応は信じられたが、第三者からしてみれば頭おかしいと思われても仕方ないぜ？」

「あ……確かに。普通異世界なんか言われても信じないもんね」

アルヴィンとジュードの話は確かに頷ける。わざわざ説明するのも面倒だしな。

「そんな訳だから、あんまりカイトが異世界から来たとか言わないようにな？ もちろん、カイトも隠すようにしろよ？」

「ああ、分かったよ」

そう頷くのと同時に、俺達はイラート海停に着いた。

海停で依頼人に報告を終えて一段落着いた矢先に、突然ミラが倒れた。

「ミラ！ どうしたの？」

「大丈夫かよ？」

すぐにジュードが駆け寄り、額に手を当てた。

「熱は……無いね。どんな感じ？」

「……力が入らない」

ミラがそう答えた瞬間、

ぐううう……。……。

と、何か鳴った。何の音？ 腹？

「ねえ……ちゃんとご飯食べてる？」

「うむ、食べた事はないな」

「……一度も？」

ジュードの問いに、ミラが頷いた。

「一度もって……何、断食してんのか？」

「いや、今までシルフとウンディーネの力があつたから必要無かつたのだ……」

「は？」

「何言ってるの？」

どうやら訳が分かってないのは俺だけじゃなくてアルヴィンもらしい。

「栄養を精霊の力で取ってたって事だよ。でも、これからはちゃんと食べないとダメだよ？」

「そうか……これが空腹という感覚か」

注意するジュードだけど、何故か嬉しそうなミラである。

空腹が嬉しいって……何で？

とにかく、ここで話していても仕方ないので、海停の宿屋に向かう事になった。

「悪いね、まだ料理人が来てないんだ」

海停の宿屋に行き、料理を食べられるかを聞いてみてその一言だ。ミラが肩を落としたのは見なくても分かる。

……何と言うか、間が悪いな。

「あの、厨房はお借りできますか？」

「構わないよ。その娘がそんな状態だからね。好きに使っていいよ」

「ありがとうございます」

ジュードが飯を作る事になったみたいだけど、俺も手伝うか。魔物退治は迷惑掛けたし。

「俺も手伝うよ」

「ありがとう、じゃあ、アルヴィンとミラは少し待っててね」

「おう、なるべく早く頼むわ」

「お腹と背中がくっつくか……なるほど……今なら意味が分かるな……」

ミラの呟きを聞いた俺とジュードは、本当に早くしないとと思い、急いで厨房に行った。

数十分後。

出来た料理を2人が待つテーブルに運び、ようやく食事になりつける事が出来た。

それにしても驚いたけど、俺の世界とこのリーゼ・マクシアの食文化はあまり変わりが無いようだった。

普通にジャガイモとか人参とかあるし、でもサイダー飯は無いな。あれはさすがにムリ。

「お、美味しいな」

「それだ！」

食事を進めていて、アルヴィンの呟いた言葉にミラが叫んだ。

「食事というのはなかなか楽しい。人は、もっとこういうものを大切にするれば良いのだ」

嬉しそうにそう言い、またガツガツ食べ始めた。

何か、人じゃない言い方をするな。

そして、飯を食べ終えたミラは、そのままテーブルに突っ伏して寝てしまった。

「それにしても、ミラって何だか不思議だよな。何者なんだ？」

「おたくが言うのか……まあ、オレも気になってはいたけどな」

「ミラ……マクスウェルらしいよ」

「マクスウェル！？ マジかよ……」

は？ 何ソレ？ と言う前に、アルヴィンがめちゃくちや驚いていた。

「僕も少し話を聞いたただけなんだけどね」

「そもそも、マクスウェルって何だ？」

「マクスウェルってのは地水火風の大精霊を従えてる 言わば精霊の主だ」

「……精霊？」

よくファンタジーに出てきそうな単語だ。よくあるのはあれだ、イフリート？

「精霊って言うのは、この世界じゃ常識なんだけどね」

話を聞くと、この世界には精霊が住んでいるらしい。街灯とか火とか、その他諸々を精霊の力 精霊術と言うモノを利用しているらしい。

魔物退治の時に見た、ミラのウィンドランスとかファイアボールも精霊術。ジュードの治癒功と言う技も、精霊術の応用らしい。それらを使うには、^{ゲート}霊力野と言う所から出るマナを使うらしい。異世界から来た俺には無さそうだな、^{ゲート}霊力野。

「で、精霊の凄いのが大精霊。それを従えてるのがミラって訳か」
「うん、僕はこの目で見たからね。四大精霊をミラが使役してるのを」

「そりゃ、普通じゃない訳だな」

何か……凄い人と一緒に居たんだなあ。言ってみれば芸能人と居る。みたいな感覚だろうか。
凄いなあ。と思うのと同時に、付いてっても大丈夫なんだろうか
と、逆に心配になってきてしまった。

「ま、何はともあれ今日はもう休もうぜ？ おたくらも疲れたろ？」

俺がいろいろ悩んでる間に話が進んでいて、とりあえず今日はみんな休む事になった。

第3話 依頼と共鳴（後書き）

↓ 今回の共鳴術技 ↓

・ 紅蓮 回歸

瞬迅剣＋ファイアボール

カイトとミラの共鳴術技。瞬迅剣で突き、後ろに斬り上がったから炎の玉を投げ飛ばす。

第4話 旅の始まり（前書き）

今回は少し、というよりかなり短いです。
尺をミスりました（笑）

第4話 旅の始まり

異世界 リーゼ・マクシアへ来てから翌日、慣れない旅先のベッドはとても寝心地が悪かった。

……すんません嘘です。めっちゃ寝心地良かったです。むしろもう毎日でも良いぐらい。

部屋には既に誰も居なくて、俺は急いで身支度をしてロビーに下りた。

「おはよう、みんな」

「来たか、カイト」

何やら話していた3人だけど、俺の姿を見て話を切り上げていた。

「早速だか2人共、これからの事で話がある」

とミラが俺とジュードに向かって言った。

ジュードは少し俯いていたけど、何でだろうか？

「私はこれからニ・アケリアに帰ろうと思っている」

「ニ・アケリア？ それって、ミラが住んでる所？」

「うむ、正確には祀られているがな」

祀られんのか！？ さすが……えっと……精霊の主、だっけ。

「そこに帰れば四大を再召喚出来るかもしれん」

「マジでマクスウェルなのな……」

アルヴィンはまだ信じられてないのか、そう呟いてた。

「そこで、ジュード、カイト、私と一緒に二・アケリアに行かないか？」

「「え？」」

ミラの予想外の提案に、俺とジュードは同時に声を上げていた。

「今のジュードの状況は見から出た錆というものだが、私の責任でもあるのも、また事実。カイトも特異な身の上だ。二・アケリアの者たちに私が口添えをしよう。きっと君達の面倒をみってくれるはずだ」

「意外に考えてんのな」

「お前にまるで他人事と言われたのでな。少し反省してみた」

反省して引き取ってくれるって……懐大きすぎだな。

「……分かった。僕も一緒に行くよ」

「うむ、お前はどつする？」

ジュードの答えに頷いたミラが、俺に尋ねてきた。

「もちろん行くよ。むしろ断る理由が無い」

「そうか、なら決まりだな」

「じゃーいろいろ準備しろよ？ 旅先は危険でいっぱいだからな」

俺達の話がまとまった所で、アルヴィンがそう言い出した。

「アルヴィンも来るのか？」

「ったり前だろ？ 二・アケリアに行けば報酬貰えるしな。何より、

「お前ら2人に剣教える約束だしな」

「ああ、なるほど」

何故かミラも納得していた。あんたが言ったんじゃなかったのか？ そんなツツコミはさて置き、アルヴィンの言った通りに準備をしてから出発する事になった。

「確か、ここから北なんだよね？ どれくらいで着くの？」

「シルフの力で飛んだなら、半日も掛からない距離だな」

「……いや、^{たと}喻えが分からない」

そもそもシルフの力って何だ？

「とにかく北に行けばいいだろ？ 途中で休む所がありゃあいいがな……」

「ガンガン行こうぜ！ って事だな」

某作戦名を使ってしまったけど……問題無いよな、多分。そんな訳で、俺達はイラート海停を出発するのだった。

「しかしまあ、まさかマクスウェル様と旅する事になるとはなあ。未だに信じらんねーんだけど」

間道を進んでいる時、突然アルヴィンがそう呟いた。

「本当だと思うよ。最初に会った時、ミラは四大精霊を従えてたから」

「四大精霊って……？」

「火のイフリート、水のウンディーネ、風のシルフ、地のノーム。これが四大元素を司る大精霊なんだ。僕もあの時初めて見たけど、間違いないよ」

名前だけ聞いても、そんなに凄そうには聞こえないけど、多分凄
いんだろうなあ。その四大精霊って。

ちょっと見てみたい。

「お前達、話しないで先に進もうとは思わないのか？」

3人で雑談していたら、前を歩いていたミラが不機嫌そうに言っ
た。

何というか、四大精霊を従える程の凄い人には見えないんだよな。

俺には。

「む……カイト、何を笑っている？」

「いや、ミラって結構普通なんだな、と思ってな」
「？」

心底分らないと言った表情を浮かべられたけど、俺は気にしな
いで足を進めた。

第5話 果樹園の村（前書き）

更新遅れて申し訳無い（汗）

第5話 果樹園の村

イラスト間道を進んでいると、やがて1つの村が見えてきた。

「なんか……甘い匂いがするな」

「うん、果物が沢山あるみたいだね」

村に入っすぐ鼻に付いたのが、美味しそうな甘い匂いだ。ジュードの言つとおり、村のいたる所に果物らしき物がある。

「酒の匂いもするな。果樹園でもやってるんじゃないか？」

アルヴィンがそう感想をもらすと、村の住人であろう、老婆が俺たちに気付いて近寄って来た。

「こんな村にお客さんとは珍しいの」

「お婆さん、村の人？」

「村長をやつとります」

なんともまあ、優しそうな村長さんだった。

……いきなり斬り掛かってくるよりは何千倍もマシだな。

「ニ・アケリアへ行く道は、こっちであっているか？」

ミラがそう尋ねると、村長さんは何故か首を傾げた。
まさか、道間違ってたのか？

「ニ・アケリアですか……懐かしい名ですな……」
「懐かしい？」

まさか、二・アケリア既に無くなった街or村の名前なのか！？

「忘れられた村の名前じゃからの。私も昔に、キジル海瀑の先にあるとしか聞いた事がないものでして……」

「そんな辺境の土地なのか……二・アケリアって……。なあ、今日はこの村で休んでかない？」

体力的に、今からその……キジル海瀑だっけ？　そこに行くのはしんどい。

戦闘は足引つ張ってばかりだけどさ……。

「オレも賛成。休まないと足が死ぬっての」

「じゃあ、今日はここで休むことにしようよ。ね、ミラ？」

「私も歩き疲れたからな。そうしよう」

満場一致で、今夜はここ、ハ・ミルで休む事になった。

話を聞いていた村長さんが、この村には無いから私の家を使ってください。とかなり親切な事を言ってくれたので、俺達はそれに甘んじる事にした。

その途中。

「いい匂いの正体はナップルの実だったのか。甘酸っぱくて美味しいんだよね」

ジュードが木に生った果実を見ながらそう言った。

「じゅる……そうなのか？」

「ちょうど今が食べ頃って感じたな」

「じゅるる……さぞ美味しいんだろうな……」

「確かに、美味そうだよな……ってミラさん！？ ヨダレが！ ヨダレが凄い事に！？」

話を聞いていたら、ミラの口からヨダレが凄い量出ていた。

「うわ……本当だ。大丈夫、ミラ？」

「じゅるる……なぜか……じゅるる……止まらない……」

「食に目覚めたみたい……だね」

いや、目覚めたとかそんなレベルなのか、これは？ どうやった
らこんな量のヨダレが……？

「盗み食いはすんなよ？ 追われる理由が増えちまうからな」

今にもナップルに食いつきそうなミラに、アルヴィンが小声で忠告するのだった。

* * * * *

村長さんの家で一晚過ごして翌日。

朝早くから俺は、素振りをしていた。

昨日の俺は、戦いではほとんど役に立っていなかった。攻撃のほとんでは共鳴術技^{リンクアーツ}だったし。

そう言えば、同じ学生の筈のジュードはなんであんなにも戦い慣れてんだろつか？　もしかして、この世界の学生は、魔物と戦うのが常識なんだろうか？

「ねえ、ミラ、聞いてもいい？」

そう考えていると、後ろからジュードの声がした。どうやら近くにはミラが居るらしい。

「黒匣^{ジン}って何？　どうしてイル・ファンにあった兵器を壊そうとするの？」

「……あれは人が手にしてはいけないモノだからだ」

少し間があってから、ミラが答えた。
「って、これ、完全に盗み聞きだよな……」。

「どうして？」

「説明する必要性を感じないな」

「うわぁ……ばっさり切り捨てたな、ミラ。」

「……信用されてないんだね」

「そうではない。……そうだな、例えば赤子が刃物を手に遊んでいたら、どうする？」

「え……取り上げるんじゃないかな？」

質問の意味が分からないと言ったように、ジュードは首を傾げながらそう答えると、ミラは「どうして？」とさらに問いかけていた。俺も、ミラの考えが分からなかった。黒匣^{ジン}と言つ兵器が何なのかも知らないからな、俺は。

「カイトか？　こんな所で何やってんだ？」
「！？」

いきなり背後から話しかけられて振り向くと、そこに居たのはアルヴィンだった。

アルヴィンは俺に近付いてくると、話していた2人に気付いた。

「なるほど、盗み聞きってヤツか？」

「いや、悪気があった訳じゃねーよ……」

「聞いちまったら悪気があるうとなかろうと同じだって」

確かに……ごもつともだ。

聞いた内容は忘れる事にしよう。どうせ聞いても分からない内容だったしな。

そうしていると、何だか村の入口の方が騒がしくなってきた。事に気が付いた。

赤い鎧に身を包んだ兵士と、村人が対峙していた。

「ありゃあ軍の兵士だな」

「軍？」

「とにかく、2人と合流するぞ」

アルヴィンが言って、2人の下に走り出した。俺も急いで後を追う。

「これ以上のんびりしてる訳にはいかなかったな」

「やっぱり、僕達を追いかけて来たんだよね？」

「国外捜査には早すぎる気もするけどな」

「何かやばい雰囲気だけど？」

「うむ、早くこの村から出るとしよう」

頷いて、俺達は走り出した。

村の西側にある道からキジル海瀑に行く事が出来るらしいけど、俺達が向かった時には、既に兵士が道を塞いでいた。

「どうする？ 正面突破行くか？」

「そうだな。仲間を呼ばれる前に片付けよう」

ええっ！？ 「冗談で言ったのに本気にされたよ！？」

「短い作戦会議だこと……」

ミラが立ち上がった所で、俺は背後から誰か来ないか確認するために後ろを向いた。

誰も居ないと思っていたそこには、ぬいぐるみを両腕に抱えた少女が居た。

「あ、あの……なに、してるん、ですか？」

「あそこに居る邪魔な兵士をどうするか考えていたところだ」

「ちょ、ミラ、子供に何言ってるんだ！？」

直球にも程がある！

でも、少女は何食わぬ表情で、兵士たちに視線を向けて言った。

「あの人たちが、邪魔なんですネ？」

何だろう……一瞬この子が黒く見えたよ……。

少女がぬいぐるみに視線を送ると、ボヨン。目を閉じていた筈のぬいぐるみが目を開け、さらに動いて宙を飛び始めた。

スゴイな、リーゼ・マクシア……。まさかぬいぐるみまでもが動き出すとは。

そのぬいぐるみは、空を飛んで兵士達の方へ。当然驚いている。つてあれ？　ぬいぐるみが動くのは常識じゃないのか？

「なんであのぬいぐるみ、動いてるの？」

「この世界じゃ普通じゃないのか？」

「んな訳ねえだろ」

ジュードとアルヴィンが驚いてるから、常識では無かったらしい。……ならあれは何？

「ここでなにをしておる？」

みんなで戸惑っていると、図体のデカイおっさんがやってきた。

「これ娘っ子。小屋から出てはならんというのに」

おっさんが少女にそう言うと、少女は何故か俺の後ろに姿を隠した。

「お、おい……」

「ちい、ラ・シュガルもんめ。勝手な真似を」

俺の後ろに隠れた少女を一瞥してから、おっさんは兵士の方へと行った。

その隙に、少女は広場の方に走って行ってしまった。俺はその後ろ姿をずっと眺めていた。

何で俺の後ろに隠れたんだろう？ あのアツさんが原因か？
考えていると、おっさんも少女と同じ道を走って行った。

「カイト！ 置いてくぞ！」

「！？ ああ、今行く！」

いつの間にか兵士が倒されていて、みんなが先に行っていた。
俺はもう一度少女が逃げて行った道を振り返ってから、みんなの
後を追った。

第5話 果樹園の村（後書き）

次回はあの尻尾を付けた人が出るとか出ないとか？
共鳴術技もいくつか出す予定です。

第6話 精霊を祀る村（前書き）

戦いって難しい……いや、たんに下手過ぎるだけですけどね。
台詞が無かったり変だったりするのには、どうか生温かくスルーし
てください…。

第6話 精霊を祀る村

ハ・ミルから出た俺達は、ラ・シュガルの兵に感ずかれないうちに、すぐにキジル海瀑^{かいばく}へと向かった。

キジル海瀑に入ると景色は一転。いままで山の中の景色だったのに、一気に海みたいな景色に変わっていた。

「ここを越えれば二・アケリアか。連中も追って来てないみたいだし、もう急ぐ必要は無くなったんじゃないか？」

後ろを見ながら言ったアルヴィンに、俺は頷いた。

戦闘で足を引っ張ってる俺が言うのもなんだけど……あのペースでここを抜けるのはしんどい……。実際、何度か置いて行かれそうになったし……。ジュードが気が付いてくれるまで、俺は半べそ掻きながら一心不乱に剣を振り回していた。

うん……これは本格的に戦い方を身につけた方がいいかもしれない。いつ元の世界に帰れるか分からないし、いつもジュード達が居る訳でもない。自分の身ぐらい自分で守れなければ、俺はきっと簡単に死んでしまうだろうから。

「村の人達……大丈夫かな？　せつかくよくしてくれてたのに」

浮かない表情で呟いたジュードの言葉にハツとした。

そうだよな……見ず知らずの俺達を泊めてくれたってのに、俺達はその恩を仇で返すような行動をとったからな。

だけど、そう考えていたのは俺とジュードだけだったらしく、アルヴィンはラ・シュガル兵が居たから仕方が無い。ミラはそれが村人たちの決めた事だと言った。

「確かに2人の言い分は分かるんだけどな……」

「そうだよ。僕らを守ってくれたのかもしれないし、そんな言い方しなくても……」

「……それなら、2人はハ・ミルに戻るといい」

少し間があってから、ミラから出た言葉は、そんなものだった。

「少しの間だったが世話になったな」と言っ、俺達を残して歩き出した。

「どうしてそうなの!？」

俺はミラの態度に絶句していたけど、ジュードは怒ったように声を張り上げていた。

だけど、振り返るミラは、いつもの様子だった。

「もっと感傷的になってほしいのか？ それは難しいな。ほら、君達もよく言うだろう？ 『感傷に浸ってる暇は無い』とな」

「……それは、使命があるから？」

「そうだ」

ジュードの問い掛けに、ミラは短く答えて頷いた。

「やるべき事の為には、感傷的になっちゃ駄目なの？」

「人は感傷的になってもやるべき事をなせるものなのか？」

「わからないよ、そんなの……やってみないと……」

ジュードが俯いてそう答えると、「ならやってみるといい」と、

ミラがそう言った。

いったいどういう事だろう？

「君のなすべき事をそのままやってみればいい。それで、答えが出るかもしれないからな」

「僕の、なすべき事……」

悩むように呟いた。

俺のなすべき事は……やっぱり『元の世界に帰る事』だよな。

「カイトはどうする？ 戻るか？」

「いや……俺は……元の世界に帰りたいからな……」
「そうか」

俺がそう言っていると、ミラは先に行った。

「なすべき事、か……アルヴィンは何かあるのか？」

「おっと……そこでオレに振るのな」

いつの間にかジュードと肩を組んでいたアルヴィンが少し驚いたように言った。

「あるのか？」

「ナイシヨだ」

「何、それ……」

「だって、オレが『ある』って言ったら、優等生がまた迷っちゃうだろ？」

もう既に迷ってる気がするんだけど？

「まあ、俺が言える立場じゃないけどさ。見つけるのはゆっくりでもいいんじゃないか？ まずは二・アケリアだ」

「……うん、そうだね」

まだ悩むように俯いていたジュードは、小さく頷いた。

* * * * *

先に進んだミラを追い掛けて合流して、さらに進んでいくと、やがて開けた場所に出た。奥の方には大きな滝が見えた。

「そういや、ニ・アケリアってどんな場所なんだ？」

「あ、それ僕も気になる。いい所なの？」

「私は気に入っているよ。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。そんな所だ」

瞑想……？ この人、まさか普段からそんな事してるのか？

「ちょっと休憩しよーぜ？ 岩場ばっか足痛え」

急にアルヴィンがそう言い出した。

「到着してから休めばいいだろう？」

「そう言うなって。ニ・アケリアは逃げやしないぜ？」

アルヴィンはそう言いながら、俺の肩に腕を回してきた。

「ほら、カイトも疲れてるだろ？」

「うつ……まあ、少しな」

あまり戦闘で役に立ってないから、俺から疲れたと言うのは、正直なところかなり抵抗があった。

けど、そんな俺の意思を無視してアルヴィンに言われた。そんなに疲れたように見えたのかな？

「そうだね、少し休もうか」

苦笑いを浮かべたジュードが言って、ミラも渋々頷いた。

休憩に入って、ミラは1人で滝まで行った。ジュードとアルヴィンは2人で何やら雑談。

そんな中、俺は1人でこの透き通った綺麗な海を、写メで撮っていた。

せっかく異世界に来たんだから、とポジティブに考えて、俺はこのリーゼ・マクシアの綺麗な景色を記録しようと、さっき思い付いた。

自分の旅の記録つてのもあるし、元の世界に戻れたら幼馴染のあいつに自慢出来るな。とか思っていた。

「っし、綺麗に撮れたな。さすが、画素数だけは立派！」

ピッピッと操作して、キジル海瀑の綺麗な景色を保存する。

もう少し早く思い付いていれば、ハ・ミルの景色も撮れたのに……。惜しかったなあ。

「っと、忘れる所だったな。あの大きい滝も撮らないとな」

もう一度カメラを起動して、滝に向ける。
滝にはミラが居た筈だけど……お、居た。
滝を背にするように、ミラは浮いていた。ミラの前には、もう一人誰か居た。さすがにその人は浮いておらず、岩場に居るけど。さすが精霊の主。宙も浮けるのか。

「……って違うだろッ!？」

思わずノリツツコミ。

そうだ、あの光景を見てゆっくりなんかしてられない。
ミラは明らかに拘束されていた。

「ジュード! アルヴィン! 大変がミラな事に!？」

「ど、どうしたの、カイト？」

「何言ってるか分かんねえよ。とりあえず落ち着け」

スーハースーハーと何度か深呼吸をして、落ち着いた所でジュードが口を開いた。

「落ち着いた? ミラがどうしたの？」

「拘束されて大変な事に」

「!?!」

やっと伝えられた内容に、2人は驚愕していた。

「それを早く言え!」

「わ、悪い……」

「と、とにかく、助けに行こう!」

ジュードも少し慌てた様子で、俺達にそう言った。

ミラの下に行くと、やはりミラは拘束されていた。

そして、多分それをやっているのは……何だあの人？ スタイルはミラ並に良くて、ミラ並に露出度の高い服を着ている。この世界の女性はみんなあんな格好なのか？

そして最大の謎は、女性の腰よりも少し下辺りから伸びている何あれ、尻尾？

その女性は、駆け付けた俺達に気付いて、こちらを向いた。

「今はこの娘にご執心なのかしら？」

何の事だ？

視線を追うと、その言葉が向けられたのがアルヴィンだと分かった。

「放してくれよ。彼女、大事な人なんだ」

ええっ！？ アルヴィンとミラ、いつの間にそんな関係に！？

「いや……ただ単に雇い主って事だと思っただけよ？」

何を考えていたのかジュードには分かったらしく、少し呆れた様子でそう言ってきた。

なんだ、ビックリしたじゃないかアルヴィン。

それにしてもどうするか。ミラを拘束できるような人と正面から戦ったら、……高確率で俺は死ぬよな……。

「誰の差し金だ？」

「さあ、誰でしょうね？」

女性は会話する気は無いらしく、拘束をさらに強めていた。

（アルヴィン、あれ、撃てる？）

突然、ジュードが小声でそんな事を言っていた。その視線の先には、崖の途中にあった、不自然な出っ張りだった。

（どうする気だ？）

（僕の予想が正しければ、あれは魔物だよ）

（魔物撃ってどうすんだよ？ 余計にややこしくならねえ？）

（大丈夫。少しでもあの人の気を逸らせればいいから）

（なるほどな。分かったぜ）

頷いたアルヴィンが、銃に弾を入れる。

「何をする気？」

「あんたには関係無いんじゃないか？」

少しでもアルヴィンから注意を逸らそうとして俺が言うと、女性は俺を見て不思議そうな表情をした。

その時、アルヴィンが崖の出っ張り 魔物に向かって発砲する。それに驚いた魔物は崖から真っ逆さまに落下して、起き上がると同時に女性の居た岩場に突進した。そのまま女性は水の中に落ちて行った。

落ちたのが見えたから、俺は考えるよりも早く、その方向に走り出していた。

「カイト！」

「！？」

だけど、先程の魔物が俺の行く手を塞いだ。
……めちゃくちゃ怒ってますね、この魔物。

「とか思ってる場合じゃないか……」

仕方なく後退してみんなの所に戻る。

みんなは既に武器を構えていたから、俺も剣を抜いた。

魔物は貝というか……やっぱりよく分からない。とにかく堅そうな甲羅をもっていて、そこから長い触手のようなものが伸びている。あの甲羅じゃ……さすがのアルヴィンでも破るのは難しそうだ。

「カイト、危ないよ！」

「あ、ごめん！」

考え事しているとジュードのそんな声が聞こえて、自分に向かってくる魔物に気付いた。気付けたのが早かったから、俺は難なく避ける事ができた。

「呆けているな、死ぬぞ！」

「ご、ごめん！」

ミラにも怒られて、俺はようやく戦いに集中する。

予想通り、相手の殻は堅く、アルヴィン以外の攻撃はあまり効かないようだった。

「魔神剣！ まじんけん もいっちょ、双牙！」

アルヴィンに教えてもらった技第1号の魔神剣。その思いつきで追加した技、その名も 魔神剣・双牙。魔神剣を放った後に、

続けて同時に2発衝撃波を飛ばす技だ。いや、名前は何かどつかで聞いた事がある気がするからオリジナル技じゃないんだけどさ。だけど、それも魔物に弾かれて上手くダメージは通らない。

「風よ駆れ、花散らす如く！ アリーヴェデルチ！」

ミラが発動させた精霊術は、魔物の真下から突風で巻き上げるものだった。高く舞い上がった魔物は背中から落下し、堅い殻の中の言ってみれば弱点が丸見えになった。

「やるぞカイト！」

「分かった！」

「「一閃喰らわす！ 閃塵瞬牙！！」」

アルヴィンが撃ちだした衝撃波が敵に当たる直前、俺はそれに向かって瞬迅剣しゅんじんけんを繰り出した。衝撃波の威力を上乗せした瞬迅剣は、敵を貫く！

『グオオオオオ……』

だけど、それだけでは魔物は倒れる事は無かった。

「次はこれだ！ 決めるぞジュード！」

「うん！」

「「燃え尽くせ！ 炎穿陣！！」」

2人を中心にして、爆発が起きた。範囲はそれほど広くはなかったけど、身動きの取れなかった魔物相手には関係無かった。

つまり、弾け飛んだ。もちろん魔物が。燃え尽くすどころか跡形も無く爆ぜた。

「ふう……お、終わった……」

魔物が消え去った後、俺はすぐに地面に座り込んだ。
やっぱり慣れないな……剣持って戦うのは。
ってそうだ。あの人は!?

「お前達、何を考えているんだ?」

立ち上がってすぐに、ミラのそんな声が聞こえてきた。

「まあ、そんな怒りなさんなって。ジュードはおたくを助けたかったんだからよ」

「それでも、あの魔物がお前達に襲いかかるとは思わなかったのか?」

確かに、今思えばその可能性は否定できない。俺達の方に来ていた場合、ジュードはどうしたんだろう?

「それでもよかったんだ」

「は? お前、俺達が襲われても良かったのかよ!？」

「そうすれば、あの位置ならアルヴィンは死角に居たからね」

その言葉を聞いて啞然。

まさかそこまで考えていたとは……俺の方が年上だったのになあ……。

「あの短時間でそこまで考えていたのか」
「すげーな」

ミラとアルヴィンも驚いている。

っと、そうだ。水に落ちたあの人、大丈夫なのかな？

こちら辺なら1人で大丈夫と思い、俺は1人で様子を見に行くことにした。

「落ちたのは……確かこちら辺だったよな」

透き通った水の中を見てみても、人の姿は見えない。まさか、あのまま沈んだのか？ やっぱり戦うより先に助けに行った方が良かったかもしれない。

「……でも、何でミラを狙ったんだ？」

ふと頭を過ぎったのは、ハ・ミルで言っていた黒^{ジン}匣だ。壊そうとしていたらしいから、それ絡みなのかもしれない。考えていると、ジュードの声が聞こえた。

「……俺が気にする事じゃないのかもな……」

小さく呟いてから、俺はみんなの所に戻った。

* * * * *

みんなの所に戻ると当然ながら怒られた。主にジュードに。
怒られながら先にキジル海瀑を進んで、俺達はようやく二・アケ
リアに到着した。

「なんか、割と普通な所だな？」

「ああ……全然予想と違うな」

もつと普通に精霊みたいなのが居ると思ってたのに、言っちゃ悪いけど本当に普通な村だ。

「何だ、お前達？　もしかして、私が居る所だからって変な想像をしていたのか？」

「そりゃあな。精霊の主様が居るトコとか聞かされたらそう思うのが普通だつて」

「ああ、俺なんか普通に精霊が見えるのかと……」

こう……半透明な精神体みたいな？　ってただの幽霊だそれは！？

「2人とも……それは非道い気が……」

「何だよ、ジュードだつて思っただろ？」

「う……まあ、少しはね……」

言いにくそうに俯きながら呟いた。

俺達がそんな話をしていると、ミラが村の入口近くに居た商人に近付いていた。

「すまない、イバルはどこに居る？」

「巫子のイバルならマクスウェル様を追って……」

荷を整理していた商人がミラの姿を見た瞬間、止まった。そして

すぐに片膝を地面に着いて崇め始めた。

「マ、マクスウェル様！？ ご無礼をお許しください！」
「うむ、気にするな」

商人の声が大きかったからか、はたまたミラが凄すぎるのか、村人が集まり崇め始めた。

…… なんと云うか、この光景は俺の世界じゃ見られない光景だな。

「やっぱり本物なんだな」

「凄いね、ミラ」

「ちよつと疑ってたんだけどな……」

ジュードとアルヴィンは冷静だった。

これはあれか。ツッコんだら負けて奴だ。

「精霊の主って、やっぱり凄いんだな……」

俺の世界で言つと、ミラはどういう存在に当てはまるだろうか？
やっぱり神？

「みんな、こつちだ」

村人と話し終えたのか、ミラが俺達を誘導し始める。

「私はこれから、社で四大の再召喚やしろの儀式をするつもりだ。そこで必要なのは、この村の四方にある世精石だ」

「それを集めるのか？」

「そうだ」

「それなら村人に頼めばいいんじゃないか？」

「さっきの見たろう？　ここでは巫女以外に私と普段から関わる者が居ないんだ。あれでは話にならない」

言われてみれば、あんな状態の村人に頼み事は無理な気がする。

「だったら、俺が集めてくるよ」

「うん、僕も」

「そういうのは男の役目だからな」

1人で行く予定だったのに、ジュードとアルヴィンもそう言っていた。

「いやいや、ここは俺1人がやるからみんなはここで待っていてくれよ！」

俺はみんなの答えを待たずに、1人で走り出した。

* * * * *

「お……終わった……ぜ……？」

四方にある世精石をミラ達の所に持って行ったのは、あれから30分後だった。

「本当に、1人で持って来たんだね」

少し呆れたようにジュードが呟いた。

「どうする？ 少し休んで行くか？」

「大丈夫、早く行こう」

俺が言うとミラが頷いて、俺達はミラが居た社に向かう事にした。

第6話 精霊を祀る村（後書き）

共鳴術技出すとか言いながら2つ……。戦闘も下手すぎでごめんなさい（汗）

今回の共鳴術技

・閃塵瞬牙

瞬迅剣＋ワイドショット

主人公とアルヴィンの共鳴術技。

アルヴィンがワイドショットを撃ち出し、それに被さるように瞬迅剣で貫く。

第7話 旅の決意（前書き）

イバルは基本うざったく思ってしまうけど、そんな嫌いなキャラじゃない。そんな感じですよ（笑）

第7話 旅の決意

二・アケリアから社^{やしろ}まで、魔物を倒しながら進んだ。

「この奥だ」

「ここに、ミラは住んでるんだ？」

社を見ながらジュードが言う。

大きな社だから驚くのも頷ける。

「住んでいる、か。そう考えた事は無いが、そうなるな」

「何も無い所だな。退屈じゃないか？」

「私の使命においては何の問題もない」

「いや、さすがに暇だったんじゃないか？」

「何の問題もない！」

何故かムキになって言われた。

中に入っただけで、ミラは四大精霊を再召喚させる儀式に取り掛かった。

床に描かれた円形の魔法陣のようなものの上に世精石を置くと、

ミラはその中心に座った。

そしてミラは、宙にも同じような魔法陣を描いていった。

だけど、世精石はパキン！ と音を立てて崩れた。

「失敗……したのか？」

世精石が割れただけで、四大精霊が現れた様子は全く感じない。

体勢を崩したミラが座り直した。
その時、

「ミラ様！」

誰かが勢いよく入って来て、ミラの前でひざまず跪いた。

「……イバルか」

イバル……確か、村の前で話してた巫子だっけ？
女だと思っていたのに……何だ、野郎か。

「ミラ様、心配しました！　これは……四元精来還の儀！？　何故
今このような儀式を！？」

イバルは信じられないようなものを見たように言い、立ち上がった
辺りを見回した。

「イフリート様！　ウンディーネ様！」

四大の名前を呼ぶが、何の反応も無かった。

「いったい……何があったのですか？」

問い掛けるイバルに、ミラはイル・ファンであった事を話した。
ちなみに、俺もちゃんと聞くのは初めてだ。

ミラはイル・ファンにある黒匣ジン『クルスニクの槍』と冠された兵器を破壊しようとした。だけど、破壊する寸前、そのクルスニクの槍が発動してしまい、それから四大の力が使えなくなっただけだ。
いい。

「そんな事が……」

「つまり、そのクルスニクの槍つてのが原因で、四大精霊は死んだか捕まったか。どっちかって訳だな」

「はっ、バカが！ 精霊が ましてや四大精霊様が死ぬものか！ 捕らえられるなんて事も無い！」

思った事を言ったら、鼻で笑われて全否定された。……ちよつと、これは傷付くなあ。

「精霊は死なない。なら、カイトの言った通り捕らえられたのかも」
落ち込んでいた俺をフォローするように、ジュードがそう言っていた。

「人間が四大様を捕らえる事など出来るものか！」
「けど、四大精霊が主の呼び掛けに応えないんだ。あり得ない事でも、他に可能性が無いなら真実になり得るんだ」

否定し続けるイバルに、ジュードはそう言った。

「何も無い空間で、卵がひとりでに潰れた場合、その原因は卵の中にある」

「……何言つてんの？」

「カイトは知らないんだったな。『ハオの卵理論』ってんだ。さすが優等生だな」

この世界にはそんな理論があったのか。いや、俺の世界にも似た理論があるかもしれないけど……。

「ぐぬぬぬ……」

否定出来なくなった巫子イバルは、唸る事しか出来なくなった。

「四大を捕らえる程の黒匣だったのか……。あの時、私はマクスウエルの力を失ったのか」

俯いたミラは、いきなり立ち上がった。そして、イバルも立ち上がる。

「さあ！ 貴様達は去れ！ ここは神聖な場所だぞ！ そして、ミラの世話をするのは巫子であるこの俺だ！ 余所者は帰れ！」

途中、白い歯がキラリと眩しく光った気がした。

ここまで徹底されて言われると、逆に清々しさすら感じるな。

「イバル、お前もだ」

「……は？」

だけど、そのイバルにも帰れとミラが言った。

「そうだな。有り体に言うと、うるさい」

「な……」

効果音で、「ガン」とでも聞こえてきそうな程に、イバルがシヨックを受けたのが分かった。

いや、だってさ、言われ瞬間仰け反ったから。それに、仕えてる人に邪魔と言われたようなものだから、そりゃあシヨックだろ。

この時初めて、俺はイバルに同情したのだった。

言われた通りに社から出ると、イバルは真っ先に（泣きながら）帰って行った。

俺達も村に戻ろうとすると、ジュードが立ち止まっていた。アルヴィンは先に帰る事にして、俺は立ち止まったジュードを見る。

「どうしたんだ？」

「うん、ちょっとね。カイトは先に戻ってていいよ」

「いや、正直言って1人で参道はキツイ。俺はジュード達みたく強くないからな」

模擬戦とはいえ、ジュードに勝てる気は全くしない。

「強い、か……。僕は、強くなてないよ」

呟いたジュードには、憂いが見えた。

「カイトは……元の世界に帰るんだよね？」

「ん？ ああ、そうだな」

「見つからなかったら、どうするの？」

「どう……だろうな？ 分かんねーよ」

「そんな……分かんないって……」

俺の答えがそんなに意外だったのか、ジュードは少し呆れていた。

「実のところ、あんまり考えてないんだよな」

「え……？」

「『元の世界に帰る』。そう漠然と思ってるけど、どうやって帰れるか分かんないし、いつ帰れるかも分からない」

言葉にしながら、自分でもそれを整理してまとめていく。

「だから帰るまでは、この世界でやれる事をやろうかなって。今思った」

「今!？」

予想通りの反応ありがとう。ジュードはやっぱり良い奴だな。

「今思っただって……そんなでいいの？」

「いいんだよ。俺は考えて動くよりも行き当たりばったりだから」

「そんな適当な……」

「だからジュードも、思ったようにやってみたらどうだ？」

「え？」

いきなり自分の事を言われたからか、ジュードは目を見開いて驚いた。

ちょうどその時、社の扉が開いてミラが出てきた。

「休んだんじゃなかったのか？」

「それは私の台詞だ。お前達、まだ戻ってなかったのか？」

「ああ、ちよつと話してた。な、ジュード」

「う、うん……」

バツが悪そうに顔を逸らされた。

「ふむ、ならこれから村の者に君達の事を頼みに行くとしよう」

「あ、ミラ。その話、俺はパスするよ」

「カイト!？」

「どうしてだ？」

2人に問われ 尤も、^{もっと}ジュードは驚いただけだが 俺は真っ直ぐミラを見た。

「さっきジュードと話してて決めた。この世界に居る間は、俺のしたい事をするって」

「それで？」

「困ってる人の力になりたい。少しでもいいから、人の力になりたいんだ。だから、ミラに付いて行きたい」

「私にか？」

俺の言った事に、ミラが少し驚いた。

「クルスニクの槍だっけ？ 壊しに行くんだろ？ 足手まといかもしれないけど、手伝いたいんだ」

「それが、カイトの『なすべき事』か？」

「……途中でそれも変わるかもしれないけどな」

「……分かった。カイト、君のその決意、見させてもらおうとするよ」

「ああ、サンキュな」

「さて、ではジュード。行くでしょうか」

話は最初に戻り、ミラがジュードにそう言った。だけど、ジュードは俯いて何かを言いたそうにしていた。

「どうした？」

「……ミラはどうして強いのかなって……」

「強い、か。そんな事考えた事も無いな。私にはなすべき事がある。それを完遂する為に行動しているだけだからな」

「でも……今のミラには四大の力は無いんだよ？ ……死んじやうかもしれない」

「だが、やらねばならない。もう決めた事だ」

「……やっぱり、ミラは強いよ……」

ジュードはまた俯いた。

俺は無言でジュードの肩に手を置いた。そして頷く。

「……僕も、行っていていいかな？ 一緒に」

その言葉に、ミラはさらに驚いていた。

「君は私に関わった事で普通の生活を失ったのだろうか？ 後悔していたのではないか？」

「うん……ホント言うとし……でも、後悔したって戻れないし、さっきカイトと話してて言われたんだ。『思ったようにやってみろ』って。僕が今思う事は、今の僕に出来る事……ミラの力になりたい」

ミラが無言で俺を見てきた。そして視線をジュードに移して、クスリと笑った。

「ジュードはお節介だな。カイトも同じようにな」

「そ、そうかな」

「お節介か、俺？」

まあ……キジル海瀑でおそらく敵であろう人を助けようとしたから、否定は出来ない。

「全く、私がわざわざ後から出た意味は薄れたな」

「そうだったんだ？」

「君達との短い旅で学んだ気を遣うというやつだったんだが……なかなか難しいな」

腕を組んで悩んだ様子だったけど、すぐにそれは終わった。

「とにかく村に行こう。君達に見つかってしまった以上、急いで発
つ意味は弱くなったからな」

俺達は頷いて、3人で村に戻る事になった。

* * * * *

「よ、遅かったな。ミラも一緒か」

村に戻ると、すぐそこにアルヴィンが待っていた。

「身の振り方、決まったみたいだな」

「うん、ミラと一緒に行く事にしたよ」

「どういう心境の変化だよ？ 後悔するんじゃないのか？」

先程のミラと同じような事を言うアルヴィンに、ジュードは首を
横に振って答えた。

「もう決めたんだ。ミラの手伝いをするって」

「……あっそ。カイトはどうすんだ？ まさか、お前も行くのか？」

アルヴィンの問いに、俺はすぐに頷いた。

「まあ、お前らがそう決めたなら、いいんじゃないか」

納得したらしく、小さく頷いた。

そうしていると、ミラがアルヴィンに近寄った。

「アルヴィン。約束の報酬なんだが……」

「ああ、その事なら、村のじいさんが払うって言うてただけど」
「村の者が？」

アルヴィンが頷くと、ミラは何かを考えるように腕を組んだ。

「長老か……いらんことを……」

「まあ、いいじゃん。長老は長老なりにいろいろ考えてんだからさ」

ほとんど憶測で言ったけど、ミラはそれに納得してくれたように小さく頷いた。

「しかしまあ、待つとけって言われて待つてんのに、一向に来なくてな」

「村に居るんだから、こっちから行った方が早いよ」

「長老はおそらく集会所に居る筈だ。行ってみよう」

とりあえず、こちらから出向く事になった。

集会所に入ると、すぐにその長老は見つかった。

ミラに対してかなり腰が引けていた長老は、「少しでもマクスウエル様の力になれるように」と、村人から集めた金を、アルヴィンに報酬として渡した。

「じゃ、また縁があつたら会おうぜ？」

と、報酬を貰ったアルヴィンは軽い様子で集会所から出て行った。

「なんだか、あつけないね……」

「だな。もう少し惜しんでもいいのにな」

別れるのが辛い訳ではないけど、いろいろと世話になったしな。
剣も教えてくれたし。

「傭兵と言うのはああいうものかもしれんな」

さて、一段落というそんな時だ。また扉が乱暴に開けられて、巫子のイバルが入って来た。

「ミラ様！ また、いずこかへ赴かれるのですか？」

「ああ。留守を頼む」

「なら自分も一緒にします！ こんなどこの誰だか分からん奴らに、ミラ様のお世話を任せられません！」

どこの誰だかつて……まあ、俺の場合は否定はできない状態だな。異世界から来ました。なんて言っても、納得してくれる筈はない。

「イバル、お前の使命を言ってみろ」

「え……自分の使命は、ミラ様のお世話をする事です」

「それだけか？」

淡々と言うミラに、イバルは少したじろいだ。

「……戦えない二・アケリアの者達をお守りする事、です」

「そうだ。お前はもう1つの使命を果たすんだ」

「ですが、こいつらの所為でミラ様は！」

あれ……ミラが四大精霊を失った原因に、何故か俺が含まれてるぞ？

まあ……それは今は置いて、このままじゃいつまで経っても出発できないな。

「イバル、だったか？ とりあえず落ち着け」

「貴様は黙っている！」

取り付く島も無い。だけど、俺は諦めないで話しかけ続ける。

「ミラはお前を信用してるからそう言っただぜ？」

「何！？」

俺はミラやジュードに話を聞かれないように、アルヴィンみたいにイバルと肩を組んで集会所の端まで行った。

「考えてもみるよ。ここは小さいかもしれないけど、きとした村だろ？ 村を守るってのは難しい。それを任されるってのは凄い事だ」

「な、何が言いたんだ……？」

「つまりな。ミラは巫子のお前になら安心してこの村を任せられるって思ってる訳だ。これはかなり信頼されてる証拠だぜ？」

「そ、そうだったのか……ミラ様はそんなにも俺の事を……」

結構適当な事を言っていたんだけど……言ってみるものだな。

というか、イバルが単純で助かった。

「そんな訳だから。ここで断ったらお前の信用に係わるぞ？」

そう言つと、イバルは俺の腕を振り切つてミラに向かい合つた。

「ミラ様、自分は村を守るといふ使命を全うしてみせます！」

「あ、ああ……頼んだ」

さつきまで拒んでいた筈のイバルが自分からそう言つたからなのか、ミラはかなり驚いた様子だった。

「いったい、何言つたの？」

「ん？ ナイシヨだ」

いきなりの変わりように驚いたのはジュードも同じで、耳打ちで聞いてきた。だけど、俺はそれを笑つてごまかした。

「と、とにかく、そろそろ出発するでしょう……」

「ミラ様お気を付けて……！」

何か異様にテンションの上がつたイバルに見送られて、俺達は二・アケリアを後にするのだった。

後に、「イバルを持ち上げ過ぎるのは止めてくれ……。何故だか疲れる」と疲れ切つた様子のミラに言われたのは、また別のお話。

* * * * *

（同時刻）

「あの女がマクスウェルか。プレザ、確かに力を失っていたのだな？」

ニ・アケリアを崖の上から眺めていた男が、ある一点　村を出ようとしていたミラ達に注目しながら問いかけた相手は、プレザと呼ばれた女性だ。

そう、キジル海瀑でミラを襲った人物である。

「『カギ』もどこかに隠されたとなると、面倒だな」

黒装束に身を包んだ男が呟く。

「あの娘がマクスウェルと知っておれば、ワシも『カギ』のありかを吐かせたんじゃがの」

次に呟いたのは、ミラ達がハ・ミルで会った大男だ。

「まあいい。今となつては泳がせた方が都合がよからう」

「ええ、ラ・シュガルの目は奴らに向けさせ、我らは静かに事を進めるのが得策です」

「アグリアからの連絡は？」

「失われた『カギ』を新たに作成する動きがある模様です」

「捨て置けんな……」

次々と話が進む中、黒装束の男が大男を一瞥する。

「ジャオ、例の娘の管理はもういい。『カギ』の件を探れ」
「いや、しかし……」

大男　ジャオは言葉を濁した。

「ラ・シュガル兵が去ったなら、お前が直に着く必要も無い」
「データが無事なんだから、優先事項が変更になるのは当然ね」
「むう……」

プレザと黒装束の男に言われ、ジャオは返す言葉が見当たらなかった。

ジャオが黙ると、黒装束の男は今度はプレザに言った。

「プレザ、お前はアグリアと連携し、イル・ファンに潜れ」
「あら、マクスウェルはいいの？」
「まだ駒はある。『カギ』のありかも探させる」

黒装束の男が淡々とそう言った。

「もう1つ、あの見掛けない格好をした男だ。何者だ？」

男がそう呟く。

「聞けば、『異世界』から来たと」
「『異世界』……だと？ 面白い。奴の素性も探れ。我らにとって、有益な情報が得られるかもしれんからな」

男はそう告げ、ニ・アケリアを一瞥して去って行った。

* * * * *

ニ・アケリアを出てすぐに、ミラが立ち止った。

「どうしたの？」

「イル・ファンへ船で行けなかった場合、どうするか考えていた」

「そつか……海が駄目なら、陸から行くしかないだろ？」

「うーん……陸路になると山脈を越えないとだから、難しいと思うよ」

3人で悩み続ける。

先が思いやられるなあ。とか他人事のように思ったその時、

「なら、サマンガン海停からカラハ・シャルル方面じゃないか？」

最近聞き覚えのある声がした。

「「アルヴィン！？」」

ジュードとミラの声が重なる。何故俺が言わなかったかと言うと、単にタイミングを逃したただけだ。

ニ・アケリアの方から現れたアルヴィンは、片手を挙げて挨拶を

した。

「信じてたよアルヴィン。きっと戻って来てくれるって!」

「へえ……オレってばそんなに信頼されちゃってたのな」

「どうしたの、いったい?」

もう既に二・アケリアから去っていたと思っていたジュードは、まだ驚いたようにアルヴィンに問い掛けた。

「イバルって言ったか? あの巫子殿に頼まれたんだよ。それに、仕事に見当たった以上の報酬を貰うのは、オレの矜持^{きやうじ}に反する」

言いながら取り出したのは、先ほど長老に貰っていた報酬が入った袋だった。

「そうか、心強いよ、アルヴィン」

「うん、ありがとう」

「礼なら村人や巫子殿にな。それで、これからの予定は?」

一段落着いた所で、アルヴィンが切り出した。
これから……クルスニクの槍を壊すんだよな。ざっくり言えば。
まあ……簡単じゃないだろうけど。

「とりあえず、ハ・ミルに向かいラ・シュガルの動向を探る」

「まだ居たら、だけどね」

「出来れば居ないで欲しいなあ……」

「弱気だな、カイトは。ま、行ってみりゃ分かるだろ」

と言う事で、これからの行く場所がハ・ミルに決まり、俺達はすぐにハ・ミルに向かった。

この旅が、やがて『この世界』を　そして、俺の存在自体を揺るがす事になるとは、俺はまだ知らなかった。

第7話 旅の決意（後書き）

ようやく次回、あの娘が仲間に！

ちなみに、台詞や場面が曖昧だったりちよくちよく違ったりするのは、うる覚えだったりするからです。

生温かく見守ってやってください（汗）

第8話 孤独な少女とぬいぐるみ（前書き）

今回、ほとんどうろ覚えだったのでほとんど原作と違うと思います。

……記憶力ないなあ。

第8話 孤独な少女とぬいぐるみ

キジル海瀑^{かいばく}からハ・ミルに行くのには、あまり時間は掛からなかった。同じ道を戻ったのもあったし、何より俺も強くなったのが要因だった。

…………… すいません嘘です。俺、また足手まといでした。いやでもちゃんと頑張ってますよ！ 俺ちゃんと強くなってますよ！

「足手まといにはなつてない筈ですよ！？」

「えっ、何？ いきなりどうしたの！？」

「…………… 何でもない」

つい心の声が出てしまった。

さて、ハ・ミルに着いたはいいけど…………… まだラ・シュガルの兵は居るんだろうか？

「そついや、四大精霊ってそもそも捕まえられるのか？」

広場に行く途中、いきなりアルヴィンがそう尋ねた。

「捕まえられるんじゃないのか？」

「だからどうやって？」

「…………… 牢屋に入れる？」

「そんな事では四大どころか微精霊すら捕らえられんよ」

でしょうね。

俺のイメージじゃ、精霊って半透明な精神体みたいな感じだしな。

「四大はマナの塊だ。おそらく、クルスニクの槍はマナを吸収、貯蔵する機能があるのだろう」

「マナを貯蔵！？ そんな事が……」

ジュードが驚愕の声を上げていた。

「でなければ、四大が捕まっているこの状況を説明できない」

俺は未だに『マナ』と言う存在が理解出来ていないから、よく分からなかった。

「ま、よく分からないけど、槍を壊せば万事解決だろ？」

「そうだね。そうすれば、四大精霊も助けられるだろうし」

俺とジュードは互いに気合いを入れ直した。

そうしながら広場に行くと、何やら人集りが出来ていた。

そこでは、この前村を出る時に出会った少女がうずくまっていた。その少女に村人が石を投げていた。

「ううつ……」

「ひどい事しないでー！ お願いだよー！」

考えるよりも先に身体が動いて、俺は少女を庇うように間に立った。投げられた石が、いくつか身体に当たる。

「つてえ……」

「え……？」

俺の呻きに驚いた少女が、俺を見上げてきた。

「怪我、無いか？」

問い掛けると、少女はそのまま小さく頷いた。
目には涙が浮かんでいる。

「お前ら！ こんな小さい子に寄ってたかつて非道いじゃないか！」
「うるさい！ お前達の所為で、こっちは散々な目に遭ったんじゃないか！」

そう言ってきたのは、この前泊めてくれたあの優しい村長だった。
あまりの変わりように、俺は怒るのを忘れてただ茫然としていた。

「だからって、子供に八つ当たりは無いんじゃないか？」

アルヴィンがそう言った。

そうだよな。どんな理由であれ、こんな小さい子に当たるのはよくない。

でも……俺達があの時、あんなやってこの村から出なければ、少しは違ったのかもしれない。

「とにかく、余所者よせものは出て行け！」

村長はそう言い残して去って行った。村人達も、バツが悪そうに散っていく。

「あ……」

少女も走って村の西側に行ってしまった。

「とは言え、ラ・シュガルの動きは探らねばならない」

「悪い、俺ちよっと思つてくる！」

一言ミラに言つて、俺は少女を追いかけた。

村の西側には、小屋が一軒あるだけだ。おそらくそこに居るのだろつと思つて、俺は小屋の扉をノックする。

「ま……出て来ないよな……」

扉には鍵は掛かつていなかったから、失礼とは思ひながらも俺は中に入った。

しかし、中には誰も居ない。

「……隠れてるのか？ いや、そんな事する意味は……」

中を見回していると、地下に続く階段を見つけた。

「お邪魔しますよー？」

ちゃんとノックしてから扉を開くと、甘ったるい匂いがしてきた。匂いに我慢しながら中に入ると、壁に背を向けてうずくまっている少女を見つけた。

「えつと……み、見つけた！」

かくれんぼの台詞を言うと、少女の身体がピクツと震えた。

「な、何……ですか？」

おそろおそろと言うように、少女が振り返って怯えながら呟いた。

「そんな怖がらなくていいよ。俺は君と話がしたいだけだから」

「お話……ですか？」

「そ、お話です」

少しずつだけど、少女が警戒を解いている気がした。

「まずは自己紹介な。俺は西風海斗^{にしかがかいと}。あ、名前は海斗ね」

「カイト……ですか」

「そうそう」

名前を呼ばれて、俺は頷いた。警戒は解いてくれる。

しかしどうでもいい事だけど、ジュードやミラ達もそうだけど、俺の呼び名って何だかカタカナな気がするんだよな。漢字って概念が無いみたいだから仕方ないけど。

「わたしは……エリーゼです……。エリーゼ・ルタス」

「エリーゼか。よろしくな」

コクリと小さく頷いて、エリーゼは腕に抱いたぬいぐるみに視線を移す。

「この子は、友達のティポ、です」

「よろしくねー」

「！？」

いきなり動き出したぞこのぬいぐるみ！

「あ、ああ……よろしく……」

そう言えば、広場でも叫んでたし、この前村出る時も飛んでた気がする……。何なんだ、ティポって？

「えと……エリーゼはここに住んでるのか？」

「……はい」

「閉じ込められてるとも言うー」

頷いたエリーゼとは裏腹に、ティポは衝撃的な事を言った。

「村の人にか？」

「違い、ます」

そう言えば、とこの前の事を思い出す。

あの大きなおっさん。あいつ、確かエリーゼの事を気に掛けてたよな。家族か？

「大きいおじさんが、ここに居ろって」

「おじさん……？」

やっぱり、あいつが原因なのか？

「おかげで友達とも遊べないー」

「そのおじさんって、家族か何かか？」

そう尋ねると、エリーゼは力強く首を横に振った。
もしかして、あのおっさんはエリーゼを監禁してるのか？

「あの……怖い顔、してます……」
「え……ああ、ごめん」

監禁。そんな言葉が頭の中に出てきたからだろう。憶測だけだから、何とも言えないけど。

でも、閉じ込められてるし、外では村人に石を投げられてるんだよな。

助けてあげたい。そう思った。

「エリーゼ、俺達と一緒に行かないか？」

だからなのか、いきなりそんな言葉を口走っていた。

「え……？」

「あ、いや……良かったらでいいんだ」
「……………」

俯いて黙ってしまった。ティポも黙った。
いきなり見ず知らずの人に言われたら、そりゃこうなるよな。

「ごめん、今の忘れて。じゃ、俺行くから」

これ以上ここに居る訳にはいかなかったと思った。

ここはエリーゼの場所だから。

だけど、歩き出した時、俺の服の裾をエリーゼが掴んでいた。

「待って、ください」

「どうした？」

エリーゼは何かを言いたそうに、俺を見上げ、また俯いて、それを繰り返した。

「一緒に……行くか？」

助け舟を出すようにそう言うと、何度も頷かれた。
俺はしゃがんで視線をエリーゼに合わせ、頭を撫でた。

「じゃあ、俺達はこれから仲間だな」

「仲間……」

「友達じゃなくて？」

「友達と仲間はほとんど同じだよ」

「ヤター！」

ティポが声を上げて飛び上がった。エリーゼも嬉しそうに微笑んだ。

「よし、じゃあ俺の仲間の所に行くけど、いいかな？」

「……………」

「大丈夫だよ。みんな優しいし、友達になってくれるよ」

不安そうにしたエリーゼをもう一度撫でて、俺達はミラ達の所に戻った。

小屋から出ると、ちょうどジュードがこちらに来る所だった。
俺の姿を見つけたジュードが走ってきた。

「カイト！ 探したよ」

「ごめんごめん」

平謝りしてみると、呆れたように肩を落とした。
そして、俺の後ろに隠れたエリーゼに視線を移した。

「この子……」

「ああ、連れて行く。ほら、自己紹介」

「……エリーゼ、です」

「ティポだよー」

やっぱりティポに驚いたジュードも、落ち着いて自己紹介すると、
エリーゼもティポも警戒を弱めていった。

3人で広場に戻ると、ミラとアルヴィンが待っていた。

「ミラ、この子も連れて行く」

「……仕方あるまい」

「いいのかよ？」

渋々といった様子だったけど、ミラは了承してくれた。けど、アルヴィンはそれに驚いていた。

「カイトが私に付いてくる理由は、『自分のやりたい事をやる為』だからな」

「サンキュな、ミラ」

何も言わずに、ミラは村の出口に歩いて行く。だけどその表情は、少し笑っていた気がした。

ハ・ミルを出た俺達は、すぐにイラート海停に向かった。

ここからイル・ファンに行ければ早くて済むんだけど、もちろんそんな甘い事は無く、首都圏全域が封鎖されていて、出ている便はサマンガン海停行きだけだった。

仕方なくその船に乗り、出発した。

「わぁー！」

甲板から海を見渡してエリーゼとティポははしゃいでいた。

俺が隣に行くと、恥ずかしそうに俯きながら言った。

「海……初めて……だから……」

「そんな恥ずかしがらないでいいぜ？　俺だって海見てはしゃぎたくなるし」

「そうなんですか？」

「ああ。俺が住んでた所じゃ、ほとんど海を見る機会は無かったからな」

まあ……港はあったけど、海水浴する場所では無かったし、ここまで綺麗に見えないしな。

「カイト、さん……」

「ん？」

「わたしを連れ出してくれて、ありがとうございます」

「ありがとねー！」

恥ずかしそうに、だけど笑顔でちゃんと俺を見ながらエリーゼが言った。

そんな表情を見ただけで、良かったと思えてきた。

「なあエリーゼ」

「はい？」

「呼び捨てでいいよ。あんまりかしこまったのは苦手だからさ」

「……はい、カイト」

微笑みながら言うエリーゼの頭を撫でた。

……何か、俺ダメかも……。無邪気な笑顔つて卑怯だ。

撫でていると、向こうでミラが海を見ているのに気付いた。

「ほら、あっちにミラが居る。話してみよう？」

エリーゼも頷いたから、俺達はミラの所に行った。

「何が見えるのー？」

突然ティポがそう問い掛けたからか、ミラは少し驚いた。
すぐにいつもの様子に戻って、俺とエリーゼを見る。

「いや、少し考えていただけだ。エリーゼ、お前はこれからどうするんだ？」

「えと……分かりません……」

エリーゼが俺を見てきているのが分かる。

……ほとんど勢いで連れ出したからな。ノープランなんだよね。

「何か分かる事は無いのか？」

「カイト君やジュード君、ミラ君、アルヴィン君は友達ー！」

「そういう事ではなくてな。そもそも、ティポは何なんだ？」

「あ、それは俺も気になる」

まるで意思があるように喋るんだ。ただのぬいぐるみな筈がない。

「ティポはティポだよー。それで、エリーの友達ー！」

「お前と話すのはなかなか難しいな。何故か論点がずれる」

「まあいいじゃん。ティポはティポ。みんな友達って事だ」

「さっすがカイト君。話が分かるねえー」

俺がまとめると、ミラは呆れたような表情をしていた。

「もう少しで着くみたいだな」

陸が見えてきて、俺はそう言った。

「ミラ君は友達ー！ みんな友達ー！ カイト君はもっと友達ー！」

ティポは宙にグルグルと回りながら言っていた。

そして、何の緊張感も無いまま、俺達はサマンガン海停に到着したのだった。

第8話 孤独な少女とぬいぐるみ（後書き）

次回、あのでっかいおっさんが出てきます。

と言うか、何かカイトのキャラが定まっていけない気が……。

第9話 樹海の戦い（前書き）

共鳴術技のネーミングセンスが無さ過ぎだと、今回気付きました
（笑）

第9話 樹海の戦い

サマングン海停に着いてすぐに、俺達は兵の配置に目を配った。

「思ったより嚴重じゃないな」

「でも兵は居るんだから、慎重に行かないとね」

ちなみに、この海停に居る兵の鎧の色は、ライトグリーンのような色だ。各地区で色でも違うんだろうか？

「一時はア・ジュールまで来ていたというのにな」

「もしかしたら、俺達を追うよりも重要な事があったんじゃないか？」

「そうなら好都合だな。気付かれないうちにイル・ファンに行くぞ」
そう言つて、ミラとアルヴィンは歩いて行つた。

「ねえ、カイト」

「ん？」

俺も2人に続こうとしたら、ジュードに声を掛けられた。

「エリーゼの事だけど……何か考えてるの？」

「何かつて？」

「……まさか、何も考えないで連れだしたの……？」

「あはは……その通り……」

しばらく沈黙が流れた。

でも、俺も何も考えてない訳じゃない。ちゃんとエリーゼがどう

したいのかを聞いて、それから決めるつもりだ。その為には、なるべくゆつくり出来る場所の方が都合がいいだろう。

「僕はてつきり、誰かエリーゼを引き取ってくれるように頼むのか
と思つてたよ……」

「まあ、それも考えなかった訳じゃないんだけどな」
「あの……」

ジュードと話していると、エリーゼがティポを抱いて不安そうに
していた。

「何の話ー？」

「エリーゼのこれからだよ」

「わたしの？」

「そ。エリーゼがこれからどうしたいのか。それはやっぱり、エリ
ーゼも自分で考えないといけないと思うんだ」

俺から連れ出しておいて無責任かもしれないけど、かと言って俺
が強要する事じゃないからな。

でも、もしちゃんとエリーゼが決めた事なら、俺は出来る範囲内
になるけど、協力は惜しまないつもりだった。

「わたしは……」

「まあ、ゆつくり考えればいいさ。とりあえず、今はみんなの所に
行こう」

「……僕も出来る限りは力になるからね？」
「サンキュな、ジュード」

少し、と言うかかなり呆れた様子だったけど、ジュードも手伝っ
てくれればかなり気が楽だな。

そう思いながら、俺はエリーゼの手を引いてミラ達の所に向かった。

ミラ達が居たのは、海停の掲示板の前だ。そこに貼ってあったのは、何かの絵だった。文字見たいのが書いてあるけど、あいにく俺には読む事が出来なかった。

「この手配書……カイトとジュードとミラ!？」

「わぁー3人ともキョーアクー!」

「へえ、手配書ねえ。しっかし全然にてねーな……って手配書!？」

字は読めないし絵は下手くそだったから、しかもこんな所に貼ってあるとは思えなかったし、とにかくいろいろな理由から手配書とは思わなかった。

……ってか、俺何一つ悪い事してないんだよなあ……。

「不幸中の幸いだな。これなら捕まる心配はなさそうだ」
「笑いを堪えるなっ!？」

完全に他人事だと思って……。どちらかと言うと、兵士ぶん殴ったアルヴィンの方が指名手配されてもおかしくないのに。

「……よくないよ」

「まあ、自意識の強い年頃にはキツイかな？」

「そうじゃなくて。僕はどうでもいいけど、ミラはこんなんじゃないよ」

「え、ジュードそこか？」

ツッコミ所と言つか……いろいろと間違っている気がする。

「うむ、確かによくない」

「ミラさんまで!？」

「です! カイトもこんなじゃありません!」

「お前もかエリーゼ!？」

どうしよう、何か意味分からん方向に話が向かっている気がする。

「私が現在の形象を成したのは、この外見が人間の半数　つまり男性全般に有利だからだ」

「そんな理由だったのか……」

まあ、確かに。とは納得できづらいな、この話。

「だが、この手配書のように非魅力的ならば、基本戦略を見直さねばならない」

「結構生々しいこと考えてんのな……」

「ジュード、正直に答えてくれ。男性視点で見て、私は魅力ある存在だろうか?」

いや、そこジュードに聞きますか!？ ジュードはまだ男性って言うより男の子と言うか……つまりはまだ子供な訳で、その問いは酷じやないかなあ。

「えっと、ミラは………すごく、ステキだと、思う」

少し顔を赤らめながら、素直にそう答えていた。

「うん、セクシーー! エリーもミラ君みたいになりたいってー」
「ティポ!」

そして、ティポが何か言った。
まあ……エリーゼの歳ならまだ見込みはあるんじゃない？ とか密かに思った。

「自信持つて良いよ、ミラ」

エリーゼ達の会話を聞いて冷静さを取り戻したジュードが、そうフォローしていた。

「具体的には、どこら辺が魅力？」

「そりゃ、いい匂いすることか、ゆれることか……」
「即答!？」

しかもいい匂いって……くつついてないと分からなくね？ そんな事。

「なるほど。貴重な意見、感謝するぞ」

「ミラはもつと恥じらえ!？」

「? 何故だ？」

心底分らないって表情された!

「いやあ、ジュード君も男の子だね」

「今のは一般論だからね!」

一般論であんな即答が出来るだろうか?
とにかく、何か見るに堪えなかったので、俺は話を中断させた。

ようやく出発、と思った矢先、海停の入口で変な爺さんに声を掛けられた。

まあ長くなるから要約して話すと、昔々とある部族に魔物の潜在能力を引き出すほどの異能を持った魔物遣いが居たらしい。そいつは天才では飽き足らず、魔物の霊力野^{ゲート}に手を加えて戦う度に強くなる魔物を造り出そうとした。

そして今から20年前、その魔物は6体完成したらしい。霊力野を爆発的に膨大化させた魔物達は本能のままに未知の精霊術を発動し、各々の体に闘争本能を具現化したような6種の武器 魔装具を生成した。その装備にちなみ、魔物達は『魔装獣』と名付けられた。

しかし、20年前に起きた戦争時に、その魔装獣達は突然の津波で流されてしまった。

だが、魔装獣はまだ現在も生きている。解き放たれた魔装獣は20年の歳月を経て、どれだけ強くなってしまったのか想像も絶するらしい。

だから、もし見掛けたとしても、絶対に戦ってはならないというものだった。

俺達はその爺さんの教訓を胸に、サマングン海停を後にするのだった。

「カイト、要約になってない気がするんだけど？」

「それに、どこに喋ってたんですか？」

「……気にすんな……」

最後に泣きそうになった。

* * * * *

サマングン海停から少し行くと、赤い鎧を着た兵隊が道を塞いでいた。

「ま、当然だな。そんなにうまい話はないって」
「どうしよう……」

辺りを見回してみても、他に道はなさそうだった。
いや、あつたとしても塞がれていると考えるのが自然だろうな。

「あつちには何があるのー？」

と、ティポが行った先には、高台のような場所があつた。

「あつちは樹海なんだ」
「上手く抜けると、カラハ・シャルルの街に出られるが……」
「迷う必要は無いな」

ミラはそう言って、樹海の方に進み始めた。
樹海となると、エリーゼが心配だな。

だけど、俺が何かを言う前に、ジュードが口を開いていた。

「滅多に人は通らないんだ。エリーゼには……」
「こうなる事は、予期できたろう？」

2人は何も言わないまま、沈黙が続いた。

「あの……わたし、だいじょうぶ、です……だから……」
「ケンカしないでー！ 友達でしょー！」

エリーゼとティポがその沈黙を破った。
泣きそうな感じではあるけど、エリーゼが自分で言ったんだ。俺が何も言わない訳にはいかない。

「まあ、いざとなったら俺とジュードで守ればいいだろう？」
「カイト……」

「2人が納得したんだ。文句はあるまい」

そう結論付けて、ミラはまた先に行ってしまった。
俺は泣きそうになっているエリーゼの手を引いて、ミラの後を追った。

* * * * *

樹海の中は想像通り薄暗く、視界は最悪と云っていい。ジメジメしてるし……やっぱり俺は陽の当たる場所が好きだ。
入ってすぐに、木の上に魔物が居た。身構えるけど、何事も無かったかのように、魔物は去って行った。

「なんだありや？」

「警告かな……これ以上立ち入るなっ」

「その警告もミラには関係無いみたいだな」

だって、1人でどんどん進んでってるし。

「ここから行けるみたいー。早く早くー！」

「臆病なのは男性陣だけのようで……」

ティポに呼ばれて、俺達も進む。

少し進むと、いきなり大きな木のような魔物が襲いかかってきた。

「つつ……」

「こいつ、攻撃範囲が広いな。全員がダメージを喰らっちゃっ！」

アルヴィンがそう呟くと、後ろで待機していた筈のエリーゼが出てきた。

手には杖みたいなのが握られている。

「エリーゼ、来るな！」

「お前を庇いながらでは戦えない。邪魔だ！」

俺とミラが言うけど、エリーゼは逃げようとしなかった。

「カイト！」

「!？」

一瞬、視線を魔物から離れたその時、魔物から攻撃を喰らってしまった。

後方に吹っ飛ばされて、背中を地面に打ちつける。

「ぐっ……」
「……ううっ……」

泣きながら俺に駆け寄ったエリーゼが、手を掲げて何かを発動した。すると、さっきまで激痛が走っていた背中や腹から、途端に痛みが引いた。

「これは……エリーゼがやったのか……」
「みんな一斉に回復を……？」
「元気出して！ ぼくたちがいるよー！」

ティポが励まして、俺は立ち上がった。

「一気に叩くぞ！」
「了解！」
「吹っ飛べ！ 紅蓮剣ぐれんけん！……」

炎を纏った剣で斬り上げ、斬り落としてから空中から炎を投げ飛ばした。炎は着弾した瞬間、爆発する。

「ジュード、俺達も！」
「うん、やろっ！」
「風よ集い弾ける！ 空縛掌破くわくしやく！……」

素早く斬り裂き、真空の刃が敵を囲う。そして、ジュードが踏み込み掌で思い切り押し飛ばす！

バコッ！ と弾けた空気もろとも、魔物も消え去った。

「ふう……エリーゼのおかげで助かったな」
「ああ、まさかこの歳であんな回復術が使えるとはね」

「エリーゼに救われたな」

みんなでベタ褒めしていたけど、その本人はまだ泣いていた。

「お前のおかげでみんな助かったんだ。それに、もう魔物も居ない。怖くないよ」

頭を撫でながら言うと、力強く首を横に振られた。そして、エリーゼの代わりにティポが言った。

「仲良くしてよー。友達には仲良くがいいんだよー！」

思わず面食らってしまった。

もしかして、樹海に入る前の事を言ってるのか？

「わたし……邪魔にならないように、する、から……だから……」

嗚咽を堪えながら、エリーゼがそう言った。

「だってさ。エリーゼに免じて許してあげれば？」

「免じるも何も、別に怒ってるつもりは無いんだが……」

「ウソーん。ジュード君とミラ君、もっと仲良しだったもんねー！」

ティポの言葉に、ミラとジュードが顔を合わせた。

「……いつの間にやら私が悪者か。ふふ、分かったよ」

「ほら、エリーゼに何か言いたい事あるだろ？」

「だな」

俺がアルヴィンに視線を移すと、何が言いたかったのか分かった

らしく、アルヴィンはミラとジュードの肩に腕を回した。

「心配かけちゃってたんだね。エリーゼ、ありがとう」

「やっぱり友達はニコニコ楽しくだねー！」

「ミラもエリーゼの回復術があれば心強いだろ？」

問い掛けると、ミラはエリーゼを見て、頷いた。

「そうだな。エリーゼ、これからはアテにするぞ」

そう言つと、エリーゼは頬を赤くして微笑んだ。

これでエリーゼはみんなと打ち解けられたよな。

俺も少し嬉しくなりながら、俺達は先に進む事になった。

道中、ケムリダケとか言うキノコの被害に遭った。

「！？ ごふっ！ なんやこれ！？」

「ごほっ！ みんな、大丈夫？」

「目にしみる……催涙性の胞子だな、こりゃ……ごほごほっ！」

煙り 胞子らしいけど で視界が最悪だったけど、ようやく

煙りが晴れて、目も回復してきた。

「これ、ケムリダケじゃないかな。目や鼻に入ると……しばらく、
涙が止まらない……」

咳をしながらジュードがそう説明した。

確かに、キノコがある。

だけど、それよりも気になる事が1つあった。

「あー、エリーゼ。何でもくっ付いてるの？」

煙りが晴れて涙も咳も気にしなくなっただけで、何故かエリーゼが正面から抱き付いてきていた。

「ご、ごめんなさい……」

「いやまあ、別にいいけど」

何か柔らかいなー。とかちょっとどきまぎしてしまったけど、それがティポと知って、少し憤りを覚えてしまった。

……何言ってるんだろ、俺……。

「やるねえ、カイト君」

「……手は出しちゃ駄目だよ？」

「いや！ 何か誤解してるぞお前ら！？」

アルヴィンはニヤニヤして、ジュードは少し心配そうな眼差しで……誤解ですよー？

とまあ、そんなこんなで、ようやく樹海の出口付近に辿り着くと、入口で見た魔物が俺達を取り囲んできた。

俺達が武器を構えると、出口の方から大きいおっさんが現れた。

「あんたは……」

「大きいおじさん……！」

おっさんを見て、エリーゼが驚いていた。

「おうおう、よう知らせてくれたわ」

いきなり魔物に向かってそう言った。
何だこいつ？

「イバル以外に魔物と会話が出来る奴がいるとはな」

どうやら魔物と話をしていたらしい。
少しカッコいいなあ。とか思ってしまったのは秘密だ。

「あなたは、ジャオさんですよね？」

「知ってるのか、ジュード？」

「人の話、ちゃんと聞いておこうよ……？」

何故か呆れられた。

「ん？ お前達には名乗っておらん筈だがのう」

「ハ・ミルの人達にな。で、どんなご用で？」

「知れた事。さあ、娘っ子、村に戻ろう」

ジャオと言うおっさんが、近付いてきてエリーゼに手を差し伸べた。

「少し目を離れたうちに、まさか村から出ているとはのう。心配したぞ？」

優しい口調で言うけど、エリーゼはティポと一緒に俺の後ろに隠れた。

ジャオは困ったように唸ったけど、俺もこいつに言いたい事があった。

「あんたがエリーゼを放っておいて、どうなってると思ってんだよ」
何も答えずに、ジャオは困った表情のままだった。

「お前はエリーゼとどういう関係なんだ？」

「その子が前に居た場所を知っておる。彼女が育った場所だ」
「そこにエリーゼを帰すのか？」

ミラの問いには答えたけど、俺の問いには答えない。

「また……ハ・ミルに閉じ込めるつもりですか？」

「お前達には関係無いわい！ さあ、その子を渡してもらおう！」

ちっ……逆ギレかよ！

「また閉じ込めるのが分かってるんだ。渡さねえよ！ エリーゼだ
って自由になっていいんだ！ あんたがどうこうする権利は無い！」

俺が叫ぶと、ぎゅっと後ろで服が掴まれた気がした。

それは、エリーゼも俺達と居たいと、そう言ってると思った。

「……仕方あるまい。エリーゼ、わしと一緒に来い！」

大きなハンマーを構えながら、ジャオがエリーゼに叫んだ。

「やだー！」

「嫌、ですー！」

自分から嫌とエリーゼが言った。その瞬間、戦いは始まっていた。ジャオは手加減も無く、俺に向かってハンマーを振り下ろしてきた。

背後にはエリーゼも居るから、簡単には避けられない。悩みながら剣を上にも構えると、ズガンッ！ 剣が折れるんじゃないかと思う程の衝撃が襲ってきた。

そして、俺は後ろに居たエリーゼと共に吹き飛ばされてしまった。

「がっ………！？」

「ううっ………」

吹き飛ばされてる時、とっさにエリーゼを庇うようにしたから、俺は近くにあった樹に背中を打ち付けた。肺の酸素が一気に吐き出される。

「カイト！ わっ………」

「くっ………邪魔だ！」

痛みを堪えながらみんなを見ると、ジュード達は狼の魔物と戦っていて、とてもじゃないけどこちらに助けに来てくれる余裕は無いように見えた。

つまり、ジャオの相手は俺がしないといけないって事だ。

……出来るのか、俺に。ただでさえ足を引っ張る俺が、エリーゼを守りながら、しかも人を相手にするんだぞ！

「カイト………大丈夫ですか！？」

「しっかりしてよー！」

「っ！？」

エリーゼとティポの声を聞いて、俺は考えるのを止めた。
考えていたって始まらないし、何よりも、1人で戦う訳じゃない。
そう気付いた。

「エリーゼ……今からあいつに、俺達の力を見せつけようぜ！」

「は、はい！」

「やったるー！」

こういう時にティポのハイテンションはいいな。何か、やる気出るわ。

「っし！ おっさん！ 今から目に物見せてやるからな！ 覚悟しやがれ！」

「何を言うか。そんなボロボロな身体で」

そうだった。俺もうボロボロなんだよな。

「大丈夫です！ ピクシーサークル！」

エリーゼが精霊術を発動させると、俺達の足下に魔法陣みたいなものが現れ、傷が癒えていく。

「行くぜ！ おっさん！」

言いながら、魔神剣を放つ。当然避けられると思っていたけど、左右から襲う双牙はどうだ！

「はあ！」

「甘い！」

ハンマーを地面に振り下ろし、隆起した岩が衝撃波を防いだ。
「ありがよ、そんなのっ！」

「エリーゼ、連携だ！」

「分かりました！」

エリーゼと共鳴^{リンク}して、俺は接近戦を試みる。
スピードでなら、おそらく俺が勝っているからだ。

「虎牙、連斬！ 真空破斬ッ！」

だけど、放つ技は全て防がれる。
隙を突いても相手が人だからか、一瞬躊躇^{ためら}ってしまふ。

「甘いと言つとるだろう、小僧！」

「ぐっ……！？」

躊躇いがこちらの隙を作り、ハンマーが容赦なく俺を襲った。

「カイトッ！」

「ははっ……大丈夫、大丈夫……まだまだ！」

エリーゼの回復術が無ければ、とつくに死んでるだろう。

「何故そうまでして、その娘を助ける？」

「さあ、何でだろうな？」

普通はここまでして、他人を助ける事はないのかもしれない。
だけど……！

「強いて言えば……俺はエリーゼの力になるって決めたからな」

「それだけか？」

「それだけありゃ十分だろ？」

ずっと独りだったエリーゼの気持ちは、俺にもよく分かったからかもしれない。

「カイト！ エリーゼ！」

「2人とも、大丈夫？」

「つたく、無茶しやがって！」

会話をしている間に、ミラ達が来た。魔物は倒せたらしい。

「……何故だ、娘っ子。その者達と居ても、安息は無いぞ？」

「仲間って……ともだちって言うてくれたもんっ！」

「もう寂しいのはイヤだよー！」

ジャオの問い掛けに、エリーゼとティポが即答した。

（みんな、少し話を聞いて）

俺達だけに聞こえるように、ジュードは小声で呟いた。
そして続いた言葉は、この状況を打破するものだった。

「わしも連れて行くのは本意ではない。……許してくれ」
「なら、そのまま帰ってくんねえか？」

もう何を言っても駄目だと分かっているけど、俺はそう言った。
そして、アルヴィンがジャオに銃を向ける。

「止めておけ。手負いのお前達が、わしに適う筈が」

しかし、アルヴィンが狙ったのはジャオではなく、ジャオの頭上に伸びた樹だった。

次々に銃弾が打ち込まれていき、ついに樹が折れて落下した。

そしてその落下地点には、道中で俺達を苦しめたケムリダケがあった。胞子が噴出し、辺りが胞子でいっぱいになった。

「口を押さえて！」

その隙に、俺達は出口へと一直線に走って逃げた。

逃げる時に、俺は思っていた。

助けるとか守るとか言っておきながら、俺はエリーゼに助けられ、守られていた。

結局、目に物見せるとか言っても、俺はジャオに傷1つ負わせる事は出来なかった。

悔しさで齒を食いしぼりながら、何に悔しさを感じているのかも分からずに、俺はただ、逃げる事しか出来ないと実感していた。

第9話 樹海の戦い（後書き）

カイトが弱いと言うか、他の人が規格外に強いだけだと思ったり（汗）。例えばジュードとか…。

次回はようやく、あのおじさまが登場（笑）

↓今回の共鳴術技↓

・空縛掌破

真空破斬＋掌底破

カイトとジュードの共鳴術技。真空破斬で斬りつけ敵を真空の中に閉じ込め、掌底破で破裂させる技。

第10話 賑やかな街

「やっとカラハ・シャルルに着いたね」

逃げ込むように街に駆け込んでから、落ち着いた所でジュードが
呟いた。

「すいぶん遠回りしちゃったな」

「もうおつきいおじさん来ないかなー？」

後方を見て心配そうにティポが呟いた。

「大丈夫だろ。さすがにあのおっさんも、こんなに人が居る所で連
れてくなんて目立つ事はしないと思うぞ？」

第一、あの図体だ。何もしなくても目立つと思う。

「カイト、大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、エリーゼの回復術のおかげでなとかな……」

あんまりエリーゼに心配かけなくなかったからそう言った。実際、
痛みは無い。まあ、身体中だるくて足もガクガクで、正直立つてる
のも辛い状態だった。

……あのおっさん、手加減はしていたんだろうな。されてなかつ
たら、とつくに死んだ。……と言うか、俺よく生きてたなあ。あ
のハンマーを思い出すだけで血の気が引いてくる。

みんなが近くの骨董品屋を見に行っていたので、俺も身体に鞭打
って歩いた。

「何か、街のあちこちが物騒だな？」

アルヴィンが店主にそう言っていて、俺は視線だけを動かして辺りを見ると、確かに武装した兵士が所々に居た。

しかも、すぐ入口のところにも居た。俺の集中力もかなり落ちていたみたいだ。これは本格的にヤバイ気がする。

「ええ、何でも首都の軍研究所にスパイが入ったらしくてね。王の親衛隊が直々に出張って来て、怪しい奴らを検問しているんですよ。まったく、迷惑な話で……」

愚痴を言うように、店主がそう言った。

「……キレイなカップ」

そんな愚痴などお構いなしに、エリーゼが他の客が持っていたカップを眺めてそう呟いた。

「でもこういうのって高いんだよねー」

「そりゃあ、そいつは『イフリート紋』が浮かぶ逸品ですからね」

「『イフリート紋』！ イフリートさんが焼いた品なのね！」

カップを手を取っていた女性が、明るくそう言った。

「イフリートって、あの大精霊の？」

「そうですよ」

へえ……そりゃすごい。と思った矢先、ミラが女性の手からカップを取って、指先で器用に回しだした。

「それは無いな。彼は秩序を重んじる真面目な奴だ。こんな奔放な模様は好まない」

と、まるで知ったかのような口振り……ってそうか。イフリートってミラに仕えてる精霊じゃんか。そりゃ分かるか。

「ほっほっほ、面白いですね。四大精霊をまるで知人のように」

ミラの言葉を聞いていた、紳士な感じの老人が笑いながら言った。

「確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則性をもつものです」

言いながら、カップが置かれていた皿を手に取り、その裏を見た。

「おや、このカップが作られたのは18年前のようですね？」

「それが、何か？」

「おかしいですね。イフリートの召喚は20年前から不可能な筈ですが？」

焦り出した店主は、老人のその一言で撃沈した。

うん。何事にも、嘘はいずればれるものだよ。

「残念、イフリートさんが作った物じゃないのね……。でも頂くわ！ このカップが素敵な事には変わりはないもの！」

そして、女性はかなり心が広がった。

偽物と知ってて買うなんて、なかなか居ないよな。

女性が買い物を終えると、老人と一緒に俺達の所に来た。

「あなた達のおかげでいい買い物ができちゃった。ドロツセル・K・シャルよ。よろしくね」

「執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを」

……どこかのお嬢様だろうか？ 執事も居る訳だし。

「お礼にお茶にご招待させて頂けないかしら？」

「お、いいね。じゃあ後でお邪魔させてもらいますか」

アルヴィンが真っ先にそう答えていた。

お茶会となれば休めるよな。俺も賛成しておこう。

「ああ、後で行かせてもらうよ」

「私の家は街の南西地区です。お待ちしておりますわ」

そう言つて、2人は去つて行つた。

「そんな暇は無いのだな」

「ま、この街に居る間は利用させてもらった方がいいだろ？」

「そうだね。こんなに警備が厳重だと、宿も取れなそうだし」

「それに、このままじゃカイトがぶつ倒れちゃうぜ？」

アルヴィンが言つて、みんなの視線が集まってきた。

何ともないようにしていたのに、ばれてたのか？

「本当に、大丈夫なんですか？」

「ダイジョブダイジョブ……」

「仕方あるまい。お茶に行くのでしょうか」

俺を見かねたのか、ミラが溜息を吐いて歩き出した。
何か、やっぱり足引っ張ってるなあ。と思いつつ、俺はエリーゼに支えられながら歩きだしたのだった。

* * * * *

街の南西地区にあるらしいドロツセルの家を訪問する事にした俺達は、すぐに絶句していた。

「お待ちしておりましたわ」

南西地区でドロツセルとローエンと合流して、前にある大きな屋敷に、言葉を失っていたのである。……主に俺が。

いや、こんな屋敷見た事ねえもん。漫画とかならあるけど、実際に見た時のこの……住んでる世界が違う感じ？ が物凄い。

だけど、ふと視線を入口に移すと、そこにはラ・シュガル兵が居た。

ミラがそれに気付き、剣を抜こうとするけど、アルヴィンが制止した。

そして、屋敷から出てきたお偉いさんみたいな2人は。こちらに気付く事も無く馬車に乗り込んで去って行った。

「お客様はお帰りになりましたか……」

ローエンがそう呟いた。何かあるのだろうか？……俺が首を突っ込む事じゃないか。

そのままドロツセル達に誘導されるように屋敷の前に行くと、また屋敷から男性が出てきた。

「お帰り、お友達かい？」

「お兄様！」

なんと、男性はドロツセルのお兄さんだったらしい。

「紹介します……あ、まだみんなの名前を聞いてなかった」

紹介しようと俺達を見たドロツセルだったけど、そう言えばこっちも名乗った覚えが無かった。

「はははっ、妹がお世話になったようですね。ドロツセルの兄の、クレイン・K・シャルです」

「クレイン様は、カラハ・シャルを治める領主様です」

礼儀正しく男性　クレインが名乗ると、ローエンが突然のカミングアウトをしてきた。

お偉方……って、マジか……！？　驚き過ぎてリアクションが出来なかった。

「立ち話もなんですから、中に入ってください」

クレインにそう促されて、俺達は屋敷の中に入って行った。

屋敷の中は想像を絶するような広さで、何かもう休めるとか思ってた数十分前の自分を全力でぶん殴りたい。だって、全部高そうな

んだもん！ 傷でもつけた日には一学生が弁償出来る筈も無い物ばかりだ。

「なるほど、また無駄遣いをする所を、皆さんが助けてくれたんだね」

おかしそくに笑いながら、クレインが言った。
優しそうな人で良かったよ。何でとは聞かないでくれ。

「無駄遣いなんて！ 協力して買ったのよね？」
「ねー」

ティポが何故かそう答えた。
そんな中、ローエンがクレインに近付いて、何かを耳打ちしていた。

「分かった。皆さんのお相手を頼むよ」
「かしこまりました」

何か用事が出来たらしく、クレインは「ゆっくりして行ってください」と言い残して去って行った。

「俺もちよつと」
「アルヴィン？」
「生理現象。一緒に行くか？」

冗談めかして言ったアルヴィンも1人でどこかに（本人曰く生理現象）行った。

話も一段落着いた事だし、やっと休めるだろう。

「ねえ、みんな旅の途中なんですよ？ 旅のお話を聞かせて？」

そんな時に、ドロツセルがそう言った。

……休めるかなあ。

「あの……わたし……」

「私、この街から離れたことがなくて……だから、遠い場所のお話を知りたいの」

「わたしも……外に出たことなかったです。でも……」

「カイト君たちが、エリーを連れ出してくれたんだー。海と森を通ってねー、波やキノコがすごかったー」

いや……すごかったのはキノコだけな気が……。

「そう言えば、カイトってあまり見ない格好よね？ どこに住んだの？」

「へ……！？」

久々に聞いた問いだった。

まあ、普通は思う事なんだよな。多分。

とりあえず、自分の格好を確認してみる。紺色のブレザー、そしてズボン。ブレザーの下には白いYシャツで、首にはネクタイだ。

……そんなに無い格好でも無い気がするんだよな。

「それ、わたしも知りたいです」

「エリーゼもか……」

少し困ったからジュードとミラに助けを求めようと視線を移してみると、ミラは何故か居ないし、ジュードは視線を逸らした。

どうする……ライフカードでもあったら睨み合いになってるな、

これは……。

そして俺が取った選択肢は、

「いやー、実は俺」

言おうとした瞬間、屋敷の扉が開け放たれた。

良かった。誰だか知らんが助かった。

そう思いながら扉の方に視線を移すと、そこに居たのはクレインだった。……横には兵も居るが。

「すみません。あなた方がイル・ファンの研究所に潜入したと知った以上、もう少しここに居てもらいますよ」

「な、なんの事だか……」

「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが全て話してくれました」

とぼけようとしたジュードだったけど、クレインはそう言ってきたまさか、アルヴィンが俺達を……？ いや、何か理由があったのかも。何も考えないでこんな事をする奴じゃないと思うから。

「軍に突き出すのか……？」

ミラが声を低くしてそう問いかける。けど、クレインは首を横に振って否定した。

「いいえ。イル・ファンの研究所で見たことを教えて欲しいのです。……ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変わってしまった。何がなされているのか、六家りくけにも知らされていない……」

クレインは椅子に座りながらそう言った。

「軍は、人間からマナを強制的に吸い出して、新兵器を開発していた」

ミラはクレインを信じたのか、そう答えた。

「人体実験を？ まさかそこまで！？ ……嘘だと思いたいが、事実とすれば辻褄があう……」

よほどショックだったのか、クレインは俯いてしまった。

「実験の主導者は、ラ・シュガル王 ナハティガルなのか？」

「そうなるでしょう」

「そんな……」

王が自国の民を実験に使うなんて……何考えてやがんだ！？

「……ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を離れていただきたい」

本当に済まなさそうに、だけど力強くクレインがそう言うと、ミラが立ち上がった。そのまま出口の方に歩いていく。

「ありがとうございます、クレインさん」

そう言って、ジュードもミラの後を追った。俺もこの場に居る訳にはいけないから立ち上がる。

「カイト……」

追おうとすると、エリーゼが悲しそうに俺を見ていた事に気付いた。

……そうだよな。エリーゼは研究所とか関係無いんだ。だから、無理に付いて行かなくてもいいんだよな。

「こんな事、俺が頼むのもなんだけど、1つだけいいか？」

「……何ですか？」

「エリーゼを、ここに引き取ってほしい」

「え……？」

「カイト君、何でー！？」

俺の言葉に、エリーゼとティポが驚いていた。

「エリーゼは研究所とか関係無いからな。わざわざミラ達に付いて行って危険な事に巻き込む必要はない」

「そうですか。こちらは構いませんけど……エリーゼさんは？」

クレインがエリーゼを見ると、ビクツと身体を震わせていた。

俺はもう一度、海停で言った問いを試してみた。

「エリーゼはこれからどうしたい？　ここに残るか、付いて行くか」

「わたしは……みんなと　友達と一緒にがいいです……」

「そっか」

一度撫でると、俯いていたエリーゼが顔を上げた。

「悪い、さっきのはナシって事で。エリーゼ、みんなの所に行こう？」

言つとエリーゼは小さく頷いた。

俺は手を引いて、屋敷から出たのだった。

屋敷から出て広場まで行くと、ミラ達が居た。

「よっ、やっと来たのか」

「アルヴィン君のバカー！　アホー！　略してバホー！」

「バホー！」

「何だよ、バホーって……」

何となくティポが言った事を復唱してみると、アルヴィンは呆れたように頭を掻いた。

「で、これからどうするんだ？」

「やっぱり、王様を討つの？」

おそろおそろというようにジュードが問い掛けると、ミラは静かに頷いた。

「君達国民は混乱するだろうが、討たねば第2、第3のクルスニクの槍が造られるかもしれない。それを見過ごす訳にはいけないからな」

「うん……無理矢理マナを引き出して犠牲にするような事、放ってなんかおけない」

ジュードが頷いたその時、運悪く兵士が俺達の近くに来てしまっていた。

「お前ら……まさか手配書の？」

「往来で堂々としすぎたかもな」

「と言うか、あの手配書で見つかるなんてな……」

ちよつと、いや、かなりショックだ。あんな変な絵だったのに。俺達が応戦しようとしたその時、今度も思わぬ人物が登場した。

「南西の風？……いい風ですね」

「……ローエン？」

そう、現れたのは、執事のローエンだった。

ローエンは俺達を見て、「この場は私が……」と言って、兵士に背を向けた。

このじいさん、何を……って、持ってるのはナイフか？

「おいじいさん！ こつちを向け！ 何をやっている！」

兵士の1人がそう叫ぶと、ローエンはようやく兵士の方を向いた。直前に、何かを空に放り投げた気がした。

「おっと、怖い怖い」

ふざけたように言いながら、ローエンは前に出た。

「おや？ 後ろのお2人、陣形が開き過ぎてはいませんか？ その位置は、一呼吸で互いをフォロー出来る間合いではありませんよ？」

ローエンが言うと、後ろの2人の兵士は思い出したように距離を詰める。

このじいさん……何で敵にアドバイスなんかしてんだよ？

「貴様！ 余計な口を利くな！」

「そしてあなた。もう少し前ではありませんか？ それでは私はともかく、後ろの皆さんを拘束出来ませんよ？」

ローエンは前に居た1人にもそう言うのと、その兵士はまるで逆らうように、一步後ろに下がった。

それを見たローエンは、「いい子ですね」と言った。

何がしたかったんだこのじいさん……。と思った次の瞬間、空からナイフが降ってきて、それは三角形に地面に刺さり、3人の兵士が拘束された。

まさか……。ローエンはこれが狙いだったのか。だからワザと3人に言って、立ち位置を修正させた？ でも、そんな上手くいくのかよ？

「皆さん、こちらへ」

兵士が動けない間に、俺達はローエンに誘導されて屋敷の方に向かった。

「ローエン君すごいー！ こわいおじさん達もイチコロだねー！」
「いえいえ、イチコロなどとても。私程度ではただの足止めです」

ティポの褒め（？）に謙遜するローエンだけど、3人一斉に足止め出来て、しかも相手の動きを操作したんだ。凄いなんて言葉じゃ足りない気がする。

そしてどうでもいい事だけど、ティポは誰に対しても君を付けるんだろうか？

「助かりました、ありがとう。……ローエン、さん」

「ローエンで結構ですよ」

「それで、何か用があるんだろう?」

ミラが問い掛けると、ローエンは顔を強ばらせた気がした。

「実は……皆さんにお願いがあるのです」

「お尋ね者いる一行にか? 楽しそうな話じゃなさそうだな」

確かに、と言うか、言い方は悪いけど、追い出そうとした俺達に助けを求めるのって……よほど緊急な事態なんだな?

「先程、ラ・シュガル王が屋敷に来られ、王命により街の民が強制徴用いたしました」

「ナハティガルが来ていたのか?」

「多分、屋敷に入る前に馬車に乗ったあれじゃないか?」

顔はよく見えなかったけど、十中八九あいつだろうな。

けど、強制徴用か……悪い予感しかないな。

「もしかして……人体実験……?」

「分かりません。民の危機を感じた旦那様は、徴用された者達を連れ戻しに向かわれました。しかしナハティガルは、反抗者を許すような男ではないのです……」

本当に、心の底から心配なんだろう。

冷静そうな人なのに、口調はいつの間にか早くなっていた。

「ドロツセルのお兄さん……危ないんですか?」

ぎゅっと裾を握ってきたエリーゼを、安心させようと頭を撫でる。

「助けに行こう」

「よろしいのですか？」

「当たり前だろ。むしろ断る理由がない。な、みんな？」

俺がみんなに問い掛けると、エリーゼは頷いてくれた。

「そうだね。クレインさんもだけど、連れて行かれた人達も心配だし、助けに行こう」

「あー、お人好し2人に火が点いちまったか」

何故かアルヴィンは残念そうに言ったけど、別段反対と言う訳でもなさそうだ。

「分かった。あれを使おうと企むナハティガルは見過ごせないからな」

「ありがとうございます」

みんなの了承が得られて、ローエンが深々と頭を下げた。

「街の民が連れて行かれたのは、『バーミア峡谷』です。急ぎましょー！」

そういう訳で、俺達はクレイン達を助ける為に、バーミア峡谷へと急ぐ事になった。

第10話 賑やかな街（後書き）

ようやくローエンが登場！ ダンディーですよねローエン。何故ギヤグ要員なのか、それが疑問だったりします（笑）。

第11話 峡谷の実験施設（前書き）

戦闘……下手だなあ……（笑）

第11話 峡谷の実験施設

カラハ・シャルルからク라마間道に出て、魔物を倒しながらようやくバーミア峡谷に着いた。

刹那、俺は思わず膝を着いてしまった。すぐに立ち上がって、震える足を落ち着かせる。

みんなの様子を見ても気付いた感じがなかったので、俺はホッと胸を撫で下ろした。

少し後ろを歩いて良かったな。屋敷で休んだから大丈夫と思ってたけど、疲労は自分で思うよりも溜まっていたらしい。

「カイト君、遅いぞー」

「あ、悪い」

ティポに言われてしまい、急いでみんなに追い付いた。

そこで改めて峡谷を見回してみると、崖には幾層もの地層があった。

「すごい地層だね……」

「ああ……まさか……登るのか？」

「はは……さすがに死んじゃうよ？」

「ここはラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね。登るのにもひと苦労でしょう」

崖は本当に高く、エリーゼやローエンも大変そうだった。と言うか、元気であるミラやジュードでも大変じゃないか？

そんな事を思いながら峡谷を見上げていると、岩影に人が見えた。

そしてそいつは、ボウガンのようなモノをこちらに向けていた！

「!? エリーゼ!」

とつさにエリーゼを抱えて近くの岩影に隠れる。すると、先程までエリーゼが立っていた場所に、矢が突き刺さった。

「あ、危ねえ……。怪我無いか、エリーゼ?」

「ありがとう、カイト……。大丈夫です」

辺りを確認すると、みんなもちゃんと岩に隠れていた。

向こうでアルヴィンが銃で撃とうとしたけど、場所が悪くて無理そうだった。

何か……。何か手は無いのか……?

「僕が囷になるよ」

「なっ、危険だぞ!」

「分かってるよ。でも、誰かがやらなきゃ」

自分の中で決めたらしく、ジュードは退かなかった。

「分かった。頼んだぞ、ジュード」

ミラからゴーサインが出て、ジュードは岩から出て行った。

そして、矢が放たれるその直前、ミラが気付かれないように走り出す。矢は放たれると、ジュードは身体を少しだけ横にずらしてそれを避けた。

さすがに敵は予想していなかったのだろう。攻撃の手は止まり、その隙にミラが敵の懷に飛び込んでいた。

それに気付いた敵は、すぐにミラを射ろうとする。だけど、アル

ヴィンのナイスアシストで、敵はボウガンを弾き落とされた。そしてミラが敵を斬り、何とかこの場は助かった。

……けど、敵とは言え、殺すのはな……。

「助かった」

「そう言われるポイントで活躍するのが傭兵のコツなんだ」

「それは言わなければカッコいいのにな……」

わざわざ言うのはマイナスポイントですよ、アルヴィンさん。そんな事を思っていると、ミラがいきなり背後に振り返った。

「これは……イル・ファンで感じた気配……？」

「なになに、お化け？」

「まさか、ここにもあの装置が？」

イル・ファンの出来事は俺にも分からないけど、とにかく大変な事なんだろう。

ミラが走った後を追って洞窟の中に入ると、明らかに怪しい機械が見えた。何かを上の方に吸い上げてるけど……もしかしてあれがマナか？

「クレイン様！」

ローエンがクレインの姿を発見して叫ぶ。

行く手を阻んでいる結界みたいなモノにミラが手を伸ばすと、アルヴィンが止めに入った。

「あれ、研究所でハウス教授を殺した装置に似てる！」

「ここでも黒匣^{ジン}の兵器を作り出そうと言うのか！？ それ程容易くはない筈……」

ミラが結界の前で何かを呟いていた。

「とにかく、どうやって中に入るんだ？ 見た所、入口はここしか無いみたいだぜ？」

「……展開した魔方阵は閉鎖型ではありませんでした。余剰の精霊力をドレインしていると考えるのが妥当です。谷の頂上から侵入して、術を発動しているコアを破壊できれば……」

「上って……」

ざっと見て軽く30メートル以上はある気がするんですが……。

「ま、他に方法は無さそうだな。仕方ないか……」

「そうだな。行こう」

洞窟から出て、峡谷を登る事になった。

* * * * *

と言う訳で頂上。……何てパツと行くみたいなものは存在せず、俺達は真面目に登り続け、ようやく3分の2の所まで辿り着いた。

……正直に言おう。軽く死ぬる。

ただでさえ辛い山登り（と言うなのロッククライミング）なのに、何故途中で魔物なんか居るんだよ！？ マジで殺しに掛かってきて

んなオイッ！

「……エリーゼ……だい、大丈夫……か……？」

「わたしは大丈夫ですけど……」

「カイト君は死にそーだねー」

その通りだよティポ君……。マジ気を抜いたら死ぬわ……。

「無理、しない方がいいよ？」

「俺から助けるって言うっておきながら、俺がへこたれてたら格好悪いだろ？」

「そこまで我が主を気に掛けてくださるとは……。ありがとうございます！」

「いや、そんな大層なもんじゃないから……」

この旅をやる事になった根本　自分のやりたい事をやっているだけなんだし。

「ま、そうやって話してられればまだ大丈夫だな」

「うむ、先を急ぐぞ」

そしてさらにスピードがアップしたのは、気のせいだと思いたかった。

やっとこさ頂上に着いた時には、疲れを通り越してもうフィーバ―状態だった。

……やべえ、何言ってるか自分でも分からねーよ！？

「で、こつからどうするんだ？」

「コアが作動してる！　けど……この高さ……」

「時間がありません。噴き上がる精霊力に対して魔方陣を展開します。それに乗ってバランスをとれば、無事に降下できるかもしれません」

……つまり、ダイブっすか……。

でも、迷ってなんかられない。

「俺はいつでもいいぜ！」

「僕も大丈夫！」

「他に手は無いからな」

「なかなか度胸がおありで」

「ホント、見掛けによらずな」

度胸というより、半ばヤケクソだけだな。

「お嬢さんはここで待っていますか？」

エリーゼは首を横に振って、俺の手を握ってきた。そつと力を入れる。

「しっかり握ってるよ？」

コクコクと数回頷いた。

「では、参りますよ！」

言いながらローエンはナイフを宙に投げる。それは紙飛行機のよ
うな魔法陣を形成した。

スペースは6人でギリギリ。仕方なくエリーゼを抱きかかえる形になってしまった。

「エリーゼ、あんまり動くなよ？」

「は、はいっ……」

何でか慌ててるけど、落ちないようにしっかりと抱きかかえる。

「うう〜」と唸る声が聞こえた気がした。

けど、それを気にする暇も無く、魔法陣は急降下して行く。ほとんど垂直落下だった。

「見えた！ アルヴィン！」

前方にコアのようなモノが見えて、ジュードが叫ぶ。

一発勝負だけど、揺れすぎてアルヴィンはコアに狙いを定められないでいた。

けど、それをジュードが支えて、狙いが定まった瞬間、銃弾はコアを撃ち抜いた。コアは砕け散り、起動していた機械は全て停止した。

クレイン達を閉じ込めていた檻の扉も開いていた。

地上に足を着けた瞬間、また膝から崩れてしまった。

「大丈夫ですかっ！？」

「だ、大丈夫……垂直落下に驚いただけだから……」

心配そうなエリーゼに、そう言ってごまかした。とりあえず、エリーゼから腕を離れた。

俺が座り込んでいる内に、クレイン達は助け出されていた。ミラの探していたナハティガル王は、この場には居ないみたいだ。

またばーつとしてしまっていた。
剣を握り直して、戦いに集中する。

あの魔物は宙に浮いていて、なかなか攻撃は当たらないようだ。

「やるぞ、ジュード！」

「分かった！」

「連撃喰らえ！ めっそうらが 滅爪乱牙！！！」

ジュードとミラがほとんど同時に殴り斬り、地面に落として衝撃波を与えて吹き飛ばした。

「エリーゼ、連携だ！」

「はいっ！」

「ピヨッときな！」「ピヨピヨですっ！」

「「ピコ連斬！！！」」

ダウンしていた蝶々の魔物に、俺は巨大なピコピコハンマーで叩きつけた。あんまり手応えは無いけど。

「喰らわせるぜじいさん！」

「承知！」

「喰らえ地の爪！ プラストライズ！！！」

ローエンが投げたナイフが魔法陣を描き、そこから岩が突き出す。それをアルヴィンが銃で撃ち砕いた。

フルボッコみたいで悪かったけど、それで蝶々の魔物は力尽きたのか、地面に倒れ込んだ。

そこに、ミラは剣でトドメを差そうとしていた。

「ミラ！ ちょっと待て！」

「何故止める？」

「いや……なんか、あれは殺しちゃいけない気がするんだよ……」

上手く理由は言えないけど、何となくそう思った。

「ミラ、あれ！」

ジュードが叫んで魔物を見ると、光り輝いて粒子のようなものが舞っていく。

「微精霊だよ」

そう呟くと、ミラは剣をしまった。

「……すまない。我を忘れ、危うく微精霊を滅する所だった。礼を言うよ、カイト」

「いや……気にしないでいいよ」

俺が気付いたのはほとんど奇跡に近いから。

そう思った瞬間、全身から力が抜けて、俺は地面に倒れ込んでしまった。

「ど、どうしたんですか!？」

そんなエリーゼの悲痛な叫びを遠くに聞きながら、俺の意識は暗闇に吞まれていった。

第11話 峡谷の実験施設（後書き）

もう少しであの要塞ですか……。どうしよう（汗）

それはともかく、次回はあの人がどうなるのか！？ とりあえず
もったいぶっておきます（笑）

〽今回の創作共鳴術技〽

・ブラストライズ（火・地）

タイドバレット+アンビュスアーチ

アルヴィンとローエンの共鳴術技。

ローエンが投げたナイフから出た岩を、アルヴィンがタイドバレットで粉碎していく。

第12話 ガンダラ要塞（前書き）

ようやく大事な場面に突入します。

第12話 ガンダラ要塞

ジュード達がカラハ・シャルルへ戻ると、屋敷の前でドロツセルが皆の帰りを待っていた。

ドロツセルはクレインの姿を見ると、すぐに駆け寄ってきた。

「お兄様！」

「僕は大丈夫だ……それよりも、この人達を早く病院へ。ローエンは、屋敷に戻ってカイトさんを休ませてくれ！」

「分かりました！」

クレインが指示すると、兵士たちは一斉に動き出して、マナを吸い取られた街の住人を運ばせた。ローエンは一足先に屋敷に戻って行く。

「ど、どうしたの!？」

ドロツセルは、アルヴィンに背負われたカイトを見て血の気が引いたように顔色が真っ青になった。

「わかり……ません……」

「多分、過度の疲労が原因だよ。大丈夫、少し休めば元気になるから」

今にも泣きそうなエリーゼを慰めるように、ジュードが言う。

「まったく、疲れてんならそう言えっつの」

そう愚痴を言って、アルヴィンは屋敷の方に向かって行く。

「ジャオと戦って峡谷も登ったんだ。仕方あるまい」

「そうかもしれないけど……ちゃんとやってくれればよかったの
ね……」

「それはあいつが起きてから言えればいいさ」

「みなさんも、屋敷に入ってください」

クレインに促されて、ジュード達は話を中断して屋敷に入る事
になった。

* * * * *

目を覚ますと……そこは何の光も無く、真つ暗な場所だった。こ
れでは自分の目が開いているのかも分からない。首を動かそうとし
ても、何故か首すら動かなかった。

ああ……もしかして俺……死んじまりました？

ほら、何か息も苦しいし、顔の回りが何かもこもこして暑苦しい
し。

おまけに、「ティポ！ カイトを食べちゃダメです！！」なんて
エリーゼの幻聴まで聞こえてきていた。

いやー、さすがにティポは食いませんよ？ あれ？ 食われてん
のは俺か？

……って、マジで息が苦しくなってきた……。無意識に顔に手を
伸ばして、顔に引っ付いていた何かを引っぺがした。

「ホントに死ぬわっ!？」

と、叫びながら起床。手にはもふもふのぬいぐるみ テイポが握られていた。

……あれ？ 俺生きてるよ!？

「カイトッ!」

呼ばれて横を見ると、目に涙を溜めたエリーゼが居た。

「エリーゼ？ ここは……?」

「……ドロツセルのお屋敷です」

「……何で？」

「峡谷で、倒れたんですよ、カイト」

言われてそう言えば、と思い出す。

たしか、限界がきてぶっ倒れたんだ。

「ごめんな、心配かけて」

言いながらベッドから降りる。

うん。ぶっ倒れたとは言え、十分休めたみたいだから、疲れは全く無いな。

「もう、無茶しちゃダメですよ?」

「ああ……うん、善処するよ……」

少し怒った様子で言うエリーゼから視線を逸らして、俺は言った。

屋敷の2階の客間？ で寝ていた俺は、エリーゼと一緒に1階へと降りた。

「ようやく起きたか」

降りてすぐに、ミラが俺に気付いてそう言ってきた。

「ごめん。迷惑掛けて……」

「別に迷惑ではないぞ」

「でも……」

俺の所為で先に進むのが遅れたとなると、罪悪感是否めない。

「もしカイトが倒れていなくても、私達は足止めをくらっていたかならな」

「そうなのか？」

言われて、カラハ・シャルへ来る時の事を思い出した。

検問が置かれていて、仕方なく樹海を通る羽目になったからな。今回も検問が行く手を阻んでいるのだろうか？

「それで？ まだガンダラ要塞から連絡は来ないのか？」

不意にアルヴィンがそう尋ねていた。

「すみません、まだのようです」

「それなら私が急ぎで確認をしますか？」

「うむ、よろしく頼む」

よく話が分からない内に、何やら話は進んでいるようだ。
とりあえず、今から行くのはガンダラ要塞と言う場所らしい。明
らかに正面突破は無理そうな名称だな。何たって要塞だから。
そう言う訳で、ローエンが発砲する準備が出来て、俺達は屋敷の
前で見送る事になった。

「どのくらいで戻ってくるの？」

「馬を使えば、1日もあれば戻って来れますよ」

それを聞いたドロツセルは、「早ければ明日にでもお別れなのね」
と残念そうに言った。エリーゼとティポも俯く。

この2人はもう親友の域に達しているようだった。

「エリー、ミラ、お買い物に行きましょう！」

「お買い物？ 行く行くー！」

ドロツセルのまさかの提案に、ティポが跳ねた。エリーゼも嬉し
そうな笑顔を浮かべる。

それで話は決まったらしく、エリーゼとドロツセルは笑顔でミラ
の両腕を掴んでいた。そして、そのまま引きずって行った。

「ま、待て。話が見えない」

「エリーとお買い物物の約束したもの。明日お別れかもしれないなら、
チャンスは今日だけよね？」

「それはそうだな。行って来るといい」

「じゃあ出発ー！」

「「出発ー！」」

まるで他人事のように言ったミラだけど、笑顔な2人（と1つ？）

はそのままミラを引きずって行った。

「だから何故こうなるんだ？ 私が行く必要は無いだろう？」

まだ抵抗するミラに、俺達は笑いを堪えながら言う。

「いいんじゃないの？」

「たまには人間の女の子っぱい事するのも、面白いんじゃないかな？」

「そうそう、遊んでこいよ」

そしてまだ何か言っていたけど、うん、聞かなかった事にしよう。

「この今の幸せの為に、僕も決心しなければならない……」

3人が去った後、クレインが何かを決意したようにそう呟いた。

「やはり、民の命をもてあそび、独裁を走る王にこれ以上従う事は出来ない」

「……反乱を起こすのか？」

「……戦争になるの？」

戦争！？

思いがけない単語を聞いて、一瞬寒気を感じた。

戦争は……確かに俺の世界にもあったけど、それは俺が生きる世代じゃなかった。昔の事だった。けど、この世界じゃ戦争は……そんなに簡単に起こる事なのか……？

いや、簡単じゃない。王様の独裁の所為で何人も死んでるんだから……。

ジュードとアルヴィンの問いに、クレインは小さく頷いた。

「ナハティガルの独裁は、ア・ジュール侵攻も視野に入れたものと考えられます。そして彼は、民の命を犠牲にしてもその野心を満たそうとするでしょう。このままでは、両国とも、無為に命が奪われる」

他国を攻めるのに自分の国の人間を殺すなんて……狂ってやがるな……。

「僕は領主です。僕の成すべき事、それは、この地に生きる民を守る事」

「……なすべきこと……」

「そう。僕の使命だ。力を、貸してくれませんか？」

クレインの言葉に、ジュードは戸惑っていた。

「僕達は、ナハティガルを討つという同じ目的を持った同志です」

そう言っ、クレインはジュードに手を差し伸べる。

戸惑いながらも、ジュードはゆっくりと、クレインの手を握ろうとした。

だけど、その刹那　クレインの胸に矢が突き刺さっていた。紅い血が飛んだ。

「なっ！？」

「旦那様！？」

「クレインさん！？」

いきなりの事で頭の中が真っ白になった。

ジュードとローエンがクレインに駆け寄る。背後で舌打ちの後に銃声が聞こえた。おそらくアルヴィンがクレインを撃った奴を撃ったのだろう。

「早く治療を！」

「う、うん！」

ジュードの掌が光り、治療を始めるけど、傷は一向に塞がる気配が無かった。

とにかく屋敷の中に戻り、クレインをソファに寝かせて治療を再開する。

抜いた矢を見てローエンが絶句していると、ジュードが治療を止めて、床に膝を着いた。

「お願いします！　どうか旦那さまを……」

「……ローエン、無理を言っではいけない」

まだ意識があつたらしく、慌てるローエンにそう呟いた。

「……僕はここまでのようだ。……国の事を……頼みます……」

もう喋る事すら難しい状態なのか、所々つかえながら言う。

「それこそ私には無理です……」

「無理じゃない筈だ……『あなた』なら……」

それを言った瞬間、がくりと力が抜けたようになった。

「……お前こそ諦めんなよ！」

だけど俺は、そう言っていた。

「カイト……もう……」

「今の幸せを守れよっ！ 1人になるドロツセルはどうするつもりなんだよ！？」

ジュードの呟きを無視して叫んだ。

俺自身、ホントは分かっていた。もう無理なんだろう。助からないだろうと。

だけど、ただの子供の我が儘みただけど、俺はこいつに死んでほしくなかった。

思った瞬間、俺の中から何かが流れ出るような感覚を感じた。

「これは……」

「まさか……精霊術！？」

みんなが驚愕している事には気付かずに、俺は流れ出るそれをクレインに流し込む。

刹那 一瞬で視界がブラックアウトして、何が起ったかも分からずに俺は意識を失った。

* * * * *

目を開けると、今度は普通に天井が視界に入った。

起き上がってみても、辺りには誰も居ない。あれからどれくらい経ったのか。クレインは大丈夫だったのか。それを知る為に、部屋を出た。

部屋を出て1階に行くと、ジュード、アルヴィン、ローエンが居た。

話を聞くと、俺はまたぶっ倒れたみたいだった。

「クレインはどうなったんだ？」

「カイトさんのおかげで、何とか一命は取り留めました。本当にありがとうございます」

「……俺が？」

ローエンが深々と頭を下げるけど、全く身に覚えは無い。覚えているのは……俺の中から何かが流れ出た感覚だけだ。……あれは何だったんだろうか？

「そうだ、エリーゼ達は？」

「……捕まっちゃったんだ」

「捕まった!？」

ジュードの話では、俺が倒れてすぐに街の兵士が来て、広場で戦いがあつたと伝えられる。広場に行った時には既に、軍の馬車にみんな乗せられていた所だった。

そして連れて行かれたのは、俺達を通ろうとしていたガンダラ要塞だった。

2度も倒れたけど、そのおかげか体力は既に全快だ。時間が惜しいと言う事もあって、俺達はさっそくガンダラ要塞へと向かった。

* * * * *

タラス街道と言う場所を通って、ガンダラ要塞には意外と早く着く事が出来た。

けど、さすが要塞と言うだけあって、外にも兵士は結構居る。さらに、もし兵士を倒したとしても、中に入るにはあの大きな鉄の扉をどうにかしないといけない。正面から突破するのは難しいだろう。

「皆さん、こちらです」

ローエンに導かれるまま、俺達は要塞の横にある排気口の所まで行った。

「ジュードさん、その排気口を叩いて合図を送ってください」

「合図って……誰に？」

「もちろん中に潜入した者に、ですよ」

「そんな、いつの間に……」

まさか、こうなる事を予想していたのか？ 本当に凄じいさんだな。いや、じいさんなんて失礼だ。ジェントルメンと呼ぼう。

「ナイス、ジェントル！」

「馬鹿か、叫んでどうする！」

アルヴィンに怒られた。

「……カイトは倒れてたから分からないかもしれないけど、峡谷から戻ってから要塞（こゝろ）を抜ける為に、クレインさんにいろいろやってもらってたんだよ」

「ああ……なるほど」

呆れ顔のジュードがそう説明する。

そう言えば、俺が倒れなくても足止めになってたって、ミラが言ってたっけ？

ジュードが排気口に入り、合図を送る。しばらくして、ジュードがこちらを向いた。

合図が返ってきたらしく、俺達はジュードに促されて中に潜入した。

第12話 ガンダラ要塞（後書き）

注）この物語の主人公はチートではありません。

今回主人公が使った力は、後で真相が分かると思います。

まあ……どれくらい後になるか分かりませんがね（笑）

第13話 強くなる為に（前書き）

ガンダラ要塞のイベントはトラウマ物ですよね……。

第13話 強くなる為に

要塞の中に無事潜入出来た俺達は、先に潜入していた味方に、助け出しても呪帯と言う空間がある限り、逃げられないと言う事を聞いた。

「制御室へ行けば呪帯を消す事が出来る筈です」

と、ローエンの提案で、制御室に向かう事になった。

制御室に向かう途中、やはり簡単には行かしてもらえないように、兵士と戦闘になってしまう。

「はっ！
ひえんれんきやく飛燕連脚！」

「シエル・ヴァンガード！」

「空破鉄槌！ エアプレッシャー！」

ジュード達はそれぞれ、技を繰り出して兵士を倒していく。だけど俺は、いつもの事だけど、上手く戦えていなかった。相手が魔物ではなく、人間という事もあるのだろう。いつもより手が震えた。

ジュードは手加減をしているのかもしれないけど、アルヴィンとローエンは戦場というものが分かっているのか、手加減は無いように見えた。

「はあっ！」

「っ！？」

兵士が俺に向かって剣を振り下ろしてきた。俺はとっさに飛び退いて避けたけど、バランスを崩して尻餅を着いてしまった。

その隙を逃す筈もなく、兵士はまた剣を振り下ろす。避ける事も出来ずに、剣を上にも構えて防いだ。ギャリギャリと嫌な音が鮮明に聞こえた。

「っ！ てっ！」

このままじゃまずいと、思い付きで兵士の足を蹴ってバランスを崩させる。その隙に起き上がって剣を構えた。

……殺らなきゃ、殺られる。それは分かっているけど……殺すのは、俺には出来ない！

だけど、敵はそんな思いを知る訳もなく襲い掛かってくる。剣を剣で弾き返し、よろけて隙が出来た所で斬りつけようとして、やはり躊躇^{ためら}ってしまい、結局柄^{つか}で兵士を殴りつけ、蹴飛ばした。

「カイト、大丈夫？」

心配そうにジュードが尋ねてきたけど、大丈夫と小さく返す事しか出来なかった。

「カイトさんは、人と戦うのは初めてなのですか？」

「……当たり前だろっ……」

だって俺は……ついこの間までは普通の学生だったんだ。魔物と戦っていた今までは違う。

斬る相手は俺と同じ人間だ。誰だって躊躇うだろ！

「ミラの力になるって事は、こういう事だ。分かった筈だろ？」
「……………」

アルヴィンの言った事は正論だ。
黒匣^{ジン}を人が扱っている以上、そうなるのは分かっていた。……頭
では。

「ま、悩むのはいいが、早くしないとミラもエリーゼもドロツセル
も、みんな助けられないぜ？」
「……………分かつてる」

そうだ。今はエリーゼを……………みんなを助ける事だけを考えよう。

「無理だけはしないでよ？」

「ああ……………ありがとな、ジュード」

この時ほど、ジュードのお節介に救われる事はないだろう。
そう思っほど、ジュードの優しさに感謝した。

* * * * *

「ナハティガル！」

ようやく見つけた制御室に入ると、そんな叫び声が聞こえた。

階段から下を覗いてみると、エリーゼとドロツセルが居て、ミラが男　ナハティガル王だろう　に斬り掛かっていた。だけど、ナハティガルは腕で剣を受け止め、その剣を握りしめた。そしてミラを壁に叩きつける。

「貴様のような小娘が精霊の主だと？　この程度で笑わせる！　儂はクルスニクの槍の力をもって、ア・ジュールをもたいらげる！」

ナハティガルが言うと、ジュードは階段から飛び降りた。

「それでカラハ・シャルを……！　どうしてこんな非道い事ばかり……」

「下がれ！　貴様のような小僧が出る幕ではないわッ！」

ジュードに叫んだと思ったら、握っていたミラの剣を持ち直した。悪い予感がした。そして、考えるより早く身体が動く。

刹那、

「貴様などに、我が野望が阻めるものか」

ミラに向かって剣が投げられた。

もう駄目か……。そう思った瞬間、投げられた剣にナイフが当たり、軌道が逸れて壁に突き刺さった。

「イルベルト、貴様か……！？」

ローエンはバーミア峡谷の時と同じ魔法陣に乗っていた。ナハティガルがローエンに何かを言うけど、ローエンは一瞥するだけだ。

「イルベルト……？　歴史で習った、あの『指揮者』イルベルト！

コンダクター

「？」

見ると、ジュードとアルヴィンも驚いた様子だった。

つと、今の内にエリーゼ達の無事を確認しないと。

エリーゼに駆け寄ると、泣きそうになりながらも抱きついてきた。

「エリーゼ、無事か！？」

「わたしは大丈夫です……」

「お嬢様も、無事で何よりです」

魔法陣から降りたローエンも、ドロツセルにそう言っていた。

「逃がさん！」

安心してしていると、またミラの叫び声が聞こえた。

視線でミラを追った時には、既にナハティガルの姿は無く、閉じようとしていた扉にミラが飛び込んでいた所だった。

「ミラ！ ミラー！」

ジュードが叫びながら扉を叩くけど、何の反応もしない。

俺もほとんど勢いで剣で斬りかかると、ガキン！！ と鈍い音がして、剣が真っ二つに折れてしまった。

「皆さん！ これからこの要塞の動力を焼き切ります。そうすれば扉も呪帯の問題も解決する筈です！」

ローエンが提案して、みんなが集まる。

「でもよ、こんな大きい要塞だぜ！ 焼き切れんのかよ？」

「皆さんのマナを使えば何とかなると思います！」

「待ってくれ！ 俺、マナとか扱えないんだけど……」

「大丈夫だよ。クレインさんを助けた時と同じようにやれば」

だから、その『助けた時』が分からないんだっての！

俺の意見は通らずに、ローエンは魔法陣を展開させた。そこにマナを流し込むだろうけど、俺はやり方が分からなかった。

みんなが手を掲げるから、それに倣ってマナを出すイメージをする。けど、正直上手くやれている実感は無かった。

「くっ……6人も居るのに……焼き切れないの……？」

ジュードが呟いた瞬間、爆発音が響いた。

……何があつたんだ？ ミラ、大丈夫なのか！？

「ティポ！ 起きて！ お願い！」

エリーゼが泣きながら抱えたティポに叫ぶ。

そしてエリーゼの呼び掛けにティポが目を覚ました瞬間、魔法陣にマナが溜まった。

バチッ！！ と何かが焼き切れる音がして、閉まっていた扉が開いた。

それを確認したジュードが先に走り出し、後に続こうと足を動かすと、何故か身体から力が抜けていく感覚に襲われた。

今までと違うのは、気絶する程ではないと言う事だ。

「カイト！」

「またかよ！」

「大丈夫！ 早く行こう！」

回復が早かったから、すぐに立ち上がってジュードを追った。
制御室を出てすぐに、ジュードとミラの姿が見えたけど、

「なん、だよ……これ……」

ミラの姿を見て、第一声がそれだった。

全身大火傷で、足はもう……見るのも無理だった。ジュードが悲痛な声を上げながら治療して、エリーゼも協力するけど、治るとは思えなかった。それ程、絶望的な状態だった。

そして、追い討ちをかけるように兵士が集まって来た。

「これ以上は無理だ！ カラハ・シャルルに戻るぞ！」

仕方なく、2人は治療術を止めて、俺とアルヴィンが協力してミラを運び出す。

「ゴーレムを起動させろ！」

そんな声が聞こえてきて、石像のような大きな人形が動き出した。俺達は間一髪で、来た時に確保していた馬車に乗り込んでいて、逃げる事が出来た。

……ミラの力になりたいなんて言っておいて、何も出来なかった。敵を斬る事も……。

馬車に揺られながら、血が滲むほど歯を食いしばっていた。

* * * * *

カラハ・シャルルに着いてから、すぐに俺とアルヴィンでベッドに運んで、医者呼んだ。

医者の診察によると、今夜が峠らしい。

「ミラ……大丈夫かな……？」

雰囲気から、大丈夫とは無責任に言えない。

「ミラ君死んじゃうのー？」

ティポも心配そうにそう言うけど、誰も反応は出来なかった。とりあえず今日は時間も遅いという事で、みんな休む事になった。ジュードは医者に代わってミラに付きつきりらしいけど。

俺は1人で外に出て、夜空を仰いだ。

「……いつも逃げてばかりで、肝心な時も役立たず……か……」

こんなんで、よく他人の力になりたいだの言えたな。

もしちゃんと戦えていれば、もしマナを操る事が出来ていたらと、「たれば」を無意識に考えてしまう。

「カイト……」

「！？ エリーゼか、どうした？」

いきなり声を掛けられ振り返り、話し掛けてきたエリーゼを見た。泣きながら治療術を使っていたから、疲れて眠っていると思った。

無言で俺の隣に来て、俺をちらちらと見てきた。

なんか……落ち着かねえ。

どうしたんだ？ と尋ねようとすると、突然ティポが喋った。

「何を考えてるのー？」

「……です」

「え……」

今度はちゃんと俺の顔を見上げていた。

エリーゼにも悟られる程、俺は思い詰めた表情をしていたのか？

「……俺って無力だって……」

誰かに言いたかった事を、エリーゼに話していた。

「俺はエリーゼみたいに治癒術が使える訳でもないし、ジュードみたいに勘も鋭くない。アルヴィンみたく戦力になる訳でもないし、ローエンみたいに精霊術を操る事も出来ない。ミラみたいに……自分の使命を成す為の信念も……無い。俺はただ、みんなの後ろでガタガタ震えてるだけだ……」

エリーゼに何を言ってるんだろうと思っても、一度溢れた感情は抑えきれなかった。

「何が力になりたいだよっ！ 守られてばかりで何も出来ない俺が！ 他人の力になんてなれる訳無かつたんだ！」

涙と一緒に、そんな言葉が出てきた。

すると、不意にぎゅっと手を握られた。見ると、エリーゼが両手で俺の手を包んでいた。

「……カイトは、わたしを連れ出してくれました。嬉しかったです」
「友達にもなったしねー」

「はい！」

予想外の言葉に思わず目を見開いた。

「……でも、エリーゼには危険な目にばかり……」
「違います！」

俺の言葉を遮るように、エリーゼが首を横に振りながら叫んだ。

「カイト、いつもわたしに言ってます。わたしがどうしたいのかわ。わたしはみんなと……カイトと一緒に居たいから、だから……！」

だから危険な目に遭わせてる訳ではないと エリーゼは泣きながら訴えるように言った。

……ああ、こんな子まで泣かして……何やってんだよ俺は！

「それに、カイトはいつもわたしを助けてくれます！」

微笑んで、力強く言った。

……そうか、俺……ちゃんと人 エリーゼを支えていたんだ。力になれていたんだ。

俺は軽く、エリーゼの頭を撫でた。

エリーゼが驚いたように見上げてきたけど、すぐに笑顔になった。

「……ありがとうな、エリーゼ。おかげで、分かった気がするよ」
「何が、ですか？」

「俺がこれからどうしたいのか」

俺は無力だけど……まだ何もやっていないんだ。
なら、やるべき事は沢山ある。まだ……俺は強くなれる！

* * * * *

翌日、ミラは意識を取り戻した。だけど、怪我の状態は深刻で、歩く事が出来ないと告げられた。

俺はミラにどう声を掛ければいいか分からずに、部屋の前で右往左往していると、中からジュードの怒ったような声が聞こえた。

悪いと思いながらも聞き耳を立てると、その内容は、ミラはまだ使命を諦めてはいないと言う事だった。でも、ジュードはそれに反対しているようだった。

俺には何も言う事は出来ずに、その場から去るしかなかった。

また翌日、ジュードとミラはル・ロンドと言う町に旅立つ事になった。

ル・ロンドはジュードの故郷で、そこならミラの足を治せるかもしれない。そういう理由だった。

「すまないな、馬まで貸してもらって」

足が動かないミラの為に、クレインは馬を貸し出していた。
これなら海停までそう時間は掛からないだろう。

「カイトも、本当に来ないの？」

ジュードが俺を見ながら問い掛けてきた。

今この場には、アルヴィンは居ない。どうやら新しい依頼人が見つかって、それをやっているらしい。

エリーゼはカラハ・シャルに残る事になった。引き取り手には申し分ない訳だしな。

「ああ、俺はここでやる事があるからな」

「そっか……」

「そんな顔すんなよ。やる事やったら必ず……必ず行くから」
「……うん、分かったよ」

納得してくれたらしく、笑顔で頷いた。

「ジュード、ミラ……」

「エリーゼ、またな」

「元気でね」

さすがに別れは悲しいエリーゼは、もう涙目になっていた。

「ローエンも、クレインさんもドロツセルさんも、お元気で」

「また、何かあったら来てください」

「何も無くて来ていいからね？」

「ジュードさんもミラさんも、お元気で」

そうして、2人はカラハ・シャルを出発した。

そして2人が見えなくなつてから、俺は深呼吸をした。
これから成すべき事をする為に。

「ローエン、無理を承知の上で頼みたい事がある」

「改まって、何でしょうか？」

「俺に 戦い方を教えてくれ」

第13話 強くなる為に（後書き）

少し急ぎすぎましたが、これで自分の中での第2部が終わりました。

次回はいきなり1カ月程時間が飛びます。

ちなみに、自分の中での第1部はニ・アケリアから再び旅立つ所でした。

間隔短いと言わない！

主人公設定2 兼 術技追加（前書き）

強化後の主人公の説明です。

主人公設定2 兼 術技追加

《西風海斗》

読：にしかざ かいと

基本設定は変わらず。

使用武器：両刃直剣

変形 弓

特性：追加連撃：術技を自分流にアレンジし、追撃も行う

主人公。

仲間からはカタカナ表記で「カイト」と呼ばれる。

武器は新調した両刃直剣を魔改造して剣から弓に変形出来るようにした。どう改造したかは謎。

何故か^{ゲート}霊力野もあり、精霊術も使えるようになったが、地水火風の術はほとんど使えず、逆に氷雷光闇の術はトップクラスになっている。

術技紹介

・術技名

昇華術技名

《剣技》

・魔神剣

魔神剣・双牙

・瞬迅剣

瞬迅回帰

・虎牙破斬

猛虎豪破斬

・真空破斬

龍爪旋空破

・雷斬衝

絶破雷迅衝

・綜雨衝

閃闇裂破刃

・幻狼斬

天狼滅牙

・魔皇刃

魔王雷撃波

・絶氷刃

氷月翔閃

・碎氷刃

幻魔衝裂破

・穿光牙

崩雷殺

・凍牙霧影剣

《弓技》

・蒼破閃

蒼迅連破

・氷雨

氷雨乱雨

・閃裂空破

閃光衝墜

・神射鷄

輝凰旋

・虚空墜衝

虚影空臥

・ヴォルテックライン

グラスニードル

・フォルスエッジ

ブライトスルー

・アローレイン

《精霊術》

・ファイアボール

フレイムシュート

・ウィンドカッター
スラストファング

・ヴォルテックヒート

・アイススパイン
フリーズハンター

・クラッシュガスト
フリジットコフィン

・ライトニング
スパークウェブ

・ヴォルトアロー
サンダーブレード

・デルタレイ
フラッシュティア

・ホーリィランス
デイベインセイバー

・シャドウエッジ
ブラッディクロス

・イービルスフィア
ヴァイオレントペイン

主人公設定2 兼 術技追加（後書き）

術技はまたこれからも増えるかもしれません。そこは未定です。

第14話 ル・ロンドの再会（前書き）

いきなり1ヶ月経った設定です。

第14話 ル・ロンドの再会

「はっ！ 魔神剣！」

瞬時に剣を振り抜き、地を這う衝撃波を繰り出し、それは魔物ボアに命中した。その一撃で、ボアは絶命する。

「ふう……これであらかた倒したかな？」

辺りを見ながらそう呟いた。

よし、魔物は近くには居ないみたいだ。

「ありがとうございます。助かりました！」

隠れていた行商人がそうお礼を言ってきた。

「いや、気にしないでください。これも仕事なので」

苦笑いしながら言う。

俺は偶然……でもないけど、このサマンガン街道で魔物を退治するという仕事を、わざわざ領主様から言い渡されていた。

まあ……実際のところは俺が頼み込んだんだけど……。

「カラハ・シャルルに行くんですしたら護衛しますよ。俺、今はそこに住んでるんで。あ、もちろん無償ですよ」

「そうですか。それなら、お願いします」

話もまとまって、俺は行商人をカラハ・シャルルまで護衛する事になった。

* * * * *

ジュードとミラガル・ロンドに向かつてから、早くも1ヶ月が経っていた。あれから何の連絡も無いけど、治療が上手くいっている事を願うばかりだ。

そして俺はこの1ヶ月と言う時間、ずっと修行のような事をしていた。

まずローエンに精霊術を教えてもらい 異世界から来たのに何故か^{ゲート}霊力野があつた 精霊術は使えるようになった。

折れた剣もちゃんと新調して、さらにそれを魔改造して弓に変形できるようにになった。何故弓なのかと言うと、アルヴィンとクレインの屋敷にあつた小説の影響だった。剣1本が弓に変形するってのが書いてあつて、自分なりに工夫したら何か出来てしまった。その時のみんなの驚きようは少し面白かった。

あ、ちゃんとこの世界の言葉も勉強したんだ。とは言え、正直読むのはまだ辛いんだけど……。

剣術と弓術は我流。と言うか、さすがにそれは教えてもらう時間が無かった。

だから、使えるようにするために、クレインに頼んで魔物退治の仕事を買っていた。実戦だと、剣も弓も精霊術も特訓できるからなそんなこんなで、気が付けばもう1ヶ月だ。早すぎじゃね？

でも、1ヶ月前とは比べ物にならないぐらい、強くなれたと思つて。心身ともにな。

「ここで大丈夫です。ありがとうございました」

そう思い返していると、街に入って少しした所で行商人が俺に頭を下げた。

俺も会釈で返して、行商人と別れた。

「さて、と……変に時間が空いたな。これからどうするかな……」

考えた結果。とりあえず、屋敷に戻る事にした。

その途中、広場にある装飾品の露店の前に、女の子 エリーゼの姿が見えた。

またドロツセルと買い物かなと思ったけど、辺りにはドロツセルの姿は見当たらない。

まあ……クレインの怪我がまだ完全に治った訳じゃないから、代わりにドロツセルが忙しくなってるから仕方ないけど。

「エリーゼ、何やってんの？」

「カイト君こそー」

声を掛けると、ティポがそう言ってきた。

「俺はひと仕事終えたから帰宅中かな。エリーゼは？」

「アクセサリーを見てました」

「何か買ったのか？」

「そ、それは……」

「カイト君のエチー！」

「何で!？」

すごい人聞きの悪い事を言われた！

アクセサリー買った事を聞くとそうなるのか？

「兄ちゃん、聞くのは野暮ってもんだよ？」

俺達のやり取りを見ていた店主が笑いながらそんな事を言っていた。

「野暮って……。ま、いつか。帰るか、エリーゼ？」

コクコクと顔を赤くしながら頷いた。ギョツと抱かれたティポが締まっている。

何で？ と思ったけど、どうやら聞くのは野暮らしい。とにかく、言った通りに屋敷に帰る事にした。

「……カイト！」

屋敷まであと少しという所で、突然エリーゼが俺の前に立って名前を呼んだ。

表情は、何かを決意したようだった。その様子に、思わずたじろぐ。

「な、何だ？」

と尋ねるとほとんど同時に、エリーゼがティポを差し出してきた。いや、正確には、ティポの口に引っかかっている透明なガラス玉のようなアクセサリーをだ。

「これを、俺に？」

コクコクと力強く頷いた。
手に取ってみるとかなり軽い。

「友達の証だよー」

「……です!」

「友達の証……?」

ああ、そう言えば、エリーゼもドロツセルにプレゼントしてもらってたっけな?

「ありがとな、大切にするよ」

俺がそう言うと、エリーゼは頬を赤くして笑ってくれた。
本当に大切にしないとな。

そうだ、確か携帯には何も付いてなかったし、いい機会だから携帯に付けよう。

という事で、ポケットから携帯を取り出して付けてみた。
おっ、結構様になってるような気がするな。

「それにしても、俺だけ貰うのみな。俺からも何か贈るよ」

ここ最近の特訓しながら魔物と戦ってたりもして、金には困っていないからな。

だけどエリーゼは、首を振って「いりません」と言った。

「いらないのか?」

「エリーはカイト君と居ればいいんだってさー」

「ティポ!」

なんか、ティポが嬉しい事をポロツと言ったな。

嬉しかったから、エリーゼの頭を撫でくり回した。

「嬉しい事言ってくれるな、ティポは」

「ならばくを撫でてよー？」

「いやー、エリーゼ可愛いからー」

何気なくそう言ってみると、騒がしかったティポが固まった。エリーゼ本人が固まっているのは言うまでもない。

……何か余計な事言っちゃったのかな？

「カイトさん、エリーゼさん、お帰りなさいませ」

どうしたらいいか分からずに慌てていると、そんな事が聞こえてきた。

声の方を見ると、ローエンとドロツセルが居た。

「た、ただいまです！」

硬直から解放されたエリーゼが、ドロツセルに向かって走って行った。

「どうしたのエリー。顔真っ赤よ？」

「何でも……ないです……」

「カイト君がエチーことをー」

「してないからな!？」

ドロツセルがエリーゼを撫でながら、俺をジト目で見てきた。ティポめ。良いこと言っなどか思ったのを撤回してやる。

「カイトさん、エリーゼさんにはそういう事はまだ早いのでは？」

「どういう事だよ!? 俺は何も変な事はしてないって!」

じとー……。

みんながそんな視線を送ってきた。

俺がいったい何をしたって言うんだろうか? この日一番悩んだ事だった。

* * * * *

時は流れて夜になった。

ふと夜空を見上げて、この星空をジュード達も見ているんだろうか? と、柄にも無くそんな事を思っていると、ローエンの姿に気づいた。

ローエンも空を仰いでいて、何か悩んでいるようだった。

「何か悩み事か?」

「まあ……じじいにも悩みはあるものですからね……」

冗談めかしてローエンは言ったけど、その後にはやっぱり真剣な表情をした。

「……ローエン、偶には休んだ方がいいんじゃないか? 俺が言う事じゃないけど、この1ヶ月ずっと休み無かっただろ?」

「……いえ、私は……」

「そうだ、ジュード達に会いに行こうぜ？」

そう提案すると、ローエンは驚いた様子だった。
そんなに意外だったろうか？

「それにほら、エリーゼも会いたがつてるだろうし」

俺も強くなった。今度こそミラの力になれると思う。

「明日、クレインに言ってみるよ」

「分かりました。お気遣い、ありがとうございます」

「気にすんなよ」

ありがとうとか言っではいるけど、悩みが晴れた訳ではなかった。
それは分かったけど、少しは解決出来ればいいと思った。

翌日、さっそくクレインにローエンの休暇を申し出てみた。

「確かに、最近のローエンは疲れているみたいだからね。いいと思うよ」

とすぐに了承を得られた。

エリーゼにル・ロンド行きを話したら、笑顔で喜んでくれた。
やっぱり、ジュードとミラに会いたかったんだな。

ドロツセルに話すと少し寂しそうにされたけど、別に反対はなかった。

と言う訳で更に翌日、ル・ロンドに向かう事になった。

「すみません、ル・ロンド行きの船っていつ出ますか？」

「もうすぐに出ますよ。乗りますか？」

「あ、はい。3人乗ります」

サマンガン海停ですぐにそう言われて、俺達はすぐに船に乗った。

「もうすぐで、ジュード達に会えるんですね！」

「ああ、そうだな。案外、もう歩けるようになってたりしてな。ミラだし」

「そうかもー」

そんな他愛も無い話をしているとすぐにル・ロンドの船着き場に到着した。

「って……そういやジュード達がどこに居るのか分からないじゃんか」

ノープランだったからなあ……。

「まあ、ミラさんが居るのはおそらく病院でしょうから、そこを探せば見つかるでしょう」

「そうだな。じゃあ、行こうか……ってあれ？ エリーゼ？」

町の中に入ろうと思ったら、いきなりエリーゼが居なくなっていた。

「え、エリーゼ！？ ヤバいどうしよう誘拐か！？ それともただの迷子！？」

「落ち着いてください。エリーゼさんなら先ほどあちらに向かいましたから！」

「え、そうなん？」

「はい。迎えに行きましょう」

ふう……焦った。ローエンが居なかったら頭の中真っ白になった。

エリーゼを追って港の端に行くと、ジュードとミラと、後知らない女の子が居た。エリーゼはミラに抱きついていて、ジュードはティポにかじられていた。

……ってミラ、マジで立ってるよ！？　すげーさすが精霊の主。

「エリーゼ、何故ここに？」

ミラが不思議そうに問い掛けて、エリーゼは少し言葉を詰まらせた。

「ミラさん、お見舞いにきました」

「ローエン！　カイトも！？」

顔からティポを離したジュードが、俺達を見て驚いた。

「よ、ジュード、ミラ、元気そうだな。まさかもう歩いてると思わなかったけど」

「うむ、ジュード達のおかげだ」

言いながら、ミラがジュードと少女に視線を動かした。

「初めまして、ローエンと申します」

ローエンが少女に自己紹介していたから、俺もしておこう。

「俺は海斗だ。よろしくな」

「あ……ども……」

いきなりだったからか、少女は戸惑いながらも会釈した。
それからジュード達がル・ロンドで何があったのかを説明した。

「医療ジントクスというのですか……。それでこの短期間に」
「世の中にはすごい技術もあるんだな」

まあ……ミラが何かと凄いつても、理由に含まれている気がする。
る。

「みんな、しばらくここに居るの？」

「カイトさんのおかげで、旦那様にしばらく休むように言われました。
エリーゼさんもミラさん達に会いたいと申していました」

「ぼくたちのせいじゃないぞー。ローエン君がボーっとしてるからだぞー」

エリーゼも気付いてたのか。俺の時もそうだったけど、エリーゼ
って結構人を見てるな。

「らしくないな？」

「いえいえ。私も悩みはいろいろありますよ？ ……少し、私も考
えるところがありましてね……」

「ふむ。ゆっくりと話を聞いてやりたいところだが……」

ミラが言葉を切ってジュードに視線を移す。それで伝わったのか、
ジュードは頷いて口を開いた。

「僕達、明日にでもル・ロンドを発つつもりなんだ」

それを聞いて、みんなが驚いていた。少女　レイアも驚いていたから、多分話してなかったんだろう。

「そんな病み上がりの状態で……。イル・ファンにはいったい何があると言うのですか？」

「クルスニクの槍と名付けられた兵器だ。あれだけは……。あれがある限り、精霊も人も破滅へと向かってしまう」

「……ラ・シュガルの王様が作ったんですか？」

ミラが頷いた。

ガンダラ要塞での出来事で、エリーゼも予測ができたんだろう。

「イル・ファンを目指すと言う事はガンダラ要塞へ向かうと言う事。あなたをあんな目に遭わせた場所です。恐ろしくはないのですか？」
「そうだな……。私にとって恐怖があるとするならば、それは……。使命を果たそうとする志の火が消えることだけだ」

あんな目に遭ってもまだ使命を果たそうとするなんてな……。強すぎだろ、ミラ……。

この1ヶ月、必死で強くなろうと頑張っていた俺とは比べ物にならない。

だけど、その強さを支える事なら、今の俺なら出来るかもしれない。

「何でミラ君がそんなに頑張らないといけないのさー！」

「私はマクスウェルだからな。世界を守る義務がある」

言った瞬間、みんなが目を見開いたのが分かった。

そっか……。みんな知らなかったんだっけ？　まあ、確かに話して

る所は見た事ないけど。

……俺もみんなに言ったら、こんなに驚かれるんだろうか？

「マクスウェル、ですと……？」

「精霊の？ ミラが……？」

「ミラ……本当に……？」

「あんぐりー」

ティポだけ緊張感が無い気がしたのは気のせいだな。

「ま、そんなの関係ないだろ？ 俺達が知ってるのは精霊の主つてよりも、使命にいつも全力で、みんなを守ろうとするミラだよ」
「うん。ミラはミラだよ」

俺とジュードがそう言うのと、みんなが納得したように頷いた。

「それじゃ、外で話し込んでないで戻ろうか」
「そうだな」

話が一段落したから、俺達はル・ロンドの町に行く事になった。
ル・ロンドはカラハ・シャールとは違って、まあ一言で言うなら田舎だった。

でもまあ、落ち着けるような場所だった。

「じゃあ、僕とミラはここだから」
「ああ、また明日な」

と、ジュードとミラは港に近い所の建物 マティス診療所と書いてあった に入って行った。

ああ、ここってジュードの家か、もしかして。

「俺達は宿とらないとな」

「それならあたしの家に来てよ！ 町一番の宿屋なんだから！」

と豪語したのはレイアだ。

「町一番ですか！」

「じゃあ決まりだな」

一番とか言われたら、そりゃテンションは上がるわ。
そんな訳で、レイアの家が経営している宿屋に向かった。

* * * * *

宿屋 ロ・ランドの夕飯はかなり家庭的だった。

「こら！ 食べ物を残すんじゃないやありません！」

「う、ごめんなさい！？」

レイアのお母さんに怒られた。 と言うか残した訳じゃなく最後に
食べようとしてた物だったんだけど、凄い威圧感でつい謝ってしま
った。

……ベクトルは別だけど、ある意味ミラよりも威圧感が凄い。主
婦って凄い。

そんな調子で夕飯が過ぎていつて、後は寝るだけの状態になった。

「と言うか……何でこうなった？」

寝るだけの筈だったのに、何故か、本当に何故かは知らないけど俺は今、レイアのお母さん　ソニアさんと宿の外で対峙していた俺の手には木刀、ソニアさんの手には筭が握られている。

……事の発端はつい5分前。素振りでもしようかな～と思った俺が剣を持つて宿屋から出ようとすると、偶然にもレイアに会った。初対面だけど難なく接してくれるから、いろいろと話し込んでしまい、いつしか話はソニアさんの話になっていた。何か、話を聞いているとんでもない人だという事が判明して、さっきの食事での威圧感はその原因か。とか納得しているとまさかの本人の登場。そしていきなり俺の腕がみたいと言いだし、今に至ると言う訳だ。

……どうしてこうなった！？

レイアに助けを求めようと視線を動かすと、もの凄い爽やかな苦笑いをしてきた。どうやらもう無理らしい。

「さあ、いつでも掛かって来なさい！　もちろん、手加減なんかしないように！」

「わ、分かりました……！」

手加減はしない。さっきのレイアの話が本当なら、そんな事したら余裕で負ける。……全力でやっても勝てる気がしないけど。

それに木刀とは言え、相手は人だ。ガンダラ要塞の時以来だから、本気を出してちゃんと振れるのか、それが心配だった。

「じゃあ……行きます！」

木刀を構えて、深呼吸。そして、

「瞬迅剣！」

距離を詰めるように瞬迅剣を放つ。

だけどそれは、1つ横に跳んで避けられた。

「ならこつちも、瞬迅爪！」

「！？」

態勢を立て直したその刹那、ソニアさんが箒の柄を突き出して突進してきた。間一髪で木刀で防ぐけど、俺の身体は後ろに吹っ飛んでしまった。

と言うか……何て威力だよ！？ 衝撃が強過ぎて、手が少し痺れる。

「くっ………そうつしゅう綜雨衝！」

すぐに距離を詰めて無数の突きを繰り出すも、これもすべて紙一重で避けられた。さっきのと同じ、今は箒で防御もしていた。

「とじんしょう兔迅衝！」

突き終わってすぐの隙に、思い切り箒の柄で突かれた。ダジャレじゃなくて割とマジに痛い。

「まだやる？」

「次で……最後って事で……！」

そう言って走り出し、ソニアさんの手前で、

「幻狼斬！」
げんろうざん

素早く背後に回り込み、木刀で横に薙いだ。

これは決まっただろうと思ったけど、何とソニアさんは避けていた。

「なら……天狼滅牙ッ！」
てんろうめつが

地面を殴りつけて衝撃波を放ち、両手を使って流れるように木刀を振るう。トドメに再び背後に回り込み、斬りつけた。

が……

「良い技持ってるのね！　ならこっちも！」

うわぁ……元気でいらっしやったよ？　あれだけの連撃を喰らわせたのに、何故に無傷！？

そして、今「こっちも」とか仰ってませんでした！？

「活伸棍・円舞！」
かつしんこん　ワルツ

持っていた筈にマナが纏って、それを踊るように回してきた。避けようにもなすすべも無く、俺はボコボコに殴られてしまった。

「何か……自信無くした……」

レイアに治癒術を使ってもらっている時に、そう呟いてしまった。俺、この1ヶ月で強くなったと思ったんだけどなぁ……。

「お、落ち込まないでよ！　お母さんが規格外に強過ぎるだけなんだから！」

……だよな？ まあ、それで俺が強いつて事にはならないけど。

「でも、カイト、って言ったっけ？ 基礎もちゃんとできてるし動きも分かつてる。まだまだ十分強くなれる見込みはあるわよ？」

「ホントっすか？」

それを聞いて、またやる気が出てきた。

「焦らずにじっくり、自分を強くしていきなさい」

「はいっ！ ありがとうございますっ！」

深々と頭を下げた。

ボロ負けだったとはいえ、得るものは沢山あったからな。

「カイト君、今日はもう休んだ方がいいよ。明日早いんでしょ？」

「あ、そうだった」

そうだ。明日にはジュード達はイル・ファンに向かうためにル・ロンドを発つんだ。俺もそれに着いて行きたいからな。

夜遅くまで悪いな。とレイアに言おうとすると、レイアは何故だか少し寂しそうな表情をしていた。

そう言えば、レイアってジュードの幼馴染なんだっけ？ やっぱ離れるのは寂しいんだろうか？

そう思った瞬間、俺も、幼馴染の事を思い出してしまった。さすがに……心配ぐらいはしてくれてるよな……？ 帰ったら帰ったで、「学校サボるな！」なんて真面目な事を言われそうだしな。ま、帰れるのかそれ自体が謎だし。むしろ今まであんまり頭の中に無かった。

何はともあれ、ジュードと離れたくないんだってのは、何とな

あく伝わってきた。

「ジュードと離れたくないんだ？」

「なっ!？」

言った瞬間、レイアの顔は真っ赤になっていた。

「隠さずとも、お主の気持ちは理解しとるよ？」

「な……別に、ジュードがどうかじゃないし！」

完全にジュードで頭がいっぱいになっているらしい。俺が変な口調なのにツツコミどころか気付きすらしていない。

これは、ボケとしては失敗か？

「まあ、付いて行きたいなら俺はいいと思うけどな」

「そうなの？」

「自分の気持ちに嘘はいけないと思うからな。だから俺は、俺が思った通りに行動する」

「嘘……か……」

何か納得したように頷いて、レイアは家に戻ろうとして、一度振り返った。

「ありがとね、カイト君。あたし、嘘つかないようにするよ」

微笑みながらそう言って戻って行った。

これはまた、人の力になれたのかな？

心の中で自問して、答えはでないまま、俺も宿に戻る事にした。

第14話 ル・ロンドの再会（後書き）

レイアが初登場しました。これでようやくパーティが賑やかになったと思います（笑）。

次回は再び、あの巫子が登場するとかしないとか……。

ちなみに、いままでチャットってあんまり入れてなかったりするんですが、あった方がいいですかね？ ちょっとしたアンケートですけど答えてくれると嬉しいです。

第15話 再集結 再出発（前書き）

チャットを入れるべきか入れないべきか…悩み所です（笑）

第15話 再集結 再出発

「朝ですよー！ 起きてくださいーい！」

ガンガンガンー！！ と金属を叩く耳障りな音よりも大きい声がして、俺は目を覚ました。

「うぁ……耳いてえ……」

扉越しとは言え、かなり耳に響いた。まさかこんな目覚ましまであるとは……完全に油断してた。

カラハ・シャルルの屋敷に居た時は、寝る間も惜しんでいたから、今回のような休暇で気が抜けていたんだな。かなり熟睡していた。しばらく鳴り続けた金属音が止んでから、ブレザーを着て部屋の外に出る。

1階に下りると、もうローエンが起きていた。

「おはよう、ローエン」

「おはようございます。予想外の目覚ましでしたね」

「ホントだよ……何だったんだ、あれ？」

まだ耳がキーンとしてる感じがする。

「いつまでも寝てたらそれが身に染みちゃうからね。その予防よ」「予防って……」

宿屋と言うよりも民宿のノリだな……。

そんな話をしていると、エリーゼが起きてきた。まだ眠そうに目を擦っている。

「おはよう、ございます」

「ああ、おはよう、エリーゼ」

「まだ眠いー」

見て一目瞭然だよ、それは。

「朝食の用意は出来てるわよ」

ソニアさんに言われて、俺達は朝食を食べる事にした。

朝食を済ませてから各々部屋に戻ろうとした所で、ジュード達がやって来た。多分、もう行く気なんだろう。

軽く挨拶を済ませると、ローエンが本当に行くのかと尋ねた。もちろん、ミラは頷いた。

「私には使命を果たす責任があるからな」

「責任、ですか……あなたは強く気高い。しかし、それが私の古い傷跡を抉るようです」

言いながら視線を落とした。

ガンダラ要塞で、ローエンは何のリアクションもしていなかったけど、ナハティガルは完全にローエンを知っている感じだったのを覚えている。

もしかしくなくても、2人は知り合いなのかもしれない。『コンダクター指揮者』
って呼ばれていた軍師と国王だし。

「あれから私は悩んでいたんです。……今の私に何ができるのか。ナハティガルを止められるだろうか……」

「やっぱり、2人は知り合いなの？」

「友人です。とても古くからの」

友人ときたか……。それは悩んでしまうかもしれない。いや、単に軍師と国王の関係でも悩み所はあるだろうけどさ。互いに殺し合わなければいけない状況なら、友人の関係の方が苦しいと思う。

「友と戦えるのか……。それがお前の悩みか」

「えー！ 友達とケンカしなきゃいけないのー！？」

ティポがあんぐりと口を開けて言う。

「決断に必要なのは時間や状況ではない。お前の意志だ。私達と共に行かないか？ ローエン」

「ミラさん……」

「悩むのもいい。だが人間の一生は短い。時間は貴重なものだろう。なら悩みながらも進んでみてはどうだ？ 人とはそういうものなのだろう？」

ミラの言葉に、ジュードも賛成しているようだった。ローエンは微笑して口を開く。

「確かにじじいの時間はとても貴重なものです。立ち止っては勿体ない」

「それじゃあ……」

「はい。ぜひ同行させてください」

ローエンが頷いた。

俺もここで言うておかなくな。その為の1ヶ月だったんだから。

「ミラ！」

「ん？ どうした？」

勢い余って叫んでしまった。少しミラが驚いている。

一度深呼吸して落ち着かせて、まっすぐにミラを見た。

「俺も同行させてくれ」

「え、カイトも！？」

ジュードに驚かれたけど、嬉しそうな感じだったから触れないでおく。

ミラの返事を待っていると、何故か「ふふっ」と笑われた。

「むしろ来ないつもりなのか？ 私はてっきり、勝手にでも付いてくると思ったのだから」

「え？」

予想外の展開に、俺は思わず言葉を失った。

「その為に、カラハ・シャルに残ったのだろう？」

その言葉で分かった。

ミラは……俺がどうしてル・ロンドに付いて行かずに、カラハ・シャルに残ったのか分かっているようだ。

ははっ……強くなった所を見せてビックリさせてやろうとしたのに……まさか見抜かれていたなんてな。

「……ああ。だからミラ。俺は今度こそ、足手まといにはならないよ」

「また、よろしく頼む」

「カイトも付いて来てくれるなら心強いよ」

ジュードにも言われて、少し照れるな。

信頼されてるんだよな。この信頼を裏切らない為にも、頑張ろう。

「わ、わたしも一緒に行きます！」

気を入れ直した所で、エリーゼがそう言った。

「ダメだよ。エリーゼは帰らないと」

「でも……」

ジュードに駄目と言われて、今度は俺に視線を移してきた。

まあ……そうくると思ったよ。

「俺はエリーゼが決めたなら反対はしないよ」

「ちよっ……カイト!?!」

驚くジュードを横目に、俺はしゃがんでエリーゼと視線を合わせる。

「エリーゼ、ミラ達と一緒に行くって事は、危険な目に
ぬかもしれない。それでも付いて行くのか？」

子供には少し酷な言い方をしてしまったけど、エリーゼは力強く
頷いた。

「……は、はい！」

「そか、なら俺は全力でエリーゼを守るよ。それでいいだろ？」

立ち上がってミラとジュードに尋ねる。

「そこまで言われると……ね」

「私は別に構わないよ」

2人が頷くと、エリーゼとティポが嬉しそうに飛び跳ねた。

「それじゃあ、そろそろ行こうか」

ジュードがそう言って、みんなで港に行く事になった。

あ、そう言えば、レイアはあれからどうしたんだろう？ 嘔吐かないようにするって言ってたけど……。

「ジュード、レイアには挨拶したのか？」

「あ、まだだった」

おい……もしかして忘れてたのかよ？

「ソニア師匠^{せんせい}、レイア居ますか？」

師匠って？ と、突っ込まない方がいいだろう。と言うか、やけにジュードは戦い慣れしてると思ってたけど、原因はそれか。

あの人が師匠ならそりゃ強いわ。

「レイアなら……そう言えば見かけてないわね？」

ええー……マジっすか！？

「カイトは何か知らないの？ 昨日遅くまで話してたみたいだけど？」

「へ？」

ソニアさんが言うと、ジトーとジュードが視線を送ってきた。
何だよその視線は……って、何故にエリーゼまでもそんな視線を
！？

「分らないですね。話してたのは『ソニアさんつえー』って内容
でしたので」

心当たりは無い訳じゃないけど、俺はそうごまかしていた。
ま、嘘じゃないし。

とは言え、どこに行ったのかは俺も知らないのは事実だ。聞かれ
ても困る。

「まあ……居ないなら仕方ないですね」

「手紙でも書いてあげなよ？」

「は、はい……」

引きつった笑顔を浮かべながら頷いていた。

……何で？

ともかく、俺達は港に向かったのだった。

港に行くまでも、結局レイアの姿は見られなかった。

「あれ？ この船ってア・ジュール行きだけど？」

「はい、これに乗りましょう」

イル・ファンに行くならラ・シュガルの中で行くんだろうけど…

…そうか、海路は駄目だし、陸路もガンダラ要塞って難攻不落の場所を抜けなければならぬ。

だからア・ジュールの方面からなんだろうけど……あっちの陸路って何だっけ？　なんたら沼野って名前？

「ジュード！」

そんな事を考えていると、背後からそんな声が聞こえた。それを言っただであろう人物は、慌てたように走って来た。

「父さん……ごめん、僕はミラ達と行きたいんだ」

なんと、走ってきた人はジュードの父親だった。

「ダメだ！　行かせるわけにはいかない。彼女は……お前が関わろうとしているのは……」

「おいおい、オレ達どんな縁なんだよ」

ジュード父の言葉を突然遮ってきたのは、これまた意外にもアルヴィンだった。

「アルヴィン！？」

「新しい仕事クビになっちまってな。カイト達が居るって事はまた行くんだろ？　オレ、前に貰った分の仕事してないぜ？」

前につて……ニ・アケリアの時のか！？　どれだけ昔の事を……。

「来てくれるんだね！」

「心強いな」

俺達がそう言っていると、ジュード父が「知り合いか？」と何故か焦りながら尋ねてきた。

「前に一緒に旅をしてたんだ」

それを聞いてまた驚いていた。
本当にこの反応は何なんだ？

「エリーゼ姫も行くんだよな？」

「当たり前です！」

「アルヴィン君バカにするなー！」

「いや、してねーから」

姫ってなんだ？ と聞こうかと思ったけど、まあ何となく分かるからいいや。

「とりま船乗ろうぜ？ 逃したら時間の無駄だしな」

「とり、ま……？ まあそうだな。カイトの言う通りだ。早く乗ろうか」

『とりま』が理解されなかったのはさて置き、俺達は船に乗った。
ジュードは父親と、走ってきた母親と何か話してから来た。

* * * * *

「この船ってラコルム海停行きだよな？　イル・ファンに行くんじゃないかったのか？」

よもや乗ってからそんな事を言うとは……。

「乗ってから聞く？　ホント、アルヴィンってそういうのこだわらないよね？」

「俺が来たのはエリーゼ姫のためだからな。どこ行くにも問題ねーの」

「いやーん、うれしー！　アルヴィン君は友達だねー」

「いや、お前じゃねーよ……」

「いやいやそれ以前に、エリーゼの為って？」

そんなの初耳なんですけど？

「あれ、言ってなかったか？　どうせ姫が行くの反対してるだろうから、危なくないように姫を守ろうかなーと」

「いやいや、聞いてねえから……」

まあ、アルヴィンと一緒に守ってくれるなら心強い事この上ないんだけどな。

「カイトが守ってくれるからいいです」

「ありや、つれないねえ？」

そこで何で俺を見るんだよ？

「ところでローエン。何故ア・ジュールに向かうのか、理由^{わけ}を聞かせてもらえるか？」

ようやく本題。と言うように、ミラがそう切り出した。それに答えるように、ローエンは頷いて口を開く。

「端的に言つと、今のガンダラ要塞を突破するのは不可能だと思われるからです。以前、ミラさんが負傷され脱出を試みた時、ゴーレムの起動を確認しましたから」

あの時に動き出した人形みたいなのか。
確かに、あれを相手にするのは6人掛かりでも難しいだろう。

「けど、海路も無理なのにア・ジュールへつて事は……」

「ア・ジュール側から陸路で行くんだろ。確か、なんたら沼野って

……」

「ファイザバード沼野か。でもあそこ、れいせい靈勢が不安定で有名じゃなかったか？」

「だよね……」

名前だけしか知らなかったけど、ジュードとアルヴィンはどういう所か知ってるらしかった。

靈勢が不安定か……また大変な事になりそうだな……。

「変節風イフリタが吹きましたので、現在は地霊フラン小節に入りました。つまり、火場から地場ラノームに入ったこの時期であれば、ファイザバード沼野も落ち着いている筈です」

……つまり……夏から秋になったから大丈夫。みたいな解釈で合ってるのかな？

「全然わかりません……」

「安心しろ、私もだ」

「胸張って言うなよ……」

分からないのは俺も同じだけどさ……。

「まあ、とりあえず問題なさそうって事でいいんじゃない？」

「んなアバウトな……。でも確かに、行けば分かるよな」

「はい。いいって事です。時間もあまり残されていないようなので」

納得した事にしようとしていると、最後にローエンがそう付け足した。

「なんでー？」

「ガンダラ要塞のゴレムはあの時から起動したままとの情報を得ました。これは、ラ・シュガルが開戦準備を始めた証と捉えてよいでしょう」

さすがにこれは、軽い気持ちで聞けなかった。

……近い内に戦争が始まってしまいかもしれない。そう言う事だろう。

「ま、今戦争の事言ってたって仕方ないな。目の前の問題を1つずつ解決してこうぜ？」

少し重くなりつつある空気を和らげる為にそう言うと、ジュードが笑った。

「そうだね。僕達はクルスニクの槍を壊さないからだからね」

「それが結果的に戦争を止める事に繋がりそうだしな」

ジュードとアルヴィンが乗ってくれたから、少し空気が和らいだ。

ラコルム海停まではまだ少しあると言う事で、とりあえず解散になった。

特にやる事の無い俺は、甲板から海を眺めていた。

「そう言えば、カイトはどうしてカラハ・シャルに残ったの？」
「私も詳しくしりたいな」

同じように甲板に居たジュードが言うと、何故だかみんな集まってきた。

「何でって言われると……ちょっと説明しづらいんだけど。強いて言うなら強くなるうと思ったからだ」
「強く？」

よく分からないと言うように、ジュードが首を傾げた。

「今までずっと足手まといだったからさ。ちゃんと戦えるようにローエンに教えてもらってたんだ」

「そうだったんだ？」

「いえいえ、私はただ精霊術を教えただけです」

ローエンがそう言うのと、ジュードとミラとアルヴィンが驚いていた。

俺が異世界から来たって知ってる3人だからな。俺に霊力野^{ゲート}があるのが驚きなんだろう。

……まあ、俺自身が驚いたんだけど。

「と言う事は、カイトは精霊術を使えるって事か？」

「ああ、地水火風は全くだけど、氷雷光闇は上手く使えるよ。後やったのは……文字の読み書きと剣術と弓術だな」

続けて言つとまた3人が驚いた。

そうだろう。

どこに弓があるのか分からない状態だからな。

「お前……読み書き出来なかったのか？」

「そっちかよ!？」

「はい、カイトはアップルグミすら読めなかったんですよ」

エリーゼエエツ!？ そこはバラすなよおおツ!？

「お前ら読み書き出来ないぐらいでいじるなああツ!？」

「別にいいじゃないか。私も生まれてから14年後に読み書きを教わったからな」

何でここでそんなカミングアウトを……。

「誰に教わったのー？」

「もしかして……四大精霊とか？」

「四大以外に誰それが居る？」

「巫子のイバルが居るだろ!？」

むしろ、「イバル以外に誰が居る？」って言ってやれよ！ 可哀想じゃないか！

「ま、まあ……これ以上読み書きの話すると、四大のイメージが崩れ去っていきますので……」

ローエンから話題変えろの合図が出た。どうしろってんだ？

「もう1つ気になったんだが……お前弓持ってないよな？」

「ようやくその話か」

「待ってたみたいと言っなよ……」

だって本当に自慢したかつ……ゴホンゴホン。話したかったんだもん。

「弓はな、この剣が変形するんだ」

と言いながら、俺は剣を抜いて実際に変形させてみる。

ガシャンと音を立てて、剣は弓に早変わりだ。

これを見て、ローエン以外のみんなが驚いていた。

「精霊術に加えてこんなものまで修得していたのか」

「1ヶ月の間に、凄いよ！」

そうだろうそうだろう。とちよつと嬉しくなってきた。

これでちゃんと実戦で役に立てれば努力は実った事になる。

「なあ……それって、カイト自身の案か？ 剣が弓に変わるってのは」

「いや、違うけど。何てったかな……」

「カイトさんが参考にしたのは、『創世紀』と言う小説ですね」

「どういう本ですか？」

「確かそれって、賢者クルスニクと勇者ゴルディンの伝承の話だったか。ああ……なるほどな」

アルヴィンが言うと、勝手に納得していた。

「僕も知ってる。けど……読んだ事はないかな……」

「勇者ゴルデインは、剣と弓を同時に扱うと伝えられていて、武器の形状はカイトさんのそれとほぼ同じなんですよ」

「つまり……同じ武器を使用しているのか？」

「同じ種類な。まあ、これは実は手製なんだけどな」

「手製！？」

叫んだのはジュードとアルヴィンだった。他の3人も驚いてる。

「カイト君きよーだねー」

「いや、器用って域越えてるぜ？」

「私も何度か見させてもらってましたが……まさか手作りだったとは……」

「カイト、凄いです」

予想以上に驚かれたな……。

そんな事していると、いきなり悲鳴が聞こえた。

見ると船員が積まれた箱の近くで腰を抜かしていた。

「どうしたんですか？」

「は、箱の中に……」

そう言われる、俺とジュードとアルヴィンが箱の中を確認すると

……うん、何コレ？

「何だ……こりゃ？」

アルヴィンが同じ事を思ったらしく、そう呟いた。

「あはは……幼馴染……かな……？」

引きつった笑顔を貼り付けたジュードは、箱の中で眠るレイアから目を逸らしながら言った。

第15話 再集結 再出発（後書き）

今回出た『勇者ゴルドイン』は原作にもこの作中にも出てきません。オリジナルです。カイトが変形剣を使うようになった要因に出ただけですが、後々また名前が出てくるかもしれません。

と言うか……巫子は名前しか出なかったなあ……。おそらく次回
はでるので楽しみに（笑）

第16話 歴史ある街（前書き）

共鳴術技のネーミングセンスを僕に下さい……（笑）

第16話 歴史ある街

「あはは……待ちくたびれてつい寝ちゃった」

ラコルム海停に着いて、レイアの第一声はそれだった。

「そんな問題？　すぐ帰りなよ」

軽い様子で言うレイアに、ジュードが怒ったように言う。

でもレイアはそんな事お構いなしに、「あたしも一緒に行く！」と引かない。

「遊びじゃないんだって」

「知ってるよ。ね？」

といきなり話を振った相手は、何故かアルヴィン。すぐに「誰？」と首を傾げていた。アルヴィンも珍しく戸惑う。

「アルヴィン君だよー」

とティポ。

そのおかげで、レイアはアルヴィンを君付けで呼ぶようになった。

「ね、いいでしょミラ？　あたしも一緒に行っても」

「そうだな……理由を聞こうか？」

ダメだ。と言うと思っていたけど、特にそんな事も無くミラが逆に問いかけた。

まあ、エリーゼの時もそんなに反対してなかった気がするから不

思議でもなんでも無いんだけど。

「鉦山で思ったの。あたしもミラみたいに強くなりたいって」
「……それだけか？」

付いてくる理由が弱いと思ったのか、ミラが問いかけた。レイアは首を横に振る。

「それにカイト君にも言われたからね。自分の気持ちに嘘はいけな
いって。だから、はいこれ」

いきなり自分の名前が出て驚いていると、レイアが一枚の紙をミ
ラに手渡していた。

「細かい事はそれに書いてきたから、見て」

「僕達に付いてくる理由を？」

「そ、100個ぐらいある」

「100個!？」

いったい何を書いたんだろうか？ 俺が何かを言った事が原因な
らば、書いてある事は少しは予想は出来るけど、100個とか推測
も出来ない。

ミラは紙を眺めると、おかしそうに笑っていた。

「ふふ、わかった、一緒に行こう。気に入ったよ、人間らしくてな」

お許しが出た事で、ジュードは少し呆れた様子で肩を落とした。

「さて、お許しが出たところで、みんな、よろしくね」

俺達と向かい合うように立って、片手を高々と上げて笑顔で言った。

そんな訳で、俺達の旅の仲間にレイアが加わったのだった。

「カイト……後でレイアと何話したのか聞かせてもらっからね？」

「はっ……！？」

話の途中で俺の名前が出たからなのか、レイアが付いてくる事になった原因が俺にあるような言い方をされた。

……やっぱり、俺が言ったからだよね？ でもまあ、レイア自身がそう決めたんだから俺もジュードも口出しは無用だ。

そんな事は知る由も無いジュードに洗いざらい話したのはまた別のお話。

「なあ、ここって二・アケリアの近くじゃねーの？」

海停から出ようとしたその時、アルヴィンがふとそんな事を言い出した。

「そうなのか？」

「寄ってかないでいいの？」

「今は村には用は無い。それとも、何か行きたい理由でもあるのか？」

「いや。みんなおたくを心配して、帰りを待ちわびてるかと思っ
てさ」

2人の会話に、何故か違和感を感じた。具体的には何なのかは分からないけど……何となく、嫌な予感が過った気がした。

「村を気に掛けてくれるのはありがたいが、今は急ぎたい」

ミラがそう言うと、アルヴィンが小さく「あっそ」と言った。

「ラコルム街道を北に進むとシャン・ドウと言う街があります。まずはそこを目指しましょう」

「待った。その街道って、ラコルムの主ってヤバイ魔物が出没するんじゃないかったか？」

主か……。ああ……。出会ったら面倒くさそうだな。

「よくご存じですね。ですがご安心を。ラコルムの主も霊勢れいせいの影響をつける魔物。地場ラコルムに入ったこの時期は、活動を弱めていて街道まで出てくることはないでしょう」

「だってさー。アルヴィン君、ビビる必要ないよー！」

「ビビってないって」

「けど、もし出て来たとしてもこのメンバーなら大丈夫じゃないか？」

みんな強いし。

「そんな、さりげなく自分強いアピールしないでいいんだぜ？」

「そんなんちゃうわ!？」

まあ……。少し強くなりましたアピールぐらいやって別になんか当たらないよな？

「とにかく、ここに居ても仕方ない。行くぞ」

ミラがそう言って、ようやく俺達は街道に向かった。

* * * * *

順調にラコルム街道を進んでいると、ジュードが空を仰いで「アルヴィンの鳥だ」と言った。

俺も見上げてみると、白い鳥が飛びまわっているのに気付いた。

「悪いな。すぐに終わるから休んでてくれよ」

と言う事で、一時休憩をとる事になった。

「さてと……この広大な荒野を写メに撮っておきますか」

ちょうどよく休めたから、俺はポケットから携帯を取り出してパシャリと撮る。

そう言えば、この世界に来て結構経つのに、携帯のバッテリーが全く減らないのは何故だろう？　ここに來てから1回も充電してない筈なのにな。

……まあ、気にして悩んでも分からないから別にいいか。

そう結論付けて携帯をしまおうとすると、エリーゼから貰ったガラス玉が目に残った。夕日で少しだけ赤く染まったガラス玉がキラキラと光っているようで綺麗だった。

と、そこでガラス玉に何かが彫られている事に気付いた。

「ん？ 何て書いてあるんだ、これ？」

今でもまだ読み書きは勉強中、ってこともあって、何が書いてあるのかよく分からない。

エリーゼにでも聞いてみようか。

「カイトさん、どうかしましたか？」

悩んでいると、ローエンが話しかけて来た。

「ローエン、これに何が書いてあるか分かるか？」

携帯に付いたガラス玉を見せると、ローエンの視線はガラス玉では無く携帯の方に向かっていた。

「これは……なんですか？」

「えっ！？ これはえーと……な、何でもなくてな。俺が聞きたいのはこっち！」

そう言えば携帯の事はローエンには話してないだった。

俺がガラス玉を指差して言うと、やっと視線がガラス玉に向いた。

「カイトさん、これは誰かからの贈り物ですか？」

「ああ、エリーゼからな。でも、何て書いてあるか分からなくてさ……」

「そうですか」

何故かローエンはおかしそうに笑っていた。

まさか……俺が読めないのをバカに……って、ローエンはそんな人じゃないからな。

……じゃあなんで？

「それは、ご自分で読んだ方が良いと思いますよ」

「そうなのか？」

問い掛けると頷かれた。

「間違っても、他人に聞いてはいけませんよ？ 特にエリーゼさんには」

「えっ……わ、分かった」

急に真面目な表情になって行ったローエンに、少したじろいでしまった。

そこでアルヴィンの用事も終わったから、俺達はまた進む事になった。

ホントに、何が彫ってあるんだろうか？ そんな疑問を残したまま、俺は携帯をしまってみんなの所に走って行った。

「ここにおられましたかー！！」

またしばらく街道を進み、ようやくもう少しでシャン・ドウ、と言う所で、頭上からそんな声が聞こえて来た。

そして、俺達の後ろに降って来たのは、巫子のイバルだった。こいつどこから来たんだ？

「ミラ様。そのお姿……再び立ち上がる事が出来たのですね」

何事も無かったかのように言葉を続けるイバルを見て、エリーゼは俺の後ろに隠れて、レイアは「誰なの？」とジュードに聞いてい

た。

「ミラ様、足が治ったのであれば、ぜひ村へお戻りください。ミラ様にまた何かあれば、俺は……」

「私はイル・ファンに向かわねばならん。今は戻る気はない」

「では、俺がお供を……」

『イバルが仲間に加わった』

……なんて事には当然ならず、ミラは俺達がいるからと言ってくれた。

「再び歩けるようになったのも、ジュードとレイアのおかげだ。彼らは信頼できる者達だ」

ミラからジュードの名前が出て来たからか、イバルはジュードを睨みつけていた。ニ・アケリアを出る時はそんなでもなかったと思うんだけど……この1ヶ月の間に随分と反感を持たれたらしい。

「ミラ様を治すという約束は守ったようだな」

「うん。約束通り、ミラを歩けるようにしたよ」

そんな約束をしてたのか……いつ……？

「貴様の成果のように語るな！ ミラ様のお力に決まっている！
くそー！ 俺が治すはずだったのにいい！」

と言うか、ジュードへの怒りはただの嫉妬（？）だった。さりげなく響いた気がする。

「ぐ、ごめん……」

「そうだ！ 謝れ偽物！ 謝って死んでしまえ！」

なんかすげー言われようだな……。

「偽物ですか!？」

「違うからねエリーゼ。信じたらいけないよ……」

ホント……純粹だな、エリーゼは。

「ジュードさんのお知り合いの方々は、あらゆる意味で個性的ですね」

「……それって、俺達の事も入ってないか？」

まあ……否定はできないと思うけどな、このパーティー……。……つて俺もか!？

「イバル、お前には大事な命を与えた筈だ。何故ここに居る！」

ミラがそう声を張り上げると、シュツ、バツ。と瞬間移動かと言いたくなるような速さでミラの前に行って土下座をしていた。

「む、村の守りは忘れておりません。お預かりしているものも誰も知らぬ場所に隠し、無事です！ しかしこの度は、このような物が……」

土下座をしながらミラに差し出したのは、1枚の紙だった。と言うか……手紙？

「『マクスウェルが危機。助けが必要、急がれたし』」

「突然、俺のもとにこれだけが届けられ、ようやくミラ様を見つけたのです」

見た所差出人の名前は書いてないな。……怪しいと思わなかったのか？

「明らかに怪しいだろうに……」

「誰だろう、こんなことしたの」

「さてな。どちらにせよ間違いだ。危機など訪れて……」

そこでミラの言葉が切れて、前を見やった。

その視線のからは、もの凄い勢いでこちらに突進してくる魔物だった。

「逃げろ、イバル！」

「は……？」

俺達はすぐに魔物の進路から離れたけど、土下座をしていたイバルはまだ気付いていないようだった。このままでは、魔物に轢かれてしまう。

「間に、合えよッ？」

踵を返してイバルに駆け寄る。

立ち上がって後ろから来る猪のような魔物に気付いたその瞬間、俺はイバルを突き飛ばした。その時点で俺は避ける事が無理そうだったから、剣を抜いて前に構え　ガキイン！　剣で突進の衝撃を和らげた。

受け止めた事に一安心する暇も無く、俺は大きく尖った角で宙に放り投げられた。クルリと回転してバランスをとり、無事に着地す

る。

そしてすぐにイバルの安否を確認する。岩に背を預けて座っているけど、おそらく大事には至らなかっただろう。下手してたら死んでいたけど、それだけでホッとした。

安心した所で魔物との戦いに集中する。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、なんとかな」

俺を心配したエリーゼが駆け寄って来て、治癒術で回復してくれた。

よし、強くなった俺の力を見せてやる。

「貫け氷閃! アイススパイン!」

冷氣の一閃が駆け抜け、魔物に当たると氷の槍が姿を現し、魔物に突き刺さっていく。

でも、残念ながらまだ続くぜ!

「さらにッ、フリーズハンター!」

貫いた魔物の周りに陣が描かれ拘束し、再び氷の槍が貫いていく。

「すごい……これがカイトの精霊術?」

「感心するのは終わってからだ」

あの精霊術で倒せている筈は無く、魔物はまだ元気だし、さらに小さい猪みたいな魔物を呼び出していた。

「数が多過ぎるな……」

確かに、と思うけど、打開策は……。

「アルヴィン、やってみるぞ！」

「仕方ねえ！」

アルヴィンと共鳴^{リンク}して、敵と少し距離を置く。

「逃げ場は無いぜ！」

「ハチの巣だ！」

「「レイン・フィールド！！」」

弓の形態にした俺は、マナを充填して空に放つ。同様にアルヴィンも銃弾を空に向かって放った。そして、無数の矢と銃弾が広範囲に降り注いだ。小さい魔物は射抜かれ撃ち抜かれ、次々に倒れていく。

それでも、大きな魔物　おそらく親玉　はまだ倒れない。

他の魔物を倒してもまた呼ばれるだけだから、親玉を倒さなければならぬ。

「ま、まだ立つてるよ！」

「慌てないでレイア」

「とは言え、次にあの数を呼ばれるとなるとさすがに辛いな」

まだ魔物が立っている事に慌てだしたレイアをジュードがなだめると、ミラが呟いた。

「それなら、呼ばせないようにすればいいんですよ」

「それをどーすんだって話だろ、じいさん」

「何かあるんですか、ローエン？」

ローエンが頷いた。

「行きますよ、カイトさん！」

「分かった！」

合図すると、ローエンと共鳴した。

「凍氷の檻に彷徨い！」

「終焉の刹那を告げる！」

「インブレイスエンド！！！」

魔物の頭上に巨大な氷の塊が作られ、それが魔物の巨大な身体を押し潰すように落下した。落下した氷塊は、辺りの空気すらも凍てつかせる。

巨大な魔物は身体の全てを凍らせていた。

「レイア、トドメ行くぞ！」

「任せて！」

「駆け抜ける疾風！ 瞬迅風牙しゅんじんふうが！！！」

ミラが放つウィンドカッターの風に乗り、レイアが瞬速の瞬迅爪を放った。

凍りついた魔物を貫き、魔物は粉々に砕け散った。

「みんな、無事か？」

「それはこっちの台詞だよ。1人であんな無茶して！」

戦闘が終わって無事を確認しようとしたら、ジュードに怒られた。

「お、俺の無茶なんかミラに比べれば可愛い方だよ？」
「む……私がいつも無茶をしているというのか？」

ミラのその一言は、全員がツツコミを堪える事になった。ティポすら何も言わないのは、ある意味奇跡に近い。

と言うか……何でそんな胸張って無茶してません。とか言うんだろつかこの人は？ 言ってみれば、無茶の塊みたいな人なのに……。

「とにかく、無茶しちゃダメですっ！」

「はい、ごめんなさい……」

このまま怒られるのは嫌なんで、素直に謝る事にした。
エリーゼ……怒ると結構怖いのもかもしれない……。

「それにしても、地霊フラム小節ラノムに入って地場になったら、おとなしくなるんじゃないのか？」

俺が怒られているのをそっちのけで、アルヴィンが疑問を口にしていた。

「四大様がお姿を消したせいで、霊勢がほとんど変化しなくなっているんだっ！」

「イバル……いつの間に……」

でも、イバルの言った理由は気になった。霊勢が変化しなくなっただって事は……。

「ファイザバード沼野を越えるのは……無理、か……？」

「ファイザバード沼野を越える？ くくく……はーっはっはっは！
これは笑える」

言ったらめちゃくちゃに笑われた。さすがの俺も少し腹が立ってきた。

「こうなつてはワイバーンでもない限り、イル・ファンへは行けないなっ！　だが……巫子であるこの俺はミラ様のお役に立てるぞお！」

「どうやって？」

「俺にだけ扱えるワイバーンが一頭いる。ミラ様と2人でならイル・ファンへ行けるぞ」

「イバル、他に方法は無いのか？」

勝ち誇つたようなドヤ顔だったイバルは、ミラのその一言で何か躊躇いだした。

……他人事で見てるだけなら面白い奴だよな、イバルって。

「あるのだな。話せ」

「……シャン・ドウの魔物を操る部族が、ワイバーンを数頭管理していると聞きます！」

ミラの命には絶対とでも言うように、俯きながらそう言った。

「行き先は決まったみたいだな」

「このまま、シャン・ドウに向かいましょう」

「予定通りにな」

シャン・ドウは通る予定だったし、ちょうどいいな。

「イバル、助かった。イバル……？」

悔しそつに俯くイバルを見て、レイアが「行こつか」と言った。
このままここで立ち止まる訳にもいかないから、俺達は、イバルを残してシャン・ドウに向かう事になった。

俺は何か声をかけてやるべきだったのかもしれないけど、この時の俺は、何を言っただいかわからなかった。

* * * * *

道中、いろいろとあつたけど、俺達はようやくシャン・ドウに辿り着く事が出来た。

「ここがシャン・ドウ？」

「はい。ア・ジュールは古くから部族間の戦乱が絶えなかったため、このような場所に街をつくったそうです」

ローエンの説明で街を見回してみる。

シャン・ドウは一言で言えば、谷に沿って造られたような街だ。

部族間の争い云々でこんな場所に街1つ造るとは……人間の力って凄いなあ。

「人間が生き生きしているな。祭りでもあるのか？」

「確かに、普通の賑わいじゃないよな」

もし祭りなら……ふふふ、血が騒ぐな……。やっぱり日本人は祭

りが好きだと俺は思うのですよ。
まあ……ここで日本人は関係無いけどさ……。

「見て、こっちも面白い像だよー」

レイアが少し先に行つて、石像を指差した。

「偉大な先祖への崇拜と、精霊信仰が同一になったといわれる像だ」
「へえ……なんか凄いな」

こう……迫力的なものが。何となく崇めたくなるような像だ。ちよつと手を合わせてみる。

「何やってるんですか？」

「このお祭りの雰囲気がこの像を崇めと言っている。さあ、エリーゼも一緒に！」

「は、はい！」

慌てて合掌するエリーゼ。
何だか微笑ましいなあ……。

「……意味分らないから」

そんな俺達を見て、ジュードが呆れたように言っていた。

「崇めるのはいいけど頭上には気を付けろよ？ 偶に落石があるからな」

「えっ……！？」

「ちょー！ 脅かさないでよー！」

見上げていたレイアがそう怒る。

俺はと言うと……何かテンション下がった。落石怖い……。

「詳しそうな口ぶりだな？」

「前に仕事で、だよ」

まただ。また正体不明の違和感をミラとアルヴィンに感じた。

……あの2人、何かあるのか？

そう考えていると、拝み終えたエリーゼが街を見まわしているのに気付いた。

「どうかしたか、エリーゼ？」

「ぼく、ここ知ってるよー。ねえ、エリー？」

「え、えと……ハ・ミルに連れて行かれる時に来たんだと思います

……」

ティポの言葉に、エリーゼがそう答えた。

ハ・ミルに行く前って事は、もしかしたらこの辺りに住んでいたのかもしれない。ローエンもそう思ったのか尋ねると、エリーゼは分からないと言った。

「ちょっとアルヴィン君、どこ行くの？」

そんな話をしていると、アルヴィンが単独行動に走っていた。

「ちょっと用事があったな。んじゃ、そう言う事で」

と去って行ってしまった。

「もー！ 協調性ないなあ」

「いいんじゃないか？ こんな祭り気分だから1人突っ走って行きたい気持ちは俺は分かるよ」

「……それはカイト君自身じゃないの？」

そうだった……。アルヴィンが「やつほー！ 祭りだ祭りだ！」

とか言っではしゃいでる姿は……想像は簡単かもしれないけど、あんまり想像したくない光景だった。

とりあえずアルヴィンとは後で合流する事になり、俺達はワイバーンを探す事になった。

第16話 歴史ある街（後書き）

～今回の創作共鳴術技～

・レイン・フィールド

アローレイン+レインバレット

カイトとアルヴィンの共鳴術技。2人で空に向かって矢と銃弾を放ち、無数の矢と銃弾を超広範囲に降り注ぐ。

・インブレイスエンド

クラッシュガスト+ブルースファイア

カイトとローエンの共鳴術技。

相手の頭上に巨大な氷塊を作り出し、相手を押し潰すように落下させる。落下させた後は回りの空気すらも凍てつかせる。

第17話 開催 闘技大会（前書き）

どこかへんかもしれないですが……どうぞ（笑）

第17話 開催 闘技大会

アルヴィンと一旦別れた俺達は、とにかくワイバーンを探そう。と言う事になり、とりあえず街を散策する事になった。

だけど、そんな時に事件は起こった。

俺達の頭上にあつた大きな岩が、崩れてきた。

「エリーゼ！」

無我夢中でエリーゼを抱えて安全な所まで跳んだ。

刹那 背後で爆発音にも似た音と共に、土煙が立ち込めた。

「大丈夫か？」

「はい……なんとか……」

「いきなりなだよー！」

うわあ……ティポが土煙で凄い事に！？

「レイアさん、しっかりしてください！」

そんな声が聞こえて、俺とエリーゼは声の聞こえた方に向かった。そこでは、レイアが倒れていた。でも意識はあるらしく、苦笑いしながらごめんと謝ってきた。

「今治療するから」

ジュードも駆け付けてきて、治療を始める。

「ローエン、怪我してる。ごめんね……」

「これぐらい何て事はありません。それよりも、ご自分の心配をなさい」

「そうだぞ。大怪我じゃなかったにしろ、怪我には変わりないんだからさ」

幸い、捻挫とかそんなだろうか。とにかく出血はしていなさそうだった。

「医者よ。手伝っわ」

そんな時だった。1人の女性がこちらに走ってきた。

医者と言う女性の助けもあって、レイアは立ち上がるまで回復した。

「ありがとう。えっと……」

「イスラよ。気にしないで」

助けてくれたからか、何だか優しくそうな人に見える。

「無茶をするな、レイア」

「まだ座ってた方がいいよ」

「大丈夫。ありがとね、みんな」

本当に、大事にならずによかったよ。

「アルヴィン君めー！ こんな時に限っていないんだよなー」

突然喋り出して、イスラさんも驚いていた。

まあ、普通は驚くよな。エリーゼには悪いけど、こんな不思議物体を見せられたら……。

「アルヴィン君ならレイアを助けられたのにー」

「年寄りだと思って失礼な！」

珍しく、ローエンがティポを引っ張りだした。ぐよーんと伸びるその素材は、果たして何で出来ているのか？

それを見てレイアが笑う。もしかしたら、ローエンは笑いが取れたかったのかもしれない。場の空気を和らげるために。

「ローエン、何やってんのさ……」

ティポを取り戻したエリーゼは、心配そうに撫でまわしていた。

「イスラさん、本当にありがとうございました」

「イスラさんって、いい人ね」

「いいのよ。気にしないで」

「そうは言っても、何かお礼を」

「！？……あなた……」

俺が言うと、イスラさんが何故か俺を見て驚いていた。なんだ？

「と、ところであなたたち、ここの人間じゃなさそうだけど、街には何をしに？」

頭を軽く振ったイスラさんが、そう尋ねた。

「ワイバーンを求めて来た。この街なら手に入るかと思ってな」

「それなら、川の向こうに檻があって、大きいのがいるわよ。行ってみてはどう？」

「本当ですか！　ありがとうございます、イスラさん」

やっぱり優しい人だった。

「ふふ、お役に立てたようね。それじゃ、私はこれで失礼するわね」

去っていく直前、イスラさんは俺を横目で一瞥していった。

ホント、何なんだ？ 初対面、だよな……？ たんに俺が忘れてるだけって事もあるかもだけど……でも、会った事は無いと思う……。

「イスラさん見つめてどうしたの？ あー、カイト君はああいうのが好きなタイプ？」
「は？」

考えていると、横からレイアがそんな事を言ってきた。

「そうなんですか？」
「答えるー」

ええー……エリーゼとティポまで！？
助けを求めようとジュードに視線を移すと……あのやろっ、目逸らしやがったな。ならミラだ。と思ってミラに視線を移すと、「これも人間の好みを知るチャンスだ。言ってみる」とか意味分からん事を口走っていた。ローエンにいたってはもう笑ってるだけ。

……何この訳分からん状況！？

「さあさあ、もう観念しちやいなよー」
「です！」
「はくじょうしろー」

くっ……仕方ない。答えてやろっじゃないか。きつと答えられるのは、この祭りの雰囲気のおかげと言う事にしておこう。

「俺はな、ああいう綺麗なお姉さんタイプじゃない」

「そうなんだ？　ちよつと意外だね」

「俺はお前の中でどういうイメージなんだ？」

「じゃあ、カイトの好みは何なんですか？」

「んー、企業秘密って事で」

「なにそれー！」

「もったいぶるなー！」

何故か怒られた。

「じゃあ、レイアとエリーゼの好みも言えよ？」

「「え……」」

「俺だけ言うのはフェアじゃないからな」

「え、あー、あたしは……遠慮しとく……」

「わたしも……です……」

「エリーの好みはねー」

「ティポ！」

俺の案にすぐに2人とも動揺してこの話は終わりになった。

いやー、助かった助かった。

「と、とにかく、ワイバーン見に行くんだろ？　早く行こうぜ」

これ以上ここでたむろっていると收拾がつかない気がしたから、俺はみんなを促して、当初の目的であるワイバーンの所に行く事にした。

ワイバーンは割とすぐに見つかった。檻に入れられても、迫力はスゴイ。本当にこいつに乗って空を飛べるんだろうかと思ってしまう。

「へいへいへいー」

ティポが挑発するようにワイバーンの目の前で飛び始めると、ワイバーンのは怒ったのか口を開けて咆哮した。身を竦めたティポが、俺の顔面に噛みついてきた。

「は、はひふふはー！？（訳：か、かみつくなー！？）」

ティポを取ろうとして手で掴み引つ張る。……って、あれ？ 取れない！？ ティポさん取れませんよ！？

「君達、何をするつもりだ？ そのワイバーンは我が部族のものだぞ」

ティポが取れなくて悪戦苦闘していると、誰かがそう言った。視界が真つ暗だからどんな人が言ったのかも分からない。

「このワイバーンを手に入れたい。どうやって檻を破壊しようか考えていた所だ」

「ほんはほはひほはへふほほお！？（訳：そんな誤解をまねく事を！？）」

ああくそっ……ティポの所為でまともにツッコめないじゃないか！？

「……そっちの彼は……いいのか？」
「カイト……まだ噛まれてたんだ？」

誰か分からない声とジュードの声がとんできた。

仕方ないじゃないか。引つ張つても何故か取れないんだから。

これは傍から見たらどうなっているんだろうか？ さながら『テ
イポ仮面』的な事になっているかもしれない。ピンチに陥ったヒー
ローを助ける為に颯爽と現れる謎の人物。その正体は身近に居た同
級生、みたいな？

……自分で思つてて、無いな……。第一に前が見えないから窮地
に立たされるのはこつちだし。助けに来て助けられるとかヒーロー
物ではナシだろ。

「ティポ、離れてー！」
「ぷはあ……苦しかったー」
「それはこつちの台詞だ！？」

やっと解放されての第一声がツツコミだった。
ようやく現状を把握すると、現地の人が3人居た。

「で、何の話でしたっけ？」

言つた瞬間、みんなが呆れていたのが分かった。
仕方ないじゃん！ こつちは話聞くだけの余裕は無かつたんだか
らさー！

「あの……ワイバーンを貸してもらつて、できませんか？」
「いきなり何を言い出すんだ」

改めてジュードが言つと、3人の内1人がそう言ってきた。

「こんなことしてる場合じゃない。早く代表者を見つけないと」

女性が言つて、閃いてしまった。

「何の代表者ですか？」

「街が賑わっているだろう。これは10年に一度開催される、部族間の闘技大会が明日開催されるからだ。だが、我がキタル族は唯一の武闘派である族長が王に仕えているため参加できないのだ。伝統ある我が部族が、このままでは戦わずして負けてしまう……。だから代表者を探しているんだが……」

様子を見た限りじゃ見つかってないんだな。

なら、ちょうどいいじゃないか。

「その代表者、俺達じゃダメですか？」「はいはい！ 参加します！」

俺と同じ事を考えていたのか、はたまたただの好奇心か、俺と同じタイミングでレイアが手を高々と上げて言っていた。

「こう見えて俺達腕立ちますし、もし優勝出来たらワイバーンを貸してください」

ダメもとの交渉だけど、そう提案してみた。

「分かった。だけど、君達の力を見せてもらう方がいいか？」

「いいよな、ミラ？」

「うむ、ワイバーンを得るためだ」

「やったー。闘技大会なんて燃えるなー！」

レイア……本当にただの好奇心だけだったのかよ……。

「少し目離しただけで面白そうな事に首突っ込みやがって。オレは仲間外れか？」

いつの間にかアルヴィンが居て、そう言っていた。

「仲間か？」

「そうだぜ。これで全員集合」

「そうか。なら、空中闘技場に来てくれ。力を見たい」

そんな訳で、俺達は闘技場に行く事になった。

闘技場に着いてすぐに力を見せる事になった俺達は、実際に舞台上がって魔物と戦う事になった。

「立派な舞台だねー！」

「これは、燃えるな！」

「2人とも……あんまりはしゃがないでね？」

舞台上上がるなりテンションが上がった俺とレイアだけど、ジュード達はそんなにテンションは上がっていなかった。

「男の子なんだからさ、もっところ、燃えてきたぜー！　みたいの無いの？　カイト君みたいな」

「ないよ、そんなの」

「ちょっと待て。何かそれ俺が変な人みたいじゃないか!？」

何か釈然としないけど、ちょっとエリーゼが気になったから、俺は話を切り上げてエリーゼの所に行く。

「エリーゼ、大丈夫か？」

「何がですか？」

「いや、こういうの好きじゃないさそうだからさ……」

ただでさえ戦いが好きじゃないだろうに、ここでは見世物だからな。俺もあんまり戦いは好きじゃないし。

でも、言いだしっぺは俺だからそんな事も言ってられない。

「わたしは、大丈夫です。危ない事があっても、カイトが守ってくれますから」

「……そっか。そうだな。全力で守るよ」

エリーゼにそう言われて気合が入った。

「そろそろ始めるが、準備はいいか？」

「ああ、構わない」

「私達は客席で見せてもらうよ」

そう言って、ユルゲンスさん さっきのキタル族の男性 は客席に向かい、同時に向こう側から魔物が現れた。見た目は強そうじゃないけど、油断大敵ってな。

「エリーゼ、やるぞ!」

「分かりました!」

すぐにエリーゼと共鳴して、術技を放つ。

「冷気を纏う玩具よ！」

「カチカチですっ！」

「コチコチハンマー！！」

精霊術を唱えると、空から冷気を帯びたピコハンが大量に降ってきた。魔物に当たると凍りつく。

「魔皇刃！」

俺は凍りついた魔物を、剣を大きく振りかぶってから地面に強く叩きつけて出した衝撃波で粉々に粉碎した。

「やるねえ、カイト」

「だろ？」

戦闘中だけど、アルヴィンとそうやって会話も出来るぐらい、戦いには慣れていた。

「ジュード！あたし達も負けてられないよ！」

「僕達は何と戦ってるのさ……？」

今度はジュードとレイアが共鳴した。

「水迅舞い上げれ！
れってんせんすいげき 裂天旋水撃！！」

ジュードが水を纏う超下段回し蹴りを繰り出し、レイアは棍を地面に叩き付けて竜巻を起こした。

「さあて、こつちも決めるぜ、ミラ様！」

「了解した！」

また違う所では、ミラとアルヴィンが共鳴している。

「噛み砕け！ 龍虎滅牙斬！！」
りゅうこめつがざん

アルヴィンが振るう剣で龍が舞い上がり、2人で飛び上がって龍と共に衝撃波を叩きつけた。

さすがミラとアルヴィン。破壊力が凄まじい。

「ローエン、一緒に！」

「承知！」

そしていつの間にか、エリーゼとローエンも共鳴していた。

「水流決壊！ テイポ爆水陣！！」
ばくすいじん

ティポから闘気が放たれて魔物がダウンし、そこに水流が降り注いだ。

エリーゼ達が倒した魔物が最後だったらしく、俺達は勝利する事が出来た。

「いざとなったら出ていこうと思っておたが、必要なかったようだな」

戦いが終わって武器をしまっていると、ユルゲンスさん達が来た。

「あつたり前だよー！ えっへん！」

「すまない。君を見くびっていたようだ」

その言葉は明らかにエリーゼに向けられていた。
まあ……仕方ないわな。

「ははは、誰が見たってそうだな」

「むー……わたしの友達、バカにしないでください！」

「ごめんごめん」

と言うかエリーゼ、あのセリフの対象はお前も含んでるよ。……
って言った方がいいんだろうか？

「だが、それだけ厳しい戦いなんだ。かつては部族間の優劣を決める為に、相手を殺すまで戦っていた大会だ」

「……………」

「えー……………」

まさかそんな大会だったとは……やっぱり安請け合いは禁物だったか……。

あからさまに元気を失った俺とレイアを見て、ユルゲンスさんが口を開いた。

「今は大丈夫。現ア・ジュール王がその制度を禁止したからね」

「なんだ、良かった……」

「ア・ジュール王、いい人ー！」

ティポの言うとおり、いい人そうだな。

「それじゃ、本戦は明日だ。宿を用意したから、ゆっくり休んでくれ」

ユルゲンスさんがそう言って、ひとまず今日は宿屋で休むことになった。

* * * * *

翌朝。宿屋のロビーに行くと、そこにはユルゲンスさん達の姿があった。軽く挨拶して、さっそく今日の大会の話になった。

「参加者の関係で、本戦は今日1日だけですべて行う事になりそうだ」

「今日ですか」

「めちゃくちゃハードだな」

いつもはどのくらいなのかは知らんけど。

「鐘が鳴ったら、闘技場まで来てくれ。それが大会開始の合図だ。私達は闘技場で待ってるよ」

そう言って、早々に去って行った。

「時間が出来たみたいだけど、どうするよ?」

アルヴィンがみんなに問いかける。

「私は広場を見てくる。少し気になるのな」

最初に口を開いたのはミラだ。あの落石地帯に何があるんだろうか？

「あ、あたしも行く。じっとしてても緊張するだけだし」

そこにレイアが言って、ミラが頷いた。

「ん、じゃあオレも行くか」

とアルヴィンも言った。

俺はどうしようかな……普通に観光とかもいいけど……。

「カイト君、観光しよーよー」

「わたしも、いろいろ見てみたいです」

「そうだな。観光しようか」

頷くと、エリーゼが嬉しそうに微笑んだ。

「ジュードとローエンはどうする？一緒に観光するか？」

「そうしようかな。僕もやる事無いし……」

「そうですね。観光しましょうか」

と言う事で、こちらも決まった。

鐘が鳴ったら各自闘技場に直行と言う事になり、俺達の観光が始まった。

「さて……観光と言ってもどこに行こうか？」

歩きながらそう呟く。

さすがに全部は回れないし、あまり闘技場から遠い場所となると、鐘に気付かない。なんて最悪な事態になってしまいかねない。

「そう言えば、エリーゼはこの街に見覚えがあったんだっけ？」

「はい、少しだけですけど……」

呟いて、街を見回した。

「それなら、何か思い出すかもしれないから、やっぱり観光にして正解だね」

とジュード。

「そうだ。ずっと気になってたんだけど、エリーゼとティポっていつから一緒なんだ？」

一応ぬいぐるみだけど、あんまり汚れは目立たないし、何よりもあの伸縮性。あんなに伸ばしまくってるのに縮まるとかおかしくないか？

「忘れちゃったー。でも、エリーゼとは研究所から一緒だよー」

「研究所？」

「ティポは、研究所の人が連れてきてくれたんですよ」

研究所……エリーゼはどこかの研究所と何か関係があるのか？

一瞬、人体実験と言う単語が脳裏を過ったけど、エリーゼはいたって普通の女の子だ。だからその考えはすぐに頭から消した。

「ローエン、研究所って……」
「うーむ……」

ローエンにも心当たりが無いのかジュードが尋ねる。

「ローエン君は、そうやってよくヒゲをさわってるよねー？」
「こうしていると、落ち付いて考えがまとまるもので」

よくやつてる人見かけけるよな。いや……もちろん、実際に見た事は無かったけども……。

「ティポさんもどうですか？ ほら、みなさんも」

「いや……僕は……」

「俺も遠慮するよ。紳士の髭を触るのは恐れ多いから」

ローエン、普通に手入れとかしてそうだしな……。乱したりしちゃったら悪い。

俺は遠慮したけど、エリーゼとジュードは少し触っていた。なんというか……シニールやね。

ヒゲから手を離れたエリーゼは、そのまま黙っていた。

「どうした、エリーゼ？」

そう尋ねると、エリーゼは俯いていきなり泣き始めた。

「ほ、本当にどうしたエリーゼ！？ あ、あれか！ 髭の触り心地に感動したのかー？」

「落ち付いてカイト！」

「……お父さん……」

慌てていたそんな中、エリーゼがそう呟いた。

「お、お父さん……？ 父親？」

「エリーゼのお父さんにもヒゲがあつたの？」

ジュードの問い掛けに、小さく頷いた。

「お父さん、お母さんに、会いたい……」

……そうだよな。エリーゼはまだ子供なんだ。いくら俺達が居て
独りじゃなくても、両親が恋しくなるのは当たり前なんだ。

エリーゼが涙を流すそんな時、闘技大会開始の鐘が、街中に響き
渡った。

「エリーゼさん、ご家族がどこに居るのか思い出したのですか？」

ローエンが尋ねると、エリーゼは泣きながら首を横に振った。

「この街ならエリーゼさんを知っている人がいるかもしれません。
ミラさん達とお別れして、しばらく探してみますか？」

「ローエン！？」

まさかそんな提案をするとは思わなかったから、思わず声を出し
ていた。

「みんなと、一緒にいい、です……。と、友達、だもん」

「ぼくもエリーの友達だから一緒だよー」

と、2人して即答して、俺は安心した。エリーゼがティポに小さ

くお礼を言っている。

「それじゃ、闘技場に行こっか」

「はい……がんばります」

涙を拭いたエリーゼが力強く言った。

一度軽くエリーゼの頭を撫でて悲しいのを紛らわせてから、俺達は闘技場へと向かったのだった。

第17話 開催 闘技大会（後書き）

ああ……もうすこしでティポが、エリーゼが！ な展開になりますが、そこはオリジナル入れるつもりです。

↓今回の創作共鳴術技↓

・コチコチハンマー（氷）

アイススパイン+ピコハン

カイトとエリーゼの共鳴術技。

カッチカチに凍ったピコハンが空から大量に降ってくる。触れると凍結。

・裂天旋水撃（水）

転泡+風塵皇旋衝

ジュードとレイアの共鳴術技。風塵皇旋衝は勝手に追加させた技。転泡で蹴った後に、風塵皇旋衝で巻き上げる。

・ティポ爆水陣（水）

ティポ戦吼+ブルースファイア

エリーゼとローエンの共鳴術技。

ティポ戦吼で吹き飛ばした後、水流で追撃する。

第18話 闘技大会本戦、開始（前書き）

今回は短くなりましたが、区切りがいいかなと思ったので。

第18話 闘技大会本戦、開始

闘技場に急いで来ると、ユルゲンスさんが待っていた。

もうミラ達も来ているらしく、さっそく合流しているいる話した。

まあ……話すと長くなるからかいつまんで言うと、何とイスラさんとユルゲンスさんは婚約しているらしい。とか、実はアルヴィンの母親がここに住んでて、面倒を見てるのがイスラさんだとか。エリーゼが少し両親の事を思い出したりとか、そう言う話だ。

話し終わり、受付を済ませて、ようやく大会かー。と意気込もうとしたその時、こんな所で俺の不幸スキルは発動した。

「は……大会参加って……最高6人なの……？」

「すみません、そうなんですよー」

受付の人に言われて、みんなして絶句していた。

「こんな事聞いてないっすよ？」と言う視線をユルゲンスさんに向けると、「すまない、今年は参加者の関係でどうやら変更になったようだ」と本当に申し訳なさそうに真面目に言ってきたから、俺もそれ以上何も言えなくなってしまった。

「え、じゃあ、誰が出る？」

ここで出場しない人を聞かないのが、ジュードの優しさだろう。だけど、出場しない人は決まってる。

「んじゃ、俺パスで」

俺がそう言うと、みんなが驚いたように俺を見た。

「いいの？ あんなに楽しみにしてたのに……」

「待て待て、人を戦闘狂みたいに言うな」

本当に、レイアの中では俺の認識はどうなってるのか、一度問いたださないといけないみたいだ。

「この大会は優勝しないといけない。負けは許されない。なら、この中で一番弱い俺が抜ければいいだろ」

例え強くなつたって言うても、どうしても埋められない経験の差がある。

なら最年少のエリーゼはどうなるんだって、話になるんだけど、何だかんだ言つてエリーゼも俺よりずっと強いからな。

「カイト……わたしの事、守ってくれるって言いました……」
「ウソ吐くのかー！」

2人に言われて、グサツと来た。
けど、これは仕方ないんだよね……。

「アルヴィン、お前エリーゼ守るって言つたろ？ 頼んだ」
「そうくると思ったよ」

予想されていたらしい。それはそれで何か複雑だな……。

「エリーゼ、俺は観客席で見守ってるよ。守るって意味なら同じだろ？」

「……分かりました。ティポ」
「へ？」

ガブツ！

視界が一気に暗くなった。

この感覚は……ティポに噛まれたか。

そう思っただけに、ティポは俺の顔から離れた。

「これで許してあげます」

「感謝しろー」

「あ、ああ……ありがとう、エリーゼ」

ここでお礼も何かおかしい気がするけど、とにかくそう言ってエリーゼの頭を撫でていた。

「って事で、俺は観客席からお前らの雄志を写真に収めとくよ」

「……シャシン？」

「あ……いや、目に焼き付けておくよ！」

レイアに首を傾げられて、慌てて言い直す。

まあ……写メには撮るつもりなんだけどな。

「それでは、私とジュード、アルヴィン、エリーゼ、ローエン、それからレイアが参加だな」

「そうだね」

ミラが受付にそう言つと、ようやく終わった。

「カイト、ちゃんと見ててくださいね？」

「分かってるよ」

「エリーゼさんは、私とアルヴィンさんでしっかり守りますので心配しないでください」

ローエンとアルヴィンが守ってくれるなら、心強い事この上ないな。安心して任せられる。

「それじゃあカイト君。私達は先に観客席に移動しよう」

「あ、分かりました」

ユルゲンスさんに言われて、俺はもう一度みんなを激励してから観客席に向かった。

* * * * *

カイトに見送られてからすぐに、僕達は闘技場の舞台入口に案内されて、出番を待っていた。

ミラとアルヴィン以外は緊張している様子で、特にレイアが落ち着きなかったけど、しばらくしてようやく出番が来た。

『続いて登場するのは、キタル族代表だ！』

言われてから舞台に出ようと前を見ると、大勢の人がいる観客席が視界に入った。

「こんなに大勢……」

「過度の緊張は、本来の能力を低下させると言う。気楽にだ、ジュード」

緊張をほぐすための言葉なんだろうけど、やっぱりそんなにすぐには緊張は解けない。

「それに、あの観客席のどこかにカイトが居る筈だ。本来の力を出せずにいたら、わざわざ出番を譲ったカイトに笑われてしまうぞ？」

「……うん、そうだね。カイトの分も頑張らないと」

そう考えれば、緊張もそんなにないかな。

ミラが先に出ていって、僕もそれに続くようにして舞台に出た。

『登録選手の中で魔物を操らない選手は彼らだけです。その実力はまったくの未知数。いかなるものなのか？』

「え、魔物？」

人と戦うものだと思っていたのか、レイアがそんな声を上げていた。

驚いたのは僕もだけど、魔物相手なら遠慮する事は無いよね。

『おっと、ここで相手選手の登場だ！』

見ると向こう側から、魔物を引き連れた人が入ってきた。

僕達は武器を構える。

「よし、行くぞっ！」

そして、闘技大会が始まった。

* * * * *

試合が始まってすぐに、俺はポケットから携帯を取り出してカメラを起動させて舞台に向けていた。

狙うはもちろん、みんなのカッコいい場面。特にエリーゼをいっぱい撮っておこう。

……とは言え、俺が携帯電話持つてるのを知っているのはジュードとミラとアルヴィンだけだから、エリーゼには直接見せてあげられないからな。それは残念だ。と言うか、ジュード達にもこのカメラ機能は言ってないから、驚かれるとは思っけど。

お、ミラとローエンが共鳴術^{リンクアーツ}技使ってる。舞台から観客席までは結構距離があるけど、何故か音声は伝わって来ている。

『塊根重圧！』

『全てを潰せ！』

『『アドブレッツシャー！！』』

地面に魔法陣が描かれた瞬間、見えない圧力が敵を押し潰していき、トドメに敵を打ち上げた。

おっと、これはシャッターチャンスじゃないか。まあ、シャッターは無いけど。パチリと写メに撮り、すぐに保存。そしてちゃんと保存されているかを確認する。よし、バッチリだ。

「そう言えば、対戦表見てなかったんですけど、何戦あるんですか？」

ふと思った事を近くで見ているユルゲンスさんに尋ねてみた。

「そうだな。あの参加者数なら、3回勝てば決勝進出だな」

「3回ですか。なら、大丈夫そうですね」

あいつらなら、きっと勝てるさ。

そう思いながらエリーゼをパチリと写メに収めた。よしよし、良
く撮れてる。

それにしても、何でエリーゼはさっきからキョロキョロと観客席
を見回しているんだろうか？　もしかして、緊張のし過ぎだろうか？

と、思ったら、不意にエリーゼの視線がある一点　俺の方に止
まって、距離がある筈なのに目が合ったのが分かった。そして、エ
リーゼがニコリと微笑んだ。

まさか、キョロキョロしてたのは俺を探していたのか！？　なん
ていい子なんだろうかエリーゼは。感動し過ぎて撮影のボタンを連
打してしまった。

「はは……撮り過ぎた……」

結果、意味分からん画像まで出来てしまった。なんだこれ？　い
つたい誰の頭だよこれは？

「お、落ち着いたかい？」

あまりの事だったからか、ユルゲンスさん達が若干引いていた。

「すみません、大丈夫です」

少し恥ずかしかったけど、エリーゼはもちろんの事、みんなの画
像を沢山撮る事に成功している俺に、もはや一片の悔いは無い！

まあ、別に死にはしないが。

「それにしてもここまで戦うなんて。君達はどういう集まりなんだ？」

不意にそんな事を聞かれて、俺は考え込んでしまう。

確かに、今のパーティーメンバーは、医学生が1人、精霊の主が1人（単位：人でいいのか？）、傭兵が1人、無垢な女の子が1人（+喋るぬいぐるみ）、元軍師現執事が1人、看護師見習いが1人、異世界人が1人。

……あれ？ 何このパーティーメンバー……よくよく考えてみると意味分らん構成だな。と言うか、医学に関係している人が2人も居る事に気が付いた！？

じ、じゃあ、メンバーじゃなくて旅の目的で考えてみよう。黒匣^{ジン}って危ない兵器を壊そうとしてるんだよね？ ……だから、

「……ええっと……せ、正義の味方？」

「正義の……？」

啞然とされた！

いやまあ、これが普通の反応か。自分でもよく分かってないからすごい適当な事を言ってしまった。

「そろそろ、決着が着きそうだな」

「え！？」

考えに耽っていたら、いつの間にか終わりそうになってしまっていた。一応写メは大量に撮りはしたけど、なんかもったいないな。とにかく、最後のトドメだけでも撮ろう。

そうやって舞台にカメラを向けると、エリーゼとアルヴィンが共

鳴術技をしていた。

『行くぜ姫様！』

『分かりました！』

『癒しの光よ！』

『仇為すものを打ち砕け！』

『しゅくごう守護光封陣ほうじん！！』

光の魔法陣を描き、仲間を癒すと共に敵を攻撃していく。
2人が倒したのが最後で、ミラ達は無事に決勝戦へと進む事が出来た。

第18話 闘技大会本戦、開始（後書き）

カイト君、今回出番無しでした。ずっとエリーゼを写メってた（笑）。

と言うか、ジュードとレイアも結構空気だった……。

↓今回の創作共鳴術技↓

・アドプレッシャー（地）

エアプレッシャー＋アリーヴェデルチ

ローエンとミラの共鳴術技。簡単に言ってしまうえばエアプレッシャーの強化版で、最後に空に舞い上げるのはオリジナル。

・守護光封陣（光）

守護方陣＋ハートレスサークル

アルヴィンとエリーゼの共鳴術技。フェアリーサークルとほぼ同じ効果。ただし、回復よりも攻撃向け。

第19話 闘技大会の陰謀

試合が終わり、すぐにロビーに駆け付けると、ミラ達が舞台から出てきた所だった。

「おつかれ、みんな」

「ああ！ 見事な戦いだっただよ」

ミラ達が勝った事がそんなに嬉しいのか、ユルゲンスさん達は結構テンションが上がっていた。

「決勝は、食事休憩をはさんでから始まるわ。他の参加者も一緒だから、落ち着かないかもしれないけど、食事にしておきましょう」

と、言われて、さっそく食事にする事になった。

おっと、移動する前に、

「エリーゼ、頑張ったな」

「はい、頑張りました！」

「ヨユーだったけどね」

俺が声をかけると、エリーゼは笑顔で俺に抱きついてきた。身長の関係で頭が俺のみぞおちにクリティカルヒットしたけど、ここは堪えるのが常識だろう。……結構痛かったけど。

「オレが余裕って言った時にはウソ吐き呼ばわりだったってのに、どんな心変わりだ？」

もう先に行ったかと思ってたアルヴィンがそう言ってきた。

「アルヴィンはもつと頑張ってもよかったです」

「オレだってカイトの分まで頑張ってたぜ？」

「そっか、ありがとな、アルヴィン」

「ま、頼まれた事ぐらいはやるさ」

エリーゼを守ってくれて事だろうな。

「ほら、オレらも飯食いに行こうぜ。カイトは腹減ってないかもしれないけど」

「いやいや、俺も観戦してて腹減ったから」

「わたしもお腹空きました」

「ぼくも」

ずっと不思議に思ってたんだけど、ティポは腹減ったとは言いつけど食ってる所見た事ないんだよな。

まあ……食ったらぐちゃぐちゃになりそうだけど。

そんな話をしながら、俺達も昼食を食べに行った。

* * * * *

みんなでテーブルに着いて料理が運ばれてくるのを待っている間、俺は携帯で撮った画像を整理していた。

さすがに撮りすぎた感じもあったし、厳選してカッコいいのを残

したかったのもある。何より整理しないと、フォルダがヒドい事になりそうだった。

「カイト君、何してんのー？」

そうしていると、ティポがいきなり話してきた。画面を覗き込んで首（？）を傾げている。

「何ですか、これ？」

ティポをどうしようかと考えていたら、エリーゼも画面を覗き込んできて、反射的に携帯を折り畳んだ。

「何でもないよ」

「中にエリー達がいいたよーなー？」

「それは気のせいだ、ティポ」

どう説明すれば理解してくれるか分からないし、なら言わない方がいいだろう。

2人は納得してなさそうだったけど、携帯に付いていたガラス玉を見て、エリーゼが小さく声を上げた。

「これ……ちゃんと持ってたんですね？」

「当たり前だろ。エリーゼに貰った大切な物なんだから。俺の宝物だよ」

俺がそう言うと、エリーゼが頬を赤くして微笑みながら、小さく「……ありがとうございます」と呟いていた。ティポも何故か恥ずかしそうに静かになった。

この2人……シンクロでもしているんだろうか？ めちゃくちゃ

仲良いな。

「あれ、ジュードどうした？」

「いや、何でもないよ……」

座ってからそわそわしていたジュードに尋ねてみると、首を軽く振ってそう答えた。

多分、この空間に決勝の相手が居るから落ち着かないんだろう。

「ジュード君好みのめっちゃ可愛い子だったらどうする？」

「なっ！？ あ、相手がどんなだって関係ないよ！」

アルヴィンの発言に、ジュードが顔を赤くして立ち上がって言った。

これは俺もからかうべきだろうか？ ……いや、ジュードの好みてミラみたいな芯の強い感じの女性っぽいし、もし戦う事になっても正々堂々戦うか。からかう価値ナシ。

「ははは！ それにしても決勝か……本当にここまでこれるとはな」

「そりゃ、優勝するって言ったしな」

「カイト君は何もしてないよね！？」

レイア、そこを突くんじやない。出来れば俺だって出たかったんだから。

そうしている間に料理が全員分運ばれ、ユルゲンスさんが「決勝も頑張ってくれよ」と言ってみんなで食べようとしたその時、慌てた様子でユルゲンスさんの仲間の男性が走って来た。

まあ……ユルゲンスさんに用があるみたいだし、俺は俺で先に食べさせてもらおうか。

「この前の落石、事故じゃなくて事件だったらいい」

落石……俺達が被害に遭ったあれか。事件って事は、誰かが人為的にやったって事か。

……何のために？

男性の口からも人為的に破壊された痕があると告げられた瞬間、ミラが突然立ち上がった。

「食事には手を付けるなッ！」

ミラが叫び、その場に居た全員が動きを止めた。けど、もう食べてしまった人もいるらしく、次々に椅子から落ちて床に倒れていく。そして俺も、もう一口食べてしまっていた。

「ゲホッゲホッ！？」

「か、カイト！？」

「まさか食ったのか！？」

みんなが慌てる中、俺はとつさに吐き出そうとしたけど、突然の事だから吐き出せないでいた。

「……あれ……？」

でも、意識が失われる事はなく、ほとんどいつも通りだった。

「大丈夫なの？」

「分かんない……けど、大丈夫……かな……？」

ジュードに聞かれたけど、そうとしか返せなかった。

「な、なんだ……これは……」

ユルゲンスさんが、倒れた人達を見て青ざめていた。

「僅かですが、この独特の木の実のような匂いはメディシニア……間違いありません。水溶性の毒です」

倒れた人に近付いたローエンが、そう判断した。

「みんなの食事に盛られてたつて事!？」

「でも……カイト君も食べたよ?」

そう、それが謎だ。

こんな無差別に毒を盛るなら、本当に全員分に毒が盛られている筈。なのに何故、俺だけがこうして生きているのか?

まさか……俺だけ盛られていなかった?

いつかジュードが言っていた、『他に可能性が無ければ、それが真実になりえる』と言う言葉が浮かんだ。

考えていたら、急に気分が悪くなってきた。

「まさか、決勝の相手が勝とうとして……」

「いや違う」

ミラが即座に否定していた。

「このような卑劣な手口を使う連中に、思い当たる節がある」

そう言った瞬間、アルヴィンが入口の方で何かを発見したらしく、1人で走って行った。

「いったい……何がおきてるんですか……？」

ミラにそう尋ねるエリーゼの声が、何だかやけに遠く感じた。レ
イアも続けてジュードに何かを問い掛けている。

さつきまでは大丈夫だったのに、今は意識が朦朧もろろとしていた。

その原因が、突然の睡魔と言う事に、意識が途切れる直前に気が
付いた。

* * * * *

目を覚ますと、見慣れない天井が視界に入ってきた。

「……あれ……ここは……？」

身体を起こすと、アルヴィンに以外のみんなが居た。

「あ、目覚めたんだ」

「……よかったです」

起きた俺に気付いたジュードとエリーゼがそう言うてきた。

……よく覚えてないけど、倒れたんだっけ？

「カイトさんの料理にだけ、睡眠薬が盛られていたようです。死に
至る事は無いのでご安心を」

睡眠薬……？ 何で俺だけに？

「カイトも起きた所で話すが、恐らくこの事件の首謀者はアルクノア」

「……アルクノア？」

聞いた事が無い単語が出てきて、みんなが首を傾げた。

「私の命を狙い続けている組織だ」

「……それじゃあ……さっきの毒は……」

「狙いは、ミラー1人だけだった……って事か？」

「死んだ者には済まないが……十中八九間違いないだろう」

そんな……1人の命を狙う為だけに、関係の無い人まで大勢殺したってのか……！？

「無関係の人をこれほど巻き込んで……一体それは……」

「もとより何でもありの連中だったが、今回は特にひどい」

ひどい、なんて一言で済ましていいレベルを超えている。もうテロの域だろう。

「どうして！？ 何で狙われてるの、ミラー！？」

「……私が、やつらの黒匣を破壊し続けてきたからだ。奴らが20年前、黒匣と共に突如出現して以来な」

「20年前……」

「黒匣と共に出現して……それじゃ、クルスニクの槍にも……黒匣を使ってるあれにも、アルクノアが関係しているの？」

ジュードの問いに、ミラが「確証は無いが出所はアルクノアだろう」と答えた。

「でも、今回の毒にしたって怪しい行動してる連中なら目に付くんじゃないか？」

「いや、見分けるのは難しいだろう。常に街の人間に溶け込んでいるからな。私もこれまで、黒匣が使われた際の、精霊の死を感じることでしか対処が出来なかった」

それじゃあ、ミラにも無理なら俺達じゃ見分けるのは不可能かな。

「あれ……精霊って死ぬのか？」

どこその巫子が精霊は死なないって言って無かったか？

「術を使う度に精霊を死に追いやる」

意外な事実に驚いていたのは、俺だけじゃなかった。

「人間は精霊の力を借りて暮らし、精霊は人間の霊力野^{ゲート}が生み出すマナで生きる。黒匣は一見、夢のような物だ。だが、黒匣は世界の循環を確実に崩す。黒匣が存在する限り、人間も精霊も安心して暮らしてなどいけない」

今まで俺は、ミラがクルスニクの槍を　黒匣を壊そうとする理由を勘違いしていたみたいだ。ここまで人間と精霊の事を考えてるなんて、さすがだと思う。

「……私もまだまだですね……。そのような大事を全く知らなかった

たとは……」

「知らなくて当然だ。人間に知られぬよう、私が1人で対処してきたのだから」

「じゃあ……今までずっとミラは……」

「世界の為に、1人でずっと戦ってたんだな」

20年と言う長い年月を。……いや、精霊だから、20年なんかあつと言う間かもしれないけど。

「だが、私が四大の力を失った所為で、お前達人間を巻き込んでしまった事になる。……すまない」

ミラが謝ると同時に、部屋の扉が開けられた。

そうか……まったく気にしてなかったけど、ここって宿屋か。

開かれた扉からは、ユルゲンスさんが入ってきた。

「あ、ユルゲンスさん、どんな様子だった？」

「あの場で助かったのは、私達だけだったよ」

「そんな……」

あの場に居たのが全員で何人居たのかは分からないけど、それでも結構な人が亡くなってしまっただろう。

アルクノア……何でこんな事が出来るんだよ……！

「それと……決勝は明後日以降に持ち越しになった」

「中止じゃないんですか！？」

ジュードが叫んで問い掛けた。

「大会執行部でもずいぶんともめたみたいだけど、10年に一度の

大会だからと……」

そう、だよな……。確かに人が死んで、祭りとか言ってる場合じゃないだろうけど、この街にとって10年に一度の大事な祭り事だ。開催したいと言う気持ちは分からないでもない。

「アルヴィンさんは、まだ戻ってないのか？」

ユルゲンスさんがそう言って、俺も今更気が付いた。

あの時、慌てたように走ってったけど、どうしたんだろうか？

アルクノアに狙われたりしてないよな？

ローエンが頷いて答えると、「詳細が決まったらまた来るよ」と言って、ユルゲンスさんは退室して行った。

「大会、辞退した方がよくない？」

「あ、あの……わたしもそう思います」

レイアとエリーゼがそう言って、ミラが腕を組んで悩みだした。

「もう今日は休みませんか？ 色々あってお疲れでしょう」

「うん、そうだね」

重苦しい空気の中、取りあえず今日は解散となった。

* * * * *

翌朝、アルヴィンはまだ戻っていなかった。それどころか、ミラの姿まで居なくなっていた。

泣きそうになっているエリーゼの頭を撫でてロビーで待っていると、2人を捜しに行っていたジュード達が来た。

「どこに行っただよ、こんな時に」

アルヴィンも、無事ならさっさと戻って来いよ。余計に心配になるだろ。

「従業員の話では、ミラさんは朝早くに1人で出て行ったそうです」
「昨日の様子じゃ、1人で無茶はしないと思うけど」

ローエンとレイアがそう言うけど、

「ミラだしな……」

「……です」

「心配だよね」

「ま、こんな所で話し込んでないで、みんなで探しに行こうぜ」

と俺が促して、みんなで捜す事になった。

宿屋を出てすぐの露店で、イスラさんを見つけた。レイアが挨拶すると、こちらに歩いてきた。

「昨日は大変だったわね。でも、あなた達は運がいいわ」

「運が良かったっても、人が死んでますけどね……」

「ごめんなさい、失言だったわ」

済まなそうにそう言った。

「あの……ミラ、見ませんでしたか？」

珍しく、エリーゼがそう言っていた。人見知り気味なエリーゼが自発的に人に話しかけるなんて、成長したなあ……。

「あら、あなたときちんとお話するのは初めてね。ミラさん、一緒にじゃないの？」

イスラさんは、近付いてエリーゼと目線を合わせる。

「1人でどっか行っちゃったみたいで……」

エリーゼが小さく頷いて、レイアがそう言う。

イスラさんがエリーゼに視線を戻すと、「前にどこかで……」と呟いた。

「もしかしてイスラさん、エリーゼの事知ってるんですか？」

「エリーゼ……？」

気になってそう聞いてみると、突然イスラさんが身体を仰け反らしてエリーゼから離れた。

「イスラさん？」

「い、いえ……違うのよ。その……私、ちょっと用事があるから、これで失礼するわね」

慌てた様子でそのまま去って行ってしまった。

「どうしたんだろうね？」

「ああ……せっかくエリーゼの事、何か分かるかもって思ったんだけどな……」

ま、イスラさんは何か知ってそうだし、また今度聞いてみよう。
アルクノアに不意を突かれていたら大変だから、俺達はまたミラ達を捜し始めた。

橋の所まで行くと、向こう側からミラとアルヴィンが来るのが分かった。

「ミラ！ アルヴィン！」

2人を発見したジュードが、名前を呼びながら走り出して、俺達も後を追う。

「どこ行ってたの？ 心配したんだからね」

「ああ……すまない」

珍しく怒ったジュードに、ミラも少し驚いている様子だった。

「アルヴィンもだ。1人で勝手にどこか行って。心配したんだからな」

「心配してくれてたんだ？ お優しい事で」

「アルヴィン！」

「そんな怒んなくて。それよりも、エリーゼが何か言いたそうにしてるぜ？」

アルヴィンに言われてエリーゼを見ると、妙にそわそわしていた。

「あの……イスラさんが……わたしのこと、何か知ってるのかも……」

「イスラが……？」

ミラは不思議そうな表情した。

「エリーゼをまじまじと見た後……顔色変わってたから」

「でも、逃げるみたいにすぐにどっか行っちゃったんだー」

「ま、それは後で直接本人に聞いてみようぜ。な、エリーゼ」

「はい、そうします……」

エリーゼとそんな約束をした瞬間、闘技場の方から鐘の音が鳴り響いてきた。

「これって……闘技大会が始まる鐘……？」

どういう事だ？ ユルゲンスさんの話だと、決勝戦は明日以降に持ち越しの筈だ。

……何かの罠って、そんな可能性もあるかな。

「あんたたち、闘技場へ急いだ方がいいんじゃないの？」

「鐘が鳴ったら、大会が始まるのよー」

俺達がじっとしていると、近くに居た街の人がそう言うてきた。

「延期になったんじゃないのか……」

街の人がこう言ってる訳だし。

「もしかして、早く行かないと失格になっちゃったり？」

昨日は反対していたレイアが、慌てて言った。

「いいのか？ 大会の辞退を考えていたのだろう？」

「迷いながらもやってみるのが人間、そう言ってくださったではないですか」

「そもそも、優勝しないとイル・ファンに行けないだろ。約束したんだし」

「うむ、そう言えばそうだったな」

忘れてたんだ、ミラさん……。

とりあえず闘技場に行こうと言う事になったけど、ジュードはその直前に街の人に何かを聞いていた。

「あの、どうして僕達が参加者だって分かったんですか？」

「この時期に、よその街の人が集まっていたらそれは参加者が観客に間違いないよ」

「そんなのここじゃジョーシキよ」

常識ですか……。

と言うか、何でジュードはそんな事を聞いたんだ？

街の人が去っても、ジュードは何か悩むようにしていた。

「どうしたの？」

「ごめん、何か頭に引っかけただけ……」

レイアが尋ねると、ジュードがまだ納得してない感じで答えた。

さっきの会話のどこにそんな引つかかる所があつたんだ？
そんなジュードに引つかかりながら、俺達は闘技場へと急いだ。

* * * * *

闘技場に着くと、ユルゲンスさん達が居た。彼らもいきなり鳴つた鐘に戸惑っているみたいだ。

「来てくれて助かった！ 執行部が急遽決勝戦を行うと言い始めたんだ」

「それに突然、前王時代のルールに戻すなんてことも言い出している」

その言葉にみんなが驚いていた。
さっきの鐘で決勝戦があるかもしれない。とは思っていたけど、まさかルールまで変更とは……。

「前王時代のルールって……まさか!？」

「前に話した、相手が死ぬまで戦うというものだ。言ってなかったかもしれないが、その上、この戦いは1対1で行われるんだ」

サシで勝負。……って事にはならなさそうだな。

「どうする、ミラ？」

「明らかに怪しいよな、これは」

「うむ……ワイバーンは必要だ。辞めるつもりはない。が、解せん
な」

「何故前王時代のルールで行うことに……」

「止めとけよ」

いきなりアルヴィンがそう言った。

「こいつは、おたくの命を狙ったアルクノアの作戦だ」

「アルクノアの……」

「あつれー？　なんでアルヴィン君がしってんのー？」

ティポが聞くと、アルヴィンはバツが悪そうに後ろを向いた。

いいのか、とミラが問い掛けると、アルヴィンは「さっきの礼だよ」と呟いた。

2人の間に、何があつたんだ？

「アルヴィンは……アルクノアと関係している」

「えっ……嘘でしょ！？」

「悪いな、仕事頼まれたりしてたんだわ」

「マジか……」

驚きすぎて、よく分からなくなってきた。

「で、でも……何かワケがあつたんだよな？」

「……まあ、そんなトコだよ」

少しの間があつて、アルヴィンが答えた。

ちゃんと答えてくれてもいいじゃないか。仲間なのに……。

俯いてそんな事を思っていると、ぎゅっとエリーゼが手を握って

きた。

驚いてエリーゼを見ると、不安そうにしていたけど、すぐに笑顔になった。

……また泣かせる訳にはいかないよな。ちゃんとしないと。そういう決意も込めながら、手を軽く握りしめる。

「アルヴィン……まさか今回の事件……」

顔を上げると、ジュードが昨日の事件を聞いていた。

「あれはオレじゃない。オレだって食ってたら死んでた所だったんだ。だから犯人もしらない。仕事つつても、小間使いにされてただけだしな。そう言えば、カイトも食ってたのに何で大丈夫なんだ？」

「え……俺は毒じゃなくて睡眠薬だったんだ」

「何でまた……」

やっぱり、アルヴィンは仕方なくアルクノアに居るだけみたいだ。良かった。

「なら、アルクノアの仕事はもうしないって約束してくれる？」

「わかった。誓うよ」

ほとんど即答に近い速さで、アルヴィンが頷いた。ジュードは良かったと呟いている。

「アルクノアの作戦は分かるのですか？」

「あ、ああ……オレが聞いた話じゃ……奴ら、決勝のルールを変えてミラを殺す気だ。勝ったとしても、疲労困憊になったおたくを客席から狙い撃つ二段構えだよ」

無差別に殺した奴らだからどんな作戦かと思ったら……前者は合法的に、後者は奥の手って感じだな。

でも、気のせいかなだらけだぞ、この作戦。ミラも同じ事を思ったのか、鼻で笑って「私が出なければ簡単に挫ける」と言った。

ミラの言葉を聞いて、みんなが安堵の表情を浮かべた。

「だが……このくだらん罠にはまってやろう。奴らを引きずり出してやる」

「おいっ！ 正気かよ？ 何で……」

一番最初に反応したのはアルヴィンだった。

「危険すぎます！ 命を懸けるなど、今回ばかりは賛成しかねます」

「そうだよ！ 止めた方がいいって、ミラ！」

続けてローエンとレイアがミラを説得する。

「ミラ君が死んじゃうー！」

エリーゼが頷き、ティポがそう言った。

みんな反対してる。当然俺も反対だ。ミラが危険つてのもあるし、何よりも他に嫌な予感がするからだ。

でも、アルクノアをあぶり出すには今しかないかもしれない。

「ジュードはそうは思っていないようだぞ」

みんながジュードに視線を移す。いつもの思案ポーズで何かを考えていた。

「ミラを狙って客席に現れたアルクノアを僕達に止めてほしい……
そういう事でしょ？」

俺も考えはしたけど、街に溶け込むような連中を見つけられるのか。それが心配だった。

「普通ならいつ出てくるか分からないけど、今ならおびき出せる。理にはなってるよね」

「今ここで手を打っておかないと、次の手を考える時間を与えてしまふ。そうすれば、もっと被害が大きくなる可能性も否定できない」

この2人がやる気なら、もう変えられないだろうな。

「分かったよ。俺もこの作戦に乗る」

「カイト!？」

驚愕の声を上げたのは、俺の手を握っていたエリーゼだった。

「ミラは俺達を信じて自分から囷を買って出たんだ。なら、その信頼に応えるのが仲間の義務ってもんだろ」

せっかくあのミラが俺達を頼ってくれるんだしな。

「では、行こうか」

ミラが頷きながらそう言って、決勝戦に臨む事になった。

第19話 闘技大会の陰謀（後書き）

次回は少しオリジナルだと思います。

アルヴィンの名ゼリフ（？）はもちろん入れますよ。

第20話 エリーゼと研究所（前書き）

今回は少しオリジナルが入っています。
そして相変わらず戦いが下手だ……。

第20話 エリーゼと研究所

ミラは闘技場の舞台の方に向かい、俺達は客席で待機しているらしいアルクノアを捜しに、散り散りになって客席に潜り込んだ。

「エリーゼ、出来るだけ離れるなよ？」

「はいっ、分かってます」

「シンパイショーだなー、カイト君はー」

もちろん、俺はエリーゼの近くに居る。嫌な予感つてのもあったし、何よりこんなに人が居る場所に、エリーゼを1人にさせる訳にはいかなかった。

とは言え、決勝戦だから観客の多さは昨日の比じゃないくらいだ。少しでも気を抜いたら、エリーゼ達を見失ってしまいそうだなにより、こんな人数の中、恐らく数人だろうアルクノアの連中を捜し出せるのか？

『最初に登場したのは、キタル族代表だ！』

アナウンスが入り、俺は無意識に舞台を見た。ちょうどミラが出てきた所だった。その後すぐに、向かい側からアルクノアだろう対戦相手が現れた。

「ミラ……大丈夫でしょうか？」

「心配ないって。ミラなら上手くやるだろうしさ。それよりも、俺達が頑張らないと被害が大きくなる」

「……ですよね」

あ、しまった。プレッシャーになる事を言ってしまった。

「そうならないように、みんなも頑張るんだからさ。俺達も頑張ろうぜ」

今度はこくこくと小さく頷くだけだった。

仕方なく、俺は舞台に視線を動かした。

『昨日、不幸な事故がありました。大会執行部の努力により、今日の決勝戦が実現しました！その上で、今年の決勝戦は公平に行うため、過去の慣例にならない、前王時代のルールとなります』

おいおい……公正に行うために殺しを可にするなよ……。どうなってるんだよ、大会執行部は？

「あ……待つて……」

「え……？」

騒がしいほどの歓声に紛れて、エリーゼの声が小さく聞こえた。再びエリーゼに視線を戻した時には、もうエリーゼの姿は見当たらなかった。

「！？……しまったッ！？」

とつさに辺りを見回すけど、エリーゼらしき人影は見当たらない。すぐに捜そうとしても、人が邪魔で上手く走れない。

何やってんだよ俺は！ちゃんと守るって言ったのに……いや、今はそうやって腹を立ててる余裕は無い。早く見つけないと！

ようやく上手く身動きが出来るようになった瞬間、舞台から爆発音が聞こえてきて、不意に動きが止まってその方向を見てしまう。舞台では、対戦相手が何かの兵器を持って、電撃を放っていた。

ミラは避けると、地面が爆ぜていた。

「なんて威力だよ……あれが、黒匣^{ジン}……？」

「何、や、やめて！ 返して！」

エリーゼの叫ぶ声が聞こえて探すと、見知らぬ男性がティポをひたたくろうとしていた。エリーゼはティポを手放さないように必死で引っ張っている。

「エリーゼ！」

伸ばされながらもティポも叫ぶが、相手は大人の2人掛かりだ。とてもエリーゼみたいなお女の子が勝てる相手じゃない。

くそっ！ 何で俺はエリーゼから目を離してしまったんだよ！ ついにエリーゼが男性に押されて、ティポから手を離して倒れてしまった。

「どうした？」

舞台の方からミラがそう叫んだ。

「……っ」

「ティポがさらわれたの！ エリーゼもそれを追って！」

俺が答えられないでいると、レイアが代わりに言っていた。

舞台では爆発音がさらに増していたけど、それを気にしている余裕がなかった。

ようやく、よろよろと力なく立ち上がったエリーゼに追いついた。

「エリーゼ、大丈夫か！？」

「ティポが……ティポが……！」

泣きじゃくるエリーゼを落ち着かせようと頭を撫でるけど、一向に泣きやまない。

どうすれば……いや、ティポを取り戻すのが先決だよな。

「カイト！」

あまりの事態に混乱していると、ミラが俺を呼んだ。

「ティポは任せた！」

ミラに言われてハツとした。

「言われなくても分かってる！」

そう叫び返して、エリーゼを抱きあげる。

「エリーゼ、今からお前の友達を取り戻しに行くぞ！」

まだ泣いていて何も言わなかったけど、小さく頷いたのが分かった。

「アルヴィン！」

ミラが今度はアルヴィンの名前を叫んでいた。

「奴らの狙いはお前じゃない、きっと初めからティポだったんだ！」

走りながらアルヴィンの言葉を聞いて、俺は驚愕していた。

初めからティポだったって!? 何で……。

「客席から狙ってる奴なんてのも、居なかったんだ! オレは知らなかった!」

アルヴィンはアルクノアの小間使いとか言ってたから……本当の作戦を知らされていなかった?

「2人の事、お前に任せる!」

ミラのそんな叫びが聞こえてきた。

2人と言うのは、俺とエリーゼの事だろう。アルヴィンが居てくれれば心強い。

「お前しかフォローできる奴は居ない! 頼んだぞ!」

「……どうなっても知らないぜ!」

アルヴィンが叫び返して、こっちに走ってきた。

「まだ遠くには行ってない筈だ。さっさと取り返そうぜ!」

まだ泣いているエリーゼを抱え直して、俺達は闘技場から出た。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

無我夢中で追いかけた結果、俺達はシャン・ドウの近くにある王の狩場とよばれる場所を抜けて、リーベリー岩孔という場所に着いた。

着いてすぐに、抱えていたエリーゼが俺のネクタイを軽く引つ張った。

「どうした？」

「もう、大丈夫だから……降ろしてください……」
「本当か？」

とても大丈夫そうには見えないけど、小さく頷いたエリーゼを、仕方なく降ろした。

自分の足で立ったエリーゼは辺りを見回して、突然俯いた。

「どうした？」

「なんでも……ないです……」

エリーゼの様子心配だけど、ティポを取り戻せば大丈夫だよな。

「ちっ……あいつら、どこ行きやがった!？」

「居た! あそこだ!」

つり橋を渡っている姿が視界に飛び込んできて、俺はすぐに剣を抜いて弓に変形させる。

「絶対に逃がさないからな!」

「落ち付け」

矢をマナで作りに出していると、アルヴィンが止めに入ってきた。

「なんだよ！ 早くしないとティポが！」

「そのティポも巻き込みたいのか！？」

「ッ！？」

「今撃てば確実に仕留められるだろうが、つり橋まで落ちるぞ。いつもならそれぐらい分かんذار？ それに、どんな理由であれ人を殺そうとするなんて、カイトらしくない」

確かに……頭に血が上り過ぎていた……。そんな簡単な事も、人を殺してしまう事も、何一つ理解が出来てなかった。

「そんなだと、エリーゼが不安になるだろ？」

「……エリーゼ……？」

振り返ってエリーゼを見ると、少し怯えたようにしていた。

……俺、またエリーゼを泣かせる所だったな。

「ごめん、エリーゼ……。でも、もう大丈夫だから、怖がらないで……よかったです……いつものカイトで……」

ようやく安心した表情になって、でもすぐに表情は暗くなった。

それだけ、ティポの存在はエリーゼにとって大きかったんだろうな。

俺はエリーゼの頭を撫でてから、気を入れ直す。

「よし、行こう、アルヴィン」

「ああ」

リーベリー岩孔の下層部の部屋のような所に、ティポをさらった

連中が向かったのを見て、俺達はすぐにそこに向かった。

扉を開け放つと、中に居たのはティポをさらった連中と、闘技場でミラの対戦相手が持っていた武器と同じ物を持った兵士が居た。

俺達が来た事に特に慌てる様子も無く、誰かがふつ、と鼻で笑った。

「ようやく来たか。ニシカザカイト」

「え……？」

前に出てきた1人の兵士がそう言った。
何で……こいつら、俺の名前を……？

「こいつに用があつたが、やはりお前も釣れたな」
「ティポ！？」

兵士が手に持っていたのは、ただのぬいぐるみになったかのように静かなティポだった。

俺を釣った？ 何のために？
いや、今はそんな事どうだっていい。

「ティポに何をした！」
「データを抜いただけだ。もう用は無い」

そう言つて、兵士がティポを投げ捨てた。エリーゼが声にならない悲鳴を上げる。

「……アルヴィン、俺、もう我慢の限界だ……」

「そうだな。こいつらの目的も意味分かんねえし、これ以上はお前と姫が心配だからな」

「サンキュ……」

短く礼を言ってから、俺は駆けだした。

刹那、兵器　おそらくは黒匣だろう　から電撃が放たれた。

紙一重で避けて兵士の懐に入る。

「せんこうが穿光牙！」

引いていた剣に光を集中させ、突き出すのと同時に開放する。光は刃となって、黒匣を貫いた。

「こいつっ！？」

「崩雷殺ッ！」

「があああ！？」

囲まれそうになり、まだ剣に残るマナを雷に変換し、地面に突き立てる。すると、俺の周りを電撃が走った。

周りの敵を倒して　おそらくまだ息はある　から、俺はティ

ポを拾う。

データを抜き取ったって言ったけど、何で動かなくなっただよ
……。

「カイト！　敵が逃げるぞ！」

さっき倒したと思っていた奴らが起き上がっていて、部屋の外に行こうとしていた。

まだ抜き取られたデータを取り戻してない。追いかけないと！

「ぐあっ！？」

そう思っていると、アルヴィンが敵の電撃を喰らってしまったてい

た。

「このっ……かむいどり神射鷄ッ！」

弓に変形させて、瞬時に溜めたマナを兵士に撃ち出した。吹き飛んで壁に激突する。

「アルヴィン、大丈夫か？」

「っ……オレはいいから、早く逃げた奴を追え！」

壁に背を預けていたアルヴィンに駆け寄ると、そう言われた。

「エリーゼはオレに任せろ……」

「……ああ、分かった！」

ひとまずアルヴィンから離れて、エリーゼの所に向かう。

「エリーゼ、必ずティポを元に戻すからな」

「……はい……」

動かなくなったティポを手渡すと、ぎゅっと抱きしめた。

そんなエリーゼを撫でて、俺は逃げた兵士を追いかける為に外に出た。

相手は手負いの状態だったから、あまり遠くには行けない筈だ。その予想は正しく、1つ下 最下層に姿を見つけた。崖を飛び降りるようにして最下層に行く。

「お前、ティポから抜き取った物を返せ！」

「そんなにこれが欲しいのか？ ふん……どうせこれはもう用済みだ。好きにしろ」

と、いきなり投げて渡してきた。これが本物かどうかは分からないけど、とりあえず受け取っておく。

「ただし……生きて帰れたらの話だな」
「！？」

今ほどテンプレが恐ろしいと思った事は無かった。
崖の上に、黒匣を持った兵士が5人ほどいた。

「抵抗しなければ命だけは助けてやろう、異世界人」
「なっ……！？」

何で俺が異世界から来た事を知ってるんだ！？
いや……それよりもまず……この状況をどうにかしないと……。

「……悪いけど、俺はあんたらと仲良くする気は無いよ。喰らいな、ヴォルテクライン！ グラスニードル！」

黒匣を構えている兵士に、電撃の矢を放ち黒匣を壊す。続けて複数の氷の矢を放射状に撃ち出し、他の3人の黒匣を破壊できた。

けど、1人だけ当たらずに、黒匣が放電を開始しようとしていた。今から撃つんじゃない。そう思って目を閉じた瞬間、短い悲鳴が聞こえた。

おそろおそろ目を開くと、俺を撃とうとしていた兵士が、ジュードに殴り飛ばされていた。

「大丈夫……みたいだね？」

「ジュード！？ 何でここに……」

予想外のジュードの登場に驚いていると、後からミラ、ローエン、レイアが現れた。

「無事のような？」

「心配しましたよ？」

「良かった、元気そうで」

「みんなも、何で？ って、驚いてる場合じゃなかった」

俺は辺りを見回して、深手を負った兵士を捜す。だけど、何故かそいつの姿は見当たらなかった。

「早く、アルヴィン達の所に行こう？」

「あ、ああ……そうだな」

何で俺の事を知っているのか聞きたかったけど、今はエリーゼとアルヴィンが心配だ。

俺はみんなを連れて、2人の居る部屋に戻った。

2人の居る部屋に戻ると、エリーゼが地べたに座って泣いていて、アルヴィンが壁に背を預けていた。

ジュードがすぐに怪我だらけのアルヴィンに駆け寄り、治療を始めた。

俺はエリーゼに近付く。

「エリーゼ、無事か？」

「……………」

「ティポ、どうしたの……？」

力無く横たわるティポを見て、レイアが呟いた。

俺はティポを手に取り、データが抜き取られた場所を探した。すると、口の中の上の部分に、ほつれが見つかった。そこに基盤のよなものが見えた。

……これか？ とりあえず、一か八か、やってみるしかないだろ。

「戻ってこいよティポ……お前が居ないと、みんなが……エリーゼが悲しむだろーが！」

カチリ、とはまった音がした。

刹那、

「うわーん！ こわかったよー！」

「ふがつ！？」

いきなり動き出したティポに顔面をかじられた。

「ティポ！」

「うわっ！？ いきなり動いたよー！」

「ひほ、ほはっはほ（訳：ティポ、良かったよ）」

ああ……本当に。本当に良かった。

俺の顔から離れたティポは、エリーゼの腕の中でぎゅうっと抱きしめられた。

「ふう……何とか一段落か……」

「アルクノアの連中はどうした？」

やっと一安心かなあ。とか思ったら、ミラがそう問い掛けていた。

「アルクノアなら、オレとカイトで倒したよ……」

立ち上がったアルヴィンがそう答える。ミラは良くやったと言いながら、落ちていた黒匣を踏んで壊した。

「ここに長居は無用です。皆さん、早くシャン・ドウに戻りましょう」

「そうだね。アルヴィンもエリーゼも、カイトも休まないと」

ローエンとジュードに促されるまま、俺達はシャン・ドウに向かった。

その帰り、魔物に囲まれてどうしようかと悩んでいると、頭上から声がしたと思ったら人が降ってきた。

地響きに驚いてると、降ってきた人は「済まないな。密猟者を追っていたのでな」と言ってきた。

とか思ってたなら、降って来たのって、いつぞや俺をポッコボコにしてくれたジャオ!?

「ジャオ……!」

その人物に気が付いたミラも、驚きながら自分の剣の柄に手をそえる。いつでも抜く事が出来るように。

「お前さん達がどうして!?!」

俺達がここに居るのが予想外だったのか、ジャオも驚いていた。

なら、エリーゼを連れ戻しに、って話は関係なさそうだ。

「娘っ子。とうとうこの場所に来てしまったのじゃな。覚えているだろう」

だけど、ジャオはエリーゼにそんな事を言っていた。

「エリーゼ……この場所、知ってたのか？」
「……………」

問い掛けてみても、エリーゼは俯いて黙ったままだ。
やっとさっき笑ってくれたのに、またか……。

「ここはお嬢ちゃんの育った研究所だったんだよ」
「え…………？」

俺の問いに答えたのは、意外にもアルヴィンだった。
そう言えば、前にシャン・ドウの橋の所で、ティポは研究所の人から貰ったって、そう言っていた。……じゃあ、ここがその研究所？

「以前、侵入者を許してしまつての。その時、この場所は放棄されたのだ」

「侵入者はお前だったのだろう？」

と、ミラがアルヴィンに問い掛けた。
アルヴィンは諦めた様子で答える。

「いい勘してんな……ああそうだよ。
増霊極^{ブースター}についての調査だったんだ」

「なんと……お前さんじゃったのか」

侵入者がアルヴィンだった事に、ジャオは驚きを隠せないようだった。

「増霊極つて、何なの？」

「ア・ジュールが開発した、ゲート霊力野から分泌されるマナを増大させる装置だよ」

「そんなものがあつたのか……」

「ああ、ティポがそうだ。第三世代らしいがな」

アルヴィンの言葉に、エリーゼとティポ本人も驚いていた。でも、そう言われると納得はできる。エリーゼみたいな幼い子が強力な治癒術を使っていたんだからな。

「そうだったんですか……ティポ……？」

「うーん……そうなのかも？」

本人は分かってないみたいだけど。

「ティポはエリーゼの心に反応し、持ち主の考えを言葉にするのじや」

「それじゃ、ティポはエリーゼの考えを喋ってたの？」

そうになると、今までのティポの発言はエリーゼの本心？

「ウソです！ ティポはティポが喋っていたんです！」

そう叫んで、「ね、ティポ？」と聞いて、「分かんない」とティポが答えた。

そして、「でも……」と続ける。

「エリーの考えはいつも分かってたよー？ エリーの知りたい事とかねー」

そう言つて、ティポはジャオの目の前に飛んで行った。

「おつきいおじさんー。エリーのお父さんとお母さんはどこにいるのー？」

「ティポ！」

確かに、ジャオは前にエリーゼが前に居た場所　つまりこの事を知っていたから、両親の事も心当たりがあるかもしれないけど……なんで今その話を！？

「それはの……」

ジャオの表情が曇った。それだけで、話の内容が良くない事だつてのが分かる。

「……もう、この世にはおらぬ」

ジャオの言葉が信じられないのか、ただ言葉を失っていた。

「お前が4つの時、野盗に遭い、殺されたのじゃ……」

「……もう、会えないんですね。……お父さんにも、お母さんにも……」

あまりのショックで、エリーゼは顔を俯かせたまま、そう呟いた。

「エリーゼ……」

「気を落とさないで……」

ジュードとレイアが言つて、俺はなんて声を掛ければいいのか分からずに、頭を撫でる事しかできなかった。
けど、エリーゼは俺の手を払って叫んだ。

「ジュードやレイア、カイトにはちゃんと居るじゃないですか！
家族が……！」

「！？」

「そんな人達にエリーの気持ち分かるもんかー」

俺が2人の言葉に言葉を失っている間に、2人は走って行ってしまった。

俺は足が、まるで杭に打たれたように、足が動かずに、手を伸ばすだけだった。

「エリーゼ、待って！」

動けない俺の代わりに、レイアがエリーゼ達を追いかけた。
その直後、バンッ！ と銃声が聞こえた。

「くっ、密猟者どもめ！」

先程の銃声は密猟者によるものらしく、ジャオはその方向に走って行こうとした。

そんなジャオに、ミラがどうしてここにエリーゼが居たのかを問い掛ける。

「うむ……連れてこられた。売られたようなものだ」
「売ら、れた……？」

親が殺されて……そんな事まで……！？

「娘っ子のような孤児を見つけては研究所に連れてきた女に……名は……」

「まさか……イスラ……？」

「おお。確かそんな名であった」

イスラって……。ジュードが言った名前の人物は、心当たりは1人しか居ない。

でも……そんな事をするようには見えなかった。

「……小僧」

いきなりジャオに呼ばれて、俺はジャオを見た。

「……わしが言えた義理ではないが、頼む。あの娘っ子を、これ以上1人にせんでやってくれ」

「え……」

「1人で力の差があり過ぎたわしに立ち向かい、ボロボロになりながらもエリーゼを守ったお前なら、任せられる」

俺が何も言えずにいる間に、ジャオは去って行った。

「カイト、大丈夫？」

「……ちつと、堪えたな……」

エリーゼが言った、カイトには家族が居るって言葉に。

そんな人にはエリーゼの気持ちは分からないと言ったティポの言葉にも、グサツときた。

だって俺も……父さんや母さん……家族が居ないから……。だから、エリーゼの気持ちも少しぐらいは分かって上げられるって、そう……思ったんだ……。

その後、エリーゼとティポを見ていたレイアと合流して、ひとまずシャン・ドウに帰る事になった。

第20話 エリーゼと研究所（後書き）

原作とは違いティポはそのままになっています。が、どのみちエリーゼは少し黒くなってしまうようです……。

そう言えばカイトの事をあまり掘り下げていなかった気がしたので、今回最後に少しだけ書いてみました。

第21話 不穏な空気

みんなが心身共に疲労状態だったから、魔物との戦闘は極力避けながら、ようやくシャン・ドウに着いた。

あれから、エリーゼは誰とも口を利こうとしない。ティポを抱き締めて、1人でみんなから少し離れた所に居た。

さすがにエリーゼを最後尾にする訳にはいかなかったから、俺が後ろに付いてるんだけど、……俺も避けられているようで、少しでも近付くとすぐに距離をとられてしまう。

……やっぱり、あの時ちゃんと話をしておけばよかった……。

「何か気掛かりな事でもあるのか、ジュード？」

街に着いてすぐ、何か考え事をしていたジュードにミラが問い掛けた。

「ジャオの話を聞いてから、様子が変だぞ？」

「……うん。でも、様子が変なのは、僕よりもカイトの方だと思うよ」

ジュードが言うと、みんなが俺に視線を集中させる。エリーゼは俺を一瞥しただけで、すぐに視線を外した。

「だ、大丈夫だって。何にも無いからさ」

と言つても、みんな納得はしてなさそうだ。

うあ……どうにかしないとなあ……。

そんな話をしていると、向こうからイスラさんが走ってきた。俺は思わず息を呑んでいた。ジャオの話が脳裏を過ぎる。

本当に……この人がエリーゼを……？

「犯人を追って王の狩り場へ行ったと聞いて、心配していたのよ」

イスラさんが何食わぬ顔で言ってきて、思わず憤りを感じた。

「色々あったけど、とりあえずは無事、かな」

「偶然とはいえ、あなた達を巻き込んでしまって、ごめんなさい」

イスラさんが謝ったけど……俺はそれを上の空で聞いていた。

「イスラさん……それ、嘘ですよね？」

ジュードの言葉に、イスラさんはもちろん俺達も驚いていた。

何でジュードがそんな事を言い出したのか分からないけど、イスラさんは明らかに慌てていた。

「な、何？ 私が心配したら変かしら？」

「そうだよジュード。どうしちゃったの？」

いきなりの発言に驚いていたレイアが尋ねると、ジュードは考えながら口を開く。

「イスラさんが僕達と知り合ったのは、偶然じゃないんだよ。決勝を知らせる鐘が鳴った時、街の人に言われたでしょ。この時期によその人間が集まっていたら、それは闘技大会の参加者が観客しかないって」

「確かに言ってたけど、それが何だって……」

呟いたその瞬間、思い出した。

この街で初めてイスラさんに会った時、彼女は俺達に、『何をしに来たのか』を聞いてきた。街の人間なら、聞かなくても分かる事を。

「私達がイスラに助けられた、あの時か……」

「そう。きっと言わないよね、あんな事。僕達に近付くように言われたんでしょ……アルクノアに……」

アルクノアと言う単語が出た瞬間、イスラさんの身体が震えた。

「イスラさん……嘘だよな……？」

「レイア……」

さすがのように問い掛けたレイアだけど、それはもう、イスラさんには届いていなかった。

「あの人達……ばれないから……平気だって言ったのに……でも、私だってあの人達に……」

「脅されてたんだよね……弱みがあったから……」

「昔の仕事ですか……」

ローエンの呟きを聞いて、反射的にエリーゼを見てしまった。

ずっとそっぽを向いて、今のこの話を聞いているのかも分からなかった。

「ユルゲンスにばらされたいのかって……この子には済まないと思ってる！　だけど、あの時は私だって……！」

叫んでから、イスラさんが地面に膝を着いて頭を下げた。

「お願い！ 彼には黙っていて！」

「……ユルゲンスは知らないのか？」

「言える訳無いじゃない！ ユルゲンスはとても純粋な人なのよ……」

イスラさんがどれだけユルゲンスさんを好いているのか……そういうのが伝わってきた。

けど……だからと言って頷きたくはない。

「何故話さないんだ？ 既に過ぎた事だろう」

「あなたも女なら分かるでしょ！？ こんな醜い女を彼が愛してくれるわけない！」

断言した……？ この人……何でユルゲンスさんを信じてあげないんだ？

「あのことを知られたら……私は捨てられる。私は幸せになりたいだけなの。お願い……彼には言わないで……ください」

イスラさんが地面に頭を着けて、そんな事を言った。

俺はもう、自分の意思とは無関係に身体が動いていた。

土下座をしているイスラさんに近付くと、彼女は顔を上げた。その瞬間、俺は胸ぐらを掴んで立ち上がらせた。

そして、叫ぶ。

「自分だけが不幸だと思うなああっ！！」

「な、何を……」

「両親も居ないですと独りで、あんたに無理やり連れてかれたエリーゼの気持ちを、少しでも考えた事があるか！？」

「そ、それは……」

「少しでも罪悪感があるなら、謝る前に罪を償おうとしろよッ！」
「どう、やって……」

「そんな事、自分で考えろ！ 1人で無理なら、あんたには頼れる人が居るだろ……」

叫んで喉が痛くなってきた、だんだん声に覇気がなくなってきた。

「ユルゲンスに話せって言うの！？ そんなの無理」

「ユルゲンスさんを信じてやれよ！ 愛すとかそんなのの前に！」
「でも……」

「なら、ずっと独りで苦しんでろよ！ そんな気持ちで幸せになるうとか言ってるな！」

これ以上言っても無駄だろうと思い、イスラさんから手を離して、俺は橋の方に向かった。

橋まで歩いて、そこでみんなを置いて来てしまった事に気付いた。叫び過ぎて痛む喉に手を当てながら、みんなが来るのを待つ。

……結局、エリーゼの事は何も解決になってない。イスラさんが何かしたからって、解決になるとは思えないけど。

「カイト君、先行っちゃわないでよね？」

「う、ごめん……」

レイアが怒ったように言ってきた、すぐに謝った。

「カイトがあんなに叫ぶのは、初めて見た気がするな？」

「ですね。カイトさんはエリーゼさんの事になると、まるで人が変わったようになる時がありますし」

「え……そ、そうか？」

まあ……普段あんまり大きい声は出さないから、叫んで喉が痛いけど……。人は変わらないと思う。

エリーゼを見ると、一瞬目が合ったと思ったたらすぐに逸らされた。ああ……これ結構ツライなあ……。

「何か、声変だけど大丈夫？」

「大丈夫……とは思うけど、後で時間あったら診てくれないか、ジュード先生？」

「分かったよ。宿屋でね」

知り合いに医者が居て助かったなあ。

って、そっぴや鞆の中にのど飴あった気がする。後で舐めよう。

「悪い、オレちよつと寄るところあるから」

「分かった。みんなで行こう」

アルヴィンが単独行動しようとする、ミラがそう言った。まだ疑ってたりするのか？

「おいおい、ワイバーンはいいいのかよ？」

「ワイバーンなら後でユルゲンスに聞けばいいだろう？」

「……分かったよ。付いて来たけりや付いて来い」

そんな訳で、アルヴィンの用事に付き合っただけ向かった先は、一軒の家だった。

中に入ると、女性が1人ベッドに横になっていた。

「この人……まさかアルヴィンの……？」

「ああ、オレのお袋。ちよつと具合が悪くてな」

ちよつと悪い訳じゃないだろう。寝たきりみたいだし。

「父親も兄弟も居ないから、オレが居ない間、イスラに看てもらつてたんだ」

そついや……レイアがそんな事を言っていた気がする。
不意にアルヴィンの母親が目を覚まし、ジュードを見た。

「 balan じゃない。また家を抜け出して遊びに来たのね。せつかく balan が来てくれたのに、アルフレッドたらどこに行ったのかしら？」

今……この人、ジュードを見て balan って言ったのか？ それに、アルフレッドって……アルヴィンの事か？
何かがおかしい。

「この人何言ってるのー？」

ティポが、俺達の気持ちを代弁してくれていた。

「レティシャさん、アルフレッドは幼年学校の寄宿舎じゃないですか？」

「ああ、そうだったわね……」

母親だつて言つてたのに、アルヴィンは他人行儀な話し方だった。

「あの子、きつと泣いてるわ。気が弱くて寂しがり屋だから……」
「大丈夫。元気だつて手紙が届いてます」

「ええ、休暇には帰って来るんですって。大きな船で旅をする約束をしたのよ」

「……アルフレドも楽しみにしてましたよ」

「ふふ……あの子、手紙でね、私が泣いてないか心配してるのよ。おかしいでしょう？ でも、とっても優しい子なの……」

話すだけ話して、母親　レティシャさんは眠りについた。

「若い頃に故郷を離れて苦労したんだ。親父も死んじまってさ。親父と暮らした家に帰りたいって、そればかり言ってた……」

何て声を掛ければいいのか分からずにいると、アルヴィンが話していた。

「こんなになっちまったけど、故郷を思い出さない分、幸せなのかもな」

アルヴィンも、俺も、エリーゼと似た状況だった。だから俺は、何も言えないのか？

自分が分からない事を、気休めで言ってしまいたいそうだから。

「お前は今まで母親のために？」

「そ。ママのために汚れ仕事をこなしてきたんだ。美しい話だろ？」

「そんな言い方……」

「同情はいいって。実際、きれいごとじゃないんだ。たまんないよ、ほんと」

それでも、そんな言い方……母親の為にやっていたんだから。

外に出ると、イスラさんが居た。俺はもう話す事は無いから、視線を外す。

その先にはエリーゼが居て、ずっと俯いたままだった。けど、少し顔を上げて、何かを見ていた。

「……あの人、泣いてますよ……」

「ああ、泣き虫なんだ」

エリーゼの視線を追うと、イスラさんが涙を流していたのが見えた。

それを見ただけで、俺はまた視線を外す。もうあの人とはあんまり関わりたくない。

「……いいの？」

「気になるなら慰めてやれよ。悲劇のヒロインさんを……さ」

「そ、そんな事より、早く行かないか？」

ジュードが何か行動を起こす前に、俺はそんな事を言っていた。

「おっと、少年からそうくるとはな。ま、オレも賛成だけど」

アルヴィンも俺に同意して、すぐにこの場から離れる事になった。

* * * * *

ワイバーンを借りる為にユルゲンスさんを探す俺達は、一度集まって話をしていた。

エリーゼだけ、少し離れた所で腰をおろしている。

「エリーゼ、大丈夫かな……」
「……………」

いつもなら俺が言っている所なのにな……。言われた事を気にしているにしても、エリーゼと話をしようとしてる筈だ。

なのに、俺はそうしない。また拒絶されるのが怖いからか……？
いや……拒絶とは少し違ったけど、結果的にはそう言う事だよ……。

「カイト君も……大丈夫？」
「え、ああ……大丈夫。気にしないでいいよ」

駄目だ……一度考えだすと止まらないな。
どうせ考えるなら、マイナスな事じゃなくてプラスに考えられ
ばいいのに。

「増^{ブラスター}霊極について、少し気に掛かる事があるのですが」

突然ローエンがそう言った。続けて口を開く。

「ナハティガルがガンダラ要塞で行っていた実験……あれは増霊極を使用する為のものだったのではないでしょうか」

「増霊極が既にラ・シュガルにも渡っていると言っのか？」

「そう考えるべきでしょうね」

ミラの問いに、ローエンが即答した。

「増霊極はエリーゼみたいな子供でも魔物と戦えるようになるもの
だろ？ そんなのを両国使って争ったら……」

「ああ、かつてない程の惨事が待っている」

惨事、つて言葉で止まるんだろうか？

「ホントにそんな戦いが始まるの？」

「少なくとも、ナハティガルにはその戦いに踏み切れる理由がある」
「クルスニクの槍だね……」

それがどのくらい危険な物なのかは、実際に見た訳じゃないから
分からないけど……それがある限りは、戦争は起こりうるのか……。

「おお、戻ったのか」

話をしていると、捜そうとしていたユルゲンスさんがあちらから
出向いてくれた。

「イスラから戻った事を聞いたんだ。無事でよかった」

どうやらイスラさんは、俺達が戻ってきた事しか言っていないらし
い。

「あの……いろいろ、すみませんでした……」

「どうしたんだ、いきなり？」

「いえ……何でも……」

大会の事とか、イスラさんの事とか……何となく、謝っておきた

かった。完全に自己満足だし何で謝ったのか正直分からないけど……。

「それより、約束のワイバーンの準備出来てんの？」

アルヴィンが尋ねると、ユルゲンスさんは頷いた。

「ただ、今は戦の雰囲気が高まってるとかで、王の許可なしには空を飛べないんだ。私はこれから首都のカン・バルクへ行つて、王の許可を貰ってくるつもりだ」

戦争が……もうそんなに近いのか……。

「ねえ、ア・ジュール王に戦いが起きたら危ないって事を伝えた方がいいんじゃない？」

「……確かに、評判良いみたいだから、もしかしたら戦争を回避しようとしてくれるかもな……」

まあ、そんな事にはならない気がするけど。

「あたし達と一緒に戦ってくれたりするかもね」

「その戦いつて戦争だぞ!？」

レイアの言葉に反対するように、アルヴィンが言う。

「私も直接会って、研究所の真意を確かめたいと思っていた……」

ミラがそう言うと、アルヴィンは諦めたように頭を掻いた。

「ア・ジュール王に会いたい。すぐカン・バルクとやらに出発する

ぞ」

「あ、ああ。それじゃ、荷物をまとめてくるよ」

ユルゲンスさんが荷物を取りに行った。なんか、主導権が完全にミラにある気がする……。

「ねえ、研究所の真意って？」

「エリーゼが居た研究所って、他にもたくさん子供が連れて来られてたらしいんだ」

「ジャオさんが言ってたの？」

ジュードは頷く。

「ア・ジュール王が民を守る存在なら、私の望む答えを持ち合わせている筈だ。だが、別の答えを持つのであれば、金輪際やめると誓わせる。どんな手を使っても」

……王に脅しとかは洒落にならん気がするけど……。

「うん、そうだね。ガツンと問いただしちゃおう！」

レイアも乗り気だった。

「あ、そうだ。そういえば宿屋に荷物置きっぱなしじゃない？」

「私達が取って来ましょう」

そう言って、ローエンとレイアがエリーゼに近寄る。

すると、まるでエリーゼを守るようにしてティポが浮き上がった。レイアはしゃがんでエリーゼと視線を合わせようとするけど、エリーゼはすぐに俯いて目を逸らした。

立ち上がったレイアはローエンと一緒にエリーゼを立たせて、宿屋に向かった。

「そんじゃ、オレもちよっくら……」

「アルヴィン」

続けてどこかに行こうとしたアルヴィンを、ミラが呼び止めた。

「よくやってくれた。2人を守ってくれると信じていたよ」

それを無視して数歩離れたアルヴィンは、いきなり足を止めてこちらを向いた。

「ぼく、約束したから覚悟決めたんだよー、ママ」

ふざけた様子で言っつて、アルヴィンも去って行った。

……何だったんだろうか、今のは？

よく分からずに、ジュードが笑っているのを見ると、いきなりポケットの中が震えたような気がした。

そう、携帯が入っているポケットが。

ジュードとミラに気付かれないように2人から離れて、携帯を開くと、

「なっ……メール……!？」

慌ててアンテナを確認しても、相変わらず圏外の表示。なら、このメールはいったい何だ!? どうやってこの携帯に受信したんだ!?

疑問は絶えないけど、俺は一番の疑問であるメールを開く事にした。

震える手で開いたメールを開いて、また目を見開いた。

アドレスも件名も書かれていない。本文は、文字化けし過ぎて何が書いてあるのか、推測でも分からなかった。

ただ1つ。

唯一読めて、なおかつ言葉の意味が分かったのは、『みがわり』
と言っ言葉だった。

「身代わり……？ 何が……何の……？」

気持ちの悪い汗が出ていたけど、そんなものを気にしていられる
余裕がなかった。

俺が誰かの身代わりになるって事なのか……？ それとも……他
にそんな人が居るって、そう言う事なのか……？

「みんな来たよ、行こうカイト。って、どうしたの、顔色悪いけど
？」

いきなりジュードに声を掛けられ、俺はとつさに携帯を閉じた。
よくよく考えたら、ジュードは読めないから見られても心配はない
んだけど。

「何でもない。ちょっと喉が痛くてさ。でも大丈夫だから。ほら、
みんなの所戻るんだろ？」

「う、うん……何かあったら、言ってね？」

「ああ。気遣いサンキュな」

出来るだけいつも通りを装ったけど、これ以上に無いほど不自然
になってしまった。けど、ジュードは深く聞いてくる事は無かった。
ホント……ジュードのお人好しには救われるな……。

メールの事は忘れよう。あんなものを信じるのは……怖いから……

…。

みんなの所に行くとき既にみんな集まっていて、俺達は首都カン・バルクに向かう事になった。

第21話 不穏な空気（後書き）

果たしてカイトはエリーゼと和解できるのか？ そして最後のメルは誰が送ったものなのか？

いろいろ謎を残して次回はカン・バルクへ行きます。王は出てくるかな？（汗）

第22話 仲直り（前書き）

王様……でえへんやん……。

第22話 仲直り

シャン・ドウを後にしてユルゲンスさんの案内の下、モン高原という雪原を行く途中、喉の痛みを思い出して鞆からのど飴を取り出した。

何でこんなものが入っているのかというと、ただ飴が好きだからだ。

今まで忘れてたと言っな。

買い置きがこれしかなかったんだけど、良かったなあ。未開封だし。

1つ取り出して口に入れる。ああ……レモン味うまー。何か落ちて着くわ……。

「ねえねえ、何食べてるの？」

飴を口の中で転がしていると、レイアが横から興味津々な感じで言ってきた。

「のど飴だよ」

「のどの……？」

言つと何かを考え始めて、突然驚いたように身体を震わせた。

「いや……何考えてるかだいたい予想は付くけどさ……これだからね」

とレイアの手の上に飴を置いた。

「え、これ？」

「ああ。試しに食べてみるよ。口の中で転がして溶かして食べるんだ。絶対にそのまま飲み込むなよ？」

「う、うん……」

一応念を押して言うと、レイアは意を決して飴を口に入れた。

「ん、結構美味しい？」

「いや、俺に聞かれてもな」

渡したのは俺だけどさ。

「何、美味しい物があるのか？」

「早っ!？」

前を歩いていた筈のミラがいつの間にか目の前に居た。
本当に食に目覚めてんのな……。

「……ミラも食べるか？」

「よく分かんが、食べる」

分からないのに食うんかい。

心の中でツッコミを入れながら、飴玉を手渡した。

「何やってるのさ？」

「ジュードも食べるか？」

「え、じゃあ、貰おうかな」

話の流れと言うか、数はあるからみんなに渡そう。

「はい、ローエンにもやるよ」

「ありがとうございます。これは綺麗な球形ですね」

「おい、オレには無いのかー？」

「分かってるよ、アルヴィン。あ、ユルゲンスさんもどうぞ」

「済まないな」

と、ローエンとアルヴィンとユルゲンスさんに渡した。
後は、

「はい、エリーゼ」

「……………いりません」

渡そうとしたら、また距離をとられてしまった。
早く……………何とかしないとなあ。

* * * * *

それからしばらくして、モン高原を抜けてようやく首都カン・バルクに辿り着いた。

それにしても、世界が違ってても雪はあるんだな。まあ、俺はあんまり見た事なかったから新鮮だけど。

「シャン・ドウもそうだったけど、ここも少し変わった街だね」

街に着いてすぐ、ジュードが言った。

変わったとか……俺にとってはどの街も変わったように見えるよ。

「ア・ジュールはラ・シュガルと違って精霊信仰が強いからな」
「わっ、何あれ？」

驚いたレイアの視線の先には、ロープウェイみたいな乗り物があった。

話によると、あれは空中滑車　まあ、ロープウェイだよな
というらしく、あれでいくつかの地区を行き来しているらしい。

「景色がよくて楽しそうだね」

エリーゼに氣遣うようにレイアが言うけど、エリーゼはふてくされるように顔を背けた。

レイアはそれを見て固まっている。

「ユルゲンス、ア・ジュール王と会うにはどうすればいい？」

固まったレイアそっちのけで、ミラが尋ねていた。

「ワイバーンの許可を取るついでに、謁見を申し出てみるよ。ただ、多くの民が謁見を望んでいるから、ずいぶん待たされると思う。済まないが、宿で気長に待っていてくれ」

そう言って、ユルゲンスさんは城の方に向かって行った。

「そ、それじゃあ、僕らは宿に行つてようか」

「そうだな。ミラが何かする前に……」

「む……まるで私がいつも何かしてるような言い方だな、それは？」

何でこの人は自覚が無いんだろうか？
とりあえず、腑に落ちない様子のミラを押して宿屋に入り、部屋をとった。

ようやく休める時間が出来て、ちょうどいいから俺はエリーゼの事を考えていた。

もちろん、マイナスには考えないようにして、みんなにとってプラスになる事を考える。

とは言え、何から考えればいいだろう？

エリーゼがあんなになつたのは……ティポを取り戻して、両親の話をジャオに聞いてからだったよな。家族が居ない事がショックで、1人ぼっちだつて……。

それで、両親がちゃんと居るジュードとレイアに当たってる。

確かに、あの歳の子に両親が居ないって現実辛いと思う。実際、俺も同じように塞ぎ込んでいたから、気持ちは分かる。

だけど、俺には支えてくれる人が 俺を気に掛けてくれる人が居た。

エリーゼもそれは同じなんだ。それに気付かなくて、傷付きたくなくて拒絶しているだけだ。

なら……俺は気付かせてあげればいいんだ。ちゃんとエリーゼの事を、大事に思ってくれてる人達が居るって事を。

それでもまだ悲しいなら……いつその事俺が……って、これはマジで奥の手だし……上手いかなかった場合、怪我するのは俺だな……。

まあ……頭の中が整理出来た気がするから良かったな。後は行動に移すのみだ。

「まだユルゲンスさん戻って来ないのー？」

考えていると、レイアがそう呟いた。ジュードが「まだだよ」と本を読みながら答える。

どうやら結構時間が経ったみたいだ。

ベッドの上でレイアが暇そうにしていた。

「ねえ、エリーゼ。街の観光でもしよっか？」

「……………」

レイアの誘いを、エリーゼは完全に無視していた。

「エリーゼさん、行ってきたはどうですか？」

とローエンが言いながら、俺に視線を移した。何か言ってくれと言われてる気がした。

「そうだな。エリーゼ、観光行ってみようか」

「……………そんなに行きたいなら、レイアとカイトが行けばいいじゃないですか……………」

ようやく口を開いてくれたと思ったら、そんな刺々しい言葉だった。

「そんな事言わずにさ。エリーゼも行こーよー？」

そうやってレイアが誘っても、また黙り込んでしまった。

エリーゼの心の内を言葉にするティポすら何も言わないって事は、完全に俺達を無視しているって事なんだろうか……………。

「ティポがはしゃいでくれないから、あたしばかりうるさいみた

「だよ」

「前からそうでしょ？」

レイアはレイアなりにエリーゼを元気付けようとしてるんだけど……。ジュード、フォローするならしてくれ。

「じゃあ、少しお話ししよつか。あたし、エリーゼの口から自分の事話してほしいな」

レイアのその言葉に答えるように、今まで静かだったティポが口を開いた。

「レイアはうるさいなー。みんなの足をいつも引っ張ってるくせにー」

「え……」

さすがのレイアも、こればかりは言葉を失っていた。もちろん、部屋の空気は最悪だった。

「エリーゼ、今のは言い過ぎだ。謝った方がいい」

「ミラが言っただから相当だぞ」

俺が何を言うか悩んでいると、ミラがそう言った。アルヴィンも、少しばかり焦って言う。

「ミラも……レイアも……!!」

「バカー！」

立ち上がったエリーゼとティポは、怒ったように叫んで部屋から出て行った。

「え、エリーゼ！」

早く追いかけないといけないのに、何故か足が動かなかった。

「あ痛たた……今のは効いたなあ……」

「レイア……」

表情は笑顔な筈なのに、泣くのを堪えているように見えた。

「ほら、あたしはいいから、エリーゼ連れ戻しに行かないと！ね、カイト君」

「あ、ああ……」

明らかに無理してるのに、上手い言葉が見つからない。

レイアの強がりに感謝しながら、俺達はエリーゼを追いかけた。

* * * * *

宿屋を出て、すぐにエリーゼを捜そうと思っているのに、あたしの足はすごく重くて、まるで捜す事を嫌がっているようだった。本心は嫌な筈はない。むしろ、こんな寒い中、1人だけで外に出たから心配でしょうがない。エリーゼは可愛いから、変な人に襲われてないかなとか、そんな的外れな心配もしてしまう。

なのに足が重いのは、エリーゼに言われた事がショックだったから。かなあ……。

足手まといはさすがにショックだよ……。確かに……。まあ……。自分でも少し思ってた事だけとさ……。

カイト君も、リーベリー岩孔から元気無いよね。あの時言われた事も、結構効いたんだよね。

多分、カイト君の方がダメージ大きいんだろうけど。

「おたく、相当落ち込んでんな？」

「あ、アルヴィン君……！」

いきなり背後から話し掛けられて、思わず驚いてしまった。び、びっくりした……。みんな先に行ったと思ってたから、なおさら。

「アルヴィン君、みんなと一緒にじゃなかったの？」

「いつも騒がしい程元気な奴が、下向いてトボトボ歩いてたら、そりや気になるっしょ？」

「そ、そんな……だった？」

尋ねてみると、アルヴィン君はすぐに頷いた。

そんなにひどかったのかな？　なら、ジュード辺りが声を掛けると思うんだけど……もしかしたら、ひどすぎてそつとされた……のかな？

「おたくは猪突猛進な感じで良いんじゃないか？　当たって砕けるみたいで」

「……それは、慰め？」

だとしたら、アルヴィン君はあたしの事をどんな目で見てるのか、

一度問いただしたくなった。

「なんつーか、ようするに言いたいのは、悩んでないで元気出せつてコト」

やっぱり、慰めてくれていたみたいだ。

「……ありがと。最初からそう言ってくればいいのに」

「別に。パーティーのムードメーカーが落ち込むと、みんな元気出ないからな」

うーん……照れてるのかな？　なら、可愛いトコもあるんだねえ、アルヴィン君も。

「そうだね。ウジウジして落ち込むのはあたしらしくないよね！　よし、早くエリーゼ捜して仲直りしないと！　ありがとね、アルヴィン君！」

慰めてくれたアルヴィン君に礼を言つて、あたしはみんなを追いかけた。

「そーそー。レイアはそうでなくちゃな」

そんな呟きが、後ろから聞こえた気がした。

* * * * *

エリーゼを捜している内に、いつの間にかアルヴィンとレイアも居なくなっている事に気が付いた。

「な、何で行方不明者が一度にこんなに出るんだよ!？」

「まあ、あの2人は別で捜してるのかもしれないし、僕らはエリーゼを捜そう」

「そうですね。と言ってる間に、お2人が来たようですよ」

ローエンが後ろを振り向いて言って、俺達もそっちを見てみるとアルヴィンとレイアが走って来た。

いつの間にか元気になったレイアと、何故か疲れた様子のアルヴィンと合流して、再びエリーゼを捜し始める。

そしてすぐにエリーゼの姿を発見して、同時に近くに居たジャオに驚きながらも、俺達は2人に近付いた。

ジャオが居ると言う事で、無意識に構えてしまう。

「安心せい。偶然会っただけじゃ」

ジャオはエリーゼから少し離れた。

それを見たレイアは、エリーゼに近付いた。

「さっきはごめんね。エリーゼ、寂しい思いしてたのにね……。ほら、あたしって、遠慮なく言っちゃうところからさ……。許してよ……」

さっき笑顔が戻ったレイアだけど、今は少し悲しそうな表情で頭を下げていた。

だけど、エリーゼはそんなレイアに向かい合って、

「……いやです……」

と、そう言っていた。

頭を下げたまま、レイアは身体を一瞬震わせた。そして、顔を上げた。

「そ、そんな事言わないでよ、ね？」

「レイアもカイトも、みんな嫌い！ 友達だと思ってたのにっ！」
「……っ」

嫌いと、そう叫ばれて、胸が締め付けられるような苦しさを味わった。

「エリーゼ、あたしはただ、あなたが心配で……」

「ウソ！ わたしの事なんてホントはどうでもいいくせにっ！ もう友達やめるっ！」

レイアの声も届かずに、叫んだエリーゼは走り去ろうとした。ここで呼び止めなければ、何か言わなければ、エリーゼとは一生すれ違ったまま分かり合えないかもしれない。

いや、そんなの抜きで、ここで退くなよ、俺！

「エリーゼッ！」

叫ぶと、走っていたエリーゼが止まった。

「みんなお前を思って優しくしてるんだ。分からない訳じゃないだろ？ それに、お前は自分が傷付けられたって言ってるけど、さっ

きのティポの言葉にレイアが傷付いてるのに気付かないのか？」

「え……レイアが……？」

ようやく、エリーゼが俺達の　レイアの顔を見た。

「あ、いや、傷付いたっていうかさ……その、へこんだっていうか……」

それを傷付いたって言うんだと思うよ、世間一般では。

「わたし……レイアを傷付けてるなんて……思ってた……」

声を小さくして、エリーゼが呟いた。

「エリーゼはちゃんと謝れるよな？」

「でも、わたし……ひどいこと言っちゃった……」

今度は泣きそうになりながら呟く。

「ちゃんと謝れば許してくれますよ。それが友達です」

ローエンが俺をフォローするように言ってくれた。

すると、エリーゼはレイアに近付いていく。

「レイア……ごめんなさい。許してくれますか……？」

「もちろん。だけど、これからはエリーゼの言葉でエリーゼの事を
もつと教えてほしいな」

レイアもエリーゼも、2人とも笑顔だった。
良かった、一見落着か。

「3歳しか変わらないのにエラそうだねー」

「ダメ、ティポ！」

綺麗に片付いたかな、と思った矢先、ティポ……なんて事を。慌ててティポの口を押さえにかかるエリーゼの名前を、レイアが呼んだ。

エリーゼが少し戸惑いながらレイアを見上げていた。

「それでもあたしの方が年上だからね！」

「はう……」

「レイアこわー！」

ティポの言葉がエリーゼの本音だと分かった上でのあの言葉。人の良い友達になりそうだな。 2

「娘っ子、友達を大事にな」

とエリーゼに言って、ジャオは去って行った。

……ごめん、すっかり忘れてた。

「……カイト……」

「ん？」

ジャオを見送っていると、エリーゼがいつの間にか俺の近くに居た。

目がちよつと潤んでいて、今にも泣きそうだった。

「カイトにもひどい事、言っちゃいました……ごめんなさい……」
「許してー」

ティポからも同じ言葉が出て、少し驚いた。
ジャオがさつき友達は大事に、と言ったから、俺からは今さら言えない。

けど、これは言ってみるチャンスかもしれない。

「エリーゼ……俺も家族居ないんだよ」

「え……？」

信じられない、と言うような表情だった。

「小さい時に2人とも死んじやってな。もう、顔も覚えてない」
「そう、だったん、ですか……」

エリーゼがまた泣きそうになっていた。

「だから、って訳じゃないけどさ……もし、エリーゼが嫌じゃなかつたらさ……家族にならないか？ 俺と」

「え……？」

『えっ！？』

エリーゼの驚いた声に重なって、みんなの声も聞こえてきた。

「お前ら……その反応は何だよ？」

「いや、だって……犯罪なんじゃ……？」

ジュードが代表して言うと、みんなが頷いていた。

何……この扱い……グレルぞこのやろっ。

「それは洒落にならない誤解だ！ 俺が言ってるのは、妹にならな

「いかって話だ！」

「い、いもうと、ですか……」

あれ……何でエリーゼさんは残念そうにしていらっしゃるのですか！？

「兄妹なら、いいんじゃない？」

「そうですね。カイトさんのような方が兄なら安心ですし」

何か釈然としない納得のされ方だな……。

「エリーゼはどうしたい？ 嫌なら無理にとは言わないけど……」

「嫌じゃないです……妹……」

「家族だよ、エリー！」

「はい……家族、ですっ」

まだ信じられないと、そんな感じだけど、ティポを抱きしめるエリーゼのその表情は、心の底からの笑顔だったと思う。

だから、俺も嬉しかった。エリーゼがまた笑ってくれたから。

第22話 仲直り（後書き）

やっとレイアとエリーゼが和解です。ここのレイアはカッコいい（？）

そして、レイアとアルヴィンが怪しい雰囲気（笑）

カイトはまたとんでもない提案をしました（笑）が、ヒロインエリーゼなのに妹ってええんか！？ と思う方も居るでしょうが、そこは終盤に多分上手く（？）やると思うので、あまり期待しないでください

では、次回もお楽しみに。

第23話 信頼と裏切り

「それでどうしよう？ ユルゲンスさんはまだ戻ってこないけど……」

ひとまず落ち着いた所で、ジュードがそう言った。

「直接城に乗り込んでみる？」

「だから、ユルゲンスさんに迷惑掛けちゃダメだつてば」

「ダメか……アルヴィンの案はしっくりくるのだが……」

そりゃ……いつも真っ正面から殴り込みしてる気がするからな……。

「でも、とりあえず城は行ってみないか？ どんな状況か見といて損はないだろうし」

俺がそう言つと、みんなが頷いた。

と言う訳で、城門の目の前に来た。

街の人で行列が出来ている門をくぐる。

「すごい行列だな」

「みんなの声をちゃんと聞いてくれる、いい王様なんだね」

行列を見ながら言つと、レイアがそう言った。

「現在のア・ジュール王は、かつて混乱を極めた国内を、その圧倒

的なカリスマで統率した人物だと言われています」

「そ、そんなすごい人なんだ……」

「それなら、あたし達に協力してくれるよ」

ジュードが緊張する一方、レイアはかなり前向きだった。

「だが、影でエリーゼのような境遇の人間を生み出しているのであれば、許せはしない」

「そうだな。ちゃんと言わないと」

ミラの発言に、俺も頷いた。

「ミラ……カイト……ありがとうございます……です」

笑顔でお礼を言うエリーゼを見て、ホツとした。
出来ればもう、悲しい思いはさせたくないから……。エリーゼ
には笑顔で居て欲しい。

そんな話をしていると、城からユルゲンスさんが出てきた。

「ごめんなさい、待ちきれなくて」

「いや、ちょうどよかったよ」

呼びに行く手間が省けたって意味かな？

「ワイバーンの方はどうなった？」

「問題無しだ」

って事は、もうイル・ファンに直行できるのか。

「それと、ミラさんに頼まれた謁見の件だが、ちょっと驚いたよ」

「……………」

「みんなの名を伝えたら、逆に陛下が会いたいわって仰ったんだ。ひよつとして、ラ・シユガルじゃ有名人なのか？」

「いえ……そんな事は無いと思うんですけど……………」

まあ……………ある意味有名人だよな。指名手配されてるんだから。でも、理由はそれじゃない気がするんだよな。

「えっと、闘技大会の結果が届いてたんじゃないですか？」

「そうか。そうならキタル族にとっても荣誉だな」

……………何だろう、この得体の知れない罪悪感は……………。

「じゃ、私は一足先にシャン・ドウに戻って、ワイバーンの用意をしておくからな」

そう言っただけでシャン・ドウに戻るユルゲンスさんを見送った。

ホント……………いろんな意味で感謝しきれないな。

「ふむ、思わぬ歓待だな」

「何かの罠だったりしないよね？」

「ジュードは心配し過ぎ。素直に歓迎されようぜ？」

心配性のジュードにそう言っただけで、かなり呆れた表情で、「カイトは気楽過ぎるんだよ……………」と呟いていた。

「あまりいい予感はありませんね」

「ローエンまでそんな事言っただけ……………」

「そっだよ。会えないで帰るよりはよかったじゃない」

レイアが俺に賛同するように言った。レイアもホントに前向きだよな。ポジティブがアイデンティティな感じが。

「また隠し事か、アルヴィン？」

いきなりミラがそんな事を言っていた。

「つたり前だよ。だからオレは魅力的なんだ」

「？」

「は……？」

ミラが不思議そうな表情を浮かべると、俺の気の抜けた声が出たのはほぼ同時だった。

「ジュード、今のはどういう意味だ？」

「……秘密のある男はカッコいいとか言うからね……ははは……」

おい、なんか笑いが乾いてるよ？

と言うか、そうなるともしかして俺もカッコいい？ 一応隠し事はあるんだし。

ま……言ったら言ったで頭おかしい奴認定されるのがオチだろうけどさ……。

「さつさと王様に会いに行こうぜ」

「アルヴィン……嘘は嫌だからね？」

先に行こうとしたアルヴィンに、ジュードが確認するように言った。

俺は信じてるけどな、アルヴィンの事。闘技大会の時だって、アルクノアの作戦を覚えてくれたし。ティポがさらわれた時だって、

俺達の力になってくれた。

「お前達がオレを信じてくれてるってのは知ってるよ」

アルヴィンは振り向かずになんて言っても、城の中に入って行っただけに満足したのか、ジュードも笑っている。

「俺達も入るぜ。いい加減寒いし」

俺が促して、俺達はアルヴィンの後を追って中に入った。

* * * * *

中に入ると、謁見の間に居た兵士に呼び止められた。

「王への謁見は、城の外で順を待って頂かねばなりません」

「ア・ジュール王が僕たちに会いたがっている」と聞いたんですけど

ジュードがそう言うのと、兵士達は互いに顔を見合わせてから、ミラの名前を出した。ミラが自分がそうだと言うと、兵士は頷いて、次に何故か俺の名前を呼んだ。

「え、あ……俺、ですけど……」

「分かりました。このままお進みください」

と、道を開けてくれた。

何で俺の名前を……？（この世界では）ちょっと変わった名前だからかな。

首を傾げながら進もうとすると、ローエンがエリーゼと話合っているのに気付いた。

「どうしたんだ？」「どうしたの？」

同じように2人が気になったレイアと声が重なり、思わず顔を見合わせた。

……何故かエリーゼの視線が痛かった。うん、気のせいっすね。そんな俺達を見て笑いながら、ローエンが言う。

「王との謁見にぬいぐるみはどうかと思いますので、預かって頂こうかと」

「あー、なるほどな。確かにちょっと失礼になるかも」

「どういう意味だー？」

「です！」

ローエンと同じ意味だよ、エリーゼ。と言おうとしたけど、ティボが頭に噛みついてきた。

何か……これに慣れた自分が悲しい……。

「いいの、エリーゼ？」

「大丈夫です。ティボはいい子ですから。ね、ティボ」
「ねー」

顔から離れたティボがエリーゼと頷いていた。
いい子なら人の顔に噛み付かないと思う。とは言えまい。

「私が責任をもって預からせて頂きます」

と兵士が言つて、エリーゼがティポを手渡した。

「あんた、ティポに何かしたらただじゃおかないからな？」
「わ、分かっております」

一応、念には念を入れて兵士にそう言つておく。
またさらわれたんじゃシャレにならないからな。

「ありがとうございます、カイト」

笑顔で言つてくれたエリーゼの頭を撫でて、俺達は謁見の間に進んだ。

進んだ先には玉座がある広い部屋だった。そこには、何とジャオの姿があつた。

「ジャオさんがどうして？」

「まさか……あんたが王様とか言つオチじゃないだろうな？」

だとしたら、今までの言葉遣い諸々で打ち首かもしれない。
まあ……その前に俺はボッコボコにされた訳だが。

「わしが王の筈なかるう」

俺の言つた事をすぐさま否定したジャオ。

「わしは四象刃^{フォーヴ}が1人、不動のジャオじゃ」
「四象刃？」

フォーって事は…… 4人居るんだろうか？ って、英語の概念が無いから関係無いのか。

「王直属の4人の戦士です。あの方がその1人だったとは……」
「お、王直属！？」

つまりそれって…… 親衛部隊って事か？
でも、それなら何でエリーゼの事を気に掛けていたんだ？
そんな疑問が浮かんだのと同時に、玉座の後ろにあった扉が開かれ、男性が2人入ってきた。

赤い甲冑みたいな物を身に纏った男性が玉座に胡座^{あくら}で座る。多分、あの人がこのア・ジュールの王だ。威圧感が凄い。1対1で対峙なんかした日には、眼力だけで死ねそうだ。

そして、その王の横に真っ黒な服を着た男性は立った。王の右腕的存在なんだろう。

「イルベルト元参謀総長、お会いできて光栄だ」
「まさか、ア・ジュールの黒き片翼 革命のウィンガル……」

黒い服の男性 ウィンガルがローエンを見ながら言うと、ローエンも心当たりがあつたらしく驚いていた。

「お前がア・ジュール王か？」

ちよっ…… 王に向かってお前って……。

「我が字はア・ジュール王、ガイアス。よく来たな、マクスウェル」

ミラを見ながら、歓迎（？）の言葉を言った。

そして、何故か視線を少し動かして俺を一瞥した。

それだけで、まるで蛇に睨まれた蛙のように、動けなくなった。

「お前達は陛下に謁見を申し出たそうだが、話を聞かせてもらおうか？」

俺達にそう言うけど、全く優しさは無い気がする。

「ア・ジュールで作られた増霊極ブースターは、既にラ・シュガルに渡っています。もし両国で戦争が始まれば、取り返しのつかない事態になってしまうんです」

意を決したように、威圧感に負けないように、一步前に出てジュールが言った。

「ほう……それを伝える為にわざわざ来たと言っのか？」

だけど、ガイアス王がそう言うと、ジュールは後ずさりながら小さく頷いた。

「それであたし達、ラ・シュガルの兵器を壊そうと思っっているんです。それが無くなれば、ラ・シュガル王は戦争を始められないんじゃないかって……協力とか……してもらえ……ませんか？」

ジュールをフォローするようにレイアも言うけど、ガイアス王の威圧感に圧されて、最後の方は小さくて聞こえない程だった。

「要件はそれだけか？」

そんな2人の言葉を、まるで大した事ではないと言ったかのように、ウインガルが切り捨てた。

「もう1つお伺いしたい事があります。以前、王の狩り場にあったという増霊極の研究所の事です」

話を終わらせまいと、ローエンがそう言った。

「あの場所に親を亡くした子供を集め、実験利用していたというのは本当か？」

続けてミラが言うと、ガイアス王は小さく息を吐いた。

それが、何故だか俺には鼻で笑ったように感じた。

「何を言い出すかと思えば、精霊のお前に関係があるのか？」

「私はマクスウェル。人間と精霊を守る義務がある」

ミラはガイアス王の威圧感にも引かず、真っ直ぐ目を見て話していた。

「やっぱり……凄いな……。俺も何か言わないとなのに、全く口が動かない。」

「精霊が人を守るとは、実に面白い事を言ったな？」

「貴様は王でありながらも、民を自らの手で弄んだ。違うか？」

「その件は全て私に任されている」

会話に割り込むようにウインガルが言った。

「あの研究所に集められた子供達は、生きる術を失った者達だった。お前達が想像するような事は無い。実験において非道な行いはしていない」

「それを信じろというのか？」

とてもじゃないけど、言われただけでは信じられない。
だって現に、エリーゼは……。

「わ、わたしは……」

小さくエリーゼが呟くと、ウインガルが「例の被験体の娘か？」と、ジャオに尋ねていた。ジャオは頷く。

俺は、被験体って言葉に憤りを覚えて、叫ぶように言った。

「エリーゼはハ・ミルの村でも閉じ込められてたんだぞ！」

「それじゃあ、あまりにも……」

「非道だと？」

俺をフォローするようにジュードも口を開いたけど、俺達の言葉を遮るように いや、むしろ俺達を黙らせるように、ガイアス王が……あー、いちいち王付けるの面倒だ。ガイアスが言った。

「え……あ、はい……」

「……少なくとも、俺はそう思う」

「お前達は民の幸せとは何なのか、考えた事があるか？」
「幸せ……？」

いきなり話が変わったように、ガイアスが問いを投げつけてきた。

「人の生涯の幸せだ。何をもって幸せが答えられるか？」

「……そんなの……」

今まで考えた事がある筈無い。

でも……そんなの、人それぞれで違うんじゃないか？ 俺の幸せと……例えばジュードの幸せとじゃ、きっと違う。

「己の考えを持ち、選び、生きる事」

「そ、そう、僕もそう思う」

俺が口ごもっていると、ミラが代わりに答えていた。それにジュードも賛同する。

ガイアスは、その答えとは違うと言って、玉座から立ち上がった。

「人が生きる道に迷う事、それは底なしの沼にはまっていく感覚に似ている」

「生きるのに、迷う……？」

「そう。生き方が分からなくなった者は、その苦しみから抜け出せずにしがき、苦しむ。故に民の幸福とは、その生に迷わぬ道筋を見出すことだと俺は考える」

ガイアスの言い分は、確かに筋は通っているのかもしれない。王だからこそ考えれる事だと思う。

「俺の国では決して脱落者を生まぬ。王とは民に生きる道を指し示さねばならぬ。それこそが俺の進むべき道……俺の義務だ！」

ここまで考える王なんか居るのか？ と内心尊敬してしまった。だからと言って、研究所の事を納得したくはないけど。

「お前達をここに呼んだ理由は2つだ。ニシカザカイト、異世界の

事を話してもらおうか？」

「……っ!？」

前に兵士に名前を聞かれたから、王が知っていてもおかしくはないと思うけど……何で……何で俺が異世界から来た事を知ってるんだ？

ガイアスが言った事に、事情を知らないエリーゼ、ローエン、レイアも戸惑いの色が見えた。

「な、何の事だよ？ 異世界って……」

「見た事の無い服装。そして見た事の無い奇妙な道具。知らないとは言わせんぞ！」

確かに……制服と携帯は隠しようがない。いや、服は違うの着れは良かったただだし、携帯も使わなければ問題はなかった。不注意過ぎたな……。

「もし……本当に異世界があったとして、俺が知っていたとして、それを聞いてどうするつもりだ？」

「我が国の利益になるか否か。それだけだ」

「……悪いけど、俺はあんたの納得するような事は知らないよ」

実際、何が利益になるとか知らないし。それに、言ったとしても、理解出来るとは思えない。

携帯すら知らないんだ。自動車とかその他諸々を説明しても分からないと思う。

「ふっ、シラを切るか？ それも良かるう。こちらには貴様を問いただすだけの物的証拠は何も無いのだからな」

……結構あつさり諦めたな……。何を考えてるんだ、ガイアスは？
俺との話は終わったとしても言うように、ガイアスはミラに視線を移した。

「2つ目だ、マクスウェル。ラ・シュガルの研究所から『カギ』を奪ったな？ それをこちらに渡せ」

睨むように、命令するようにガイアスが言う。が、ミラは全く物怖じしない。

「断る。あれは人が扱いきれるモノではない。人は世界を破滅に向かわせるような力を前に、己を保つ事など出来ない」

「お前には俺の言葉が理解出来なかったと見えるな」

「どれだけ高尚な道とやらを説いたところで、人は変わらない。2千年以上見てきた」

ここまで頑ななら、もう聞く術は無いだろう。誰もがそう思った。

「では、あなたに『カギ』の在処を聞くとしよう」

ウィンガルが俺達の方を見ながら言うと、アルヴィンが前に出た。

「え……？」

「あ、アルヴィン……？」

「……嘘、だよ……アルヴィン……？」

「……ひどいです」

「……アルヴィン」

信じられなかった。アルヴィンは信じたいのに……目の前の現実が……信じたく、なかった。

だからか……ガイアスが俺が異世界から来た事を知っていたのは、
と、頭の隅で冷静に思っていた。

「すまんね。これも仕事ってやつなのよ」

「アルヴィン、マクスウェルは『カギ』を誰に預けた？」

「巫子のイバルだ。今頃は二・アケリアでおとなしくしてるんじゃないか？」

何の躊躇いもなく言った……。

アルヴィン……これも母親の為なのか？

俺達が言葉を失っていると、奥の扉から露出度の高い服を着た女性が慌てた様子で入ってきた。

確かあの人は……キジル海瀑でミラを襲った人だ。

女性はアルヴィンを見ると、「どうしてここに！？」と驚いていた。

「よ、プレザ。久しぶり」

2人は知り合いなのか？　そう言えば、前にもそんな感じだった気がする。

「プレザ、何用だ？」

俺達が居るからか、プレザと呼ばれた女性は報告を躊躇っていた。

「構わん。報告しろ」

「……ハ・ミルガラ・シュガル軍に侵略されました」
「なんですと……」

プレザの言葉に、俺達はまたショックを受けていた。

悪い事つてのは本当に、よく重なるもんだな……。

「村民の大半が捕らえられ、ラ・シュガルへ送られた模様。殺害された者も多数おります。そして、その場には大精霊の力と思わしき痕跡が多数ありました」

なっ……大精霊！？ 四大はクルスニクの槍に捕まってるんじゃないのか！？

「大精霊だと？ 四大精霊は20年前から召喚が不可能になっている筈だ」

ミラを疑っているのか、ガイアスはミラを睨んだ。
だけどミラは、それに気付きもせずに顔色を悪くしていた。

「……バカな、四大が解放されていれば感知出来る筈だ。……まさか、クルスニクの槍の力！？ ナハティガルは新たな『カギ』を生み出したのか！？」

目を見開いて驚愕するミラ。

もしクルスニクの槍の力ならば、戦争が始まってしまふ。

「全ての部族に通告しろ。宣戦布告の準備だ。我が民を手に掛ける者は、何人たりとも許しはしない！」

ガイアスは叫ぶと、部屋を出て行った。
残ったウィンガルが、俺達を見やる。

「さて、あなた達はもう用済みになってしまったが……陛下が精霊マクスウェルを得たとなれば、反抗的な部族も従わざるを得まい」

ウィンガルがそう言った時には、既に俺達は兵士に取り囲まれていた。

けど、ローエンは何かを伝えるようにエリーゼに声を掛けた。すると、エリーゼはティポの名前を叫ぶ。

俺達を取り囲んでいた兵士の中に、ティポを抱きかかえていた兵士が居て、急に動き出したティポに驚き、その隙に俺はとつさに蹴り飛ばした。

「ナイスカイト君ー！ 今のうちに逃げろー！」

逃げられるだけの道が出来て、ティポが叫ぶ。
みんなが走り出す中、俺は振り返ってアルヴィンを見た。
あいつ……呑気に手振ってやがる……。

「カイト！ 早くですっ！」

エリーゼに呼ばれて、俺は最後に叫んだ。

「アルヴィン！ 俺は信じてるからなっ！」

そうして俺達は、城から脱出した。

後ろから聞こえたのは、ウィンガルが俺とミラとエリーゼを捕らえる命令を出している声だった。

第23話 信頼と裏切り（後書き）

ついにア・ジュール側の人達が一気に登場！そしてアルヴィンが裏切りました。設定上、アルヴィンがカイトが異世界人だと話した事になってます。

それでは次回もお楽しみに。

第24話 雪の街の脱出（前書き）

やっぱり戦闘が下手やな〜と思う今日この頃。

第24話 雪の街の脱出

「やっぱり……アルヴィンはウソつきです……」

城を出て、城門の前で足を止めたエリーゼがそう呟いた。

「事情があるのかとも思いましたが、今回はさすがに……」

「アルヴィンをダンザイしろー！ 引きずり出せー！」

みんな、アルヴィンを信じていただけに、ダメージは深い。

「アルヴィン君……あたしの事慰めてくれたのも……ウソ、だったのかな？ ……アルヴィン君、どうして？」

「私にも本心は分からないな……」

「何が僕達が信じてるのを知ってるだ！ アルヴィンなんて……もう！」

ジュード何か、肩が震えていた。

「俺は……アルヴィンを信じるよ……」

みんなの視線が俺に集中するのが分かる。

「どうして……ですか？」

「アルヴィンは僕達の目の前で裏切ったじゃないか！」

「そうだけど！ 今までの事が全部嘘だったなんて、俺は思わない。俺は仲間を信じる！」

確かに裏切られて、ショックじゃないと言えば嘘になる。けど…

…だからと言って信じない理由にはならない筈だ。
傷付けられたから信じないってのは、違う気がする。

「ここに居ても捕まるだけだ。とにかく、街の外に逃げようぜ」

納得はされていないと思うけど、そう促して空中滑車の方に向かった。

けど、そこは固い壁で閉ざされていた。

「5カ所の制御石を復帰させれば、ロックを解除できるかもしれない。石にマナを注いでください。石が完全に赤く輝いたら、完了の合図です」

「ガンダラ要塞の時と同じですね」

ローエンが的確に指示を言って、エリーゼがあの時的事を言う。

「ただし、みなが近いタイミングで完了させなければ、ロックは解除されません」

なかなかシビアな事を……だけど、このメンバーなら心配はいらないだろう。

「なら、兵士が来ないか俺が見張るよ」

「すみませんカイトさん。お願いします」

「ちよ、ちよっと待つてよカイト君！」

ローエンに任されて剣を抜こうとしたら、レイアが待ったをかけた。

「あ、あたし……マナを注ぐなんてやった事無いよ！」

「大丈夫だよ。レイアなら出来る。それに、足止めは棍より弓の方がいいからな」

「時間はあまりありません、レイアさん！」

「う、うん……分かった。やってみる！」

何とか納得してくれて、それぞれ石の前に立つ。

俺は改めて剣を抜いて弓に変形させる。まだ兵士は来ないけど、なるべく早くな。

「行きますよ！」

ローエンの合図で、みんなが石にマナを注いでいく。それを確認しながら、俺もすぐに足止めが出来るようにマナで矢を形成し始める。

そう思ったら、もう城の入口から兵士が出て来始めた。

「終わりました」

「もう！？」

ローエンが終わったらしく、レイアが驚いていた。確かに早いけど、ローエンなら納得だわな。つと、こっちはこっちで兵士を足止めしないとな。

「頭上には注意しろよ！ 氷雨！」

幾つもの矢を束ねた状態で空に向かって放った。放物線を描きながら、矢は雨のように兵士に降り注ぐ。

「氷雨乱雨！」

続けて跳躍し、空中から同じ数の矢を兵士に向かって放った。足止めをすればいいだけだから、狙うのは足だけだ。

「熱風よ、吹き飛ばせ　ヴォルテックヒート！」

着地した直後に詠唱を始め放った術は、俺が使える風属性の精霊術の中で一番威力の高い術だ。それを兵士達に直撃しないように照準を合わせて発動させると、熱風が吹き荒れて兵士達を城の方に吹き飛ばした。

これで少しは時間が稼げるだろう。

「みんな、まだか？」

振り返って確認すると、後はレイアだけだった。少し手間取っているらしい。

そうしている間にも、また中から兵士が出てきた。

俺はまた矢を作り出して今度は放射状に放った。足だけを狙うのは効率は悪くて、足を止める兵士は少ない。

「カイト！　開いたよ！」

「分かった！　最後に一発！　アローレイン！」

少しだけ溜めたマナを空に放ち、光の矢を雨のように降らせる。

氷雨と違うのは、この技はマナそのものを攻撃として使っている事だ。エネルギー状の矢を放つてると言えば分かりやすいか。

それから俺は、武器をしまつてみんなと合流して、空中滑車に乗って下に降りた。

市街地に出ると、そこにはプレザが待ち構えていた。

「私を置いて先に行くなんて、そんな奴滅多にいないわよ」

「プレザと言ったな。まさかガイアスの部下だったとはな。イル・ファンを脱出した私達は、初めから狙われていた訳か」

そうか……あの時ミラを襲ったのは、クルスニクの槍の『カギ』の在処を聞き出すためだったのか……。

「ニ・アケリアじゃ、アルが陛下にあなた達の情報を売ったのよ」

やっぱりか……辻褄が合った。

「アルヴィンは……最初からあなた達の仲間だったんだね」

「やめて。あんな男……仲間でも何でもないわ」

ジュードが苦しそうに言った事を、プレザはすぐに否定した。

傭兵だからか……？ 雇われたら誰の味方にでもなるから。

「……私達の関係はご想像にお任せするわ。けど、アルは組織を渡り歩く、根無し草の一匹オオカミよ。誰にも心を許さない。信じた方が悪いわ、ボーヤ」

「それでも俺はアルヴィンを信じるよ。あんたと違ってな」

明らかにジュードに対して言っていたセリフだったけど、俺がそう言っていた。ギロリと睨まれる。

「戦になればクルスニクの槍が、最たる脅威となるのは明白。それが分からぬマクスウェルじゃないだろう？」

どこから現れたのか、それとも最初からそこに居たのか、ウィンガルがミラに向けて言った。

「お前達の縄張り争いに手を貸すつもりはない。あれをお前達人間が手にすれば、待っているのは悲惨な結末だけだ」
「随分、上から見られたものだな」

ミラの言葉を聞こうともせず、ウィンガルは剣を抜いた。プレザも構える。

俺達も武器を出そうとするけど、それを制するようにローエンが前に出た。

「おやめなさい！ 戦巧者と名高いあなたでも、その誉^{ほまれ}、剣で得たものではないでしょう。若さが見誤らせているのでは？」

ローエンが言うと、ウィンガルはローエンに剣を向けた。

「イルベルト殿。それがあなたの限界。古い。……故に間違い……逃げ出す！」

ウィンガルが叫んだ瞬間、奴の纏う雰囲気が一気に変わった。そして、いつの間にか髪の色が白に変わっていた。

「な、なにあれ！？」

「マナが急激に……！？」

^{ブースター}
「増霊極！？」

「どうして……」

「なんだお前ー！」

みんな驚愕しているけど、俺はもう……この世界に来ていろいろ驚いたから……正直髪の色変わるぐらいじゃ驚きませんよ。

（エリーゼ、誰に向かってそんな口をきいている？ 先輩には敬意

を払うものだ」

「は……！？」

いや……さすがにこれは予想外だ。何言ってるのか欠片も分からない。

それは他のみんなも同じようで、ローエンがロンダウ語と呟いたのが聞こえた。

（マクスウェル、捕えるつもりだった……殺した方が早そうだ）

何を言っているかは分からないけど、その一言がとてつもなくヤバイ事だと言うのはウィンガルの雰囲気で分かった。

いきなりもの凄い早さで距離を詰めてきたウィンガルが剣を振る。かろうじてすぐに反応できた俺達は、ウィンガルを取り囲むように散らばっていた。その間も、何かを言ってるようだけど全く分からない。

「くっ……話すなら日本語にしてくれよな……」

「今はそんな事言ってる場合じゃないよ！」

「分かってるよ、んな事は！」

でも、戦闘中に意味分からん言葉を聞いてると、なんか気になって仕方が無い。

サイヒヨウジン
「砕氷刃！」

斬りかかってくるウィンガルに、氷を纏う刃で対抗する。剣と剣が打ち合わされる度、氷が砕けていく。俺は少しだけ距離を空けて、剣を握り直す。

「はあっ！ 幻魔衝裂破！」
ゲンマシヨウレツパ

回転するように二度十字に剣を振り、大きな衝撃波を放つ。突進してくるウインガルは、それを大きく跳んで難なく避けた。

「飛燕翔旋！」
ヒエンシヨウセン

跳んだウインガルに追撃するように、レイアが棍を振り上げながら大きく跳ぶ。それにはさすがのウインガルも避ける事が出来なかったのか一度喰らう。二撃目は剣で防ぎ、逆にレイアを地面に叩き落とそうとした。

「神射鷄！」
カムイドリ
「続けて輝凰旋！」
キオウセン

レイアを助けようとウインガルに向かってマナの塊を放ち、続けて光を集めた矢を撃ち出す。ウインガルはその2派を、レイアを吹き飛ばす反動で避けていた。

「ぐう……いったあゝ！」

「大丈夫か？」

「回復します！」

地面に倒れたレイアに、エリーゼが治癒術を施した。

「ほら、立ち止まってる暇なんか無いわよ！」

「させないよ！」
ヒテンシヨウク
「飛天翔駆！」

「バニツシュヴォルト！」

術を使おうとしていたプレザに、ジュードとミラが連携で阻止していた。

「エアプレッシャー！」

「きゃあ！」

2人の攻撃を避けたプレザだけど、ローエンの追撃には気付かず、術を喰らっていた。

「カイト、やりましょう！」

「頼んだ、エリーゼ！」

エリーゼと共鳴して、隙の出来たプレザに術技を放つ。

「闇の刃よ今ここに！」

「連撃受けな！」

「斬魔、飛影斬！！！」

プレザの周りに幾つもの黒い剣が現れ、俺はそれを空中で掴み取りながら斬り続けていく。そして最後に現れた剣を掴み、真上から落下しながら斬りつける。

「あああああっ！？」

それがトドメになり、プレザは力無く倒れた。急所は外した筈だからちゃんと生きている筈だ。残るはウインガルだけだ。

「ローエン、お願い！」

「お任せを！」

いつの間にかウインガルが押されていて、レイアとローエンの共

鳴術技が炸裂する。

「「踊って碎ける！　連舞華鷹レンブカヨウ！！」」

2人が舞うように殴り斬りを続け、ローエンが斬り上げるとトドメにレイアがウインガルを地面に叩きつけた。

「がはあっ！」

白くなっていた髪の色が、元の黒色に戻った。それが、戦闘の終了を告げていた。

「やってくれたな……」

フラフラになりながらも、2人が立ち上がる。それを見たミラが再び剣を構えた。

「まだ……相手をしてくれるのかしら……？」

いつ斬りかかってもおかしくない状態だったけど、ウインガルとプレザの後ろの方から、兵士が走って来たのが見えた。

「ミラ、そんな事やってる場合じゃない。逃げないと捕まるぞ」
「……潮時と言う訳か」

ウインガルとプレザはもう追いかけるだけの力は無いだろうから、今から逃げれば兵士に捕まる事はなくなる筈だ。

俺達が街の外に走り出すと、ローエンがウインガルに呼び止められていた事に気が付いた。

何かを言われてローエンの表情が強ばり、何も言わずに走り出し

た。それを確認して俺も走り出す。

「無理はしないようにな、ローエン」

「……お気遣い、感謝します」

辛そうだったけど、俺に言えた事はそれぐらいしかなかった。

* * * * *

兵士が追ってくる事もなく、なんとか無事にシャン・ドウまで戻ってくる事が出来た。

けど、兵士に追われた訳だから、その事がユルゲンスさんに伝わっているかもしれない。そうローエンが言った。

……両国のお尋ね者に行く場所はあるのか？

そんな事を思っていると、ユルゲンスさんが来てしまった。思わず俺は半歩後ずさってしまった。

「謁見はどうだった？」

俺達の心配は杞憂だったのか、ユルゲンスさんは至って普通に接してくれた。

「えっと……それなりに……成果はあった……のかな……？」

実に歯切れの悪い答えを言ってしまった。そもそも、成果なんかあったか？

「済まないユルゲンス。急いでいるんだ。すぐに発てるか？」

俺の返答に見かねたのか、ミラがそう言っていた。

「まあ、出来ない事はないが……何か急ぐ理由でも出来たのか？」

「うん、ぼくたちガイアスに……」

「おっとティポ。いきなり噛んだらダメだろー」

「もががが……」

ティポが余計な事を言う前に、俺はティポを掴んで自分の頭を噛ませた。いつもと逆のパターンに、ティポも驚いていた。

「ティポー！」

「わっ、カイト君何やってんの！？」

そんな俺の行動に驚いたエリーゼとレイアが声を上げた。

とっさにやったから、自分でも何やってんのか分からない。

ただ1つつ分かるのは、噛まれる事に完全に慣れていると言っ悲しい現実だけだった。

とりあえず誤魔化せたと思うから、ティポを顔から離れた。

ちょうどその時、

「急ぐ必要は無くなったよ」

と背後から声がした。

「アルヴィン！？」

ジュードが驚きの声を上げた。

そう、背後に居たのはアルヴィンだった。

「奴ら、今頃せつせと山狩りでもしてるからな」

「……手土産のつもりか？」

ミラはアルヴィンを警戒しているのか、そう尋ねた。

「土産も何も、仲間だろ、オレ達」

「……………」

白々しいとでも言うように、ミラがアルヴィンを見ながら黙る。

「何だよ、信じられないって？ お前達が信じてくれてるって知ってるって、そう言っただろ？」

そう言って、アルヴィンがジュードの肩に腕を回した。

「まだオレの事信じてくれるよな？」

「う、うん……」

「俺も仲間だって信じてるからな」

ぐつと親指を立ててアルヴィンに言うつと、一瞬戸惑った様子だったけどすぐにいつもの調子に戻った。

「アルヴィン君、おかえり……」

「帰ってきてくれて……うれしい、です……」

腕を組んでジト目でアルヴィンを見るレイアと、警戒して俺の後

るに隠れるエリーゼを見て、アルヴィンがおかしそうに笑った。

「とにかく、しばらく時間は稼げそうですね」

「そうだな。ちゃんと休んでからイル・ファンに行こうぜ」

カン・バルクでウインガルとプレザの2人と戦ってから走って来て、ロクに休んでないしな。

クルスニクの槍を壊すのには、やっぱり万全でなければいけない気がする。

まあ……さすがに宿に一晩泊まるのは無理だろうけど。

「事情は聞かない方がよさそうだな。まったく、君達と関わっていると飽きないよ。私はワイバーンの檻の前に居るから、飛ぶつもりになったら来てくれ」

「ありがとうございます、ユルゲンスさん」

本当に、何度も言った気がするけど感謝してもしきれないな。

「さて、少し時間が空いたな？」

「すみません、1つ気になる事があるのですが、よろしいですか？」

ローエンが俺を見ながら言った。

……何だろう？

「ア・ジュール王　　ガイアスさんが言っていた、『異世界』の事です」

「あ……」

すっかり忘れてたけど、そう言えばそんな話が出てたんだよね……

…。

普通なら冗談で済ませられるけど、ガイアスがあの状況で言った事だ。冗談とは思えないかもしれない。

「あ、それあたしも気になる」

「わたしもですっ」

あー、みんな興味津々な感じ……？

でも、エリーゼ達になら話しても問題はないかもしれない。むしろ、今がチャンスかもしれない？

「じゃあ、話すけど……今から話す事は他言無用、誰にも話さないようにな？」

みんなが頷いたのを確認してから、俺は自分の世界の事、何故かこの世界に迷い込んだ事を話した。

「そんな事が……」

「うん、普通は信じられないよ……」

「……嘘じゃ、ないですよね？」

話し終わると、みんながそんな反応をした。

まあ、想定の内だな。

「もちろん証明出来るのはあるよ」

ポケットから携帯を出してみんなに見せる。

みんながそれに注目するのが分かった。

「これ……カイトが最初に見せた……『ケータイ』だっけ？」

「あれ、このガラス玉は何？」

「ああ、これは貰い物」

ジュードは覚えていたらしく名称を言った。

レイアがガラス玉に目を向けたから、俺はとっさにそう答える。

エリーゼの顔が真っ赤になってるのは何でだろう？

「そっぴゃ、そのケータイは何に使う物なんだ？」

とアルヴィン。

「用途はいろいろあるけど、主な使い方は……遠く離れた人と会話したり、一瞬で手紙をやり取りしたり、かな」

分かりやすいように言葉を選びながら言つと、当然ながらみんな驚いていた。

「まさか……黒匣^{ジン}……」

「違うから！」

ミラさん……一瞬目がマジだったよ！？

「まあ……そう言う訳でさ……黙っててごめん」

「アルヴィンみたいな嘘じゃなくて安心しました」

「本人前にして言うなよ……」

エリーゼ、黒くなつたのか？

「あたしも安心したよ。変な話じゃなくて」

……ある意味変な話でしたけどね？

「じゃあ話はこれぐらいにして、ユルゲンスさんの所に行こうぜ」

話を切り上げてそう言うと、今度はジュードが何かあるらしく、アルヴィンを見た。

話の内容が分かったのか、アルヴィンが頭を掻いた。

「納得いつてないってか？」

「当たり前でしょ？」

「4人で初めて二・アケリアに行った時だよ。社から俺1人でここに行ったる」

諦めたようにアルヴィンが話し始めた。

「私が社を出ると、ジュードとカイトが2人で居た時だな」

「その時だよ。ウィンガルと会ってたのは」

そんな初めの時からだったのか。

「密約を交わしていたのでは？ いざとなればミラさんを引き渡すと」

「アルヴィン君ひどい！ やっぱりミラやジュードやカイト君を裏切ってたんだ！」

レイアが怒ったように言うと、アルヴィンが慌てて弁解する。

「待てよ。確かにあの時は色々考えてたけど、今回は逆にそれを利用できると思ったんだ。ワイバーンの許可が下りたのだって、事前に話を通してたからなんだぜ」

「え、それって、ガイアスの前で裏切ったのは……」

「あの場で裏切ったフリしてなきゃ、ワイバーンも使えなかったって事。だから、わざわざシャン・ドウとは真逆に逃げたて嘘ついたんだ」

つまり……遠回りながらも俺達の為に動いてくれてたって訳だな。

「ジュード、それでもアルヴィンの事信じられないか？」

「……僕は、カイトみたいには信じられないよ……信じたいけど……」

また裏切られるかもしれないと、そう思ってるんだろうな。

「あのプレザと言う女。キジル海瀑の時といい、知った仲のようだったな？」

そんな中、ミラがプレザの事を聞いていた。

「何が聞きたい？」

「どういつ関係なの？」

さすがにジュードも気になっていたんだろう。一度戦った敵と仲間が知り合いつてのは。

だけど、アルヴィンは黙ってしまった。それに問いただすようにジュードがアルヴィンに叫ぶ。

珍しく泣きそうになっていたジュードを見て、アルヴィンはやっと口を開いた。

「出会いはオレがラ・シュガルの情報機関に雇われてた時だよ。あいつはア・ジュールの作業員として、イル・ファンに潜入中だったけどな」

「……それで？」

「その後、個人的になんつーのよ、色々あったのは聞かないでくれよ」

煮え切らないけど……大人の事情ってやつでしょうかね？ よく分かんけど。

「納得はした。けど、まだ信用しきった訳じゃないからね」

そこまで行ったら信用しろよ、ジュード……。

「くくく、ジュード君はかわいいね」

「な、なんだよそれ！ 僕は怒ってるんだよ！」
「わかった、わかった」

とりあえず、和解はしたのかな。ギスギスよりはよっぽど良い。

「最後に1つだけいいか？」

「何だ？」

ミラが真剣な表情で尋ねた。

「お前が私達に肩入れする理由を教えてほしい。何かメリットがあるのか？」

「それ今さら聞く？ 優等生やみんなが大好きだからに決まってるでしょーよー！」

「はあ！？」

思わず声を出してしまった。みんなも呆れて言葉を失っている。さすがに……これは胡散臭いと思ってしまった。

「ウソつきやがってー!」

「なんだそれ、ちよっとヒデーじゃねえか!」

ティポの怒ったようなツツコミにアルヴィンは笑いながら言った。

「と……とりあえず……ユルゲンスの所へ行こうか……」

珍しく顔が引きつったミラが促して、俺達は呆れながらユルゲンスさんの所へ向かった。

……こんなんで大丈夫なんだろうか?
気を引き締めないでいいのか?

第24話 雪の街の脱出（後書き）

ついにエリーゼ達に異世界から来た事を告げました。すごい端折った感じがあるけど気のせいです。

あと……オチ無いわぁ……。とか言わない

↓今回の創作共鳴術技↓

・斬魔飛影斬（闇）

凍牙霧影剣＋フラッターズ・デйм

カイトとエリーゼの共鳴術技。

空中に出現した幾つもの闇の剣を、超高速で移動しながら掴み、敵を斬る。トドメに真上から落下しながら斬る。

・連舞華鷹

三散華＋マーシーワルツ

レイアとローエンの共鳴術技。

2人で踊るように攻撃して、最後にローエンが斬り上げた敵をレイアが叩き落とす。

第25話 飛翔 イル・ファンへ（前書き）

今回も短くなりました。

第25話 飛翔 イル・ファンへ

改めてユルゲンスさんの所に行って、ワイバーンを借りると申し出る。

「さすがにラ・シュガル王都に降りるわけにはいかないからな。近くの街道にでも降りる事になると思う」

「なんか……ホントありがとうございます」

そして何度も礼を言う俺だった。

ワイバーン1頭に乗れる人数は2人と言う事で、とりあえず借りるワイバーンは4頭。俺とエリーゼ、ジュードとミラ、アルヴィンとレイアがペアで乗って、ローエンには1人で乗ってもらう事になった。

ここで1つ。

乗り方が分かん。

ユルゲンスさん曰く、手綱を握っていればとりあえず何とかなるらしいけど……不安で仕方がない。

「よ、よし……行くよ、エリーゼ。しっかり掴まっててな」

「しっかり掴まってます」

と言って抱きついてきたエリーゼ。

刹那、ワイバーンが飛び上がって大空を駆け、俺達はイル・ファンへと向かった。

* * * * *

「うわああああ！？　ちゃんと飛べええ〜ッ！？」

大空に出てからそれなりに経つけど、ワイバーンは未だ蛇行を続けていた。既にどっちがイル・ファンなのか、俺には分からない状態になっていた。

「ちゃ……ちゃんと飛んでください〜……！」

「ちゃんと操縦しろー！」

「これでも精一杯ですからっ！？」

手綱を離すまいとしがみつくようにしているのが悪いのか……。エリーゼが失神しないのが驚きだった。

「うわあああああっ！？　ミラ！　逆さ！　逆さになってるからっ！？」

「案ずるな、ジュード！　慣れれば愉快なものだぞ！」
「どこがああああッ！？」

前を飛んでいる、ジュードとミラのペアからは、ワイバーンが逆さに飛んでいた。ジュードの悲鳴が聞こえる。

これを愉快と思えるのは、きっとミラが精霊の主だからだろうっな。そう思っておこう。

「アルヴィン君！　落ちる！　落ちちゃうよっ！？」

「うるせえ！　黙ってる！　オレだって精一杯なんだよ！」

また違う所では、レイアがアルヴィンにしがみついて絶叫していた。アルヴィンも余裕が無いのか、言葉を返すだけで精一杯のようだ。

これ……イル・ファンに着くまで保つのか？

「なかなか難しいですね……！」

と、蛇行し続ける3組とは違い、ローエンは普通に飛んでいた。何故……？　と思うより早く、ワイバーンがまた明後日の方向に旋回し始める。

ミラ達の乗るワイバーンが何故か垂直落下して、水面ギリギリでなんとか浮上。そして何故か俺達の乗っているワイバーンも同じ様に続いた。

水面の次は断崖絶壁のある岩場。間をくぐり抜けると今度は急上昇して一気に雲の上に出た。

「こんなアクロバティックはいらないからっ！？」

雲の上でようやくワイバーンが落ち着いた。

空気が澄んで　むしろ冷た過ぎるが　いて、見える景色が綺麗だった。

「エリーゼ……くれぐれも下は見なよ……」

下は一面雲だけ……。

「綺麗ですね」

「ああ。一生に何回も見れないぐらいの光景だな」

飛行機で飛ぶよりも高い高度なんじゃないか？ あいにくと乗った事無いから分からないけど。

そうして綺麗な景色に見惚れていると、いきなり雲の下から巨大な魔物が出てきた。

「うわっ……！ 何だこいつ！」

大きな口を広げてきて、俺はとっさに手綱を強く引いてワイバーンにスピードを出させて避ける。

「このままじゃ落とされちゃうよ！」

「みんな！ ひとまず降りよう！」

ジュードの声が聞こえて、俺達は雲の下へと戻る。けど、魔物もこちらを追いかけてきた。

雲の下には大きな街が見えた。このままじゃあの街に被害が及んでしまうかもしれない。

そう思った瞬間、魔物の放った火球がミラ達の乗ったワイバーンに直撃してしまう。

「ジュード！」

「ミラ！」

落下して行く先は、街のど真ん中だった。俺達も急いで2人を追った。

* * * * *

落ちたのは見慣れた街　カラハ・シャルだった。

広場に落ちた2人を発見した俺達は、ワイバーンから降りて2人
の下に走る。

その時、身体を起こしたジュードに向かって、先程の魔物がすごい
勢いで迫っているのが見えた。

「ジュード！」

と俺が叫ぶのとほぼ同時に、アルヴィンが俺を抜かしてジュード
の前に立ち、大剣で魔物の攻撃を受けて吹っ飛ばされていた。アル
ヴィンは何事も無かったかのように地面に着地する。

「アルヴィン……」

「今は余所見してる場合じゃないぜ！」

魔物に銃を向けるアルヴィン。

俺達もようやく追い付き、武器を構えた。

この魔物はいつぞやの飛んでいた敵と似た感じがする。

「やるぞレイア！」

「分かった！」

戦闘が始まってすぐに、俺はレイアと共鳴して弓に変形させる。

「集え8元素！」

「より取り見取りで行くよ！」

「「エレメンタルマスター!!」」

俺が作った矢にレイアがそれぞれ属性を付与し、俺は空中から魔物に向かって連続で撃ちだした。

直撃はしているけど、致命傷にはなっていないようだ。

早く片付けないと、街に被害が出てしまう可能性もある。

「聖なる槍よ、敵を貫け！　ホーリィランス！　さらに、ディバインセイバー！」

魔物の周囲に光の槍が現れ、魔物を串刺しにする。そして、閃光が敵を取り囲み、徐々に中心へと集まり弾けた。

「このような大技があつたのですか……」

「もったいぶらないください！」

「え……何かごめん……って、まだ倒してないからな！」

さっきの術は俺が使える中でも高威力だけど、さすがにあの大きさの魔物を倒せるほどの威力では無かった。

とは言え、あと一撃でも大技を喰らわせれば多分倒せそうだ。

「いくよミラ！」

「了解だ！」

そのトドメを、ジュードとミラが共鳴術技でやろうとしていた。

「斬り抜ける！」

「一瞬の交差！」

「ソウサイジン
双碎迅!!」

2人が一瞬の内に瞬速の突きを繰り出し、魔物が絶命した。速過ぎて何が起こったのかよく分からなかったけど、とりあえずこれで一安心だ。

「皆さん、落ち着いてください！ 女性と子どもは家に入って出てきてはいけません」

魔物を倒してホッと安心していると、聞いた事のある声が聞こえてきた。

振り返ってみると、そこに居たのはこの街の領主 クレインが兵士を連れて剣を抜いていた。

「旦那様！」

「ローエン！ それに、皆さんまで！」

クレインがローエンに気付くと、俺達の姿にも気付いて驚いていた。

その時、アルヴィンが苦しそうに片膝を着いていた。

「アルヴィン？」

「……ははっ、しくつちまったな……」

「さっきジュードを庇った時だな。大丈夫か？」

「何とか、な……」

とは言え、かなり辛そうにしてるし……休ませないと戦うのも厳しそうだな。

アルヴィンの様子を見たクレインが、兵士達に言って屋敷まで運んでくれる事になった。

俺達も屋敷に入れさせてもらうと、ワイバーンも、魔物の攻撃が直撃してしまったから、1日は休ませないといけなくなってしまう

た。

「仕方あるまい。今日はしっかりと休んで、明日改めてイル・ファ
ンに向かうとしよう」

ミラがそう言って、予定外の休息をとる事になった。

第25話 飛翔 イル・ファンへ（後書き）

どうにも戦闘が共鳴だけになってしまっ……。どうしましょうか（笑）

次回はちよつとオリジナルが入る予定です。

↓今回の創作共鳴術技↓

・エレメンタルマスター（全属性）

虚空墜衝＋ファンシーエレメンツ

カイトとレイアの共鳴術技。

カイトが作り出した8つの矢に、レイアが属性を付与して撃ち出す。火 水 風 地 雷 氷 光 闇の順で撃つ。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実（前書き）

別にそこまで衝撃の事実は無かったりします。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実

一時解散になって各々自由に動き出してすぐに、俺達が戻ってきた事を知らされて来たドロツセルが走ってきた。

「エリー！」

「ドロツセル！」

まるで生き別れた親子 いや、姉妹が奇跡的に出会った場面を彷彿させるように、エリーゼとドロツセルが抱き合った。

ティポはというと、2人の周りをグルグルと飛び回っている。

「おかえりなさい、エリー。大丈夫だった？ 怪我は無い？」

「はい。みんなが居ましたから」

いきなり旅に出る事になった感じだったからな。ドロツセルはかなり心配していたらしい。

親友を通り越してもう家族だよな。

「カイトに変な事されなかった？」

「ってちょっと待てーい！？」

関心していた時にそんな事が聞こえて、俺はとっさにツッコミを入れていた。

すると、何故かジト目で見られた。

「な、何もしてないからな……変な事は……」

……してない、よな？ 頭を撫でる事は数回あったけど、別にそ

れは変な事じゃなかった筈だ。

「分かってるわよ。おかえりなさい、カイト」

からかわれたらしく、すぐに笑顔になってそう言ってくれた。
俺もただいまと言おうとすると、

「ドロツセル！ いろいろお話したいです！」

「うん！ お話しましょう！」

と普段のエリーゼとは思えない速さで走って部屋に向かって行った。

うーん…… 1人になってしまった。

「ドロツセルもエリーゼも、久しぶりに会えたから嬉しいんだろうね」

ソファに座って何をしようか考えていたら、いきなりクレインがそう話し掛けてきた。

「そうだな。俺は前から思ってた事だったけど、エリーゼにしてみればいきなりの旅だったからな」

「でも、まだ途中とは言え無事な様子を見るとホッとするよ。皆さんは恩人だからね」

恩人…… 俺はどうやってクレインを助けたのか、未だに分からないんだよな。

ローエンに精霊術を教わってからも、治癒術を使おうとしても発動しなかったしな。

…… この機会だから、また治癒術の特訓でもしてみるか。

「それじゃ、僕は仕事にもどるよ。カイトの部屋はそのままにしてあるから、後で見に行ってみるといい。留守中にいろいろ来てたからね」

「来てた……って、何が？」

「手紙とかがね」

手紙……？ そんなのを貰うような間柄の人は居なかったと思うんだけどな……。

まあいいか。

「分かった、見てみるよ。それと、後で書斎使わせてもらうけどいいか？」

「別に構わないよ」

と答えを残して、クレインは仕事に戻って行った。
俺は早速、自分が前に使っていた部屋に向かった。

部屋に行くと、確かにここを出発した日からあまり変わった所はなかった。

けど……机の上には結構な量の手紙が置かれていた。
まずはこれの整理からか……。

「えーと、これは……領収証？」

ちゃんと読み書きの練習の結果は実った。ちゃんと読める。

ああ……本の代金か……。

「……3万ガルド……？ そんなに買ったっけか？」

まあ、これは後に回そう。

次は、つと。

「何これ？」

きちんと封をされた手紙を開けて読んでみて、思わず息を噴き出していた。

「こ……これはなんだ……あ、あれか？　いわゆる、その……ラヴレター！？　」

実際に貰った事は無いけど、書いてあるのはだいたいそんな感じの内容だった。

とりあえずこれも置いておこうと、他の手紙を見ると、同じような内容の手紙が数十通あった。

その4割程が同じ名前だったのには触れる事はしない。
とりあえず、手紙はそんな感じの物ばかりだったので、整理には思った程時間は掛からなかった。

「さて……またやる事が……って、そうだ。書斎借りるんだった」
ベッドに倒れ込もうとした時に思い出して、俺は書斎へと向かった。

* * * * *

屋敷に運ばれた後、医者の治療を受けてすぐに怪我が良くなったオレは、特にやる事が無くて街に出ていた。

ミラやジュードが話に来たけど……それは別に語る事じゃないか。独りでボーっと、シャン・ドウやカン・バルクでの出来事を思い出す。

予想外だったのは、オレの事を何が何でも信じようとするカイトだ。他の奴みたいに、少しでも疑ってくれればこっちは楽だったのに……。

カン・バルクで裏切った時も、逃げる直前にあんな事を言いやがった。その後合流して、全員半信半疑な状態　それより悪いかもしれないが　にも関わらず、あいつだけは信じると言い切った。

「ミラだけでもやりにくいってのに……」

もしかしたら、あいつだけは最後までオレを信じようとするのかもしれない。

例えオレが、どんな裏切り方をしようとも。

「ミラがどうかしたの？」

「ッ!？」

いきなり近くから声が聞こえてきて、オレは思わず身構えてしまった。近くに居たのはレイアで、そんなオレの様子に驚いていた。独りでボーっとし過ぎた所為か、近寄るレイアに気付かなかったのか。

「う、ごめん……そんな驚くとは思わなくて……」

「勝手にオレが驚いたただけだ。何か用？」

レイアはオレを完全には信用していない筈だ。ジュードを裏切っていた事で何か言うつもりか？

俯いて言いにくそうにしているレイアから、言葉を待った。

「大した用じゃないんだけど……ケガ、大丈夫なのかなって……」

予想外の言葉に思わず言葉を失った。

けど、次の瞬間オレは笑っていた。

「くくく、怪我の心配でわざわざオレの所に来たのか？ 優等生のお節介が移ったんじゃないか？」

笑いは堪えられなかったけど、これは茶化すとかそんな笑いじゃない。

オレが笑うと顔を上げていつものような表情になった。

「移ってないし、何で笑うかな！ もう、心配して損した！」

「悪い悪い。怪我はもう大丈夫だよ。それに、心配するなら優等生を心配しとけて」

何かと抱え込もうとするからな、あいつは。

「な、何でそこでジュードが！？」

「別に。言ってみただけ」

「……あたしだって、カイト君程じゃないけど、ちゃんとアルヴィン君の事信じてるんだからね」

「は……？」

今、何だった？

「何でもない！　じゃあの、アルヴィン君」

「あ、おい……！」

オレの呼び止めを無視して、レイアが去って行った。

「……信じられる程、罪悪感が増すつてのにな……」

* * * * *

書斎で治癒術に関する本を読みふけて、時間がだいぶ経ったらしく、日は傾いて空は茜色に染まっていた。

結局、読んでもそんなに成果は無かった。いや、『そんなに』じゃないな……『全く』だ。

今回のこれで分かった事は1つある。

「俺に治癒術の才能は皆無……とな……」

応急手当でぐらい出来てもいいじゃないか。と愚痴をこぼしそうになる程、全く出来なかった。

治癒術が駄目と分かった後は、これまた上手く出来ない地水火風の各精霊術を調べただけで、やっぱり何も変わらない。

「うーん……短所を直すよりも、長所を伸ばすか？」

唯一上手く出来る氷、雷、光、闇の4属性の精霊術のバリエーションを増やす方が、もしかしたらいいのかもしれない。けど、1つ問題があった。

「この書斎……この4属性に関する本がほとんど無いんだよね……」

地水火風はたくさんあるのに、残りの氷雷光闇の特に氷と雷に関する本が無い。

本当にキレイさっぱりに。まるで切り取られたかのように無い。

「……ま、無いなら仕方ないんだけどな」

探すにも時間は遅すぎるし。

椅子に座りながら伸びをすると、ポケットから携帯がするりと落ちた。

拾って机に置いて、そう言えばと思い出す事があった。

エリーゼから貰ったガラス玉。それに彫られた文字は何て書いてあるんだろうか？

「ちょうどいい機会だから調べてみますか」

と言う訳で読み書きの基本が書かれている教材用の本を開く。

「えーと……」

彫られた文字は少ないからすぐに分かると思うけど……探すのは難しいもんだな。

しばらく教材とガラス玉とを交互に見ながら文字を読んでいき、全部読めて意味を理解したのは、探し始めてから1時間は経っていたと思う。

そして、その言葉に俺は固まっていた。

「……………は？」

いや、言葉の意味は分かる。エリーゼが俺に渡したと言う事は、エリーゼが俺にそう思ってるって……そういう事なのか？

理由が分からずに固まっていると、いきなり書斎の扉が開いて、エリーゼが顔を覗かせていた。

な、何でエリーゼが今来るんだよ！？

と内心思いながら、俺はエリーゼを見る。

「どう、したんだ、エリーゼ？」

ちよつと棒読みみたくなって、エリーゼが首を傾げたけど、すぐに不信感は無くなったようで、部屋に入ってきた。

「もう少しで夕食の準備が出来るそうなので、呼びにきたんです」

「え……もうそんな？」

窓の外を見ると、なんと既に日が暮れていた。

「カイト、一緒に行きましょう？」

「ああ、分かったよ」

と椅子から立って、机の状態に気付いた。

……調べるのに夢中で、かなりこつちやごちやになってるな。

「悪いエリーゼ。これ片付けてから行くから、先に行ってくれないか？」

「わたし、待ってます」

「いや、結構時間掛かりそうだからさ。みんなに遅れるって言うてきてほしいんだ」

「……分かりました。早く来てくださいね？」

「分かってるよ」

残念そうにしたエリーゼは、そう言っで部屋から出て行つた。

俺は早速、出した本を片付け始める。

片付けている最中、俺はエリーゼの事を考えていた。

ガラス玉に彫られていた、『好き』と言つ言葉の意味を、ずっと考えて、自分の中で整理をしていた。

* * * * *

本を片付けた後にみんなの所に行くと、みんな既に食事を始めていた。

片付け中にはやはり考えはまとまらなかった。

「ごめん、遅れちゃつて」

「早く来ないと、ミラが全部食つちまうぜ？」

「ね、狙つてなどいないからな！」

アルヴィンが冗談っぽく言ったのに対して、ミラは何か本気な感じだった。

俺がもう少し遅れていたら、本当に食べられていたのかもしれない

い。

みんなで賑やかな夕食を食べ終えて、俺は自室で考えをまとめる。

ガラス玉に彫られた言葉は、エリーゼは本気なんだろうか？ としても、俺はそれに応えたら妹に手を出した事に……。

いや、あれを貰ったのはその話が出るずっと前だ。

そうか…… だから俺が妹にならないかって言った時、残念そうな、悲しそうな表情をしたのか。

……なら俺、かなり悪い事をしたんだな。読めなかったとは言えな。

でも、それでも俺は、エリーゼの気持ちに応えられるか分からない。自分の気持ちが分からないから。

「あー！ 考えても始まらないな。とにかく、エリーゼと話をしよう」

そうすれば、答えも分かるかもしれない。

そんな訳で、エリーゼの部屋の前に来てしまった。

ってか…… 今さら思った事だけど…… 友達の証って言ってたんだよな、渡して来た時に。だからこれって…… 友達として好きとかそんな感じなんじゃね？ という可能性が出てきた。むしろ、その可能性の方が高い気がする。

「ははは…… 自意識過剰だな、俺……」

とは言え、ここまで来たら事の真相を聞いてみようじゃないか。
頭の中で、どう話すかを組み立ててから扉をノックする。
しばらくしてエリーゼが出てきた。

「どうしたんですか？」

「あゝえつと……ちよつとお話に……」

首を傾げるエリーゼだけど、すぐに部屋の中に入れてもらえた。
そして、何故かティポに顔をかじられた。

「何してるんですか、ティポ！」

まあ……慣れたんで別にいいんだけどな。

俺が窒息する前に、エリーゼがティポを剥がしてくれた。

「カイト君、何の用ー？」

「まさかティポから言われるとは……」

聞くならかじるなよ……。

俺は呆れながら、とりあえず本題に入ろうとエリーゼから貰った
ガラス玉を取り出す。エリーゼが小さく声を上げた。
出したはいいけど……何を言おうか。

「えつとさ……ごめんな」

少し考えた結果、出たのは謝罪の言葉だった。

「……なんで、謝るんですか？」

俺の言葉に俯きながらエリーゼが尋ねてきた。

「いや、実はさ……今までこれに何が彫られてたのか分からなくて……さつき、やっとよめたからさ。ほら、俺って読み書きダメだから、時間掛かったんだ……」

本当の事なのに……言い訳っぽく聞こえるのは何でだろうか？俺が慌てながらそう言うのと、エリーゼは一度顔を上げて、それからまた俯いた。

「……だから、今の『ごめん』は今まで読めなかった事と、それでエリーゼを傷つけちゃったかもって思ったから……」

ああ……俯いてるけど何となく、怒ってるのが分かる……。そりゃそうだよなあ。貰ってから結構経つし……。

「カイトって、鈍感だったんですね」

「……すいません……」

エリーゼの言葉に謝る事しかできなかった。

「カイト君はエリーのこと、どう思ってるのー？」

とティポ。

いつもなら口を塞ぐうとしていると思うけど、今回は違った。

「俺は……」

エリーゼと話せば答えが見つかるかもしれないと思ったけど……全然見つからない。

大事に思ってるし、好きかと聞かれれば、間違いなく好きと答え

られる。だけどそれが、どういう意味の『好き』なのかは、今の俺には分からない。

1人の女の子として好きなのか。友達として、家族としてなのか。

「わたしは、カイトの事、好きですよ」

急かすように、エリーゼがそう言った。

「……それは、友達として？」

恐る恐る聞いてみると、すぐに首を横に振った。それなら家族としてなのかと尋ねると、それも違った。

ならやっぱり、エリーゼの想いは……そう言う事なんだろう。

「こういう事言うの、迷惑でしたか？」

「違うよ、そんな事無い！」

答えるのを躊躇うように見えていたのか、エリーゼが不安そうな表情で言ってきた。俺はすぐにそれを否定した。

「……正直、俺は自分の気持ち分からないんだ」

「分からないんですか？」

「エリーゼの事はすごく大事に思ってるし、好き……なんだと思うけど、その『好き』がどういう意味なのか、俺には分からないんだ」

「……」
「どついう意味ー？」

エリーゼの代わりにティポが尋ねる。まあ、エリーゼの考えを口にするらしいから、エリーゼがそう考えたんだろう。

「……つまり……時間をください」

何で敬語になったんだ！？
言った自分がかかり驚いていた。

「どのくらいですか？」

「えっと……分からない……」

「なんだよそれー」

煮え切らない答えで本当にごめん。

自分でも考えが浅い事は腹立たしいと思ってるよ……。

「……エリーゼがもう少し大きくなったら、かな」

改めて考えて、そんな言葉が出てきた。

結局は先送りにしようとしてるけど、実際にエリーゼはまだ子供なんだ。こういう話は、もう少し大きくなってからでもいいと思う。

「大きく……ですか……」

「ミラ君みたいなバリボーじゃないとー？」

「そつ言う意味の大きくじゃないから!？」

いきなり何を言い出すんだティポは……。

まあ、エリーゼは今は成長期だろうから見込みはあるのかも……
って、何言ってるんだ、俺は？

「つまり……カイトに見合う女性になればいいんですね!？」

曲解した!？

と言うか……大きくなったら、逆に俺はエリーゼに釣りあうんだ

ろうか？ とか心配になってしまった。

「わたし、それまで頑張ります！　ね、ティポ！」
「うん！　ガンバロー！」

いや……ティポは何をするんだ？

「まあ……そう言う事……なのかな？」

「だからカイト、今度からわたしの事は……『エリー』って呼んでください！」

「え、何で？」

「その方が頑張れそうだからです！」

「そ、そうか。分かったよ……」

シリアスな空気（？）はどこへ……？
とりあえず、エリーゼの決意が新たになった所で、今日は休むことになった。

あんな事を言わせちゃったんだ……。俺もちゃんと考えて、ちゃんとエリーゼに応えないといけないな。

第26話 束の間の休息 衝撃の事実（後書き）

今回、書いててエリーゼが少し変になった気がしなくは無いです
が……気のせいと言う事で（笑）

アルヴィンとレイアの絡みは今後どうなるのでしょうかねー。
次回はようやくイル・ファンに向かいます。

第27話 常夜の街、再び

翌日。

ワイバーンの傷も治り、十分に休息がとれた俺達は街の広場に集まっていた。

「みんな、お待たせ」

と屋敷の方からジュードとミラが一緒に来た。クレインとドロツセルも一緒に見送りに来てくれたみたいだ。

「アルヴィンはまだ来ていないのか？」

辺りを見回しながらミラが言う。

「うん、まだ来てないよ」

「きつと……また嘘つく準備ですよ……」

まだカン・バルクの時の事を根に持っているのか、エリーが俯きながら言った。

「……どうも慣れないな、エリーって呼ぶのは。」

「そんな事ないだろ」

「……そうですか？」

「俺はアルヴィンを信じてるからな」

俺が言うと、エリーが考えるように俯いた。

「皆はアルヴィンをどう思う？ この先の戦いを共にしていいのか

「？」

ミラがみんなに問い掛けた。

「お母さんの事で頑張ってるから、あたしは応援したいな」

「私は、彼自身このままにいるのか、とても心配しています」

レイアとローエンがそう言う中、エリーはぷいと顔を背けた。でも、ティポは「アルヴィン君はぼくを助けてくれたけどねー」と、エリーの心の声を言っていた。

「俺は」

「ミラはどう思ってるの？」

「俺は！？」

自分の意見を言おうとしたら、ジュードがミラに尋ねていた。

「カイトはさつき信じてるって言ったでしょ？」

「まあ、そうだけども……」

改めて言わせてくれてもいいじゃないか。

「真意が測れない以上、判断は出来ないが……戦いに置いてはこと信頼しているよ」

「……って事は、みんなアルヴィンの事をそれなりに信頼してる訳だな」

「うむ、そうなるな」

俺がまとめると、ミラが頷いた。

エリーだけ不満そうな表情をしていたけど、ティポがアルヴィン

を批判しないから、心の奥底では信頼していると思いたい。

「本人の居ない所で悪口なんて、いけない子のする事だぞ、エリーゼ」

まるで狙ったかのようなタイミングで現れたアルヴィンがそう言うと、エリーゼは「知りません」とまたそっぽを向いた。

「……オレの味方は、お前らだけだよ」

アルヴィンがそう言うと、みんな呆れたような表情をした。

「何はともあれ、これで全員揃ったな。では……」
「待つて……ください！」

出発しようと言おうとしたミラの言葉を遮るように叫んだエリーが、ローエンを心配そうに見た。

「ローエン、友達とケンカするのー？」

ティポがそう言うと、そう言えばと思い出した。

かつての友人と、恐らく剣を交える事になるだろう。ローエンが答えを見出していなかったら、とても辛い結末になってしまいかねない。

だけど、俺の心配が杞憂だというように、ローエンはティポとエリーに微笑みかけていた。

「ナハティガルがこうなってしまったのには、私にも責任があります。私は、私の覚悟を持って戦います」

もう覚悟を決めていた。そんなローエンを心配そうにジュードが見ていた。

「頑張ろうね、ローエン！ あたしも頑張るから！」

「ぼくも応援してるよー」

「皆さん、ありがとうございます」

レイアとティポの言葉に、ローエンは礼を言っていた。

「俺も、出来る限りの事はやらせてもらうよ」

「骨は拾ってやるよ、じいさん」

アルヴィン……「冗談だろうけど、そいつはシャレにならん気がするよ……？」

俺が呆れてアルヴィンを見やると、ローエンが「その時は、よろしくお願いします」と本気なのか冗談なのかよく分からない答えを言った。これにはアルヴィンもたじろいでいた。

「覚悟は決まったね。あとは……」

「うむ、準備を整えて出発するのみだな」

ジュードとミラがそう言った。

とは言え、あとは出発するだけの状態だったから、最終確認として荷物を確認するだけで、俺達はワイバーンに乗る事になった。

「世話になったな、クレイン、ドロツセル」

出発前に、ミラが2人にそう言った。

「僕達に出来る事は、これぐらいですから……」

「そのおかげで、俺達は万全の状態で戦えるんだ。ありがとな」

この旅で、またいろんな人に支えられたからな。感謝してもし足りない。

「ローエン、生きて帰ってくださいね」

「はい、お嬢様」

ドロツセルは最後までローエンを心配していた。

エリーとは昨日の内に色々話していたのか、微笑み合っただけだった。

「では、行くぞ」

そして、再びワイバーンに乗って、イル・ファンを目指すのだった。

* * * * *

カラハ・シャルから出発してから数時間後、今度は何のトラブルも起きずにイル・ファンの近くの街道　バルナウル街道へと降り立つ事が出来た。

空は既に暗くなってるけど、別に夜が来た訳じゃなく、イル・ファンの霊域　夜域による暗さだろう。

「イル・ファンはこの道を行けばいいんだな？」

「そうです」

「それじゃ、行こうか」

降り立って一息つく間もなく、俺達は陸路でイル・ファンに向かった。

しばらく歩いて空が完全に暗くなつてすぐに、俺達は旅の目的地であるイル・ファンに到着した。

初めにここでジュード達と会つたんだよな。とか感慨に耽る余裕も無いほどに、慌ただしい空気が街中を支配していた。

武装した兵士が街中を走っていたり、道の端で苦しそうにしている人々が目に入ってきた。

「どうなつてるの？」

「ねえ、あっち！ 煙が上がってる！」

レイアが指を差した方を見ると、確かに黒い煙が上っているのが見えた。

「あつちは……」

「研究所だよ！」

と、ミラとジュードが反応した。

「クルスニクの槍は研究所だ。行こう！」

慌てたようにミラがそう言っつて、俺達は急いで研究所に向かった。

研究所の近くに行くと、怪我をして倒れている人達が多くなっているのに気付いた。

やっぱり、研究所で何かがあったようだ。

「大丈夫ですか！」

ジュードが倒れていた兵士に近付いて、兜を取った。

「エデさん……？」

「先生……ジュード先生なのか？」

倒れていた兵士とジュードは、どうやら顔見知りらしい……つて、この人俺も見えた事あるぞ！？

「あつ！ あんたあの時の！」

そうだ、思い出した。この世界に来てすぐに、どう言っ訳か俺を重罪人扱いした奴だ。

「カイト、知ってる人ですか？」

「あ、いや……気にしないでいいよ……。大した事じゃないし」

わざわざ指名手配を蒸し返す事は無いし、今ここで言っつてばれたら厄介だしな。

「聞いてくれ。研究所の中にア・ジュールのスパイが紛れ込んでいたんだ。逮捕しようとしたら……そいつらが実験室を爆破させて…

……」

爆破って……もしかして見付かったからって道連れにでもしようとしたのか？

「怪我人は病院へ搬送する。こちらへ」

男性が1人こちらに来て、エデを連れて行った。

「ミラ、ガイアスが動き出したんじゃ？」

「速過ぎじゃないか？」

宣戦布告を……って言ってたのは、ついこの前だった筈だ。

「どちらにせよ、急いだ方がよさそうだ」

そう言って、研究所の中へと入った。

ジュードとミラの案内の下、俺達はクルスニクの槍があるらしい部屋の前まで来ていた。だけど、拒むようにして分厚い鉄板に扉が閉ざされていた。

「この中に入るのは、ちとキツイぜ」

アルヴィンがそう言うと、ミラが突然剣を抜いて壁に斬りかかった。金属が打ち付けられるような甲高い音が響き渡る。けど、何度斬りつけても壁には傷一つ入らない。

「すぐそこにクルスニクの槍がありながら……」

「と、とりあえず落ち着けて……」

悔しそうに歯を食いしばるミラ。
黒匣^{シン}の事になると性格変わるんだな……。

「きつと他に方法がある筈だよ。探してみよう」

「ああ……取り乱したようで、すまない」

ふう、と一息ついてミラが落ち着いてから、俺達は別の方法を探す事になった。

と、その時、

ガタンッ！

どこからかそんな音がした。

「今の音……何だ？」

「どうかしたんですか？」

「あれ、エリーは今の音聞こえなかったのか？」

「……分かりません」

って事は、気のせいかな？ いや、でもはっきり聞こえたしな。

ガタガタッ！

「また聞こえた！」

「はい、今度は聞こえました！」

「どうしたの、2人とも」

さっきの音は俺とエリーしか聞こえていなかったのか、ジュード

達が俺達を不思議そうに見ていた。

「変な音がするんだ。もしかしたら何かあるのかも」

「ふむ、気になるな……行ってみよう」

ミラがそう言って、俺とエリーがみんなを案内するように音の聞こえた方に向かった。

そこは1つの部屋で、中に入ると怪しげな装置が沢山あって、その中に人が入っていた。その近くにも。人が倒れているのを発見する。

「大丈夫ですか！」

「わ、私はもう何も……許してください……」

起こしてみると、その人は何とハ・ミルの村長だった。

「このバアさん……」

「村長さん……！」

「しっかりしてよー！」

みんなが駆け寄って来て、エリーが俺の隣に座り込む。

「ハ・ミルの村長か」

「ラ・シュガル軍に侵攻されたって言ってたよね」

「ああ！ 皆が……凍りづけにされる……やめてくだされー！」

村長は俺達が居る事も認識できていないようで、うわ言のように叫ぶだけだった。

「おい、しっかりしろ」

「エリー！ 治癒術を！」

「カイトさん……残念ながらもう……」

俺がエリーに言うと、ローエンが答えるようにそう言った。

エリーもあまりの事に錯乱していて、治癒術を使える状態では無かった。

「村長さん、村長さん！」

そして、息絶えてしまった。

「ハウス教授の時と、一緒だ……」

ジュードの言葉を聞いてから立ち上がると、エリーが抱きついてきた。

俺も上手く言葉が出ずに、頭を撫でることで精一杯だった。

「村の人達が凍りづけにされるとは一体……ガイアスの所で聞いた、大精霊の力でしょうか？」

「……でも、大精霊って地水火風の4属性じゃないのか？ 凍りづけにさせるなんて出来ないんじゃないか……」

「そもそも、あんな状態での言葉だ。どこまでアテになるか分からねえぞ」

ミラもこの事には憤りを覚えたのか、「許せる事ではないな」と呟く。

「そうだ、あれなら……」

何かを考えていたジュードが、上にある端末らしきものを見なが

ら言っ。

早速みんなでそこに行くと、ジュードが操作し出した。

「これで、何か分かるのか？」

「槍の様子が分かるかもしれない」

端末を操作しながらジュードが答える。

これは……俺の世界で言うパソコン的物だろうか？

それにしても、ジュードって結構いろんな事出来るのな。

そんな事を思っていると、画面に映像が映し出された。

「映ったよ」

「すごいな、ジュード」

映った映像は、かなり大きな部屋だ。しかし、そこには何も無い。

「何も無いよ？」

「クルスニクの槍が消えている……。さっきの爆発で破壊されたのか？」

「ですが、それなら残骸が残っていてもおかしくは無い筈……」

「それに、そんな爆発で壊れる物なのか？」

「確かに……壊れる筈は無いな……」

自分で言っという何だけど……. どんだけ丈夫なんだろうか、クルスニクの槍。

「では、槍はその前にどこかへ運び出されていた？　そう考えるのが妥当な所か……」

「しかし、いったいどこへ？」

あんなに大きな部屋を使ってたって事は、それなりに大きな兵器だった筈だ。それを運び出すなら、何か痕跡が残っていたって不思議じゃない。

「みんな、見て。記録が残ってたんだ。これって、エデさんの言ってたスパイじゃない？」

そう言って映し出された映像には、赤い服を着た少女が居た。

「この女……確か前にここで……」

「そうだよ。突然、僕達に襲いかかってきた子だ」

2人は面識があるらしい。

その間に、映像では少女に兵士が近付いていた。

「おい、女が何か取り出したぞ」

アルヴィンが言ったその瞬間、映像から爆発音が響いた。

「素性がばれて爆破したようだな」

「って事は……自爆？」

「けど……ア・ジュールのスパイなんだよな？」

何か腑に落ちないのか、アルヴィンがそう言った。

「オレなら素性がばれても、自分をこんな危険にはさらさないぜ。敵にしてみれば、死体だって貴重な情報源だからな」

つまり……自爆した訳じゃないのか。恐らく敵だろうけど、安心した。

「それなら、エデさんに見つかったのは偶然で、以前から槍の破壊を計画してたんじゃない？」

「この方も、クルスニクの槍がここには既に無い事を知らなかった可能性ががありますね」

「となれば、今頃は運び出した場所へ向かっているか、あるいは……」

「運び出された場所を探してるね」

アルヴィンに続いてジュードがそう言うと、ミラが考えながら口を開いた。

「いずれにせよ、あの女を見つければ何かつかめそうだが……」

「記録の日時を見る限り、爆破されてから半の鐘しか経ってないよ」

「なら、まだこの街に居てもおかしくないんじゃない？」

正直、半の鐘がよく分からないけど、今から捜せばまだ間に合う時間だったのは分かった。

「捜し出す他無いな」

みんなが頷いて、早速赤い服の少女を捜す事になった。

第27話 常夜の街、再び（後書き）

戦いがボス戦以外にないなあ。とか思う今日この頃ですが、あと3〜4話程で連戦がやって来るんで、そこを上手く書ければ問題無いですよ（笑）

まあ……書ける自信はありませんがね。

次回はあの人との戦闘！

第28話 炎を操る少女（前書き）

今回はほぼ戦闘だけとなりました。

第28話 炎を操る少女

研究所を出てすぐに、俺はミラを呼び止めていた。

「どうした？ 話なら後でもいいだろう？」

「ごめん、今聞いとかなないと、いざ戦いになった時に集中できそうにない。それに、多分すぐ終わるから」

俺がそう言うと、ミラは仕方が無いとでも言うように、小さく息を吐いた。

「大精霊って、何体いるんだ？」

「四大のみだ」

「言い切れるのか？」

「……何が言いたいんだ？」

ミラは俺の問いに対する答えが自信が無いのか、そう言うてきた。

「もしかしたら、ミラが認識していない大精霊もいるんじゃないかって思っただけ。現に、地水火風の4属性とは違う、氷の大精霊の力らしき存在もほのめかされてる」

「バカな……それなら私が感知出来る筈だ。今までそんな力は感じた事がない」

俺の言葉を否定するように、ミラが言った。

「これはあくまでも可能性の話。いないならそれでいい。けどいたとしたら、そいつはラ・シュガルに付いている。戦う事になるかもしれない いや、戦いは避けられないと思う」

「つまり……用心しておけ。と言う訳だな？」

「そう言う事。それに、マクスウェルの言葉なら、聞き入れてくれるかもしれないだろ？」

聞き入れてくれて、それで戦闘が回避できるのであれば、それに越した事は無い。

「それは分かったが、何故私だけに話す？」

「あー、それは……みんな、結構いっぱいに見えたからさ……」

俺がそう言うと、ミラがクスリと笑った。

「な、何だよ？」

「いや……何でも無い。早くみんなの所に戻るぞ」

「え……最後の笑いなんだよ！？」

めちやくちや気になるじゃんか！

ミラは先にみんなを追って行ったから、問いたす事も出来なかった。だから仕方なく、俺も後を追うのだった。

* * * * *

街を捜しまわって、案外すぐに赤い服の少女を見つける事が出来

た。

他の工作員らしき人達と何やら話していた……けど、スパイならもう少し見つかりにくい場所にしとけよ……。

俺達が近付くと、少女も俺達に気付いて振り返った。何か……落ち着きの無い子だな……。

「あんたは……」

そして視線はミラに向かっていた。

「アハハハハ！ ようやくあんたを殺れる日が来た！」

身体全体を使って喜び（？）を現わしていた。

……これは、関わりと疲れるタイプか……？

「恨みたつぷりのことろ悪いが、聞かせてもらいたい事がある」

「アハハハハ！ バーカ。答える訳ないだろ！」

うわぁ……否定早え……。

何となく、エリーは見ない方がいいんじゃないだろうか？ とか思ってしまう。

「あなたは……どこかで……ひょっとして……トラヴィス家のナデア様ではありませんか？」

ローエンの言葉に、少女が目を見開いた。

「やはりそうでしたか。六家のお嬢様じゅけがア・ジュールのスパイとは……一体なぜ？」

え……この子お嬢様だったのか！？

「あたしはトラヴィスなんて関係無い！　あたしは四象刃^{フォーヴ}、無影のアグリアだ！」

少女　アグリアがそう叫んだ。それを言う時だけ、まともな感じがしたのは気のせいだろうか？

「四象刃って事は……」

「ガイアスの命で動いているのか」

「だったら何だよ？

スパイって、こんなに簡単に自分の事言っているんだっけか？

「お前はクルスニクの槍を破壊しようとしていたのだな」

「あたりだよ、アハー！」

「私も同じだ。つまり私達は敵では無い。槍の運び出された場所を知っているなら教えてくれ」

ミラが真剣にそう言う中、アグリアは腹を抱えて笑っていた。

「アハハハハ！　誰が教えるかつつの」

「お願い。あなたもあんな危ない物、壊したいって思うでしょ？」

「くせえな……」

アグリアがレイアを見ながらそう呟いた。

「アハハハハ！　決めた。槍を壊す前に、ラ・シュガルに向けて一発ぶっぱなしてやるよ」

街を指差して笑いながらそう言った。
駄目だこいつ……会話が成り立ってない。

「何言ってるの、あなた。みんな一生懸命やろうとしているのに、
どうして邪魔しようとするの！」

「アハハハハ！ やっぱりくせえよ、お前！」
「何？ 失礼な人！」

今度は呟くのではなく、大声で笑いながらレイアに言った。さすがに怒ったのか、レイアも腕を組んだ。

「お前、頑張れば世の中どうにかなると思ってるだろ？ アハハハハ！ お前からはそんな悪臭がぶんぶんすんだよ！」

「頑張るのはいいい事じゃない！」

「うつせー、ブス！ 喋るんじゃないよ！」
「な、なによー！」

今のやり取りで、みんなが呆れたような表情になった。
何だ今のは……？

そんな事を思っていると、アグリアが特殊な作りをした剣を構えた。そして、視線は再びミラに戻っている。

「あんたにやられた、あの時の痛み。忘れて無いからね！」

「結局戦うのかよ……」

「話にならない奴だ」

俺達も武器を構えて、街中での戦闘が始まった。

「アハー！ カセンリン 火旋輪！」

アグリアが炎を纏った剣で突いてくる。標的となった俺は、とっさに剣で防ぐ。が、ギヤリギヤリギヤリ！ 剣の刃が回転して、嫌な音が響き渡る。回転も力強く、気を抜けば一緒に回されそうだ。

「アサルtdダンス！」

「ちっ……！」

横からミラが連続で剣を振るってきて、アグリアは舌打ちをして後方に飛び退いてかわした。

「はあっ！ タイリンゲツカ 大輪月華！」

その先で、レイアが棍の端を持ち長さを活かした回転攻撃を繰り返すが、

「甘えんだよ！ エンフジン 炎舞陣！」

アグリアが剣を頭上に掲げると、剣が3方向に開いた。奇妙な作りだと思ったら、そんなカラクリだったのか。

開いた剣が回転し、炎の竜巻を生み出してレイアを巻き込んだ。

「きゃあっ！？」

「アハハハハ！ そのまま焼け落ちろー！！」

「ちっ……ジュードやるぞ！」

「うん！」

炎に巻き込まれたレイアを助けようと、アルヴィンとジュードが共鳴した。リング

「飛んでけ！」

「貫く！」

「ヒテンシヨウセイク
飛天翔星駆！！」

アルヴィンの大剣に乗ったジュードが、振り上げられるのと同時に天高くジャンプ。そして落下の勢いを乗せた盛大な飛天翔駆が炎の竜巻の目に飛び込んだ。

「ぐあっ！？ このやる……！！」

「まだ行くよ！ アルヴィン！！」
「任せろ！」

攻撃を受けたアグリアが体勢を崩している間に、ジュードとアルヴィンが再び術技^{アーツ}を繰り出す。

「チドリシフキ
千鳥飛沫！！」

ジュードが竜巻を生む程の回転を繰り出すと、空中からアルヴィンがジュードに向かって連射する。銃弾は竜巻によって軌道がずらされ、アグリアに直撃する。

「くそっ……調子に乗るなよガキがあっ！？」

年齢的には同じぐらいな気がするけど……今はそんなツッコみしてる暇は無いな。

「レイア、今治します！」

「あ、ありがと、エリーゼ」

ジュードとアルヴィンが相手をしている間に、エリーゼがレイアを治癒していた。

「フリーズランサー！」

「アリーヴェデルチ！」

ローエン、ミラがそれぞれ精霊術を発動すると、アグリアはすぐに体勢を立て直して避ける。

「ソウウシヨウ綜雨衝！ センエンレッパジンからのつ、閃闇裂破刃！」

避けた隙を突き、無数の突きからの闇を纏った突きを数回繰り出し、最後に吹っ飛ばした。

「があっ！？ …… テメエら…… もうただじゃ済まさねえからな！」

叫ぶと、アグリアの纏う雰囲気明らかに変わった。

「アルヴィン！ 気を付けろ！」

「なっ……！？」

「アハハハ！ おせえんだよ！ グランドフレイム！」

俺の声でとっさにアルヴィンが剣を構えて防御するが、その防御を無視して、アグリアが炎を纏う剣で切り上げた。

アルヴィンが空中に放り出されると、アグリアが地面に剣を突き刺し、上に乗った。

「ぐっ……！！」

「焼けるッ！ ログズ・アクセルッ！」

そして、アグリアを中心に炎が巻き起こる。
空中に居たアルヴィンは直撃してしまう。

「頼むローエン！」

「承知！」

アルヴィンを助けようと、俺はローエンと共鳴する。

「水流集いて！」

「駆けろ一閃！」

「「アクアレイザー！！！」」

矢に水属性のマナを集中して撃ち出す。が、アグリアの作り出した炎には効果は無かった。

「テメエら丸焼きだ！ 焼き払え！ ログズ・イーターツ！！！」

アグリア中心に発生していた炎がさらに大きくなり、俺達みんなを巻き込んだ。

「アハハハハ！ 消し炭になったかあ？」

俺達は何とか炎に堪えたけど、ダメージは思ったよりも大きい。

「まだ終わらないからね！ とっておきスペシャル！」

すぐに立ち直ったレイアとジュードが共鳴していた。

「どうなってもいいよね！」

「神速の連撃、いくよ！」

「「インフィニティア・ストライク！！！」」

レイアがジュードを精霊術で強化すると、ジュードは目にも留まらない連撃をアグリアに打ち込み、最後に掌底で吹っ飛ばした。そしてその先には、レイアが棍を持って待ち構えていた！

「カッシンコン 活神棍・円舞！ワルツ」

飛んできたアグリアを、棍を回しながら舞うように叩く。
あの技は……俺がル・ロンドでソニアさんに喰らった技だ……。

「ぶっ飛べ！ グルグル〜！ お母さん直伝っ！ 活神棍・神楽あーッ！！」カグラ

円舞に続く形で棍を回して吹き飛ばし棍を空高く投げた。それを空中に跳んでキャッチして、落下と同時に地面に倒れていたアグリアを叩きつけた。

「うああああっ！？」

「パーフェクト！」

スタツ、と着地したレイアがそう言った。

アグリアも地面に倒れたままで、ミラがアグリアの首に剣を突き付けた。

「あいにく、剣は不得手でな。うっかり手が滑らないよう、よく考えて答える事だ。槍はどこだ？」

ほとんど脅しな気がするけど、剣を抜いたのはあちらが先だから、これは立派な正当防衛です。

と言うか、こうでもしないと会話が成り立たないもん……。これでは分が悪いとアグリアも分かったのか、舌打ちをしてから

素直に答え始めた。

「研究所の地下には秘密の通路があつて、オルダ宮に繋がつてたんだ」

「オルダ宮つて……？」

分からない単語が出てきてつい口にしてしまうと、ジュードが「王宮だよ」と教えてくれた。

「つて事は……クルスニクの槍は王様の所にあるつて、そういう事か。」

「その通路、まだあるのか？」

「残念。もう潰されたみたいだよ」

「使えないか……」

考えるようにミラが呟いたその瞬間、あまり言葉にしたくない動きでアグリアが逃げ出した。

「……強いていうなら……この世の人なら約9割9分程は嫌いだろう、あの昆虫の動き？」

「マクスウェル！ あんたもいつかぐちゃぐちゃにしてやるからね！」

ある程度逃げてから、ミラを指差してそう叫ぶと、次はレイアを指差した。

「それとブス！ これだけは言つていてやる。お前がいくら努力しようが、報われる事なんて無いんだよ！」

「どうしてそんな事あなたに……！」

レイアが言い終わる前に、アグリアは逃げるように去って行った。

「何なのよ、もー!」

「あ、あんまり気にすんなよ?」

「そうです! レイアは可愛いです!」

エリー……それも大事かもしれんだけど、今は的外れだ……。

「うん……ありがと、2人とも」

明らかに落ち込んでるけど、空元氣みたいにレイアが言った。

「ま、報われるかどーかはその人次第ってな」

「……アルヴィンが言うと、嘘臭いです」

「ちよっ……それはヒデーよ。なあ、カイト?」

俺に振るなよ……。それと、エリーがアルヴィンに対して黒すぎる気がする。

「しかしアルヴィンさんの言う通り、努力をしなければ報われる事はありません。その点、レイアさんの努力は私達が知っていますよ」

「ああ、レイアはちゃんと頑張ってるよ」

「……そうかな、ありがとうね、みんな。よおーし、もっと頑張っちゃうよー!」

落ち込んだ空気はどこかに行って、レイアは元氣になった。

「頑張るのはいいけど、あんまり調子には乗らないでね、レイア?」
「分かってますよーだ」

調子が戻りすぎじゃないか？

「みんな、これからオルダ宮に乗り込む。が、まずは様子見だ。行くぞ」

話しが一区切りついてミラがそう言うのと、俺達はナハティガルが居て、そしてクルスニクの槍があると言うオルダ宮に向かった。

この旅の終着点が見えてきた気がした。

第28話 炎を操る少女（後書き）

戦闘が上手く書けない……何回言っただろうか（笑）

次回もほとんど戦いばかりになると思います。何たって王様が出てきますから。

～今回の共鳴術技～

・千鳥飛沫（水・風）

烈風拳＋レインバレット

ジュードとアルヴィンの共鳴術技。

ジュードが作り出した竜巻に銃弾を撃ち込み軌道を逸らしながら相手に攻撃する。

・アクアレイザー

ヴォルテックライン＋スプラッシュ

カイトとローエンの共鳴術技。

水の力を集めた矢で敵を貫く。

・インフィニティア・ストライク

連牙弾＋クイックネス

ジュードとレイアの共鳴術技。

レイアの術で強化されたジュードが神速の連撃を叩き込み、トド

メに掌底で吹き飛ばす。

第29話 王都の決着（前書き）

共鳴術技の案が尽きかけている……。

第29話 王都の決着

アグリアの戦闘で負った傷を少し癒やしてから、俺達はオルダ宮へと来ていた。

オルダ宮は大きな樹をそのまま建物にしたような外装で、装飾も綺麗だった。これだけでも芸術品と言えるだけの価値はあるだろう。と、品評会をやる為に来た訳じゃないから、感想はここで終了。

「何か……兵士が全然居ないな？」

「うん、王宮なんだからもう少し居てもいいのにね」

俺が言うと、レイアも賛成するようにそう言った。

「出来れば、このまま突破したい所だね」

「だが、敵の本拠地だ。慎重に行くべきだろうな」

いつもなら、「正面衝突だ！」とか言って1人で突っ込もうとするミラが、珍しく慎重と言う言葉を使っていた。

それだけ、クルスニクの槍を破壊する事に本氣って事が。

「どうしたんですか、ローエン？」

エリーの声でローエンを見ると、髭をいじっていた。何か考えている時、ああいう事をするらしいけど、何かいい案でもあるんだろうか？

そう思っただけだと期待していると、思いもよらない言葉が出てきた。

「ジュードさんの言うように……やってみませんか？」

その言葉に、みんなが驚いた。エリーなんて俯く程に。

「おいおい。珍しくミラが慎重にって言ってんだぜ？」

「……何か考えがあるのか？」

アルヴィンの言葉に反応しながらも、ミラはローエンに問い掛ける。

「考えと言う程のものではありませんが、どうでしょうか？」

ミラとローエンの言葉が真逆な気がするけど、どちらでも信頼は出来る。

「まあ、俺はいいと思うよ。ローエンを信じる」

「そうだね。ローエンが言うなら、そうした方がいい気がする」

俺が言うと、ジュードも同じように同意してきた。

話がまとまった所で、俺達は武器を出して王宮の入口に向かって一気に走り出した。

入口に居る数人の兵士を気絶させる。

「増援も来ないのか？」

「そうみたいだね」

兵士を倒しても、一向に増援が来る気配は無い。

「王様の居る場所なのに……不思議です」

「罠かもしれないぜ」

確かに、中に誘い込んで一網打尽に、って算段かもしれないけど、

それにしても妙だろう。

「すでにラ・シュガル軍はア・ジュールとの戦いに向けて動いているのかもしれませんが」

「それなら、むしろ守りが厚い筈じゃないか？」

「もしかして、南北の要害が関係してるの？」

ジュードが尋ねるとローエンが頷いた。

「ここは決戦都市としては造られていませんから、街の内部にまで突破されれば敗戦は濃厚です。ですから、戦時下は兵士の大半が街を離れ、海上の防衛やガンダラ要塞に配置されるのです」

「だから突破しようって言ったのか」

「賭でしたかね」

とは言え、そこを読むのはすごいと思う。

けど、そうだとすれば、もう戦争は間近と言う事だ。その前になんとかクルスニクの槍は破壊したい。

みんなの思いも同じと信じて、オルダ宮の中へと入った。

入ってすぐ、道が無かった。その代わりとでも言うように、変な魔法陣が描かれていた。

「オルダ宮の各所を繋ぐ蓮華陣ロータスです。これを使わないと奥には進めません」

ローエンの説明を受けながら、蓮華陣に乗る。フワツとした瞬間、違う場所に飛ばされていた。

……これがワープって奴か……。まさかこんな所で味わえるとは

な。

それからいくつか蓮華陣に乗ってワープを繰り返して、ついにナハティガルの居る部屋に辿り着いた。

ナハティガルは中で、玉座に座っていた。

「来たか、マクスウェル。……まさかあの怪我から復活するとはな」
「……ナハティガル」

ミラの足が治っている事が少し驚きだったのか、そんな事を言っ
た。

「貴様は槍の下で待っておれ。マクスウェル狩りの後は、北の部族
狩りといくぞ」

「かしこまりました」

ナハティガルは近くに居た男性 名前は……何だっけ、ジランド
って言ったか。そいつに言って、ジランドは一礼して去った。

「イルベルト。主である儂に、本気で逆らうつもりか？」

「私の主はクレイン様、ただお一人だけです」

「今なら許してやる。儂の下に戻ってこい！」

ナハティガルはローエンの言葉を無視するかのように、そう言い
放った。

「あの頃、あなたの内に見た王の器は、すっかり陰りをみせてしま
った」

「儂以外に、王に相応しい者など存在せぬ」

「まだ分かっていないようだな。人を統べる資質とは何かを」

ミラが言くとナハティガルは、「資質など王には無縁」と豪語した。

「だから民を犠牲にしてもいいと？」

「そうだ。それが農の権利だ。精霊も、今に支配してみせよう」

こいつ……人間も精霊も、全部犠牲にするつもりなのか！？

「人も精霊も、あなたなんか支配されたりしない！」

「小僧が……マクスウェルとつるんですっかりつけあがりおって」

我慢出来ずに叫ぶジュードを侮蔑するように、ナハティガルが言う。

「あんたこそ、いきなり強い力得たからって調子に乗り過ぎなんじゃないか？」

「ふんっ、腰抜けが何を言うか」

どうやらガンダラ要塞の時の事を言っているらしい。
残念ながら、あの時とは違うんだよ。

「その様子じゃ、ローエンがどんなにあんたの事で悩んでいたのかも理解出来そうにないな？」

「民が悩むなど当然！ 貴様らに安息と生きる権利など無い！ 農の為に命を費やせ！ それが農の民たる使命だ！」

俺の世界にも独裁政治はあるけど、それもこんななのか……。話し合いじゃ何も解決はしそうに無い。

「救いようが無いな」

「時間の無駄だったようだな。今、全てを終わらせてやる」

ミラが呆れたように言うのと同時に、ナハティガルは武器を取り出した。槍のようなそれを天井に掲げると、何かのエネルギーが槍に流れ込む。

「クルスニクの槍が吸収したマナの部分転用よ」

「私は、あなたを同じ道を歩む友だと思っていましたが……どうやら、もう引き返す道はないのですね……」

ローエンが覚悟したかのように言いながら、剣を抜いた。
やっぱりこうなるんだな。俺達も武器を構える。

「お前みたいに考えられたら、どれだけ楽だろうな。けどよ、正直付き合ってらんねーわ、裸の王様さんよ」

「こんな人が自分達の王様だなんて、信じられない！ 絶対、変わってもらうから！」

「ジュードやミラ……カイト……みんな……友達を守ります！」

「やるぞー！ 敵討ちだー！」

「あんたに人も精霊も犠牲にはさせない！ 何が大切なのか、分かってやる！」

「あなたの野望も終わりだ！ うっん、ここで終わりにしなきゃ！」

「覚悟しろ！ ナハティガル！」

みんなの思いは同じだった。

なら……負けない！ 負ける訳にはいかない！

「見せてやる。リーゼ・マクシアを統一する力を！」

ナハティガルも武器をこちらに向けた。

先手必勝と言わんばかりに、俺は矢を放った。けど、それは簡単に槍で弾かれてしまう。

「このような鈍ら、なめるな！
アンリユウソウ 闇竜槍！」

弾いてすぐに、ナハティガルは槍を構えて突進突きをしてきた。かなり距離があつた筈なのに、一瞬で距離が詰められる。ミラは槍をどうにか回避した。

サザンカ
「三散華！」
ソウハセン
「蒼破閃！」

少しだけ隙が出来た所で、ジュードが3連撃の技を仕掛ける。それを防いだナハティガルの背後から、俺は真空の衝撃波を放つ。

「ふんっ！
ホウガンソウ 崩岩槍！」

衝撃波は槍を右に薙ぐ事で防がれてしまった。

「デイベインストリーク！」

ミラが光のレーザーを放つと、ようやくそれがナハティガルにヒットした。

たたみ掛けるなら今のうちだ。

「ここだね、アルヴィン君！」
「やってやるぜ！」
ショウハジユウモンジ
「「衝破十文字！！」」

レイアとアルヴィンが共鳴して、2人が十字を描くように交差し
て突き、クロスした所が爆発した。

「ぐぬう！」

「ジュード、今だ！」

「分かった！」

まだ身動きが取れていない内に、俺はさらにジュードと共鳴する。

「「シャツコウケン灼光拳！ はあっ！」」

俺がナハティガルに突進して背後に回り込みそのまま斬りつけ、
ジュードがそのうちにナハティガルに上段突きを放ち、最後に闘気
を爆発させた。

「ぐっ！ 貴様らの力はその程度か？」

床に倒れ込むけど、すぐに立ち上がるナハティガルには、まるで
ダメージが無いかのようにそう言った。

「まさか……効いて無いんですか？」

「なんてタフな野郎だよ……！」

「ですが、全く効いていない訳ではなさそうですよ」

驚いていたエリートアルヴィンに、ローエンがそう言う。

「貴様らが何をしようと、俺を倒せる筈は無い！ エアプレッシャ
ー！」

「ぐあっ！？」

いきなり精霊術が発動して、頭上から重圧で押し潰されそうになる。

「カイト！ 回復しますよ！」

「そのような暇を与えているのか！ ハジャチリュウジン 破邪地竜陣！」

「きやああ！」

駆け寄ってくるエリーの足元から竜が出てきて、エリーが床に倒れ込んだ。

ジレンバクシヨウ
「時練爆鐘！」

「え、何これ！」

「まさか、爆発の術式！？」

ナハティガルの横薙ぎを喰らったレイアとミラに、何かの術式が刻み込まれたらしく、次の瞬間 2人は爆発に巻き込まれていた。

「きやあつ！？」

「ぐううつ！？」

「ミラ！ レイア！」

なんとか起き上がった俺は2人の名前を呼ぶ。爆発のダメージは大きいのか、なかなか立ち上がろうとしない。

「2人とも大丈夫？ 治癒功！」

ジュードがナハティガルの攻撃を避けながらミラとレイアに近付くと、治癒技を使って2人の傷のある程度癒していた。

「エリー、大丈夫か？」

「は、はい……」

「なんとかぶじだよー」

よかった、エリーもティポも無事のようにだ。

「回復頼むな？」

「任せてください！」

今度はエリーを傷つけさせないように、俺は治癒術を唱えようとしているエリーの前に立つ。

「行くぜ、じいさん！」

「やりましょう！」

「降り注げ！ フェイタルサーキュラー！！」

ローエンが投げたナイフが大きな三角形を作り、アルヴィンが宙に放った無数の銃弾が降り注いだ。それと同時に、エリーの治癒術も発動してみんなの傷が癒えていく。

「ぐうっ！ まだこんな力が残っていたか！ ならば、我が力で絶望を味わうがいい！ はあぁっ！！」

ナハティガルが闘気を開放して、槍を構える。

「ふんっ！ 天上天下、唯我独尊！ デモンズランス！！」

宙に飛んだナハティガルが槍にマナを溜めると、その槍を俺達に向かって投げつけてきた。床に突き刺さった瞬間、俺達全員を巻き込むような大爆発が起こる。

俺はとつさに近くに居たエリーを庇うように抱きしめた。

「が……っ!？」

爆発で身体が宙に浮いていたのか、いきなり背中を固い床に叩きつけられて、肺の酸素を吐き出してしまう。

抱きかかえたエリーを見ると、なんとか怪我は無いようだ。

「愚かな奴らだ。王である儂に楯突くとはな」

戦いが終わったとしても言うように、ナハティガルが言う。

確かに、みんなダメージが大きくて、みんなは床に倒れている。

けど……これで終わりになんかさせてやるか!

「まだ終わってないぞ! ナハティガルツ!」

向こうでミラが立ち上がりながら叫ぶ。

いくらミラでも、今のフラフラの状態ではともに戦えないだろうと、俺は抱えたエリーに治療術の使用を促した。

「まだ立ち上がる余力があつたか……。だが、マクスウェル。貴様1人で何が出来る?」

鼻で笑いながらナハティガルが言う。

立ち上がる俺と、一瞬目が合った。そしてミラは、笑って答えた。

「ふふっ……私は1人ではない。信頼出来る仲間達が居るからな!

カイトツ!」

「任せろ!」

「何ッ!？」

ナハティガルを挟んで俺達は走り出した。途中、ナハティガルがミラに精霊術を発動させるが、

「やらせ、ないよ……！」

「頑張ってくださいっ！」

エリーとレイアが共鳴して、強力な治癒術を発動した。

「万物に宿りし命！」

「その息吹をここに！」

「リザレクション……！」

俺達全員を包み込むような治癒術で、傷はほぼ完全に癒えた。

それによつて、ナハティガルが放った精霊術を、ミラは堪える事が出来た。ナハティガルの表情が歪むのが分かる。

そして、俺とミラも共鳴して、大技を叩き込む！

「絶対なる終焉！」

「それが貴様の運命だ！」

「「刻め！ セルシウスキャリバー……！」」

氷を纏わせた剣でナハティガルを斬り、ミラが雷の剣で斬り上げ、投げつける。そして、俺は氷のマナを再び剣に集中させて跳ぶ。落下しながら斬り下ろし、最後に駆けながら斬る。

「ぐおおおッ！？」

「今だ！ ローエン！」

精霊術を準備していたローエンに叫ぶ。

「分かっていますとも！ タイダルウェイブ！」

発動した術で、ナハティガルは激流に飲み込まれる。

「フェローチエ、荒々しく！」

激流から複数の水柱が上がり、

「グラツィオーソ、優雅に！」

それら全てを凍てつかせる。

「ナハティガル、あなたが望んだ決着です。従ってもらいますよ」

背を向けたローエンが数歩歩いてそう呟き、

「グランドフィナーレ！！」

合図と共に凍てついた全てが砕け散った。

「ぐおおおおおッ！？」

今のローエンの攻撃で深手を負ったナハティガルは、ついに片膝を床に着いた。槍も遠くに転がっている。

「ぐうう……バカ者共が……儂を殺せば、ラ・シュガルはガイアスに飲み込まれるぞ……」

ナハティガルは傷付いた身体を必死に動かし、玉座へと向かった。

「ですが、王とて罪は償わねばなりません」

その背中にローエンが言った。

「関係あるか！ …… クルスニクの槍があれば…… 僕は絶対の力を……」

この期に及んでまだ力を欲するナハティガルの名を、ミラが叫んだ。剣先をナハティガルに向ける。

「人の分を超えた力は世界そのものを滅ぼす。お前も同様だ」
「ミラ、待って！」

今にも斬りかかって行きそうなミラを、エリーが叫んで止めた。

「この人はローエンの友達だから…… ローエンに……」

エリーがそう言うと、ミラは剣を鞘に収めていた。

その間に、ローエンは1人、玉座に座るナハティガルに近付いた。

「ナハティガル…… この国には民を導く王が必要です。私もあなたと同じなのです。背負うべき責任から目を背けた…… ナハティガル」

2人にしか分からない内容の会話。ナハティガルが目を見開いて、何かに気付いたようにローエンの名を呟いた。

「私とあなたとで、もう一度ラ・シュガルの未来を……」

「貴様は僕の生み出した業まで背負って……」

「構いません」

ローエンが即答した。

2人は分かり合えたんだろうか？ ナハティガルは力を抜いて、戦いの雰囲気は無くなった。

ローエンの覚悟は、こういう事だったのかもしれない。

「……ッ!？」

—安心と思つた瞬間、急に背筋に寒気が走つた。
何だ……この、嫌な予感はい!？」

「ローエン！ ナハティガルを連れて逃げろ！」

「何ですと……!？」

叫んでローエンが振り返つた次の瞬間 どこからか氷の槍が飛んできて、ナハティガルを玉座ごと貫いた。

バリイン！ と、貫いた氷の槍は砕け散る。

俺はすぐにナハティガルに近付く。とつさに脳裏を過ぎつたのは、クレインを助けた時の事。致命傷だったクレインを助けた時、自分の何かが抜けてクレインに流れていった。

今なら分かる。あの時流れたのは、俺のマナだった。

なら、この致命傷だって、俺がマナを送れば治るかもしれない。

血が流れて止まらない傷口に手をかざすと、淡い光が発せられた。

「これは……あの時と同じ光！」

「治療術だよ！」

ローエンとジュードが叫ぶ。あの2人は前にも見てたもんな。

「傷口が塞がっていきます！」

「頑張つて、カイト君！」

エリーとレイアの声も聞こえる。

「これは……止せ、カイト！ 死ぬ気か！？」

ミラが叫んだ瞬間、急に力が抜けて行く。

視界も次第にぼやけてきた。

……くそっ……あと……ちょっと……なの、に……。

「カイト！」

俺の名を誰かが叫ぶのが聞こえるのと同時に、俺の意識は暗闇に落ちていった。

第29話 王都の決着（後書き）

ナハティガルはクレインみたいに死なないようにする事も出来たんですが……物語上仕方ありませんよ……。
次回は沼野に行きます。

〽今回の共鳴術技〽

・灼光拳

幻狼斬＋烈破掌

カイトとジュードの共鳴術技。

幻狼斬で斬りつけた敵に上段突きを繰り出し爆発させる。

・セルシウスキャリバー

凍牙霧影剣＋サンダーブレード

カイトとミラの共鳴術技。

2人がそれぞれ氷と雷の剣で交差するように斬りつけ、最後にその力を敵に叩きつける。

第30話 沼野を駆ける

「ん……あれ、ここは……？」

目を開けると、辺りは暗い場所だった。背中冷たく固い床。

「起きましたか、カイトさん」

「大丈夫ですか？」

そう言いながら、ローエンとエリーが俺を覗き込んできた。
起き上がると頭痛がした。

「俺……どうして……そうだ、ナハティガルは！？」

ローエンに聞くと、無言で首を横に振った。エリーも悲しそうに
俯いてしまう。

「ごめん……俺が気絶なんかしなければ……」

「いいのです。カイトさんは必死にナハティガルを助けようとして
くれました。そのお気持ちだけでも、私は嬉しかった」

そう言うてはくれるけど……俺はやっぱり助けたかった。

どんなに悪い奴でも、助かるなら、助けられたなら助けたかった
のに……。

「身体、大丈夫なんですか？」

「え？ ああ……大丈夫だよ」

突然エリーが聞いてきたから、無意識に心配させない言葉を言っ

ていた。

まあ、実際に全然問題は無い訳だからな。

「みんなは？」

「クルスニクの槍を見に行きました」

ローエンがそう答えた瞬間、ミラ達が玉座の後ろにあつた蓮華陣ロータスに現れた。

「おつ、カイト起きてるな？」

「心配したよ」

「悪いな。気絶ばかりで」

旅の当初から気絶多かったもんな。

まさかこんな所でも気絶するとは思わなかったけど。

「それで、クルスニクの槍は？」

「それが……何も無かったの」

「もしかしたら、ジランドが持ち出したのかもしれない」

ジランドって……ナハティガルの側近みたいな奴か。何が目的で？

「とにかく、話は後だ。ひとまず外に出るぞ」

ミラがそう言って、俺達はオルダ宮から出る事になった。

けど、その直前、俺だけミラに呼び止められた。研究所の時とは反対だな。

「カイト、どういっつもりだ？」

「何が？」

いきなりそんな事を言われて首を傾げると、ミラは小さく息を吐いた。

「ナハティガルを助けようとした時の事だ。お前、治癒術ではなく直接マナを送っていたな？」

「ああ、よく分かったな」

「私を誰だと思っている？」

確かに……マクスウェルなら分かるのか。

「お前のマナがどういう理由で治癒術と同じ効果になるのかは分からないが、今後それは使うな」

「……どうして？」

「研究所でハ・ミルの村長がどうなったか、覚えているな？」

村長……確か、マナを吸い取られていたんだっけか。

それと何の関係が？

「マナを渡し続け枯渇すれば、お前もあのようになる」

「!？」

「私も仲間があのような事で死ぬのは見たくないのにな」

ミラが言った事は少し衝撃的だったけど、俺は首を横に振った。

「俺は、俺が助けられるのなら助けたいだけだよ」

「自分の命を危険にさらしてもか？」

「もちろん死ぬのは嫌だ。けど、その時俺にしか助けられないのなら、俺は力を使うよ」

見殺しになんかしたくないから。例え自分が危険な状態でも。

「……どうあっても、その意思是曲げないようだな」

「ああ。俺は誰も殺したくないし、誰も死なせたくないんだ。それが信念……って言うの大袈裟かな」

とは言え、俺が出来るのは小さな事だ。だからそれは、自分の手が届く範囲の事になってしまふ。

「信念、か……分かった。そうなら私は止めはしないよ」

「サンキュな、ミラ。さあ、早くみんなを追おうぜ」

そう言つて、俺達は走つてみんなを追つた。

誰も死なせたくない。でも……俺なんかが助けられる命はあるんだろうか？

* * * * *

みんなと合流してから外に出ると、早速兵士に見つかつてしまつた。けど、ローエンの姿を見た兵士は、警戒を解いた。引退しても、ローエンってやっぱり凄い人なんだな。

「伝令だ！ 通してくれ！」

そんな時、やけに慌てた様子の兵士が1人走ってきた。

「ア・ジュール軍の侵攻だ！ 敵兵力およそ5万！」

「5万も……！？」

兵士の言葉に思わず声を上げてしまった。

「戦争が……始まった……」

しかも、王が亡くなったこの最悪な状況で、だ。

「ご、5万の大軍！？ 東方^{サマンガ}辺境か！？」

「違う！ イル・ファン北方、ファイザバード沼野だ！」

それって……今は霊勢の影響とかで通れなかったんじゃないのか？

「バカな！ どのようにしてあの地を攻略するつもりなのですか！
？ 霊勢は変化していない筈！」

ファイザバード沼野を実際に知っているのか、ローエンが驚きの
声を上げる。

兵士はそんなローエンに気付くと、ア・ジュール軍がどのように
進行しているかは不明と教えてくれた。

「大丈夫なの？ 兵力はガンダラ要塞や海上に集中してるんでしょ
？」

「そうだよ！ 今から移動して間に合うのか！？」

ジュードが言った事で思い出して、俺もそう言った。

海上ならまだ間に合うかもしれないけど、ガンダラ要塞の兵はも

う無いものと思っていいるだろう。それほどの距離がある。

「ご安心ください。ジランド参謀副長が敵の攻撃を予期し、すでに新兵器を移送中です」

「新兵器……って、まさか！」

クルスニクの槍か！？

ミラが腕を組んでやはりかと呟いた。

「あなた、この伝令は誰の命令によるものですか？」

「ジランド参謀副長ですが……それが何か？」

「いえ、ありがとう」

ローエンがそう礼を言くと、兵士は敬礼をしてオルダ宮の中に入って行った。俺達を呼び止めた兵士達も後に続く。

「何か裏がありそうだな」

「ですが、今はファイザバード沼野へ急ぎましょう」

クルスニクの槍が使われる前に、なんとか壊さないといけない。

「休まなくてもいいんですか？」

出発しようとした所でエリーがそう聞いてくると、みんなの視線が俺に集中した。

「大丈夫だよ。それに、今は休んでる暇は無いだろう？」

俺の所為で行動に滞りが出来るのは嫌だしな。

「ああ、カイトには悪いが休む暇は無い」

「でも、無理はしないでね？」

ジュードの言葉に頷いて、俺達はようやくファイザバード沼野に向かった。

でも、ここで無茶すんなってのは……無理な注文だぜ、ジュード。

* * * * *

アルカンド湿原を通っている途中、ティポが湿気吸い過ぎて膨らむと言う以外と言うか緊張感の無いアクシデントがあったりしながら、俺達はファイザバード沼野へと辿り着いた。

着いてすぐに兵士に動きを止められたけど、そこはローエンの出番。『指揮者』コンダクターの二つ名で簡単に通してくれた。

作戦司令部みたいな場所に連れられると、そこには不思議な台があった。これが戦局図と言うやつだろうか。ローエンの話では、リアるオーブの反応を拾って表示する物らしい。

まあ……一学生にはぱっと見じゃ何が何だか分かる筈も無い。シユミレーシヨンゲームとかが得意な人なら、何となく分かるんだろうけど……あいに俺はゲームやらないからなあ……。

「あれ？ これだけなんか違うよ？」

レイアが戦局図を見て、1つの駒みたいな物を見つけて言った。
確かに他のよりも大きい気がする。

「それは参謀副長が進めている戦略の為の部隊です。四象刃^{フォーヴ}アグリ
アの妨害を突破したようですね」

アグリア……あいつが居るのか……。

いや、戦争なんだから、他の四象刃　ジャオ、ウィンガル、プ
レザも居るんだろう。

「ジランドの戦略だと？」

何か思う所があるのか、ミラが聞いた。

「一の鐘の後には、予定到達点に至ると思われます。詳細は聞かさ
れていませんが、戦局の流れを一気にこちらへと傾ける切り札と
か。作戦実行の際に、予定到達点へ出来るだけ部隊を集結させるよ
う、指示が出ています」

何で兵に詳細を言わないんだ？　それに、何の為に1か所に集め
ようとする……？

ダメだ……こういうのは苦手過ぎる。考えても全く分からない。

「ふむ……この進路だと、予定到達点はここですね？」

と、ローエンが示すと、兵士は驚いていた。

「嫌な予感がしますね……」

場所を確認してから、ローエンがそう呟く。

「ああ。クルスニクの槍を使つつもりだろうが、自軍に詳細を明かさな理由が見えない」

ミラも俺と同じように分からないらしい。

「……クルスニクの槍は、ジランドと言う人が持って行つたんでしようか……」

「状況的にそうだろうな」

エリーの言葉を肯定するように俺が言うと、ジュードが「けど……」と呟きミラと視線を合わせた。

「クルスニクの槍の起動に必要な『カギ』は私が奪い、イバルに託してある」

「だから槍は使われる事は無いと思ってたんだ」

イバルに託したんだ……何か、不安だな……。

「ですが、槍は持ち出され、おそらく使用準備を進めている。それはつまり……」

「新たな『カギ』が生み出されたのかもしれん」

いずれにしても、判断材料が少な過ぎるな……。

「そういえば、ア・ジュール軍ってどうやって沼野を進んでるんだ？ 確か地霊ラノームは来てないんだろ？」

槍がどうやって使われるのかは分からないから、とりあえず話を変えてみる。

「それなら、ア・ジュールが開発した増霊極^{ブースター}の効果です」
「増霊極……」

その単語を聞いて、みんなの視線はティポに注がれた。

「そんな見ないでよー。ハズカシイ」

みんなの視線に、エリーも頬を赤くしていた。

「敵は増霊極によってマナを増大させ、自分達の周囲の霊勢を変化させています」

「えっと……つまり……人工的に地霊を作り出したって事か？」

「そのようですね。マナで地の微精霊を大量に召喚すれば、確かにそれは可能だと思います。さすがウィンガル……何と言う奇策を……」

みんなに分かりやすくローエンが説明する。

増霊極って、そんな使い方もあったのか……。それを戦い以外の使い方してほしかったけどな。

「ラ・シュガル軍はどうやって抵抗してるんですか？」

確かに……いや、ローエンの予測だとラ・シュガル側にも増霊極はある筈だ。

「我々にも増霊極はありますからね」

「兵全員に配備し、小隊の1人に霊勢を変化させる者を充てたのですね？」

「は、はい。おっしゃるとおりです」

ローエンにはすべてお見通しだった。

「もしかして、ぼくらの出番？」

そう言ってエリーとティポが顔を見合わせた。

俺達は増霊極持ってないし、必然的にそうなるんだろっか？

と想像していたら、ミラが「ここは地の術に長けたローエンに任せ
た方がいいだろう」と言った。エリーとティポは、残念そうに肩を
落とした。

「ははは……まあ、援護は頼りにしてるよ」

「……はい、頑張ります……」

撫でながら言うと、少し不満そうに返された。

「時間がありません。すぐにジランドの部隊を追いましょっ」

ローエンがそう言って、増霊極を借りるローエンを俺達は外で待
った。

「まさかとは思っけど……来ないよな……？ ……イバル……」

「ま、まさか……来ないよ、多分……」

俺の呟きが聞こえたのか、ジュードがそう答えた。顔が少し引き
つっている。

不安が生まれてしまったジュードは、アルヴィンを捜しに行った。
こんな時にどこに行ったんだろっか？

「アルヴィン……また嘘ですか？」

「エリーゼってば、何言ってるんだよ」
「白々しいぞー！」

いつの間にか居たアルヴィンに、エリーとティポが何か言っていた。

「おたくも疑ってるの？」

アルヴィンが近づくジュードにそう言うと、ジュードは俯いた。
この状況で空気が悪過ぎじゃありませんか？

「アルヴィンさん、この状況で1人で動かれますと、さすがに疑われますよ」

「アルヴィン、今は勝手に僕達から離れないでよ」

「ホントだよ。約束だからね！」

ジュードとレイアに言われて、アルヴィンは呆れたように頷いていたのだった。

* * * * *

「皆さん、私から離れないでください」

戦地へ向かう途中、崖を降りるとローエンがそう言って増霊極を

使用した。ローエンを中心に、霊勢が地霊に変化する。

「思ったよりも視界が悪いね。敵がどこに居るのか、全然分からないよ」

強く降る雨の所為か、視界は最悪だ。

「迂回して、安全なルートを探すか？」

「ううん、直線^{まっすぐ}に駆け抜けようよ。それが一番早い」

アルヴィンの安全策を、ジュードは蹴った。

オルダ宮の時もだけど、何か考え方がミラに似てきてるよな。

「ぼくたち死んじやうかもねー」

「大丈夫だよ。みんなが居るんだからさ」

こういう時に、「俺が守るよ」って言えばなあ……。まあ、気持ちはそうなんだけどな。

「恐れるな」

レイアもエリーも不安で仕方がない中、ミラがそう言った。

「今、最も恐れるべきは、人間と精霊の命が脅かされる事だ」

「ミラ、カッコいい！」

確かにカッコよかった。レイアもエリーも、それだけで不安が無くなったような表情を浮かべる。

「みんな、行こう」

「クルスニクの槍を破壊する！」

ミラがそう叫んで、俺達は戦場へと走り出す。

途中、兵士が道を塞ぐけど、「止まるな！」とミラが叫んだ。

少し進んで戦場のど真ん中を走っていると、いきなりラ・シュガルの兵士が攻撃してきた。

「何すんだよ！」

「僕達は敵じゃないよ！」

「ジランド参謀副長より全軍に通達があつた！『指揮者イルベルト』は敵となった。殺してでも排除せよ、とな！」

「なんですと！？」

兵士の言葉に、ローエンは驚きを隠せない。

「ラ・シュガル戦略要点の破壊など、絶対にさせん！」

兵士達は武器を構えて、俺達を殺す気だ。

「くっ……！ 結局ラ・シュガル兵と戦うのか！」

「私達を殺そうとしています。ジランドは感情的な軍師のようですね」

「まさか……俺達がナハティガルと戦ったからか？」

あの時ジランドも一緒に居たからな。俺達を敵視する理由は十分にある。

「勝つためには手段を選ばない。んな奴はいつもそんなもんだろ」

「戦争に勝つ事のみが目的ではないかもしれないな」

他の目的……？ それにはクルスニクの槍が関わっているのは確かだな。

「何か嫌な感じがするよ！」

「うん、槍の下へ急ごう！」

「一気に蹴散らすぞ！」

倒してもまた現れる兵士達に、ミラが1人で突っ込む。

「ミラ、張り切ってますね！」

「張り切りすぎじゃないか？」

剣を振るいながらミラの様子を見る。いつもの何倍も勇ましいな……。

（てめえが死んだら人間も精霊の命も脅かされる。どうしてその矛盾を無視してられるのかね……）

「何、アルヴィン？」

小声で何かを呟いたアルヴィンにジュードが反応した。その一瞬の隙に、兵士がジュードに槍を向けた。

俺はその直前に、槍を弾いて兵士の顔面を柄で殴って気絶させる。

「余所見すんな、ジュード！」

「そうだぞ、優等生！」

「うん、ごめん2人とも！」

乱戦に次ぐ乱戦。兵士は倒しても倒しても、先が見えてこない。

「まだ来るの!? でも、僕が!」

「おい、無理し過ぎじゃねえか? 下がってろって!」
「できないよ!」

1人で頑張るジュードだけど、これだけは譲れないと言うように拳を振るう。

「アルヴィンの言うとおりだ。槍はまではまだある」

「僕は大丈夫だよ! それよりも、ミラは前だけを見ていて! お願ひ!」

「ふふ……ありがとう。私は心強い友を得た」

「俺も出来る限りフオローするからな! ジュード! ミラ!」

とは言え、エリーからはあまり離れられない。守ると決めているからな。俺もそこだけは譲れないし譲るつもりも無い。

「ちい! うじゃうじゃと湧いてきやがって! あと少しだったのに!」

「アルヴィン君、大丈夫?」

「無理はすんなよ!」

「お前らに心配されるほど、やわじゃないよ!」

そう言いつつも、兵士に向かって剣を振る。

「本当に……平気ですか?」

「嘔吐きだから心配してくれんの?」

「ち、違いますっ!」

「もうすぐそれも無しだ!」

「それもウソだね!」

「こればつかしはホントかもよ？」

「え……？」

「2人とも、話し込んでもとやられるぜ？」

ヴォルトアローを放ち、兵士を倒していく。
クルスニクの檣まではあともう少しだった。

「はあ、はあ………あと、ちょっとだ！」

「大丈夫ですか？ ジュードさん！」

「これが戦争なんだね」

疲れをものとしないうちに言う。
無茶してんのはお前じゃねーかよ！

「はい。戦争は若者の命を奪い、先を生きた者達を置き去りにする。
若者に残すべき未来に彼等はいません！」

「行こう、ローエン！ そんな戦いは早く終わらせなきゃ！」

「参りましょう！ 檣の運ばれた丘はもうすぐ。あとひと踏ん張り
です！」

ジュードがもう一度気合を入れ直した。

「はあ………はあ………」

「キビシー………」

「大丈夫か、エリー！」

明らかに疲労が溜まっているエリー。このままじゃ、丘に着く前
に……いや、何としても守り抜いてやるからな！

「フォローするぜ？ お姫様！」

「そんなの、頼んでませんっ！」

「その元気があるなら、大丈夫だな」

「あ……」

「ありがとう……」

心配された事が嬉しかったのか、エリーとティポがアルヴィンに礼を言っていた。

「もう！ しつこい！」

「レイアさん！ 単独で突っ込むと包囲されますよ！」

レイアが突っ込みそうになったのを、ローエンが止める。

「ミラ！ このままじゃまずいよ！」

「かと言って引く訳にはいかない！ なんとか押し切るんだ！」

丘まであと少し！

「エリー、無理すんなよ！」

「はい、大丈夫です！」

「カイト君こそ無茶しないでよねー！」

エリーとティポに心配されて、思わず笑ってしまった。

「こんなの無茶に入らねえよ！」

それを証明するかのように、俺は雷を纏った剣で兵士を薙ぎ倒していく。もちろん、気絶させるだけだ。

「す、凄いです……」

「ほら、行^くぜエリー！」

ちょうど兵士が居なくなつて出来た道を、俺はエリーの手を引いて走つた。

クルスニクの槍が運ばれた丘は、もうすぐ目の前だつた。

第30話 沼野を駆ける（後書き）

今回会話ばっかになってる気が……一応戦ってますよ。
次回はあの3人と戦います。

第31話 四象刃との決戦（前書き）

とは言え物語上の都合で1人いませんがね（笑）

第31話 四象刃との決戦

戦場を突っ切つてようやく兵士に襲われなくなり、ほんの少しだけ休息をとってから進むと、またラ・シュガルの兵士が沢山見えてきた。

けど、そいつらは俺達には気付いておらず、何かを囲んでいた。

「あれは……四象刃！？」
フォーヴ

兵士の合間から見た3人の人物を見て、俺は声を上げた。

そう、ラ・シュガル兵士に囲まれていたのは、ジャオとウィンガルとプレザ 四象刃の面々だった。

残りの1人、アグリアが居ないのは何でだろうか？

だけど、数でかなりハンデがあったにも関わらず、ウィンガル達はほとんど一瞬で兵士を倒していった。

改めてデタラメな強さだと思い知らされた。

戦闘が終わった事を確認してから、俺達は3人のもとへと行く。

「来たか、マクスウェル」

ミラの姿を確認したウィンガルが、まるで待っていたように言う。

「やはり戦場でまみえる事になったか。悲しい時代だのお」

ジャオは俺達を見て もしかしたらエリーを見て 残念そうに目を伏せた。

「山狩りは楽しかったわ、アル」

「そいつはよかった」

プレザはカン・バルクの時の事を言ってるらしい。あの時、アルヴィンが嘘をついてくれたんだっけな。

「ジランドは討ったの？」

「答える義理は無いな」

こちらの問いには相変わらず答えない。

「ならば話を変えましょう。道を開けろ！」

「うふふ、冗談でしょ？」

ミラの言葉に、プレザが失笑する。

「檣は破壊する。それでこの戦いはお前達の勝利だろう。何故それで満足できない？」

「陛下の望みだからだ」

「この戦は通過点に過ぎない」

ガイアスは何を考えているんだろう？

これが通過点ってどういう意味だ？

「ここで争えば、あなた達も命を落とすかもしれない。王を支える者が居なくなるのですよ！」

「陛下はお1人でも歩まれるわ」

そんな事はないと思う。支えてくれる人が居なければ、自分を正してくれるものは完全に無くなる。

王だって、それは同じな筈だ。

ナハティガルは最期にそれが分かったんだと思う。

「イルベルト殿。あなたがそれを言えるのか？」

ウィンガルが言うと、ローエンは眉をひそめた。

何も答えないローエンに、ウィンガルがさらに言葉を続ける。

「民の先陣を切り、戦わねばならない者であるあなたは最後尾に回ってしまった。その結果、ナハティガルの独裁を許し、手に掛けた」

ウィンガルはナハティガルが死んだ事を知っていたらしい。
情報早すぎじゃないか？

「ローエンは悪くないよ。悪いのはナハティガルだ」

ジュードが庇うように言うが、ウィンガルは「国にとって個人の是非は関わりの無い事だ」と言った。

「……どういう事？」

「導く指導者が居なければ、民は路頭に迷うだけ、と言っている」
「なら……今からでもローエンが……」

ローエンなら、混乱した国でも導く程の技量があると思った俺は、
ローエンを見ながら言う。

だけど、ローエンは首を横に振った。

「そう簡単にはいきません。私など所詮は一介の軍師。王にはふさわしい器が必要なのです」

王になるには……それだけの器が必要だって、そういう事が……。

「我らが王はその器をもつておる」

「そして民を導く為の道をこの先に見出されたのよ」

「槍は我らが、王の力として貰い受ける！」

3人が言つと、ミラも叫んだ。

「何度も言わせるな。クルスニクの槍は渡さない。どんな理由があるうとも、だ！」

「ミラの……マクスウェルの思いは邪魔させない！」

ミラとジュードが構えると、俺達も武器を出した。

それと同時に、ウインガルの髪が白くなり、マナが急増した。カ
ン・バルクで見た戦闘モードだ。ジャオとプレザも構える。

「あんたらを倒してでも先に進むからな！」

（倒せるものなら倒してみろッ！）

相変わらず何言ってるかは分からないけど、多分通さないって言
ってるんだと思う。

素早い動きで突っ込んでくるウインガルの剣を防ぎ、こちらも攻
撃する。けど、ほとんど防戦一方だった。

「カイトさん、援護します！ スプラッシュ！」

（そんなものが当たるとでも思っているのか？）

空から水流が降ってくる直前、ウインガルはバックステップで避
ける。

「甘いぞ！ グレイブ！」

（どちらがだ！ ダンクウケン 断空剣！ ホウオウテンク 鳳凰天駆！）

避けた先に居たミラが剣を地面に突き刺すと、岩が槍のように上に突き出す。ウィンガルはそれを竜巻を伴う斬り上げで回避し、さらに炎を纏ってミラに突進した。

避けようとしたミラだけど、体勢的にも厳しくて完全には避けきれず、地面に倒れてしまった。

「ぐあっ！」

「ミラ！」

（他人を気遣う余裕があるのか！？ 神風！^{カミカゼ}）

「くっ……うわっ！？」

ミラに駆け寄ろうとしたら、ウィンガルに斬りつけられた。とっさに防御したけど体勢を崩してしまい、大きくぶっ飛ばされてしまった。

「カイト！」

「エリーゼ、駄目だ！」

「娘っ子、行かせはせんぞ！」

「邪魔だぞ、おっさんー！」

こっちに来ようとしたエリーだけど、ジャオに道を塞がれていた。ジュードがエリーを守っているみたいだ。

「ほら、あなたも余所見はいけないわよ？ ブルースファイア！」

「ちっ……これじゃあ加勢に行けねーな」

「アルヴィン君、援護するよ！」

ミラ達に加勢しに行こうとしていたアルヴィンだけど、プレザに阻まれていた。アルヴィンにレイアが加勢する。

「カイト！ 先に行け！」

「え……？」

ミラの言葉に自分の耳を疑いながら、俺は辺りを見回した。

ウイングガルに吹っ飛ばされた先は、どうやらクルスニクの檣の方に行く道の方だったらしい。

「少しでいい！ ガイアスから時間を稼いでくれ！ 私達もすぐに追いつく！」

そうか……ここで時間を使いすぎて、ガイアスがクルスニクの檣を得たら元も子もない。

今自由に動けるのは俺だけ。阻まれずにガイアスのもとへ行けるのは俺だけだ。

「分かった！ ミラ達もなるべく早く来てくれ！」

（ちいっ！ 行かせるかッ！）

走り出すと同時に、俺を行かせまいとウイングガルが追い掛けてくる。

「「アドプレッシャー！」」

（ぐおっ！？）

だけど、ミラとローエンの共鳴術技で、ウイングガルの足が止まった。
リンクアーツ

その隙に、俺は全力でガイアスのもとへと走った。

みんな、信じてるからな！

* * * * *

(くっ……やってくれたな……)

「お前の相手は私達だ！」

カイトが走り去った後、ウィンガルの進路を阻むようにミラとロ
ーエンが立ちはだかる。

(ふっ……まあいい。奴を追うのは貴様らを殺した後でも間に合う
！)

「何をごちゃごちゃ言っている！ サンダーブレード！」

ミラが精霊術を発動させると、ウィンガルはそれを簡単に避け、
ミラに近付いた。

(はっ！ そんな攻撃が当たるか！ 白牙追蓮！)

ビャクガツイレ

「くっ……」

素早い突進からの多段斬りに、ミラは防ぐ事で精一杯だった。

「ロケットライ！」

それを助けるなように、ローエンが精霊術を発動する。
足下から岩の槍が3つ飛び出すのを、ウィンガルは間一髪で避ける。

「済まない、ローエン」

「ウィンガルの速さは侮れません。普通に攻撃しただけではまず当たらないでしょう」

ウィンガルと距離が出来て礼を言うミラに、ローエンが近付いて言う。

速さについてはミラも敬服をせざるを得ない。仲間の中で一番速いジュードですら、ウィンガルの速さに付いていけるかは分からないからだ。

だが、こちらは1人ではないと、ミラは知っている。

「ローエン。連携、頼めるか？」

「もちろんです、ミラさん」

（最期の相談は済んだか？）

2人が話し終えたのが分かったウィンガルがそう言うと、ミラが鼻で笑った。

刹那、ウィンガルは地面を蹴って距離を詰めた。

「行くぞ！ ルナティックステイング！」

ミラが正面に円を描くと、そこから槍が飛び出す。だが、それをウィンガルは剣で受け流して避ける。速度は落ちない。ウィンガルはミラに向かって剣を突き出す。が、

「フリーズランサー！」

ミラが横に飛び退いて剣を避けた瞬間、ローエンが詠唱していた精霊術が発動する。

無数の氷の槍はウィンガルにヒットしていく。

「まだまだ！ デイストールノヴァ！」

周囲を攻撃しながら浮き上がり、剣を振り下ろしてウィンガルを地面に叩きつけた。

（ぐおおっ！ 貴様ら……！）

起き上がったウィンガルは怒りを露わにしていた。

「まだ立ち上がるのか？」

「ミラさん！ いけません！」

（遅いッ！ クウハゼツブウケキ 空破絶風撃ッ！）

ウィンガルはミラを一度斬り上げ、突進斬りを放つ。
そして、ミラを何度も斬りつけ雷の鎖で捕らえ、

（ライトニングノヴァー！！）

「がああああ！？」

斬り伏せた。

（ふんっ……手こずったか……）

「まだ、だ……」

（何っ！？）

ウイングルの奥義を喰らったミラだが、フラフラになりながらも立ち上がった。

（ふっ……その状態で勝てると思っているのか！）

ウイングルの速さに、今のミラは付いていく事はおろか、反応も出来ないだろう。

だが、

「私をお忘れでは？ ソリッドコントラクション！」

（しまっ……ッ！？）

ミラに突進するウイングルの四方に鎖を張り巡らせ、ウイングルの動きを止めた。

「終わらせる！ ハイアーザンスカイ！」

ミラは空に向かって飛び上がりながら、強力な突きを繰り出した。

「始まりの力、手の内に！」

空から炎を纏い急降下、そして水を巻き上げウイングルを浮かした。

「我が導となり、こじ開けろ！」

飛びながら風の刃で斬りつけ、岩の槍を飛ばす。

「スプリームエレメンツ！！」

トドメに地水火風全ての力がウインガルを襲った。

（がぁぁぁぁッッ！？）

ウインガルはドサツと地面に倒れ込んだ。
同時に、ミラも地面に膝を着く。

「大丈夫ですか！ ミラさん！」

「なんとかな……それより、皆は？」

ミラは言つと、辺りを見回した。

* * * * *

エリーゼはカイトを追おうとしたが、ジャオが立ちはだかる。ジュードはエリーゼを守りながら戦っていた。

「おじさん！ 通してください！ わたし……おじさんと戦いたくないです……！」

「わしも娘っ子とは戦いたくはない！ だが、わしとて成すべき役割がある！」

エリーゼの言葉に、ジャオはハンマーを振り下ろす事で答える。
地面が爆せて、岩が飛び出た。

ジュードはその直前、エリーゼを抱えて後ろに飛び退いて避け、着地すると同時に魔神拳を放つ。

「どうしても、退いてくれないんだね？」

「ふんっ！ くどいぞ、小僧！」

魔神拳の衝撃波を、ジャオはハンマーを叩きつけて防いだ。

「ガリヨウクウハ臥竜空破！ ヒエンレンキヤク飛燕連脚！」

素早い動きでジャオの懐に入ったジュードは、飛び上がりながらのアップパーから連続蹴りに繋げる。

「ちいつ！ レッシンテンショウ烈震天衝！」

ハンマーで振り払い、さらに拳を払い無数の岩片を巻き上げジュードを吹き飛ばした。

「ガロウゲキ続けて喰らえ！ 牙狼撃！」
「うわあっ！」

地面に倒れていたジュードをハンマーを振り上げることで起き上がらせ、拳を叩きこんだ。大きく吹き飛び、地面を転がった。

「降り注げ、博愛の慈雨！ ハートレスサークル！」

その直後に、ジュードを中心に治癒効果のある魔法陣が描かれ、ジュードの傷が癒えていく。

「ありがと、エリーゼ」

「ジュード、援護です！ 行くよ、ティポ！」
「まかせろ〜！」

エリーゼは立ち上がるジュードに近付き、手にした杖を握り直した。

「わたしは、あなたを倒してカイトを追います！」
「仕方あるまい……来い！ エリーゼ！」

ジャオもハンマーを握り直し、本気を出す。

「湧き出よ、闇の腕！ かいな ネガティブゲイト！」
マオウチガクジン
「魔王地顎陣！」

ジャオの足下から闇のエネルギーが発生して攻撃するが、ジャオはハンマーで地面を強打し、現れた岩槍でそれを打ち破った。

ホウツイケン
「今だ！ 鳳墜拳！」
「ぐっ！？」

その一瞬の隙で、ジュードは現れた岩を足場にして高く跳び、拳から火球を叩きつけた。

「フラッターズ・ディム！」

さらにエリーゼが精霊術を発動して、闇の剣で連続で斬りつける。

「ぐぬおおお！」

怯んでいる今の内に一気にたたみ掛けようと、ジュードが再度ジ

ヤオの懷に飛び込む。

「まだ終わる訳にはいかんだ!」

「ッ!？」

急に体勢を立て直したジャオは、懷に飛び込んだジュードを掴み、地面に何度も叩きつけ、放り投げた。そして、

「これで終わりじゃ! ゴウマリユウシヨウタン 轟魔隆衝断!!」

「うわあぁっ!」

「きやあぁっ!」

強力な衝撃波がジュードに向けて放たれた。衝撃波の威力は凄まじく、余波はエリーゼをも襲う。

「うう……」

「僕達だって……ここで終わる訳にはいかないっ!」

「なんとっ! あの技を受けても立ち上がるか!？」

しかし、ジュードとエリーゼはボロボロの状態。治療術で回復しようやく戦える状態だった。

「エリーゼ、僕がジャオを引きつける。その間に、頼むよ」

「わかり、ました」

「がんばれー! ジュード君ー!」

拳を握りしめたジュードが走り出す。

「まだやると言うのか! センジンロウハ 戦迅狼破!」

「ふっ! 遅い! ムエイシヨウ 無影掌!」

「何！？　ぐお！」

ジャオが狼の形をした闘気を放つが、ジュードは瞬時にバックステップでそれを避け、素早い突進からの突きを放つ。

「今だよ！　エリーゼ！」

「深淵の盟約を果たせ！　リベールイグニッション！」

エリーゼの目の前に魔法陣が現れ、闇のレーザーが撃ち出される。

「まだ行きます！」

「目標ロック！」

「チャージ完了！　発射！」

「覚悟しろー！」

ティポに闇のマナを集中し、発射される。ティポはジャオの周りをグルグルと飛び回り魔法陣を描いた。

「ただいま！」

「「リベールゴランド！！」」

ティポがエリーゼの所に戻ると、2人で魔法陣を爆発させる。

「ぐおおおっ！？　強くなつたな……エリーゼ……」

ジャオはそう呟いて地面に倒れた。

「なんとか……なりました……」

「みんなはっ」

なんとか戦闘を終えたジュードとエリーゼは、辺りを見回す。

* * * * *

「次はその子にご執心なのかしら？ とつかえすぎじゃない？」

「え、あたし？」

「何の話だよ、何の！？」

プレザと戦っているアルヴィンに加勢しようとしたレイアに、プレザがそんな事を言っていた。

「あなたも、アルを信じ過ぎて捨てられない事ね？ ドラゴネス・ハンド！」

「何だか知らないけど、多分違うからね！ シュンジンソウ 瞬迅爪！」

プレザの本から出た竜の爪を、レイアは敢えて正面から突っ込んで受け流すことで避ける。

「ブルースファイア！」

「ちい！ エリアルレイザー！」

大きな水の玉がレイアの真上に出現し、それが落ちる直前にアルヴィンが銃で撃ち破裂させる。水が飛び散るだけでダメージはなかった。

「ありがと、アルヴィン君」

「礼は後だ！　んな事より、妙な話してんじゃねえ！」

「いや……あたし、巻き込まれてるだけなんだけど……」

「話してる暇は無いわよ！　スプラッシュ！」

2人に向かって、プレザが精霊術を発動させる。

アルヴィンはとっさにバックステップで避け、レイアはプレザに向かって走り出していた。

チリサザメ
「散沙雨！」

「くっ！」

レイアの素早い突き攻撃に反応出来ずに、プレザは数度、攻撃を喰らっていた。

「悪いが勝たせてもらっぜ！　マジンセンコウダン 魔神閃光断！」

突き攻撃が終わる直前、アルヴィンが飛び上がる。それを見たレイアはすぐにバックステップで距離を取った。落下しながらの斬り下ろしは、地面に当たる直前に爆発する。

「あああああ！？」

爆発が直撃したプレザの身体は、大きく吹き飛んだ。

「ナイスコンビネーション！」

「気付いて無かったらあたしまで巻き込まれてたよ！？」

「あれえー、そうだったけ？」

攻撃が当たりそうだったと、レイアがアルヴィンに怒る。しらは
つくれるアルヴィンは、倒れたプレザに視線を動かした。

「やってくれるじゃない、アル！ 守護方陣！」
シュゴホウジン

プレザを中心に描かれた魔法陣が、プレザの傷を癒していく。

「厄介な技持つてんな……」

「なら、こんなのはどう？ アクアスパイラル！」

アルヴィンに向けて、回転する水流が放たれる。
横に跳んで避けるアルヴィンに、追撃が来る。

「スプラッシュ！」

「ぐっ！」

避けた先で、頭上から降り注ぐ水流にアルヴィンは身動きが出来
なくなった。

「アルヴィン君！」

「あなたはこれよ！ ドラゴネス・テール！」

「きやあっ！？」

駆け寄ろうとしたレイアも、プレザの本から現れた竜の尻尾で薙
ぎ払われて地面に倒れた。

「レイア！ ヴァリアブルフラッシュ！」

「必死ね、アル！」

大剣と銃を合わせて、プレザに向けて発砲する。が、簡単に避け

られてしまう。

「ならっ、タイドスパーク！」

大剣を薙ぐようにして振りながら地面に向かって銃撃を行う。これはプレザも避けきれずにバランスを崩してしまった。

「任せて！
ショウブコウバツバ翔舞煌爆破！」
「きゃああ！」

レイアが空高くにジャンプしていて、体勢の崩れたプレザに空中から強い衝撃波を放った。

「っ……ちょっとはやるようね……でも、これはどうかしら！？」
「えっ！？」

地面に着地したレイアに余裕を与えず、プレザは本から竜の頭を召喚し、水流を放つ。突然の事に反応出来なかったレイアは直撃してしまった。

「まだ終わらないわよ？ 龍精召喚！ ドラゴネス・スニーカー！
！ 逝っちゃいなさい！」

本から巨大な竜が2体現れ、レイアに向かって行った。

「くそっ！ レイア！」
「きゃっ！ アルヴィン君！？」

攻撃が当たる直前、アルヴィンがレイアに体当たりして吹っ飛ばした。

水の竜は軌道を変えず、そのままアルヴィンに直撃した。空に舞い上がり、アルヴィンは地面に落ちる。

「そんなにあの子が大事なの、アル？」

「別に……傷つけると怒る奴が居るだけだ……」

起き上がるアルヴィンに、プレザが意外そうに聞いていた。だが、アルヴィンの答えはプレザの納得のいく答えでは無かった。

「彼の者に注げ！ 安らぎの光輝！ ヒール！」

攻撃を受けたアルヴィンの身体を光が包み、傷を癒した。

「さあて、そろそろ終わりにするぜ？」

「やれるもんならやってみなさい！」

大剣に銃を合わせたまま、アルヴィンが突っ込んだ。そのアルヴィンに、竜の頭からの水流が放たれる。

「やらせない！ バリアー！」

「なっ……！？」

水流は、レイアの補助術によって防がれた。

プレザが驚いて、一瞬隙が来ると、既にアルヴィンは剣が届く位置にプレザを捉えていた。

「ガリユウグレんケン
我流紅蓮剣！」

プレザの技が不発に終わり、アルヴィンが炎を纏う剣で斬り上げ、もう一度飛び上がりながら斬り上げた。

「目えかつぱじってよく見てな！ おたくの最期の光景だ！」

宙に跳んだまま、プレザに向かって銃を乱射して、大剣と銃を合
わせる。

「エクスペンダブルプライド！！」

トドメに落下して地面を叩きつけ大爆発させる。

「ああああああ！？」

プレザの悲鳴が響いた。

「アルヴィン君、大丈夫！？」

「お前の術のおかげでな。それより、あいつらの心配が先だ」

アルヴィンがそう言うと、2人は辺りを見回した。

* * * * *

3組の戦闘が終了したのは、ほとんど同時だった。

「皆、終わったようだな……」

勝利はしたが、ダメージは皆一様にひどい状態だった。

「ウィンガルさん、あなたの増霊極はどこですか？」
フイスター

戦いの後、ローエンがウィンガルにそう問い掛けると、ウィンガルは自分の頭を指差して地面に倒れた。

戦いの傷で気絶したらしい。

「そうまでしてガイアスに仕えるのですね……」

ウィンガルの信念に敬服するように、ローエンが呟いた。

「悪い。遺言訊くつもりないから」

また違う所では、アルヴィンが倒れたブレザの頭に銃口を突き付けていた。

「アルヴィン君、待ってよ！ もう決着ついてるんだよ！？」

レイアが必死にそう叫ぶと、アルヴィンが仕方ないと言うように銃を下ろした。

「怖い怖い。そうやって、生きていくのよね。お嬢さん、そうやって弄ばれて、いつかは捨てられるのよ」

「だから何の話か分からないけど……あたしは一応アルヴィン君の事は信じてるつもりだよ」

「一応かよ……」

レイアの返しに、アルヴィンは呆れながら呟いた。

「あの……どうして……わたしを、心配……してくれるんですか？」
「理由を言えー！」

エリーゼとティポがジャオに問い掛けるが、ジャオは黙ったままだった。

「ど、どうして……っ」
「エリーゼ……」

何も答えようとしないジャオにもう一度問い掛ける。心配になったのか、ジュードもエリーゼに近寄った。

「クルスニクの檣まであと少しだ。皆、思っ所もあるだろうが、先に行かせてくれ。先に行ったカイトも心配だしな」
「そうです！ 早く行きましょう！」

ミラがそう言つと、エリーゼが慌てたようにそう言いだして、ミラ達は先を急いだ。

第31話 四象刃との決戦（後書き）

今回パーティーを分けたのは、ただ単に混戦が書くの苦手なだけです。必ず1人は空気になってしまう人が出るんで……。

そして今回、敢えて共鳴術技はほとんど使いませんでした。理由は忘れていた訳ではありません（笑）

プレザにはいくつか新技を追加してしまったのはただの事故です（笑）

次回は時間を稼ぎに先に行ったカイトとガイアスの一騎討ちになるかもしれないです。

第32話 時間稼ぎの一騎討ち（前書き）

ガイアスが強過ぎる気がしなくは無いですが……原作もこんな感じですよね（笑）

第32話 時間稼ぎの一騎討ち

後ろ髪を引かれるような思いでみんなを残して先に進むと、丘の上に巨大な黒い兵器が設置されているのが見えた。多分、あれがクルスニクの槍なんだろう。

あんな大きな兵器が発動したら、いったいどれだけの人が犠牲になってしまうんだろうか？ 俺には想像もつかない事だけど、これだけは分かる。起動したら、最悪な結果になってしまうと言う事だけは。

走って丘の下まで行くと、やっぱりそこにはガイアスが居た。

「ほう……貴様1人だけとは……俺もなめられたものだな？」

「俺はただ、時間を稼ぎに来ただけだよ。ミラやジュードはあんたの手下と戦ってる」

「同じ事だ。マクスウェルならばまだしも、貴様のような奴に俺の相手が務まると思っているのか？ まして、時間を稼ぐ事さえもな」

「うわぁ……完全に見下されてるよ！？」 確かに、内心はかなりビビってるし、気を抜いたら立てるかどうかも分からないほど足は震えてる。

こんな奴と顔を合わせずに会話したって、話し合う事すら俺には恐怖だったのに、もしかしたら剣を交える事になるかもしれない。恐怖を感じるなって方が無理な話だ。

けど、みんなは ミラは俺を信じて1人でここに送り出した。例え吹き飛ばされたのが偶然だったとしても、俺が信頼されているのには変わりはない。

なら、俺はそれに応えるだけだ。

時間を稼ぐ方法なら、戦い以外にもある筈だしな。

「ガイアス……何であんたはクルスニクの槍を欲しがるんだ？」
「答える義理は無い」

とりあえず時間を稼ごうと話しかけてみると……こうなるのな……。

話し合いと言つか……会話する気が無いのか、こいつは……？

「あんたが答えないならそれでもいい。だけど、俺は槍をあんたに渡す気は無いぜ？」

「ふっ……貴様に何が出来る？俺を倒すとも言うつもりか？」

それが出来たらどれだけ楽だろうかねえ……。

「言つたろ。俺は時間を稼ぐだけだ。俺があんたの足元にも及ばない事は自分が一番分かってるよ」

「己の力量が分かるか……。ただのバカではないようだな」

あれ……何で俺バカ扱いされてんの！？

そう思っていると、ガイアスが振り返り俺を見た。

「ジャオに挑み敗北したお前が、何故ここまで止まらず進み続けられたのか。興味がわいた」

「……俺がここまでこれたのは、みんなが仲間が居たからだ。決して俺1人の力じゃない！」

あの時から……強くなろうと思いつけたけど、俺の強さは俺だけの物じゃない。

「それもよからう。丁度良い機会だ。貴様の力量……この俺が図つてやろう！俺の道に害があるかも含めてなッ！」

ガイアスは、自分の身長よりも長い長太刀を抜いた。
た、戦うのかよ……。相手が務まらないとか自分が言ったくせに！
愚痴る余裕なんか皆無だ。俺も剣を抜いた。

「異世界の人間の力……俺に見せてみるッ！ 異世界人！」
「俺にはちゃんと、海斗って名前があるんだよ！」

こうなったら……俺を 俺と言う存在を認識させてやる！

「先手は譲ってやろう 来いッ！！」

なめられてとは思わない。それだけの力の差がある事は分かっているのだから。

でも、その余裕……一度でも崩せば俺の勝ちだ！

「はあっ！」

剣を構えて地面を蹴り走り出し、全力で振る。

当然防御されるけど、それでも俺は攻撃を続ける。

ガイアスに唯一勝てる可能性があるのは、力でも技量でもない。
俺自身の速さだ。

もちろん、ガイアスが遅い訳じゃない。けど、俺の能力の中でお
そらく一番高い能力はスピードだ。

「ぬるい！ マジンケン 魔神剣！」
「ッ！？」

ガギンッ！！ 剣と剣がぶつかり合う。力負けして、俺は後ろ
に吹っ飛ばされた。そして、俺を追い掛けてくるように衝撃波が迫

り、俺はとつさに弓に変形させて横に衝撃波を放ち、吹っ飛ぶ方向を変えて何とか衝撃波を避けられた。

ガイアスが大きく剣を振って放ったのは魔神剣だ。だけど……威力が俺やアルヴィンのそれとは桁違いだ。あれが直撃しただけでも相当ヤバイ。

「ふっ！ シュンジンケン 瞬迅剣！」

「おおっ！ ゼッヒョウジン 絶氷刃！」

俺が体勢を立て直さない内に、ガイアスは剣を正面に構えて高速の突きを繰り出してきた。それを防ぐ為に、氷を纏う剣でガイアスの突きを弾いた。

何とか防げたと思を吐く間もなく、ガイアスは剣を横に薙ぐ。

「くうっ！？」

今度は足を踏ん張らせて吹っ飛ぶ事は避けられた。

「どうした？ もう終わりか？」

ガイアスが挑発するように剣を構え直した。

まだ戦い始めてからあまり時間は経ってないけど、力の差が歴然と言う事を改めて思い知らされた。

「まだまだあつ！ シンクウハザン 真空破斬！」

高速で剣を振るい真空の刃を飛ばす。けど、ガイアスは正面から一振りで真空の刃を切り捨てる。

ああ、そうなるだろうと思ったよ。だから、今の一撃はフェイク。本命はこっちだ！

「センコウガ穿光牙あ！」

剣に瞬時に光を集め、ガイアスが真空の刃を切り捨てているその隙に近付き、光を開放して貫く。

「甘い！ シッセンコウ獅子戦吼！」

「がつ！？」

突きを出す直前、ガイアスの放つ獅子を思わせる鬨気に吹き飛ばされた。

地面を何度か転がる。

……くつ、まだだ……まだみんな来てない……。ここで倒れる訳にはいかないんだ！

「雷光一閃！ ライトニング！ スパークウェブ！」

立ち上がってからすぐに精霊術を発動する。

一筋の落雷がガイアスに落ちるが、それも剣を強く振り消し飛ばす。だけど、さらに俺は追撃でガイアスの居る場所に大きな雷球を発生させる。

「おおおおおおツッ！」

「なっ……嘘、だろ……？」

やっと直撃したと思ったスパークウェブは、ガイアスの全身で放つ鬨気に打ち消されていた。

……確かに俺の術は威力は低いかもしれないけど……打ち消すなんか反則だろ！？

「ふんっ！ コガハザン 虎牙破斬！」
「ッ！！」

驚いている余裕なんか無かったのに、一瞬気が緩んだその刹那にガイアスが2連撃の技を繰り出す。

直前に何とか反応出来たけど、空に打ち上げられてしまった。

「ヒエンシユンレンザン 飛燕瞬連斬！」

いつの間にか目の前に居たガイアスが、空を駆けながら俺を斬りつける。トドメと言わんばかりに、地面に叩きつけられる。

「っ……！？」

肺から酸素が吐き出される。

全身も斬られて痛い……。

スピードでなら勝機はあるかもしれない。そう思ったけど、ガイアスの能力は全て俺のはるか先を行っている。

「貴様、おかしな服を着ているな。我が剣技を以てしても斬れぬとは」

「え……？」

起き上がりながら自分の姿を確認してみる。確かに、あれだけ斬られたのに、制服は全く斬れていなかった。

……何で防刃仕様なんだ？ でも、おかげで助かった。身体は痛いけど、出血が無い分マシだ。

「それにしても解せんな？ 貴様、何故急所を外した攻撃をする。まさか、この期に及んで人を斬る事に臆しているのか？」

どうやら、ガイアス相手でも無意識に急所を外そうとしていたらしい。それで全力が出てないのか……。

「そりゃ怖いさ……人を斬るのは……。剣だって、握るのは今も怖いよ。けど……」

信じてくれる仲間が居るから、俺はこれまで殺さずを貫く事が出来ていた。

これから人を殺す事はしない。絶対に。

「ほう……ここに来ていい眼をする」

「……次は……全力でいく……」

別に手加減をしていた訳じゃないけど……ガイアスなら急所を狙った所で、死ぬ事は無いだろう。

そもそも、この人を相手にして遠慮をしたのが間違いだったんだ。

「カムイドリ
神射鶏！」

弓に変形してマナを撃ち出す。

ガイアスがそれを防ぐのは予想済み。俺はまた正面から突っ込む。

「獅子戦吼！ ……ッ！？」

先ほどと同じように、俺に闘気を放つ。けど、その時には俺はガイアスの後ろに回り込んでいた。

この時始めて、ガイアスが息を呑んだのが分かった。

「ゲンロウザン テンロウメツガ
幻狼斬！ 天狼滅牙ア！」

後ろから斬りつけ、さらに息をも吐かせない連撃を叩き込む。

「閃裂空破！ 閃光衝墜！」
センレックウハ センコウショウツイ

弓に変形させながら斬り上げ、浮いたガイアスを下から射抜き、
続けて光の矢を放つ。

「ぐっ…… おお！？」
「まだまだあ！ 雷斬衝！ 絶破雷迅衝！」
ライザンショウ ゼツバラインショウ

雷を纏わせた剣で数回斬りつけ、突き、飛び上がりながら斬り上げ、さらなる雷を纏いながら斬り下ろす！

「裂天臥影刃！」
レットエンガイジン

斬り上げ、さらに斬り上げ、思い切り斬り下ろし、駆け抜けながら無数に斬り裂く！

そして、連撃はまだ終わらないッ！！

「この連撃でッ！ 沈め！」

マナを剣に集中させ、ガイアスに乱舞攻撃を繰り返し出し、回転するように空高く斬り上げる。

「天旋、霊霸断！！」
テンセン レイハダン

マナをさらに集中させ、落下してガイアスに叩きつけた。

「ぐおおおおッッ！！」

「はあ……はあ……どう、だ……！」

バックステップで、地面に倒れるガイアスから距離を置く。
これが、今の俺に出せる全力だ。これで駄目なら……負けは決定だ。

もう……立たないでくれよ……。

「ふっ……今のは効いたぞ……」

だけど、そんな俺の願いむなしく、ガイアスは立ち上がった。
しかも、効いたと言っておきながら、あまりダメージは無さそうだった。

「これが貴様の全力と言う訳か……」

……くっ……やっぱりこいつ……バケモノかよ……。

「俺はお前の力を見くびっていたようだな……改めて、名を聞こう？」

「……西風……海斗……」

俺の名前を聞いたガイアスは、剣を構えた。

「ニシカザカイト。貴様の全力には……俺も全力で応えよう」

「……ッ！？」

構えた剣にマナを集中させたガイアスが、一気に距離を詰める。

「貫け！ ハオウテンシヨウケン 霸王天衝剣！」

「ぐっっ……あ！？」

マナを集めた剣で突いてきて、俺は空に打ち上げられた。

「醒めよ！ 黄昏の地より呼び寄せし流転の狼王！」

打ち上げられた俺に向かい剣を振り上げ、火球を投げつけられる。
そして、

ビャク マジンオウケン
「闢・魔神王剣！！」

「うわああああッッ！？」

一刀両断されるッ！

地面に落下して叩きつけられる。身体が動かなかった。けど……
まだ意識はある。俺はまだ生きていた。

「案ずるな。死にはすまい」

「ぐっ……は、あ……」

これが……ガイアスの……全力……？
全く歯が立たなかった……。

「カイトっ！」

その時、誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。

第32話 時間稼ぎの一騎討ち（後書き）

今回カイトはボロ負けしました。やっぱり普通の人ガイアスと一騎討ちとか無理な気がするんですね。生きてる方が奇跡みたいな感じです。

初の特奥義も難くかわされてしまっています。

次回はいよいよあの精霊が！？そしてまさかの展開に！？

くオリジナル術技く

・裂天臥影刃

上昇しながら斬り上げていき、落下しながら斬り下ろす。トドメに駆け抜けながら無数に斬り裂く特奥義。

・天旋霊霸断

武器にマナを集中させて、目にも留まらぬ剣と弓の乱舞攻撃をしながら上昇していき、マナを開放して相手に叩きつける特奥義。

第33話 壊れる殻

俺の名前を呼んだのは、エリーだった。
倒れたまま首を動かすと、エリーが涙を溜めながら走ってきた。
ミラ達も走ってくる。

「ほう……ウインガル達が敗れたか……」

ガイアスがミラ達を見てそう呟いた。

「ははっ……試合に負けて勝負に勝った……ってか？」

あれ、逆だっけ？

「カイト！ 今治しますね！」

「エリーゼ、僕も手伝うよ！」

エリーとジュードに治癒術を施されて、何とか立てるだけには回復した。

「サンキユ、2人とも」

「無茶しないでっ……言いました……」

「……ごめん」

泣きながら言うエリーの頭を撫でる。
でも……ガイアスと戦って無茶するなって、それの方が無茶だよな。

「答える、ガイアス」

そうしている間に、ミラがガイアスと対峙していた。
俺達もミラを追ってミラの後ろに立つ。

「何故クルスニクの槍を手に入れようとする？」

ミラが俺と同じ問いを投げつけると、ガイアスが微笑する。一瞬、俺を見た気がした。

まるで、最初に問い掛けた俺に答えるように。

「全ての民を守る為だ。力は全て、俺に集約させ管理する」

「それはただの独占に過ぎない。結果、お前も守るべき民も、槍の力が災いし、身を滅ぼすだろう」

「俺は滅びぬ。弱きものを導くこの意志がある限りな」

ガイアスは何が何でも退かない気なんだろう。

だからこそ、ミラはガイアスに言う。「お前は1つ重要な事実から目を背けている」と。

ガイアスがミラを睨みながら問い掛けた。

「お前がいくら力ある者であっても、いつかは必ず死ぬ」

そうだ。ガイアスがいくら人外な強さを誇ろうとも、人間には生きる事についてタイムリミットがある。

いくらガイアスでも、これからずっと生きていける筈はない。

「その後はどうなる？ 人の系譜の中で、お前のような者がもう一度現れるのだろうか？」

ガイアスも考えなかった訳では無いだろう。けど、だからこそ答

えの無いそこは突かれれば何も言えない。

「遺された者達は過ぎたる力を持て余し、自らの身を滅ぼす選択をする……それが人間だ。歴史がそれを証明している」

「……ならば俺が、その歴史に新たな道を標そう」

どうやって？

そう問いたかったけど、空気はそれを許さない。

「……ガイアス。やはりお前も人間だな」

「ふ、そうだ。人間だからこそ俺にはリーゼ・マクシア平定と言う野望がある。お前は、ただの欲望と捉えるだろうがな」

そこまで分かっているミラに言うなんてな。

「最後だ、ガイアス。槍は渡さない。どうしても退かないか？」

剣を抜こうとするミラに、

「退かぬ！」

ガイアスは長太刀を構える事で答えた。

俺と戦った事は、それほどダメージでは無かったらしい。

「あなたならもしかしたらって思った……でも、クルスニクの槍は絶対に壊さなきゃ駄目だと思う！」

ジュードがミラの隣で身構えながら言う。

「ええ。クルスニクの槍は悲しみを生み出すものです」

「悲しいのは終わらせないといけないんだから！」

「そうです！ ミラはいつも正しいんです！」

「うん！ ぼくたちはミラ君の味方だもんねー！」

「まあ、そう言う事らしいぜ？」

みんなが武器を出しながらガイアスに言う。

俺もジュードの隣に行き、武器を構えガイアスを見る。

「さっきも言ったぜ？ クルスニクの槍は渡さない！」

「ならば俺も言おう！ クルスニクの槍は必ず手に入れる！」

叫んだガイアスは、とてつもない量のマナを身に纏わせ、太刀に纏わせた。

さっきも対峙していた時に感じた、ガイアスの全力が来る！

「行くぞー！！」

ガイアスが剣のマナを開放しようとしたその瞬間、どこからか剣が2本ガイアスに向かって飛んできた。

とっさの事に、ガイアスは俺達を攻撃する事を中断して、2本の剣を振り払って落とす。

「何者だ！」

俺達も、突然の乱入者を見回して捜す。

「そこまでだ！」

声は丘の上 クルスニクの槍の方から聞こえてきた。
見上げると、そこには巫子のイバルが仁王立ちしていた。

「イバル？ 何故ここに……！？」

予想外の事態に、ミラは言葉を失っていた。

……と言つかこれって……最悪過ぎじゃないか！？

「ミラ様！ 本来のお力を取り戻し、その者を打ち倒してください！」

叫ぶイバルは、懷から円形の何かを取り出した。

……あれが、まさかクルスニクの槍の『カギ』！？

「はははっ！ どうだ偽物！ お前との違いを見せ付けてやる！」
「待て、イバル！」

とっさに俺が叫ぶけど、イバルはそのまま槍の方に走り出し、『カギ』をクルスニクの槍に差し込んだ。

クルスニクの槍が、開く。

「どうだジュード！ この俺が本物の巫子だ！ 四大様のお力が、今蘇る！」

イバルが叫んだ瞬間、クルスニクの槍が起動された。

刹那、何かが吸われる感覚に襲われた。

「な……何だ……これ……？」

吸われてるのは……マナか……？

辺りを見回すと、この場に居る いや、この戦場に居るみんなからマナを吸っているようだった。

もちろん、吸収を行っているのはクルスニクの鎗だ。

吸収が終わると、クルスニクの鎗からレーザーのようなものが空に向かって放たれた。

バキインツ！

何かが割れる音が、戦場に響いた。

全員が空を見上げている。

「今の……何だ？」

「どう、なったの……？」

「そんな……破られてしまった……？」

珍しくミラの顔色が悪い。空を見上げるミラは、驚愕で言葉を失っていた。

「そうか……そうだったのか！ クルスニクの鎗は兵器などでは無かった！」

「それ、どういう」

ミラに問い掛けようとした刹那、爆発が起こった。クルスニクの鎗が放たれた空を見ると、そこから何かが無数に降ってきていた。

それは地上を焼き尽くそうと降り注ぐ。

そして、割れた空から出てきたのは、

「なっ……！！？ 飛行艇！？」

現れたのは空を浮かぶ船。

俺の世界で言うなれば飛行艇 飛行機、そう言う物だろう。

でも、あんな巨大な しかも攻撃が出来る飛行機は俺の世界に

は無いと思う。

「ついにやった！ くくくく……くはははは！」

どこからか笑い声が聞こえた。

声の方向を見ると、クルスニクの槍の前に男性が1人立っていた。

「ジランド！ どうなってる！」

アルヴィンがそう叫んだ。

あれが……ジランド？ 髪をオールバックにしているからか、別人に見える。

「ジランド……お前！」

アルヴィンがジランドに銃を向けると、どこからか氷の槍が降り注ぎ、アルヴィンを襲う。

この氷……ナハティガルを襲った奴か！？

「ハ・ミルをやったのは貴様らか？」

「そうオレの精霊、このセルシウスがな」

ガイアスの問いに答えるように、ジランドが匣のような物を掲げる。魔法陣が描かれると、そこから精霊が現れた。

「精霊セルシウスだと……？ そのような名、聞いた事も……」
「やっぱり、四大以外にも大精霊は居たのか……」

分かったのはいいけど、明らかに状況が最悪すぎる。

「我が民を手に掛けた事……許しはせん」

ガイアスが剣を構えると、再び船から砲撃が行われる。
そして、空から黒^{ジン}匣で武装した兵士がかなりの人数降りてきた。

「何なの、この人達……」

レイアが声を上げる中、降り立った兵士の1人がジランドに近付いた。

「アルクノアのジランドさんですね？」

「ああ、そうだ。あれが例の女と小僧だ」

俺とミラを交互に見ながら、ジランドが言う。

「……アルクノアだと……？ 貴様がナハティガルに黒匣を伝えたのか！？」

そうか……そうすれば辻褄は合う。ナハティガルの側近に、アルクノアが居たんだから。

「あの小僧と女は殺すなよ？ 台無しになる」

ジランドが兵士に指示を出すと、武装した兵士が丘を滑り降りてきて、マシンガンのような兵器を乱射してくる。

それだけでみんな戸惑うのに、黒匣から電撃が放たれた。

「うわぁっ！？」

とっさの事にみんな反応出来ずに、吹き飛ばされてしまう。

「くっ……エリー!?」

安否を確認しようとエリーを捜すけど、見当たらない。

一瞬、最悪な事が脳裏を過ぎる。

そうしていると、アルヴィンがジランドに銃を向けていたのが視界に入る。だけど、氷の槍に銃を吹き飛ばされていた。

「聞いてなかったのか? 勝手な事はさせねえぜ」

2人が睨み合っているけど……悪いけど今はエリーが心配だ。

「エリーゼさん!」

「ッ!?」

ローエンの声に反応して見てみると、遠くでエリーが倒れていた。

「そのガキも連れて行け。^{ブイスター}増霊極の適合好例だ」

俺が動くのとほぼ同時に動いたミラだけど、ガイアスが肘打ちして気絶させていたのが、視界の隅に見えた。

けど、俺は止まらずにエリーの所に走り続ける。

アルクノアの兵士がエリーに近付き、エリーとティポを抱え上げた。

「させるかよっ! ヴォルデックライン!」

雷の矢を放って、ティポを持ち上げた兵士に当てる。

エリーを抱え上げた兵士にも撃ちたい。けど、エリーに当たるかもしれないと思ってしまい、撃てなかった。

だけど、思わぬ援軍が来ていた。

「…………ジャオ!？」

そう、四象刃フォーヴのジャオがエリーを抱えていた兵士の顔面を足蹴にして岩に叩きつけていた。エリーが地面に落ちると、ジャオがエリーを抱える。

俺は安堵の息を吐きながら、2人の所に向かう。

「これ、娘っ子。目を開けろ」

ジャオがそう言うと、エリーが目を覚ました。自分を抱えているのがジャオだと気付くと、目を見開いて驚いていた。

「な、なんだよー！ やるかー！ エリーを離せー！」

「エリー落ち付け。ジャオが助けてくれたんだ」

近付いてそう言うと、エリーがそうだったんですか。と小さく呟いた。

そして、エリーが地面に下ろされる。

「わしは謝らなければならない事がある」

そう言ったジャオは、とても悲しそうなのやない。優しい筈なのに…………それが今にも消えてしまいそうなのやない。そんな表情だ。

ジャオが言葉を続けようとすると、後ろにアルクノアの兵士が見えた。

「ジャオ！ 後ろ！」

「ぐぬお!？」

俺も気付くのが遅くて、ジャオは兵士に背中を強打されていた。そして、自分を殴った兵士の顔面を掴み、持ち上げた。もう1人ジャオを狙っている奴を見つけて、俺はとっさに矢を放つ。けど、一瞬間だけ遅くて、黒匣の電撃が放たれてしまい、ジャオに直撃してしまう。持ち上げた兵士を投げると、ジャオは地面に片膝を着いた。

「お前の殺された両親だが……殺した野盗つてのは……わしだ」
「……え？」

エリーが信じられないというふうに小さく声をもらした。そりゃそうだろう。一応敵と言う関係になっではいたけど、それでもジャオはエリーをいつも案じていたんだ。そんな人が自分の両親を殺したなんて……言われても信じたくは無いだろう。俺だって……信じたくは無い。

でも……だからこそ、罪悪感とかそういうので、ジャオはエリーを心配していたんだろうな。

「エリーゼ! カイト!」

ジュードが俺達を追ってきた。俺もエリーも、ジャオの一言で反応は出来なかった。

戦場の中心となっているガイアスが力を振るい、アルクノアの兵士を一掃したのが、視界の片隅で見えた。

「これ以上お前を見守る事は出来ないだろう……だから、生きてくれ」

「……ジャオ……さん……」

泣きそうに、いや、雨で分からないけど、もうエリーは泣いているんだろ。ジャオの名を呼ぶけど、ジャオは立ち上がってゆつくりと歩いて行く。

もう動く事すらやっとな筈なのに……。

「ジャオ！」

「小僧……いや、カイト、と言ったな。エリーゼの事、頼んだぞ」
「ま、待てよっ」

俺が走ってジャオを止めようとすると、エリーがすぐるように俺の服を掴んできた。

俺を見上げるエリーは、これ以上無いってくらいに泣いている。エリーを安心させるように頭を撫でながらジャオを見ると、ガイアスに近付いていた。何か会話しききものも何も無かったけど、ガイアスはジャオの横を歩いて通り過ぎた。ウィンガルとプレザも、ジャオに一礼してからガイアスを追う。

ジャオは、死ぬ気……らしい……。

あいつの目の前には、百を超える程の兵士が居る。例えあれに打ち勝つ事が出来たとしても、無傷では無いし、上の戦艦からの砲撃を喰らってしまえばそれで終わりだ。

いいのか……？ 俺は、何もしないでジャオを見殺しにしても……。

「カイト、ひとまずミラ達と合流しよう！」

「こんな所で立ち止まってたら、狙い撃ちにされるぞ！」

立ち止まる俺に、ジュードとアルヴィンがそう言ってきた。

エリーはまだ泣きながら俺の服の裾を掴んでいる。走り出すジュードに腕を引かれて、俺とエリーも走り出す。

だけど俺は、エリーの手をほどいて立ち止った。

「カイト……？」

「何してるの！ 早く！」

動きを止めた俺を、エリーが心配そうに見上げている。

「ジュード、アルヴィン……エリーを頼んだ」

「え……？」

「お前、何言つて……！」

3人から視線をそらすように言うと、後ろからそんな声が聞こえてきた。

「やっぱり俺は、ジャオを見殺しになんてできない！」

「だ、ダメです！ 行かないでくださいっ！」

俺を行かせまいと、エリーが腕にしがみ付いてきた。

「カイトまで居なくなったら……わたし……」

声が次第に小さくなっていく。振り返って、エリーの頭を撫でた。

「大丈夫、俺は死なないよ」

「そんなの……分からないじゃないですかっ！」

どうしたら納得してくれるだろうか？ あまり考える時間は無い。

「……じゃあ、これ、預かっててくれないか？」

ポケットから携帯電話を取り出して、エリーから貰ったガラス玉だけは外してからエリーに携帯を手渡す。

「それ、俺にとっては大事なものだからさ。生きて帰ったらまた返してくれ」

「でも……っ」

「ジュード！ アルヴィン！ 頼んだからな！」

「ちよっ……カイト！」

「何考えてんだよお前は！？」

エリーに携帯を押しつけて、ジュードとアルヴィンにそう言い残してから、俺はジャオの所に向かって走り出した。

俺には何も出来ないかもしれないけど、足手まといとかになるかもしれないけど！ ジャオ！ お前を見殺しになんてできるかよ！

「ジャオ！」

「小僧！ 何故来た！？」

俺が駆け寄ると、ジャオが怒声を上げる。

いつもなら怯むけど、俺もそんな余裕は無い。

「エリーの為だ！」

「何……？」

「エリーの両親を殺したって、そう言っただけのうとするなんて卑怯だろ！」

どうしようもないこの状況。誰か一人が全員を相手にする事によって、みんなを逃がす。ジャオはそういう役目を自ら引き受けた。それは凄いよ。尊敬も出来る。

だけど……、

「あんたは生きて罪を償うべきだ！ 逃げるなんて許さない！」
「逃げ……か……。痛い所を突いてくるのお」

俺の意志が伝わったのか、ジャオが一瞬だけ表情を和らげる。

「しかし小僧……この状況をどうしのぐつもりで来た？」

「あんたの死ぬ気の覚悟と一緒になら、なんとかなるんじゃないかってな。死なすつもりは無いけど」

「ふっ……面白い！ わしに付いてこれるか、小僧！」
「上等ッ！」

俺とジャオが共鳴^{リンク}して、強力な一撃を放つ！

「^{ゲート}霊力野……全開！！ ^{ゴウハライダンショウ}轟覇雷断衝ッッ！！」

ジャオの渾身の一撃に、俺の雷の一撃も合わせ、沼野を揺るがすほどの大きな衝撃波を放った。巻き込まれた兵士達は吹き飛んでいく。

「はぁ……はぁ……これで、どうだ……？」

目の前に居た兵士達は全員吹き飛んだのか、姿は見当たらない。

「ジャオ！ 早く逃げるぞ！」

今逃げれば、兵士の追つても来そうにない。なのにジャオは、仁王立ちしたままハンマーを地面に投げ捨てた。

「すまん小僧……わしはやはりここで終わりのようじゃ……」

「何言つてんだよ！　今ならまだ間に合う！　だから　」

俺の言葉に、ジャオは首を横に振って空を仰いだ。その瞬間、辺りが急に明るくなった気がした。

ジャオの視線を追ってみると、空にある船の一隻の砲台が、こちらに向いている。多分、砲撃準備を行ってるんだろう。

駄目だ……あんなものを撃たれたら、今から走っても無事じゃ済まない。

考えるまでも無く、ただ本能がそう告げている。

刹那、俺の身体がいきなり浮いた。

「小僧……エリーゼを託したお前を死なせる訳にはいかん！」

ジャオにそう言われて、ようやく俺はジャオに持ち上げられている事を認識した。

「エリーゼを……頼んだぞ……」

「待つ　！？　」

俺が何か口にしようとしたその瞬間、俺はジャオに空高くに投げ飛ばされていた。

そして、

「ジャオ　！？　」

爆発音が聞こえるとともに、俺の身体は爆風に飛ばされる。そんな感覚だけを何故か感じながら、俺は意識を手放した。

第33話 壊れる殻（後書き）

まさかのジャオとの共鳴術技。でもやっぱりジャオさんはこうな
ってしまいました。

投げ飛ばされたカイトの運命やいかに！？
次回もお楽しみに！

第34話 合流 空いた穴

「……ッ!？」

気が付くと、見知らない天井が視界に入ってきた。

「じ……こは……?」

身体を起こそうとすると、全身に激痛が走る。けど、今の自分の状況を確かめようと、痛みを堪えて起き上がる。

辺りを見回してみても、やっぱり見覚えは無かった。

「……………俺、1人か」

フラッシュバックするように、あの時の記憶が蘇る。

結局……助ける事が出来なかった。逆に助けられるなんて……

何やってんだ、俺……。

みんなも……エリーもちゃんと逃げられただろうか?

「……! そうだ、キーホルダー!」

ポケットの中に手を入れて目的の物を探す。手に触れた物を取り出すと、綺麗なガラス玉が出てきた。

「……良かった……無事だった……」

無傷だったガラス玉を手握りしめる。
きつとみんな生きてる。そう信じながら。

「やっと起きたか？」

「え……」

いきなり声が聞こえて、その方向を見てみると、なんとそこにはイバルが居た。

「イバル！ 生きてたんだな！」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている？ 巫子だぞ！」

いや……巫子は関係無い気がするんだけど……。

「それにしても……ここはどこなんだ？」

「ニ・アケリアの俺の家だ」

「は……？」

ニ・アケリア……って、ファイザバード沼野からどのくらい離れてるんだ？

よく分からないけど……かなりぶっ飛ばされたんだな……。むしろ、何で俺生きてられたんだ？

「じゃあ、イバルが助けてくれたんだな」

「し、仕方なくだ！ 貴様がいきなり俺の上に落ちてきたからな！」

なんか照れ（？）ながらイバルがよく分からん事を言った。

「落ちてきたって……？」

「あの後、ミラ様をワイバーンに乗って捜していたら、いきなり貴様が落ちてきたんだ！ おかげでワイバーンが驚いてニ・アケリアに戻ってしまうし！ ミラ様の行方は分からずじまいだ！」

「あ、うん……悪い……」

いつものように叫ぶイバルに、思わず謝ってしまった。
……ジュード、よくあしらえるよなあ……。

「でも、助けてくれてサンキュな、イバル」
「ふ、ふんっ……俺は借りを返したただけだ」
「借り？」

何か貸してたっけ？
と言うか……イバルとはあんまり会わないからな。そんな機会も無かったと思う。

「ラコルム街道の時だ！ あの時、お前に助けられた借りは今返した！」

ああ……そう言えば、イバルが魔物に跳ねられそうになったのを助けた事もあったっけな？

イバルって……意外に律儀だったのか。

「別に気にしなくて良かったんだけどな」

「それでは俺の気が収まらん！ 返させろバカ者！」

バカ呼ばわりされた！？

何だろっ……めっちゃくちや腑に落ちない……。

「って、こんな事してる場合じゃないだろ。早くミラ達と合流しないと……」

「何！？ ミラ様がどこに居るのか知っているのか！？」

「いや、知らない。けど、ここで寝てる訳にはいかないからな」

もしかしたら俺、死んでる扱いになってるかもしれないし。

とは言えどうやって捜そうか？ あんまりゆっくりしている時間は無いから、効率よく捜せばいいんだけど……。

「あ……そう言えばイバル。ワイバーン扱えるんだよね？ 乗せてくれよ」

「図々しいぞ貴様！」

「頼むよ。お前だってミラが心配だろ？」

ミラの名前を出すと、イバルが「うつ……」と後ずさりした。

本当に……こいつはミラに弱いんだな。まあ、自分が仕えている訳だから仕方ないと言えば仕方ないんだろうけど。

そんな事を考えていると、イバルが踵を返して家から出ようとした。

「お、おい……イバル！」

「俺はワイバーンでミラ様を捜す。付いてくるなら勝手にしろっ！」

と言って出て行った。

……とにかく、ワイバーンには乗らせてくれるんだな。

「イバル、ありがとな！」

そう叫びながら、俺はイバルを追いかけた。

エリー、今行くからな。無事でいてくれよ！

* * * * *

カイトがイバルと一緒にワイバーンでミラ達を捜そうとしていた頃、そのミラ達はカン・バルクの街の外れに位置する、ザイラの森の教会で合流していた。

「ミラ！」

先に到着していたジュードが叫ぶと、エリーゼがミラに抱き付いた。

「良かった、みんな無事で……」

ジュードが安堵の息を吐きながら辺りを見回す。そこで異変に気が付いた。

「ミラ……カイトは……？」

「……会ってない。ジュード達と一緒にだと思っていたのだが……」
「……そんな……」

一気にエリーゼの表情が暗くなり、目に涙を溜めた。

「カイト君……きっと無事だよ……」

「そうですよ、エリーゼさん。あの方なら、きっと……」
「……」

レイアとローエンの言葉にも、エリーゼは泣きそうになって聞く

だけだった。

皆も俯きがちになっているそんな時、宙に浮いた女性がミラに話し掛けた。

「誰だ？ 初めて見る者だか……？」

「え？」

ミラがそう言うと、ジュードが意外そうに驚いていた。

「私はあなたの姉です」

「姉……？ 私に姉など居ないぞ」

「どういう事、ミュゼ？」

話が分からなくなったジュードは、ミラの姉と言う女性 ミュゼに問い掛ける。

「私も話するのは初めてです。けれど私達は同時にこの世に生を受けた精霊である事は事実」

「確かに……精霊である事は間違いない」

ミラがミュゼの気配を確かめて頷く。すると、ミュゼは笑いながら言う。

「そんなに警戒しないで。姉と偽ってあなたを騙す意味など精霊には無いでしょう？ だってあなたは、マクスウェルなのだから」

「確かに……何の得にもならないもんね」

ミュゼの言い分に納得したのか、ジュードが頷いた。

「では、何故、ジュードの前に現れた？」

ミラの問いに、またしてもミュゼは笑いながら答える。

「あなたの彼を思う強い感情が、私を彼のもとに召喚させたのよ」
「そんな事が、あるのでしょうか？」

まだ半泣きの状態のエリーゼが尋ねた。

その時、教会の扉が開かれ、中から四象刃のウインガルが姿を現した。

思わず皆が身構えるが、ウインガルには戦意は無く、ジュード達を手で制する。

その瞬間、何かの音が当たりに響き、ウインガルが「情報通りか」と呟いた。

そして、カン・バルクの方から鐘の音が聞こえてくると、次に聞こえてきたのは、ジランドの声だった。

『私はジランド。まずは、君達の街に強引に進駐した非礼を詫びよう。だが、我々の目的は支配などではない！ これは大国間による最終戦争を回避するための、非常措置だ』

ジランドの淡々とした声が響く。

『諸君の生活と安全は、アルクノアが責任をもって保証しよう！
我々と諸君の願いはひとつの筈だ！ リーゼ・マクシアに平和を！』

そして、響いていた声は聞こえなくなる。

この場に居る誰一人として、ジランドの言葉を信用している者は居なかった。

「ふざけた男だ。……ジランド。黒匣^{ジン}などを使って人や精霊に害を

なしながら!」

「……もう、あの者達を討つしか道は無いのではないかしら?」

ジランドの言葉に反論するように叫んだミラに、ミュゼがそんな事を言った。

ミラは小さく頷く。

「しかし、どうするおつもりですか?」

「そうだよね……あいつら、すごい強かったし……」

アルクノアを討つ。それについては賛成だが、ファイザード沼野での戦いを思い出したローエンとレイアがそう言う。

ほぼ奇襲と言っても差し支えないだろうが、それでもまともに戦う事は出来ていなかった。

2人の不安は仕方ないものだろう。

「……アルヴィン。もう知ってる事、全部話してよ!」

少し離れた所で座っていたアルヴィンにジュードが言うが、アルヴィンはそれを無視したように歩き出した。

ジュードが怒りながらも一度アルヴィンの名を呼ぶが、それさえも無視して腕に着いた鳥から何かを取り出していた。

「ガイアスは奴らに抗うのだろう?」

ミラが問い掛けると、ウィンガルは何も言わずに教会の中へと入って行った。

「誘っていますね……わざと私達の前に現れるとは……」

「僕達を試しているの?」

「畏……とか……？」

ジュード達が話していると、アルヴィンが皆に近付いた。
何か覚悟を決めたようにも 焦ったようにも 自棄になった
ようにも感じる。

「……行こうぜ。ケリつけるんだろ？」

「……アルヴィン君？」

「何か……あつたの？」

レイアとジュードの言葉には耳を傾けずに、アルヴィンはミラを
まっすぐに見る。

「もう裏切らない……約束する」

「……信じるというのか？」

これまでに何度も裏切られているからか、ミラが警戒しながら言
う。

「ジランドは許せねえ。頼む……オレにジランドを殺らせてくれ。
次にもし裏切ったら、迷わずお前の剣をオレに突き立ててくれても
いい。だから、オレも一緒に行かせてくれ」

必死に懇願するアルヴィンは、いつになく真剣だった。

「駄目だと言ったら？」

「……オレだけでも奴を殺る」

覚悟は本気なのだろうと、アルヴィンの目を見て納得する。

「ふつ……いいだろう。それに、この場にカイトが居たなら、必ずお前を信じると言ってきかないだろうからな」

「……悪い……サンキュな……」

カイトの名が出たその一瞬、アルヴィンの表情が動いたが、誰もそれを気に留める者は居なかった。

「ガイアス達の思惑も確認せねばな」

「ま、待つてください！ カイトはどうするんですか！？」

ミラ達が教会に入ろうと動き出すと、エリーゼがそう叫んだ。

「お前の気持ちは分かるが……いつここに来るか分からない者を待つていられる程、私達には時間は無い」

「どうしてそんな冷たい事が言えるんですか！？」

「エリーゼ……」

ミラの言葉に反感を抱くエリーゼが、涙を溜めながら叫ぶ。

「私はカイトが私達を信頼するのと同じように、私はカイトを信頼している。カイトの一番近くに居ながら、エリーゼはカイトを信じてやれないのか？」

「信じて……ますよ……！」

「なら、今は前に進め。カイトが生きているなら、必ず私達を追いかけてくる筈だろう？」

エリーゼはカイトに託された携帯電話を取り出して、ぎゅっと胸に抱いた。

「ごめんなさい……ミラ……。わたし……カイトを信じてます。だ

から……前に進みます」

涙を拭きながらエリーゼが言うと、ミラは微笑んで教会の中へと入って行った。

「行こう、エリーゼ」

「……はい」

レイアに手を引かれて、エリーゼも歩き出した。一度だけカイトを捜すようにして振り返り、教会の中へと入って行った。

教会の中には、ガイアスと四象刃フオーヴの姿があった。ただし、ジャオの姿だけは無い。

その事実が、エリーゼをより一層不安にさせた。

「来たか」

「……結局その男を信じると言うのか。意外とと甘いな、マクスウエル」

ウィンガルがアルヴィンを見ながらそう言った。

「私達をここへ導いた狙いは何だ？」

早速、ミラが本題に入るように問い掛ける。

「我らはヤツらと雌雄を決すべく、立つ。お前達が勝手にヤツらに挑むというのならそれはそれでいい」

「だが、その前にお前には話してもらっぞ。お前がひた隠しにして

きた断界殻シエルの事をな」

ミラはその間も、表情を動かさずにしていた。
断界殻という初めて聞く単語に、ジュードも呟きながらミラを見た。

全員の視線が集まると、ミラはジュードを一瞥してから意を決したように口を開いた。

「今から二千年前……このリーゼ・マクシアは、私の施した精霊術
断界殻によって閉ざされた世界として生まれた」
「この世界が……ミラに創られた世界？」

そう言われても実感がわかないのだろう。レイアがそう呟く。それにティポも驚きの声を上げた。

「全ては、精霊と人間を守るためだった」
「閉ざされた、と言ったな。それでは断界殻の外にはまだ、世界が広がっていると言うのか？」
「うむ。その世界をエレンピオスと言う」

ガイアスの問いに、ミラが即答した。
今あるこの世界が閉ざされたもので、さらに外には世界が広がっていると言う。その事実、この場に居た皆が驚きを隠せず、戸惑っていた。

「だが、クルスニクの槍について、私は大きな思い違いをしてしまった。奴らはナハティガルに兵器と伝え、謀り、断界殻を打ち消す装置を作っていたのだ」

クルスニクの槍の本来の力。それは人を大量に殺してしまう兵器

ではなく、ただ断界殻を打ち消すためのものだったのだ。

「打ち消すだと……？ それに何の意味がある？」

ミラは分らないと首を振る。

「断界殻を打ち消し、エレンピオスにマナを還元する算段でもしていたか……」

その呟きにアルヴィンは違うと答える。

突然口を開いたアルヴィンに、視線が集まった。

「アルクノアはただ……帰リたかったただだ。生まれ故郷のエレンピオスにな」

自分もそうだと言うように、アルヴィンは言う。

「この世界に閉じ込められた二十余年……その為だけに動いてきた。断界殻をぶち破る方法を見つけるか、断界殻を消すか……」

そう言ったアルヴィンは、ミラに視線を向けていた。

「断界殻を消す為には、生み出した者を排除しなければならない」

「……アルクノアがミラの命を狙ったのは、その為だったんだね」

レイアが納得したように言うと、ミラが静かに頷いた。

「解せん……ジランド、何を企んでいる？」

何か思う所があるのか、ガイアスがそう言うと、エリーゼが何が

と尋ねた。

「アルクノアの目的とジランドの行動はそぐわないものです」

「エレンピオスから軍を呼び寄せる必要なんかない。リーゼ・マクシア統一……？ オレ達は……そんな事望んじやいない」

槍を発動させ、敗れた断界殻から軍が来たのは、アルヴィンも知らなかったようだ。

「ジランドは断界殻がある今の世界のあり方を、何かに利用しようとしているのかもしれないな」

ウインガルがそう言つと、沈黙が訪れる。その沈黙を破ったのはアルヴィンだった。

「そうか、異界炉計画だ……」

ジュードとアグリアが聞き返すと、アルヴィンは皆に説明するよつに言う。

「通称 精霊燃料化計画。まだオレが向こうに居たガキの頃、従兄が話してたのを覚えてる。黒^{ジン}匣の燃料である精霊を捕まえるって話があるってな」

「……つまり、ジランドの狙いは精霊の囲い込みってワケ？」

「だけど……それおかしいよ。精霊だけなら、あんな嘘つく必要無い。ジランドは……」

ジュードが頭に指について考え込む。そして、何かを思いついて見回しながら口を開いた

「^{ゲート}靈力野を持つ僕達も一緒に、リーゼ・マクシアに閉じ込めるつもりだよ」

「リーゼ・マクシアの民を資源にするつもりか……バカげた事を」

声には出さないが、ガイアスは恐らく憤りを覚えているのだろう。拳が強く握りしめられた。

「多分ジランドは海上にあるアルクノアの本拠地に戻ってる。エレンピオス軍も来てるんだ。船で近付くにも厳しいぜ」

ファイザバード沿野を攻撃してきた空を駆ける船。あれが何十隻もある状態では、ジランドのもとへと辿り着くのは難しいだろう。

「では、カン・バルクに停泊している、連中の空駆ける船を奪うのはどうかと」

ウインガルがそんな事をガイアスに進言していた。

「あの人、さらっと凄い事言ってるじゃない？」

「ですが、それしか手は無いでしょうね」

驚いていたレイアが小さい声で呟くと、ローエンがそう答えた。

そうしていると話し合いはまとまったのか、ガイアスが「明日決行する」と言い出した。そして、ガイアス達が去ろうとした。

「待って！ ガイアス！ 一緒に戦ってくれるんでしょ？」

立ち止まるガイアス達に、ジュードは自分たちの目的は同じだと告げると、ガイアスはきっぱりと切り捨てた。

「マクスウェルが勝手に断界殻を作り出し、我らをこの世界に閉じ込めている事実……これも知った以上は捨て置けん。お前達とはまた争う事になるかもしれぬ」

「そんな人達とは必要以上に馴れ合えないわ」

「お前達は勝手にやるがいい。が、我らの邪魔はするな」

ガイアス達は、ミラ達と共闘する気は無いらしく、もう話す事はないとでも言うように去っていった。

「もー！ 何あれー！」

ガイアスと四象刃が去ったのを確認してから、レイアが怒ったように教会の椅子を叩きながら言った。

「奴らも手が足りないのだろう。情報を共有させたのが何よりの証拠だ」

「ああ言いつつも、今は私達をアテにしているのでしょうね」

レイアをなだめる為にか、ミラとローエンがそう言った。

「あの……わたし、話を聞いていて思ったんですけど……カイトが居た世界って、もしかしてエレンピオスじゃないですか？」

「それは無いな」

椅子に座っていたエリーゼが、携帯を握り締めて立ち上がると、皆にそう言った。だが、それはアルヴィンがすぐに否定した。

「何で分かるんだよー！」

「オレが居た時も、カイトが言ってた国も都市も聞いた事がない」

ティポが怒ったように言うが、アルヴィンの言葉には説得力があった。

「でも、アルヴィン君が居たのって二十年前なんでしょ？ その後に出来たんじゃ」

「それこそ有り得ない」

今度はレイアが言った言葉をすぐさま否定した。

「カイトが持っていた『携帯電話』。あれは黒匣でもなければ精霊術も使ってない。そんな物が普及する国が二十年ちよつとで出来る筈がない」

「もし、出来ていたら……？」

「黒匣よりもヤバい物を使ってる。だから、カイトの世界はエレンピオスとは無縁だと思う」

それならば、もう1つ世界があるという事になる。

そう思ったジュードがミラに視線を移すが、ミラは首を横に振る事で答えた。

「とにかく、今日は休もう。ガイアス達に全てを任せる気は無いからな」

「そうだね……明日も、戦いになるだろうし」

ミラとジュードが言うと、この日は解散となった。

第34話 合流 空いた穴（後書き）

第三者視点って難しい……。状況把握を文字だけでやるのって……
…難しいですね（汗）

次回は空中戦艦の奪取まで行きます。

それにしても、あの戦艦の名前って何でしょうね？ 多分作中に
出て無かったと思うんですけど……。

第35話 空中戦艦奪取（前書き）

エリーの視点が結構難しい……。

第35話 空中戦艦奪取

今日はとりあえず解散と言う事になったけど、わたしは礼拝堂の椅子に1人で座っていました。

もう日は暮れて辺りは暗いけど、ティポを抱いていれば暗さなんか恐くはありません。

でも……こういう時にいつも近くに居てくれるカイトが居ないのは……暗い事よりも恐くて、不安でした。

きつと生きてる。そう信じてるけど……。

さつきジュードが四象刃のアグリア、プレザの2人と話している声が聞こえました。

あの状況で残ったジャオさんは、生きてる筈がないと。なら、一緒に残ったカイトも……。

「カイト君……死んじゃったのかなー？」

「！？　そ、そんな事無いです！　どうしてそんな事言うの、ティポ！」

「どうしてって……エリーが思った事を言ってるだけだよー」

「わ、わたしは……そんな事……思ってます……」

少しでも思ってしまうと、ティポが口に出してしまう。

信じたい。信じてるのに……どこかでわたしは、そんな事を考えてしまっている。

「ちゃんと……これをカイトに返すんです……」

ティポにも見せるように、カイトから預かった『ケータイ』と言う道具を取り出しました。

「そういえばコレ、何に使うの？」

「遠くの人とお話したり、お手紙を出すって、カイト言っていました」
「なら、カイト君と話せるんじゃないのー？」

「ティポ、賢い！」

言われてみればそうです。これがあれば、遠く離れたカイトとお話が出る筈です。

早速、折り畳まれたケータイを開いてみます。

「……どうやって使うんでしょう？」

「さあ……？」

ケータイを開くと、薄暗い礼拝堂を小さく照らしました。

何で光が出るんだろう？ カイトの持ち物はわたしにとっては不思議な物ばかりです。

とりあえず、丸い形をしたボタンを押してみます。そうしたら、映し出されていた映像が突然パツと変わりました。

「何コレー！」

「わ、分からないですよ！」

壊しちゃったのかな？ 分からずに適当にボタンを押していくと、また映像が変わってティポが映し出されました。

「ティポが映りました！？」

「えー！」

「あっ！」

ティポが動いてケータイを覗いてくると、ケータイに映っていたティポが居なくなりました。

「どこー?」

「今、ティポが居たんです!」

本当に不思議な道具です。

そう思っていたら、いきなりケータイが強く震え出しました。

ビックリして、わたしはケータイを床に落としてしまいました。

「な、なんだろう、これ……?」

床に落としても、ケータイの震えは止まりません。

とりあえず映像を見てみると、そこには数字がたくさん書かれていました。

「ど、どうしよう……?」

わたしがどうしていいか分からずに慌てていると、ケータイの震えが止まりました。

「いったい……何だっただんでしょう?」

「わかんないー」

「エリーゼー! どこー?」

ティポと顔を合わせて首を傾げていると、レイアの声が聞こえてきました。

「あ、エリーゼ、こんな所に居たんだ」

「どうしたんですか?」

「またレイアのお節介ー?」

「ティポ!」

……ティポはたまに、わたしが思っていない事も言いますよね。

「あはは、そうだよ、お節介焼きにきたんだから。もう夜も遅いし、エリーゼは寝なきやダメだよ?」

「もうそんな時間ですか?」

ケータイをいじるのに夢中になっていたんですね。

「夜更かししたら、大きくなれないよー?」

「それはレイアもだよな?」

「あ、あたしはそこそこだからいいの!」

「ミラ君の方が大きいもんねー」

「あたしはまだ成長期なのっ!」

ティポの言葉にレイアが怒るように言いました。

「大丈夫です。レイアは大きくなりますよ」

「エリーゼも成長期だから大きくなるんじゃないかな!? とにかく寝よ、エリーゼ?」

怒ったようでも、すぐに笑ってくれる優しいレイアも、わたしは大好きです。

「はい、もう寝ますね。おやすみなさい、レイア」

「うん、おやすみ、エリーゼ」

レイアにおやすみを言って、わたしはティポを抱いて部屋に戻りました。

きつとカイトは生きていると信じながら、わたしは眠りについた

のでした。

* * * * *

辺りが暗くなって、俺達は仕方なくシャン・ドウに降り立っていた。

「で、泊まる金が無いのか……」

「何故巫子である俺が野宿などせねばなんだ!？」

「それはこっちのセリフだ!？」

街中で叫び合うのはかなり迷惑だろうけど……仕方ないじゃないか。野宿は嫌なんだから。

旅の間財布は持ってたからなあ……いつもジュードが計画的に使おうって言うってたから。

ってかそもそも、すぐに日が暮れる事に気付けば良かったんだ……。

ここ、シャン・ドウは、近くに雪原があるからなのか、日が落ちた今はめちゃくちゃ寒い。こんな所で野宿なんかしたら、エリー達に会う前に死んでしまいかねない。

「あれ……君は……カイトじゃないか？」

「え……?」

イバルと言い争いをしていると、背後から声を掛けられた。

振り返ってみると、そこに居たのは何と、ユルゲンスさんとイスラさんが居た。

イスラさんは俺を見ると気まずそうに視線を逸らした。……この反応は、ユルゲンスさんにはまだ話してないんだろうな。まあ、俺が気にする事じゃないんだけどさ。

「こんな所で何をしているんだ？ 君達は確か、イル・ファンに言っただけじゃ……？」

「それがですね」

ユルゲンスさんは信頼の出来る良い人だから、何があつたのかを簡単に説明した。

「なるほど……はぐれてしまったミラさん達を捜していたのか」「はい。暗くなってきたんで、それで宿泊まろうとしたら金が無い事が判明してですね……」

「貴様、ミラ様と旅をしておきながら金すら持つてないとはな！」「お前だつて巫子のくせに何で1ガルドも持つてないんだよ！？」

むしろその方が不思議でならない。

「そう言う話なら、私が出そう」

「ユルゲンス！？」

まさかのユルゲンスさんの言葉に、イスラさんが驚いていた。と言うか、俺達も驚きだよ……。

「いいんですか？」

「構わないよ。君達には、いろいろと世話になつた事もある訳だから」

らね」

その件はワイバーンでチャラになったんじゃないですか？
それにどちらかと言うと、世話になったのは俺達の方だよ……。
むしろ世話になり過ぎに思ってしまうぐらいに。

でも、今は背に腹は代えられない。喜んでこの好意を受け取ろう。

「ありがとうございます、ユルゲンスさん。じゃあ、俺達行くんで」
「ああ、ミラさん達と会えるといいな」

金の入った袋を受け取って、俺はイバルを引きずって宿屋へと駆けこんだ。

とりあえず、寝床は確保できたのだった。

* * * * *

翌朝。教会を出たミラ達はガイアス達と合流していた。
朝早くから、カン・バルクは吹雪いている。

「空中に停泊している艦へは、どのように攻め入るつもりなのか？」
「か？」

開口一番、ローエンがそう問い掛けた。

「城に繋いであるワイバーンを使う」

その問いに、ウィンガルが機械的に答えた。この質問は、予想されていたのだろう。

「城まではどうする？」

「俺の城に向かうのに策を弄するつもりはない」

「大通りから突破する」

つまりは強行突破。ガイアス達は真正面から戦いを挑む気でした。

「そんな！ 無茶だよ！」

「そうです。せめて二手に分かれて……」

そんなガイアス達に、ジュードが言うと、ローエンも続けて言うが、途中で言葉を切り何かを考え始めた。

「てめえらの意見なんて求めてねーんだよ」

座り込んでいたアグリアが、拒絶するようにそう言った。

ガイアスは、ジュードを見据える。

「ジュード、お前のなすべき事、分かっているか？」

問い掛けに、ジュードは力強く頷く。

「ミラを勝たせる……それが僕のなすべき事」

その答えに、ガイアスは一瞬だけ微笑したかのように見えた。そして、ガイアス達は街の方に向かって行った。

「教会の脇から市街に続いてる道があるわ」

プレザが立ち止りそう言って、最後にアルヴィンを一瞥してから
ガイアス達を追う。

「もー！　なんで仲よくしてくんないのー！」

4人が素っ気なさすぎる事に、エリーゼが肩を落とし、代わりに
ティポがそう怒っていた。

「うふふ、どうしようか？」

「そうだな……」

「教会の脇を抜けて、裏道から市街へ入り、そこからは屋根伝いで
城を目指しましょう」

悩み始めたミラ達に、ローエンがそう言った。

「そして、空中戦艦奪取と共に城と兵達を奪い返すのです。彼らは
陽動を買って出てくれたんですよ」

とても回りくどいので分からなかったが、ローエンに言われて気
付くと、レイアが「素直じゃないなあ」ともらした。

「では、行こう！」

ミラの掛け声で、ミラ達も城に向かう事になった。

無事に市街に入ってから順調に屋根伝いで進んでいくと、急にジュードが皆に伏せるように言った。ジュード達が居る屋根の下では、今まさにガイアス達がアルクノアの兵士と戦っている最中だったのだ。

「ガイアス、強いですね」

次々と敵をねじ伏せていくガイアスを見て、エリーゼがそう呟いた。それにジュードは、「凄い人だよな」と答えるように言う。

「ジュード！ 後ろだ！」

「え！？」

突然のミラの声に振り返ろうとすると、ジュードの横を衝撃波が飛んでいき、ジュードが振り返った時には兵士を吹き飛ばしていた。

「さ、オレ達もさっさと行こうぜ」

立ち止っていたジュードにアルヴィンが促して、先を急ぐ。

「苦戦していますね」

城まで後少しと言う所で、ローエンがガイアス達を見ながらそう言った。

「助けた方がいいんじゃない？」

レイアの提案にジュードは迷うが、「私達が向かえば、彼らの陽動が無駄になる。任せるしかない」とミラが言う。

そして下では、市民やカン・バルクの兵士達がガイアスに加勢し

ていた。

「あんなに人望があるんだ」

「お前の役目は……ミラを勝たせる事なんだろう？」

迷いが消えたのか、ジュードは頷いて先に進む。

屋根を降りて城の中に入り、ワイバーンで空中戦艦へと向かった。

空中戦艦に降り立つ。

「まずは船橋を掌握しましょう」

「船尾のあれじゃないか？」

ローエンの言葉にアルヴィンが言うと、皆がその方向へと視線を移した。

そうしていると、ミラ達が侵入した事に兵士達が気付き、ミラ達の前に立ちはだかる。

「ここからは力押しだ！」

ミラの掛け声と共に戦闘が始まる。

始めこそは順調に敵を倒していくミラ達だが、多勢に無勢。兵士は次第に多くなっていく。

「ちょっとちょっと、さすがに多くない!？」

兵士を棍で叩き倒したレイアがそう呟く。

「二手に分かれよう。一方が艦橋まで辿り着いて、この船を地上に

降ろすんだ」

「確かに。そうすりゃガイアス達の支援もある。ここの敵もどうにかなるな」

ジュードの提案に、アルヴィンが兵士を斬りながら同意した。

「問題は誰が行くかですね」

ローエンがそう言うと、ジュードはミラの近くに居る兵士を殴り飛ばして言った。

「僕はここに残るから、ミラが行って」

「ジュード……」

ミラが頷こうとしたその時、何か魔物が鳴く声が聞こえてきた。

「はーっはっはっは！ 俺の地獄耳で話は聞かせてもらったぞ！」

「この声って……」

聞き覚えのある声なのか、ジュードが呟きながら空を仰ぐ。

この場に居たアルクノアの兵士達も、突然の声に空を見上げていた。

空には1匹の動物らしきものが浮遊していたのが、肉眼で確認できる。

そして、ジュード達にはさらに、聞き覚えのある声を聞く事になる。

「みんな！ 避けるよッ？」

「え……？」

その浮遊している動物から、何かが飛び降りた。

「あの声……まさか……！」

「！？ みんな！ 私の近くに！」

エリーゼが空を仰いで目を見開いていると、ミラがそう叫んだ。レイアがエリーゼの手を引いて、皆がミラの周りに集まると、ミラが空に手をかざし大きなマナの障壁を作り出した。

次の瞬間、マナの矢が雨のように降り注いだ。突然の声に戸惑っていたアルクノアの兵士達は、防御も何も出来ずに攻撃を喰らう。

「これは……カイトの技だ……」

矢が降り注ぐ技を見たアルヴィンが呟く。

そして、技を放った張本人がミラ達の目の前に降り立った。

* * * * *

「よっ、久しぶり。間に合ったか？」

ワイバーンから飛び降りて飛行艇に着地。目の前に居るエリー達に向かってそう言った。

俺が放った技はミラが全部防いだようで、みんな無傷だった。さすがミラだな。

と言うか、エリー固まってるな。

「よっ、じゃないよ！ あたし達まで巻き込んで！」

「少し反応が遅かったらオレ達まで喰らってただろうが！」

「う……ご、ごめんなさい……」

めちゃくちゃ怒られた。

まあ……避けるとは言ったけど、こんな足場の狭い場所で避けるって結構難しいよな。

「何にせよ、生きていてくれて嬉しいよ」

「そうですね。あの状況で生きているとは、さすがカイトさんです」

ローエン……それは褒められているのか？

「それにしても、どうして空から？ それにさっき、イバルの声も聞こえたよね？」

「ああ、イバルのワイバーンに乗せてもらったんだ」

俺がそう言った瞬間、後ろの方で何かがぶつかり落下した音がした。

後ろを振り返ってみると、兵士達が固まっている。イバル……着地ミスったのか？

「な、何だ貴様らは……！？」

突然現れた俺とイバルを交互に見ながら兵士が言うと、イバルが落ちた所がいきなり爆発した。

そして、イバルが俺達の前に姿を現した。……額にたんこぶ付いて。

「あいつ、生きてたのか」

アルヴィンが呟いたのが聞こえた。

「おい、偽者！ 貴様の出番など無い！ ここからは俺の独壇場だ！」

「イバル！ うん、お願い！」

格好付けて言うイバルに、ジュードが即答でイバルに任せた。
一方的にライバル視しているイバルにはそれが面白くないらしく、
地団駄を踏んでいた。

……地団駄つて、この世界にもあるんだな？

「どうして貴様は俺の活躍に嫉妬しない！」

「あ……なら、やっぱり僕が。イバルは見てていいから」

「はっ！ お前に活躍の場などない！」

本当にイバルの扱い方が上手いな、ジュードは。
と言うか、イバルも単純過ぎるよなあ。

とにかく、イバルはジュードに手柄を渡さない為にも、兵士を蹴り飛ばしながら船橋に向かった。……つて、よじ登ったよ！？

……アグリアもだけど……変な動きする奴が多いよなあ。

「優等生、随時とあいつの扱い上手くなったんじゃない？」

「とっさに思い付いたんだよ。前にもカイトがやってたし」

「え、やったっけ？」

そんなにイバルを上手く操った事は無いけどな？

「でも、ミラの事言わないんだね」

「ジュードが気になるのだろう。それで力が発揮されれば問題ない」

巫子とか連呼するくせに、いいのかそれは？

「さて、私達はイバルが制圧するまで時間を稼ぐぞ！」

兵士はさっきの技である程度は倒せてはいたけど、まだ数は居る。

「か、カイト！」

「エリー、話は後だ。今はここをどうにかしないと」

「そ、そう、ですね……」

ようやく硬直が解けたエリーだけど、後で落ち着いてから話せばいいだろう。

俺は剣を握り直して兵士に向き直る。さて、遅刻した分、働かないといけないな。

そう思って人一倍頑張っで戦っていると、突然放送が入った。イバルが船橋を制圧したらしい。

「イバル！ この船を地上に降ろして！」

「貴様に言われなくとも分かっている！」

ジュードの言葉に反発するように言っただけで、何をどうすればいいのかわからないと言った感じが放送で筒抜けだった。

そして、イバルが何かのスイッチを押した。

その瞬間、甲板に設置されていた兵器が動き出した。

「ヤロー、何しやがった！」

「あいつ……やっぱりバカだ……」

「仕方のない奴だ……」

みんながそれぞれ愚痴ってから、俺達は兵器と戦う事になった。

「三ツ星煌めけ！ デルタレイ！ 続け、フラッシュティア！」

3つの光の弾を生み出し敵に飛ばす。そして、光の魔法陣を描き閃光を放った。

けど、全く壊れる気配は無い。

「うわ……意外に堅いな……」

「カイト、わたしと一緒に！」

「よし、やってみるか！」

エリーと共鳴して、兵器を一気に叩く。

「ティポ頑張つて！」

「ティポに力を！」

「「ティポルネード……」」

弓に変形させ、矢の代わりにティポを構える。エリーと俺のマナをティポに集中させ、ティポを兵器に向けて放った。

回転しながら飛んでいくティポは、兵器を貫いた。

「ただいま」

「頑張りました！」

帰ってきたティポをエリーが撫でた。

「他も終わつたみたいだな」

見回してみると、他の兵器も破壊されていた。
ようやく終わりか……。

「ここまでだ！ この船は完全に我らが掌握した！」

ひと息ついていると、ガイアスと四象刃、そしてア・ジュールの兵士が甲板に上がっていた。

「ガイアス達だけで、何とかなったのかもね……」

ジュードはガイアス達を見て、安心したように床に座った。

「……っ」

「カイト！」

気が抜けたら片膝を着いてしまった。さすがに疲労が溜まっていたみたいだ。

エリーが泣きそうになりながら走ってきて、抱きついてきた。テイポも珍しくすり寄ってきた。

その勢いで尻餅を着く。

「どうしたんだよ、エリー……？」

「よ……良かった……です……ホントに……ひっく……カイト……良かった……」

泣きながらそう言うエリーを撫でる。

「ごめんな、心配させて……」

それしか言えない。他にも言う事だっと思うけど……。
そうしていると、いつの間にかガイアスが近付いて俺を見下ろしていた。

見下ろされると、さらに威圧感が増していて、思わずエリーを抱き締める腕に力がこもってしまう。

「ジャオはどうした？」

「……多分、死んだ……」

威圧感に負けないように、エリーの温もりを感じながらガイアスの目を見て言う。

「……助けられなかった……逆に……ジャオに助けられた……ごめん……」

「そうか」

「……責めないのか？」

助けるとか死なせないとか言ってたのに、結局何も出来なかった俺を。

「自らの信念を貫こうとした者を責める事はすまい」
「……ごめん……」

もう一度謝ると、ガイアスは静かに去って行った。

「カイト……ジャオさんは……」

「ごめんエリー……落ち着いたら話すよ」

俺はそう呟いて、またエリーを抱き締める力を強めてしまった。

第35話 空中戦艦奪取（後書き）

やっとこの小説の書きたかった部分第2弾です。空中から矢の雨降らす為だけにカイトの武器を弓に変形できるようにしたと言っても過言では無いです（笑）

次回は休息な感じなので短めだと思います。

〽今回の共鳴術技〽

・ティポルネード

神射鶏＋ティポ戦吼

カイトとエリーゼの共鳴術技。

マナを溜めたティポを弓で発射させる。発射されたティポは回転しながら敵を貫く。

第36話 休息中の不安

空中戦艦を奪取した後、俺達はカン・バルクの城で今後どうするのかを決めていた。

とは言え、ほとんどガイアスが決めてるようなもんだけだな。

とりあえず、動くのは戦艦の機能を掌握した後らしく、それまでは休む事になった。

けど、俺達には　　と言つかミラには　　やる事があつたらしい。それは、

「イバル……勝手にカギを持ち出した挙げ句、クルスニクの槍を発動させた言い訳を聞かせてもらおうか？」

そう、ファイザード沼野でイバルが何でクルスニクの槍を発動させたのか、その理由を聞いていなかった。

まあ……これはもう尋問に近いんだけど……。

「お、俺はただ……ミラ様の為にと……」

「私の為になる事が何故槍の発動に繋がる？」

「し……四大様を助ければ……ミラ様は本来のお力を……取り戻すかと……」

ミラの鬼の形相に、イバルは半泣き状態だった。

他のみんなも、こればかりは口出しは出来ずにいる。

仕方ない……俺が割って入るか。

「ミラ、そのへんにしてやれよ。一応反省はしてるんだからさ」

「だからと言って、槍を発動させた事を簡単に許す訳にはいかない」

「イバルはミラを助けたかっただけなんだ。その気持ち先走って

こんな結果になっただけだ」

俺だって、大切な者が エリーが危険にさらされていて、それを助けられるのはクルスニクの槍のような強大な力を持ったモノだけ。なんて状況だったら、使っているかもしれないからな。

「許せとは言わない。だけど、償わせるチャンスぐらい与えてもいいと思うんだ」

「わ、わたしからもお願いしますっ」

エリーがミラに言った。

すると、諦めたように小さく息を吐いた。

「仕方ない、カイトとエリーゼに免じて、チャンスをやろつ。イバル」

「は、はいっ！」

「これからアルクノアの本拠地へ乗り込む。その時に皆が認めるような動きを見せてみる」

「お、お任せを！」

返事だけは良いイバルだった。

とりあえず、これでイバルの件はひと段落着いたな。

やる事も無く、とにかく休もうと床に座って壁に背を預けていると、エリーが隣に座ってきた。

俺を見てくるエリーは、何かを聞いたそうにしていた。

「あの……カイト……」

「ん？ ああ……ジャオの事、だよな？」

言いくそうにしているエリーの代わりに言うと、俯いて小さく頷いた。

「ごめん……結局……ジャオの事は助けられなかった……」
「……はい……」

エリーはジャオにも生きていて欲しいって、そう思っていた筈なのにな……。

「あいつ……最初から死ぬつもりで1人で残ったみたいなんだ……。エリーに両親の事話したのも、最期だって覚悟したからだと思う」

いや、したんじゃない、しなければならなかったのかもしれない。

「けど……ジャオは自分から死ぬべきじゃなかったと思う……。確かにジャオのおかげでみんな逃げれた。ジャオがあ選択をしたたからこそ、みんな無事だったんだ。その行動は誰にも真似出来ないし、尊敬も出来るかもしれない」

でもジャオは、1つだけ責任を投げたんだ。

「エリーを見守る事。それを投げちゃ駄目だろ……」

最期には俺に託し、俺を助けてくれたけど、それだけは言いたい事だった。

「カイトは……ジャオさんがどうしてわたしを心配してくれていたか……分かりますか？」

「本当の事は分からないけど……ジャオはエリーの事を大切に思っていたからじゃないかな？」

「エリーのお父さんとお母さんを殺したのにー？」

ティポが言うと、エリーの肩がピクリと震えた。

「本当の事は分からないって言ったろ？ でも、ジャオがエリーを見る目は、娘を見守るような、そんな眼差しだったと思うんだ」

「娘……ですか？」

「きつと、エリーの両親との間に何かあったんだと思う。両親が死ぬ前に、ジャオと約束を交わしたのかな」

「どう……なんでしょう？」

全部想像 妄想と言われても仕方ない事だ。エリーも首を傾げて不思議そうにしている。

「真実は分からずじまい、だけど、ジャオはエリーを大切に思っていた。それだけは、何となく分かるよ」

俺が同じようにエリーを大事に思っている立場だからなのか、自分自身そうあってほしいと思っているからかもしれない。

「ごめんな、ほとんど想像ばかりで」

「いいんです……ホントの事は、もう……分かりませんから……」

最近謝ってばかりかも、俺。

謝ったって何も帰ってはこないのにな……。

「カイト、1つお願いしてもいいですか？」

「まあ、俺に出来る事ならいいけど……」

俺がそう答えると、エリーがいきなり立ち上がった。

「少しでいいですから……ギュって、抱きしめてください……」
「……………へ？」

……………ナ、ナンダッテ！？

よく言葉が理解出来ずに立ち上がったエリーを見上げる。
顔を真つ赤に染めたエリーは俯いているけど、俺座ってるから俯いても意味無いよ？

「あ……っと、わ、ワンモア……………」

……………プリーズ……………。

「か、カイト、わたしにいっぱい心配かけました！　だ、だからその……バツです！」
「ダンザイされろ！」

うわぁ……………何その可愛い理由……………。
と言うかそんなに叫ばないで！？　今通ってた兵士が明らかに不審そうな眼差しを向けてたから！？

「でもさ、空中戦艦で抱きついてきたけど、あれは……………？」
「あれじゃ足りません！」

何が！？　そしてそれが本音か！

「……………ダメ、ですか？」

肩を落として、エリーが呟いた。
そんなされたら……やらない訳にはいかないじゃないか……。

「じゃあ、ちよつとだけな」

そう答えると本当に嬉しそうな表情になつて微笑んだ。

ああ……ホント可愛いな……。

そう思いながらエリーを抱き寄せる。空中戦艦に居た時も抱きしめてたけど、人の温もりつてやっぱり大事なんだな。温かいし、何よりも独りじゃないと実感できる。

でも……城の中で何やってんだろ、俺……。まあ、一応は兄妹つて認識だから別にいいよな？

とか思っていたら、城の入口からジュードが入って来て、バツチリ目が合ってしまった。

「よ、ようジュード……どこ行つてたんだ？」

予想外と言うか……とにかく身体が動かなかったから、エリーを抱きしめたままジュードにそんな事を言っていた。

「ミラとちよつと話してたんだ。もうそろそろ出発するみたいだから戻って来たんだけど、カイトとエリーゼは何してるの？」

「え、いや……これは……」

「兄妹のカンドーの再会だからねー」

俺が言葉を濁していたら、代わりにティポがそう答えていた。ジュードもそれに納得したように笑った。

「もうすぐで行くみたいだから、遅れないでね？」

「ああ、分かった」

ジュードが去って行つてすぐに、エリーが俺から離れる。引いて行く温もりに寂しさを感じながらエリーを見ると、まだ顔を赤くしていた。

「大丈夫かエリー？ 顔真つ赤だけど……」
「カイトも赤いですよ？」

言われても全く実感がわかない。

「そうです、カイト、これ」

と、手渡して来たのは、俺がエリーに預けていた携帯だった。

「ちゃんとお返ししますね」
「ああ、ありがとな、エリー」

受け取つてすぐに、エリーから貰ったガラス玉を付け直す。うん、やっぱりここに無いとしっくりこないな。

「いろいろいじっちゃいました」
「ふしぎおもしろかった」
「ははは、そりゃよかったよ」

いじつたつて言つても、字が読めない筈だから……なおさら危険だ！？

「それに、そのケータイ、いきなり震えだしたんですよ」
「変な数字がいつぱいだつたよねー」
「数字……？ まさか……！？」

ポケットにしまおうとしていた携帯を慌てて取り出し、着信履歴を開いた。

確かに一番上の最新着信は、ついこの間のようだった。そして、その番号には見覚えがある。

急いで着信履歴から掛け直す事にする。

出るよ……頼むから出てくれよ……。

願いが通じたのか、コール音が途切れる。

「もしもし！ 華沙音！ 聞こえてるか！？」

見覚えのある番号。それは、俺が居た世界での俺の幼馴染
村華沙音じむらかさねの携帯電話の番号だった。 藤ふ

だけど、いくら呼びかけても一向に向こうからは何も音が聞こえない。そして、

ブツンツ……ツ……ツ。

電話が切れた。

携帯の画面を見てみると、アンテナは相変わらずに立っていない。なら、今のは何だったんだ！？

「カイト……どうしたんですか？」

「！？ あ、いや……何でもないよ」

「む……」

心配そうにしていたエリーは何故か不機嫌な表情になり、そして何故か、決意したようなそんな表情になった。

「わたし、絶対にカイトに見合う女性になりますね！」

「……はい？」

またもや唐突な発言に驚いていると、エリーはティポを連れて走って行ってしまった。

考えていた頭が完全にフリーズした。何故このタイミングで？それに、逆に俺が見合うかが心配なんだよな……。エリー、大人になったら絶対に綺麗になるだろうからな……。

「ま、元気だからいいか」

そう言う事にしておこう。

考え事は……俺には分からないからまた今度考えよう。

謁見の間の前に行くと、既にミラ以外のみんなが集まっていた。

「あれ、ミラは？」

「ミュゼと話があるみたいだよ」

ジュードがそう答えて、俺は改めて首を傾げた。

……ここで聞くべき、だよな。何も知らずに戦うつても、何か気持ち悪いし。

「今さらだけどさ……ミュゼって誰？あと、あの空中戦艦って何？」

「……そう言えば、カイトには話してなかったよね、いろいろ」

と言う事で、俺が居ない間に話された事を説明してもらった。ミュゼがミラの姉だと言う事。このリーゼ・マクシアはマクスウ

エル ミラが創り出した事。その外の世界はエレンピオスと言い、アルクノアはそこから来た事。異界炉計画の事。ジランドがリーゼ・マクシアの人々を異界炉計画に利用しようとしている事。

いつきに話されたからこんがらがったけど、まあ理解は出来たと思う。

「何というか……途方のない話だな」

まさか、この世界が閉ざされた場所だとは思わなかった。

「すまない、待たせたな」

話していると、ミラとミュゼが合流する。

これで全員が揃った。

「それじゃ、ガイアスの所に行こうぜ」

「お待ちください、皆さん」

真剣な表情で、ローエンがみんなを呼び止める。

「この戦い、ガイアスさん達も本気のようにです。準備だけは怠らないようにしましょう」

「みんな準備出来てるか？」

ローエンが言った事に、俺が続けてみんなに問い掛けた。
本気なのはガイアスだけじゃない。俺達だって本気だ。

「私はもちろん、出来ていますよ」

「あたしもだよ」

「オレはいつでも行けるぜ」

「わたしも、大丈夫ですっ」

「かつとばすぞー！」

「僕も万全だよ」

「私は……わざわざ言う必要もないだろうっ」

みんながそれぞれ答えた。

準備とやる気は万全。わざわざ聞く必要は無かったな。

「カイトはどうなんですか？」

「俺か？ 俺は」

エリーに聞かれて、俺はみんなを見回す。

「もちろん、準備万端だ」

俺がそう言うと、みんなが頷いた。

「よし、行くぞ」

そして、ガイアスのもとへ向かい、アルクノアとの決戦へ行く為に空中戦艦に乗った。

これが 最後の戦いになればいいと、そう思った。

第36話 休息の中の不安（後書き）

原作ではありませんでしたが、イバルを一応は責めてます。それにしてもカイトはお人好しというか甘いですね……書いてて思いましたが（笑）

そしてオリジナルキャラが名前だけ出てきました。一応作中でも絡めますが……どうなる事やら。

次回はジルニトラに向かいます。

第37話 敵の本拠地へ

出発準備が整い、戦艦に乗り込んだ俺達はそこで驚くべき光景を目にした。

ア・ジュールの兵士が沢山居る。それはまあ数は驚くけど、ここはア・ジュールの首都カン・バルク。別段驚く事じゃない。

それなら何に驚いたのかと言うと、ア・ジュールの兵士に混じって、なんとラ・シュガルの兵士が居たからだ。

「ラ・シュガルの兵隊さん？」

「何でこんな所に？」

「私が召集したんですよ」

さすがローエン。国間のいざこざをものともしないで、両国の兵士を共闘させるなんてな。

「って……兵士の中にイバルもいるみたいだぜ？」

「ちゃんと償う為に参加したのだろう」

ここで頑張らないとだぞ、イバル。

「陛下、皆に一言を」

俺達が話していると、兵士達が並んだ前で、ウインガルがガイアスにそう言った。

ガイアスは兵士達を見渡す。

「かつて俺達はリーゼ・マクシアの覇権を争い、互いに剣を向けた。だが、この戦いはこれまでとは一線を画するものだ」

これからの戦いがどれだけ激しくなるのか、ガイアスは何となく
だけと分かっているんだろうな。

俺も、これまでの戦いから想像するに、厳しい戦いになるんだろう
うと思っている。

「敵の本拠地、ジルニトラの場所は既に分かっている。臆するな、
我が同胞よ！ 信頼せよ、昨日までの敵を！ 我らの尊厳を再びこ
の手に！」

さすがガイアスだ。言う事がいちいちカッコいいな。兵士達の士
気は最高潮と言っていていいだろう。

昨日の敵は今日の友と、この場はそう言う事なんだ。

「船を出せ！」

「お、お待ちください！ リーゼ・マクシア全域に高出力魔法陣の
展開を感知！」

戦艦が動くと思つた瞬間、そんな報告があつた。

そして、マナが吸われる感覚に襲われた。この場にいる全員から
いや、リーゼ・マクシアのあらゆる生命から、マナの吸収が始
まつた。

「マナが……抜ける……」

「この感覚は……？」

「クルスニクの槍のマナ吸収機能を世界中に向けて使つたんだ！」

やっぱりか……ジランドの奴……異界炉計画つてのをマジでやる
つもりらしい。

「民を犠牲にはさせん……リーゼ・マクシアは俺が！ 今すぐ船を出せ！」

マナを吸われながらガイアスが指示を出した。
そして、戦艦は発進して空高くに飛び上がった。雲の上まで出ると、ようやくマナ吸収の範囲から逃れる事が出来た。

「なかなか……マナ吸われるのって……嫌だな……」

何て言うか……生気を吸われる感じだろうか？

とにかくいい気はしない。

ファイザバード沼野の時はそれ程気にしなかったのにな。

とりあえず、アルクノアの本拠地　ジルニトラに着くまで休んでようか。

エリーも具合が悪かったらしく、レイアが医務室へ連れて行っていた。

「そっぴゃカイト、お前自分の世界に帰る方法、見つかったのか？」
「あ……」

休もうとしていきなりアルヴィンに問い掛けられて、思わず固まってしまった。

いや……忘れていた訳じゃない。けど、今までほとんど探してる余裕と時間は無かったからな……。

それに、一応少しは時間を自分で見つけて探した事はあった。けど、何一つとして使えそうな情報は無かった。

「お前……忘れてたのか？」

「いやいや、そんな事はないからな！？」

「……ホントかよ……？」

呆れられてしまった。

まあ……そうだよな。普通なら自分の世界に帰る為にいろいろ動く筈なんだろう。けど俺は、この世界の生活に慣れてしまっている。帰ったって俺にとっては冷たい世界だ。争いはあるけど温かいこの世界の方が、住みやすくなっている感じが生まれつつあった。

「と、とりあえず……今はアルクノアを倒す事に集中したいんだ。中途半端には関わりたくないからな。やるなら最後まで行くよ、俺は」

帰る方法は後回しになってるけど、一度関わった事には最後まで関わり抜く。

そうじゃないと、いろいろ気にしてしまつて気持ち悪いんだよな。

「アルヴィンは……エレンピオスに帰りたいか？」

「……そりゃな。今までずっとそうしてきたんだ」

一瞬表情が強張ったけど、すぐにアルヴィンは表情を元に戻して言った。

そして気まずそうにしてから背を向けた。

「俺はアルヴィンの手助けもしたからな、力になれそうな事があれば言ってくれよ」

「……お前は何でいつも……ッ！」

「え？」

「何でもない……何かあったら、力借りるな」

アルヴィンの背中にそう言つと、最初は何を言ったか分からなかったけど、そう呟いた言葉が聞こえた。

それから何も言わずに、アルヴィンが去っていった。

「どうしたんだ……アルヴィン？」

そう呟いた瞬間、突然戦艦が激しく揺れた。

何が起こったのかを知らうと辺りを見回すと、天高くに向かって光が放たれていたのが見えた。

「あれは……クルスニクの槍！？」

また発射されたのか！

俺は急いでみんなの所に戻る。

甲板にはみんなが集まっていて、光の柱の方を見ていた。

「なあ、あれって……」

「はい……クルスニクの槍みたいでした……」

俺が問い掛けるように言うと、エリーがそう答える。

「光の発生源はジルニトラで間違いなさそうだ」

「あの光……また断界殻シエルに穴が……？」

言われて空を仰いでみるけど、この前みたいに殻が割れるような音は無かった。

「けど、前と違って船が入って来なかったわね」

割れたようじゃなかったのなら……もしかしてさっきのは……。

「マナを、エレンプイオスに送った？」

「そうみたいだな。戦艦が入って来なかったのがその証拠だ」

アルヴィンが歯を食いしばりながら言う。

「アルヴィンの考えは正しかったんだね」

「最悪な現実だけは、嘘にならないってのが皮肉だよな」

ジュードが言うと、アルヴィンが自嘲気味に笑った。

「アハハハハ！ 上等じゃない！」

アグリアの笑い声が聞こえて見てみると、小さく敵の戦艦が見えた。

もしかして……体当たりしてくる気かよ！？

『こちらに接近する敵の船がいるぞ！ 全員、衝撃に備えろ！』

イバルの声が聞こえると、こちらでも戦艦が砲撃を開始する。敵の戦艦は俺達の上空を飛ぶようにして砲撃をしながら接近してくると、急に降下し始め体当たりをしてきた。

「おっと、大丈夫か、エリー？」

「なんとか……です……」

「フラフラ」

とりあえず大丈夫そうだ。

「早速お出ましか」

ミラが呟いたのが聞こえた。

そして、敵の戦艦から黒匣^{ジン}で武装した兵士が降りてきた。

こちらのア・ジュール、ラ・シュガルの混合軍の兵士が応戦するけど、武装が違い過ぎるのか押され気味だった。

「くっ……これヤバくないか？」

「そうだね……まともに黒匣と戦った事あるの、僕達だけだし……！」

背中合わせにジュードと話していると、こちらに向かってくる兵士が1人。攻撃を避けて弓で黒匣を射抜いて破壊した。

そして続けて、剣に戻して雷を纏わせ、敵の合間を縫うようにして走りながら黒匣を破壊していく。

「エリー、しんどくなったら言えよ？」

「大丈夫ですから！ ブラッディハウリング！」

エリーが唱えると、闇のエネルギーが兵士達を巻き込んでいった。心配になって声を掛けてみたんだけど……いつの間にこんな強力な攻撃術を？

けど、一向に敵の数は減らずに、むしろ増えてってる気がする。

「キリが無いよ、こいつら」

（ザマねえな。その程度かよ！）

ジュードの言う通りなんだけど……ウインガルが何言ってるのが全然分かん。応援してくれてるとっておこう。うん、それが一番平和だ。

「ガイアス！」

ミラが叫ぶと、ガイアスが艦橋に向かって叫んだ。

「このまま船をジルニトラへ突っ込ませろ！」

マジかよ……！？ でも、状況が状況だ。一気に攻め入って大将を討ち取る方が早いかもしれない。このメンツだし。

そう思っていると、戦艦が急降下して行き一気に海へと着水した。衝撃が強いと思ったからエリーを抱いているけど……まさかここまで強いとはな。ほとんど不時着レベルだ。

海に着水するとすぐに、巨大な船が見えた。

そして、上手い具合に隣接して俺達の戦艦が止まった。すぐにジュードとミラがジルニトラに跳び移っているのが見えた。

「エリー、掴まってるよ！」

「はいっ！」

俺もエリーと一緒に跳び移ると、既に兵士が沢山いた。上空に居る敵の戦艦から大量に降って来ているみたいだ。こちらの戦艦も断幕を張って妨害をしているみたいだけど、兵士が多くなる一方だ。これじゃ……ジランドの所に行くのにかなり時間が掛かってしまう。

「もっつ、ごちゃごちゃとうるさいっ！」

ミュゼが怒ったように上空に飛んで行き、敵の戦艦を何かの結果みたいなモノの中に閉じ込める。すると、戦艦の中心に重力が生まれたかのように、次々と丸まって押し潰されていく。

「ミュゼ、凄い……」

「こんな力あるんだったら、もっと早くに使ってくれよ……」

さっきの戦いもやらずに済んだかもしれないってのに……。

「ジュードの使役のおかげ。力が戻ってきたようです」

「それ程の力の持ち主だったのか」

ジュードの使役、ってミュゼが言った瞬間、ミラの表情がピクリと動いたような気がしたけど、気のせいだな。現にこうやって普通に問い掛けている訳だし。

「さすがミラのお姉さん！」

「心強いです、ミュゼ」

レイアとエリーもそう言っていた。

「私はここで皆様に力をお貸しします」

「どういうつもりだ？」

「ここを落とされたら作戦は終わりでしょう？」

確かに……唯一の拠点として制圧出来たここを落とされれば、必然的に挟み撃ちに追い込まれてしまう可能性もあるからな。

「……任せていいんだな？」

渋々と言うようにミラがそう問い掛けると、ミュゼは微笑んで頷いた。

「ありがとう、ミュゼ。気を付けてね」

「ジュード、ご無事で」

2人のやり取りで、ミラが再び表情を強張らせたけど、ミュゼがミラを見るとすぐに元に戻った。

……何だ、あれ？

「ミラ、忘れないでね。あなたはマクスウェルなのよ」
「……………」

ミュゼが暗示でも掛けるようにミラに言うと、一瞬だけ俺を見て笑った。それも、温かくなるような笑みではなく、冷たい氷のような感じだった。

俺がその意味を測りかねている間に、ミュゼは空へと昇って行く。
……何だったんだ、今のは？

「時間はありません。敵の増援を防いでいる間が好機です」

ローエンがそう言ったのに気付いて、俺は考えるのをやめた。
今は、ジランドを討つ事にだけ専念だ。

「なら、ここは二手に分かれた方がよさそうだな」

ミラはさっきのミュゼの言葉を気にしていたのか、少し間をおいてそう言った。

その間に、ガイアス達は先に行こうとしていて、ジュードを一瞥する。

「分かってるよ、ガイアス。僕のなすべき事を忘れるな、でしょ」

ジュードがそう答えると、ガイアスは俺達に背を向けた。

「ヤツらの企み。ここで必ず阻止する！ 目標はジランド、並びに

クルスニクの槍だ」

そう言ってガイアス達が行こうとしたその時、空からイバルが降って来た。

「俺にも手伝わせてください、ミラ様」

ニカツ、と笑うイバル。

「お前、まだ居たのかよ？」

「邪魔だからこっちくんなー」

ティポ……さりげなくひどいぞ？

「わ、分かっている。俺はガイアスにつ」

「いらん」

言葉を遮られて、いらんと言われていた。

「が、ガイアス……こいつ、何だかんだで使えると思っぜ？」

主に囫とかに……。

「それなら、ジャオの抜けた穴でも埋めてもらおうか」

「余裕っ！」

ウィンガルがそう言つと、イバルがそう即答していた。

と言うか……初めてアグリアとプレザがジト目してるのを見た気がする。なかなかレアだな。

しかしまあ、ガイアス側の反応は冷たいものだ。

「よ、余裕だ！」

イバルも後ずさりながらももう一度言う辺りが、なんか凄いよ…。
認めたのかそうでないのか分からないけど、ガイアスは先に進んでいく。

「ミラ様！ 汚名は必ず挽回しますからね！」

と言って、イバルもガイアス達を追って行った。

……汚名は挽回するものじゃないぞー。

「アル……」

「何だよ？」

何か言いたそうな感じだけど、プレザは踵を返して「死なないで」とだけを言い残して先に行った。

「私達も行くぞ！」

ミラのが促して、俺達もジランドのもとへと急ぐのだった。

第37話 敵の本拠地へ（後書き）

いろいろと戦いのネタが尽きてきてもととひどいのがさらにひどくなりつつあるこの現状です……。

とりあえず次回、あの2人との決戦です。

第38話 決着（前書き）

今回結構長くなりました。詰め込み過ぎたみたいです（笑）
それにしても戦闘が……。

第38話 決着

ガイアス達とは別の道を行く事になった俺達は、扉を1つくぐると甲板に出た。

そこには、俺達を待ち伏せしていた兵士が居たけど、俺達は勢いそのままにそいつらを一瞬で倒した。

すると、兵士の1人が倒れた拍子に何かを落とした。

「何コレ？」

「これって……トランシーバー？」

「トラン……何？」

レイアが拾った機械を見て呟くと、レイアが首を傾げた。

「あーえっと……通信機って言えば分かるか？」

「……？」

「連絡を取り合うのに使うんだ。貸してみ」

首を傾げるレイアから通信機を受け取ったアルヴィンが、通信機を受信に合わせる。

「カイトはこれを知ってたのか？」

「まあ……俺の世界にもあるからな」

実際に見た事はないけど。

アルヴィンが調整が終わると、通信機から音声が届いてきた。兵士の話によると……イバルが捕まったらしい。

「……助けに行くか？」

「いや、あれでもイバルは腕だけは確かだからな。心配はいらないだろう」

これは、ミラは一応信頼してるのか？

話していると、また強い揺れが発生した。

「な、何だ？」

「精霊がまた大量に消滅した……」

「クルスニクの槍を使ったって事か」

と言う事は、またリーゼ・マクシアで吸収されたマナが、エレンピオスに送られたのか。

時間が無い事を改めて思い知らされた俺達は、急いでジルニトラの中へと入った。

入った先は広い部屋で、天井には大きなシャンデリアのようなものがあつた。

「すごい……」

「お城みたい！」

エリーとレイアがシャンデリアの下に駆け寄って、そう呟いていた。

「これで戦艦なの？」

「違うよ。このジルニトラは二十年前、エレンピオスの海を旅した旅客船だ」

疑問を口にしたジュードに、アルヴィンが即答していた。

まさかこの船が旅客船だとは……。

「二十年前に断界殻^{シエル}の一部が破られた時に、こっちに来ちまったんだ」

「二十年前か……エレンピオスの軍勢に断界殻の一部が破られた時だな」

ミラにも覚えがあつたのか、アルヴィンが言った事に頷いていた。

「エレンピオスはクルスニクの槍もなく、どのようにして断界殻を破つたのですか？」

「確かに……あんな物、そう簡単には造れないだろうしな」

ミラは分からないというように首を振った。

「クルスニクの槍のオリジナルを、エレンピオス軍が開発したんだ」
歩き出して話したアルヴィンに、俺達は付いて行きながら話を聞く。

ミラが「知っているのか」と問い掛けた。

「聞いた話だ。今あるクルスニクの槍は、それをマネして造つたものらしい」

「それって、精霊が欲しかったからか？」

「エレンピオスは黒匣^{ジン}に支えられて発達した世界だ。黒匣と精霊は文明の要なんだよ」

「どうして止めなかったんですか？ 精霊を殺すなら、止めるべきです」

エリーが思つた事を言っていた。

それで解決するような問題ならいいんだけどな。

「きつと、みんなアルヴィンと一緒に嘘つきで、野蛮なんだろうー」
「ティポ……野蛮は言い過ぎ……」

嘘つきは自分で言ってたから、そこはフォローいらんだろうな。

「オレ、野蛮か？ でもさ、黒匣が無けりや何も出来ないんだよ、オレ達は」

入って来た扉からちょうど向かい側まで来て、アルヴィンが足を止めた。

「オレ達に霊力野^{ゲート}とやらはねーのよ」
「えっ、そうなの？」

レイアがそう驚いていた。
口には出してないけど、俺も他のみんなも驚いていた。

「だから、精霊術は使えない。マナを操るなんてマネできねえんだ」
「それで黒匣を使っていたのか」
「そゆこと。カイトは少し分かるんじゃないか？」
「ああ……分かるよ……」

マナを操る事が出来ない。それは俺も同じだった。

この世界に来た時は、精霊術なんか俺には使えないと思っていたんだから。

だって、俺が居た世界じゃそんなのいらなかったから。黒匣なんて物も無かった。

もしかしたら、俺の居た世界とエレンピオスは、ひどく似ているのかもしれない。

そう考えていると、アルヴィンが近くの扉に近づいていた。

「くそ、封鎖線を張りやがったな」

アルヴィンの目の前には、薄い赤い線が張られていた。それにティポが近付こうとすると、アルヴィンが手で止めた。

「なにこれー？」

「気を付けろよ。触ったら真つ二つだぞ」
「こわー！」

ティポがいきなり頭に噛みついてきた。

あ……何か久しぶりの感覚。

「どうすれば……」

ティポを引き剥がすと、ジュードが悩んでいた。

その時、ミラが預かっていた通信機が何かを受信した。

通信によると、封鎖線は中央　つまりここだけしか張られていないらしく、これを発生させる為の機械以外の故障で、他の地区には封鎖線は無いらしい。

さらに、船の左右に封鎖線を発生させる発動機があるらしいと、通信してきた兵士が言っていた。

「どうやら、左右にある発動機を止めれば、封鎖線は消えるようですね」

「もう、サクッと止めてこようぜ」

「そんなに簡単に行かないと思うんだけど……」

そんな弱腰でどうするんだよ、ジュード。

こういう時こそ、いつものように正面衝突が一番だろうに。

「とにかく、左右の発動機を止めに行くぞ!」

ミラがそう言って、俺達は左右の発動機の場所に向かう事になった。

* * * * *

「カイト、早く行きましょう!」

発動機がある部屋に向かう途中、襲いかかってきた敵と戦い終わるとエリーがそう言ってきた。

「元気なのはいいけど、もう少し慎重にな? この戦いは負けられないんだからさ」

「分かってます。けど……」

俯いて言葉を濁したエリーの頭を撫でる。

「焦るなつて。いつもの調子でやればいいんだ」

「……はい」

「でも、いつもの調子だとカイト君はムチャするよね?」

ティポの言葉に俺は苦笑した。

俺はそんなに無茶してるつもりはなかったんだけど、いつの間にか無茶しまくってるんだよな。ミラの無茶が移ったんだろうか。

「ま、そうだけどさ。それが俺だから」

「ふふっ、ですね。今さらでした」

笑いながら答えてくれたエリーにホッとした。

こうやってエリーが笑ってくれる。それだけで俺は頑張れる気がする。

大切な存在だから、絶対に守りきる。

「エリー、行こうか」

「はい！」

エリーの手を引いて、みんなに追いつく為に走った。

* * * * *

右側の発動機を破壊して止めてから左側の発動機の所に行く途中、あたしはアルヴィン君の様子が少しおかしい事に気づいた。

おかしいと言うか……何て言うのかな、元気が無いかな？

いつも気配りしてるジュードも気付かないし、気のせいかな？

「レイア……そんなに見つめられると困るんだけど？」

「えっ、別に見つめてなんかないよ」

アルヴィン君をずっと見ていたら、あたしの視線に気付いたアルヴィン君がそう聞いてきて、あたしは思わずそう返していた。

……確かに見つめてたのかもしれないけど、それは心配してたからだしなあ。ノーカンだよな。

「思いつきり挙動不審だぞ、お前？」

「あはは……気のせいだよー」

ダメだ……思いつきり棒読みだ。

そんなあたしを見て、アルヴィン君が少し笑った。それを見ただけで、不安みtainな気持がスツと抜けて言った。

「よかった、元気ないみたいに見えたけど、そんな事無かったんだね」

「そう言う心配はいらねえって。ほら、さっさと行かねえと置いてかれるぞ」

「分かってる。行こ、アルヴィン君」

みんなに遅れないように、あたしはアルヴィン君の手を引っ張って走り出した。

*
*
*
*
*
*
*
*
*

左右の発動機を破壊すると、中央の封鎖線が消えた。

そこから扉をくぐるとまた外に通じていて、そこを道なりに進むとまた扉があった。何となくで分かる。この先にジランドが居る。扉を開いて中に入ると、そこはかなり広い空間で、クルスニクの槍が置かれていた。その前にある階段に、ジランドが座っていた。

「ご苦労なこった。わざわざ……マクスウェルを連れて来てくれるなんてな」

顔を上げたジランドがそう言うと、アルヴィンに視線を移す。

「アルフレド・ヴィント・スヴェント。裏切った理由を聞かせてもらおうか？」

随分と長い名前だけど、それがアルヴィンの本名なんだろうな。

「簡単だよ。あんたが昔から大嫌いだったただけだ」

アルヴィンもジランドを睨みつけ、一步前に出ながらそう言った。すると、ジランドが立ち上がった。

「一生、リーゼ・マクシアで過ごす覚悟が出来たようだな」

「……関係ねえだろ」

もうアルヴィンは、いつジランドを攻撃してもおかしくない状態だった。

ジランドはアルヴィンの言葉を聞いて笑うと手を振り切った。すると、いきなりジランドの周りに氷属性の魔法陣が無数に現れ、氷の槍が放たれた。

黒匣は見当たらない。なのに詠唱も何も無しの術に驚きながらも、みんなはかるうじて避けた。俺もエリーを抱えながら横に跳び退いて避ける事に成功する。

「なっ……どうやった!？」

「微精霊の消滅は感じていない!　どう言う事だ?」

避けたアルヴィンがそう言うのと、黒匣の使用で無い事をミラが言った。

「ジランドオ!!」

叫んだアルヴィンが銃弾を放つと、ジランドに当たる直前、魔法陣からセルシウスが現れ、ジランドの目の前に氷の壁を作った。銃弾は氷を貫けずに止まった。

「また、あの精霊さんっ!」

「セルシウスか……!」

セルシウスは防御に使った氷の壁を素手で殴りつけ、壊した。その破片がこちらに飛んでくるけど、ミラが障壁を作ってくれて、俺達は無傷で済んだ。

「あなたがマクスウェルとはな。随分姿を変えたな」

セルシウスがミラの姿を見ながら言うと、ジランドがセルシウスの顔を殴った。

「俺の許可なく、口を動かすな」

「はい、マスター」

殴られた所をさすりながら、セルシウスがそう答える。

「ひどい……どうしてそんな人に従ってるの？」

レイアがそうセルシウスに問い掛けると、ジランドがセルシウスの頭に手を乗せそれに答えた。

「道具は主人に仕えるのが当然だろう？」

「精霊と人は一緒に生きてくものでしょ！ それを道具だなんて！」
「こいつは精霊だが、ただの精霊とは少々違う」

レイアが怒りながら言うのに対して、ジランドは至って普通だ。

「こいつは源^{オリジン}霊匣だ」

ジランドの言葉を、ジュードが復唱していた。

「ブースター」
増霊極を使い、精霊の化石に眠っていたセルシウスを再現した。
こいつは、精霊術自体が形を成した存在だ。」

精霊の化石って……ミラが足に着けてる医療ジンテクスに使ってる物か？

つまり……セルシウス自体はもう死んでいて、ジランドがそれを蘇らせた？

「源霊匣のマナを、お前自身が術として使ってるのか！？」

「だから道具だってんだ。納得したか？」

「出来る訳ないだろ！」

高笑いしながら言うジランドに、俺は叫んだ。
勝手に蘇らせて、それで道具のように扱うなんて……倫理的にどうなんだ？

「あなた、最っ低！」

レイアも同じことを思っていたらしく、そう叫んでいた。

「それもこれも、そこのお嬢さんの増霊極のデータのおかげだ」
「なっ！？」

「えっ……！？」

ジランドの言葉に、俺とエリーがほとんど同時に声を上げていた。

「まさか……あの時……ティポのデータはコピーされていた！？」
「気付かなかったか？ そうでなければわざわざ返す訳無いだろう？」

確かに不自然だったんだ……すんなり返してくれたあの時の事は。くそっ！ どうして今になって気付くんだよ！

「感謝してるぜ。源霊匣が生まれたのも、リーゼ・マクシアが燃料になったのも、そいつのデータのおかげなんだからよ」

まるでエリーとティポの所為だとしても言うようにジランドが言うて、エリーは俯いた。

泣きそうになっているエリーの頭を撫でる。俺にはこれしか出来ないから。

「なんだ、嬉しくて泣きそうか？」

「あなたと言う人は！」

今のはローエンも怒ったようで、ジラントに言う。

「指揮者^{コンダクター}。ジジイの出る幕はもうないぜ？ それとも、踊り足りないのか？」

「ええ。ジジイは、しぶといのが売りですので。我が友を弄んだ事、決して許しません！」

剣を抜いて、ローエンがそう言った。

「僕達は負けない。絶対！」

ジュードが叫ぶと、ジラントは鼻で笑った。

「何の力も野望も無いくせにのぼせ上がってるてめえを見てるとムカついてヘドが出るぜ！ 場違いなガキが！」

「あなたみたいな人が、力とか野望とか口にしないでよ！ 僕は、あなたが間違ってるのを知ってる！」

叫ぶジュードも武器を構えた。

「あんたの野望はここで終わるんだ。観念しろよ、ジラント」

俺も、武器を構えながらそう言うと、ジラントは俺を見ながらまた鼻で笑う。

「異世界から来たガキが。調子に乗るなよ」

「異世界からってんならあんたらもだろ。ここはあんた達が踏み荒らしていい世界じゃないんだ。おとなしくしてろよ」

こんなに綺麗な世界なんだ。こんな形で破壊されるのは嫌だ。

「もはやお前などと語る口は持っていないが……。最後に1つだけ問おう。お前とジュード達の違いが分かるか？」

「ハッ！ 知るかよ」

「だろうな。だからお前は愚か者なのだ」

ミラが剣を構えると、クルスニクの槍が起動し他たのか、音が出た。

「そろそろ、マナの定期採取のお時間だ。マクスウェル、お前は生かしてやる。そして異世界のガキ。てめえにはいろいろ吐いてもらう事がある」

クルスニクの槍を一瞥したジランドは、言いながらミラと俺を指差した。

吐いてもらう事って、また俺の世界の事かよ……。話せる事なんか何も無いってのにな。

「他のヤツらは皆殺しだ！」

銃に弾を込めて、俺達に向けた。

「リーゼ・マクシアの精霊と人は私が守る！」

「ジランド、僕はお前を許さない！」

「片を付けてやるぜ、ガキども！」

「こっちもそのつもりだぜ、ジランド！」

戦闘が始まってすぐに、アルヴィンがジランドに向かって突っ込

んでいた。そこに、セルシウスが横からジランドを守るために割って入る。

「マスターはやらせません！ 氷転爪！」
ヒョウテンソウ

「アルヴィン！」

セルシウスが両腕を振り払い、アルヴィンに当たる直前に俺はアルヴィンに体当たりで吹っ飛ばした。俺は剣でセルシウスの攻撃を防いで後ろに飛び退いた。

「一人で突っ走んなよ。仲間が居るんだから」

「ッ！？ ああ……悪い。そうだったな」

一瞬驚いた表情になったけど、アルヴィンはそう言って頷いた。

「いい的になってるぜ！ スネアショット！」

ジランドが俺とアルヴィンに向かって銃弾を放つ。俺達は互いに飛び退いて避けるけど、セルシウスが俺に追撃を加える為にスライディングで接近していた。

「氷槍撃！」
ヒョウソウゲキ

「くっ……魔皇刃！」
マコウジン

剣を思い切り床に叩きつけて衝撃波をセルシウスに喰らわせる。スライディングは止まった。

「魔王雷撃波！」
マオウライゲキハ

さらに一回転しながら剣を振り抜き、広範囲に雷を発生させる。

「ぐあああ！」

「セルシウス！ お前は自由な筈だろ！？ 何であいつの言う事を聞くんだった！？」

俺の攻撃に仰け反ったセルシウスに、そう問い掛ける。

「私を蘇らせてくれたのはマスターだ。仕えるのは当然！ フリーズランサー！」

「それが道具としてでもか！ フォルスエッジ！」

無数に撃ち出される氷の槍を、俺は弓で矢を連射して撃ち落とす。

「やらせません！ ブラッディハウリング！」
「くっ！」

槍を放っていたセルシウスが飛び退くと、闇の奔流から逃れた。エリーが駆け寄ってくる。

「俺は、お前とは戦いたくない！ 今ならまだ、俺達は分かりあえるだろ！？」

「そんなものは不要だ！ お前が戦わないのなら、今すぐ死ねッ！
サイカヒヨウロウ
彩華氷牢！」

足下から氷の槍が出てきた。俺はエリーと共に後ろに飛んで避けると、それが粉碎して氷の破片が飛んできた。

「うわああ！」
「きゃあ！」

攻撃を喰らってしまい、床に倒れてしまう。

「カイトさん！ エリーゼさん！」

「ミラ！ 2人が！」

「余所見してる暇あんのかガキ！」

「わああっ！」

俺達を気にしたジュードが、攻撃を喰らっていた。

くそ……ジランドもセルシウスも、どちらも半端無いほど強い。

「アルヴィン君、行くよ！」

「ああ！」

「「紅蓮爆発！ エンジンバツバシヨウ 炎塵爆破衝！！」」

アルヴィンが大きな火球を飛ばすと、レイアが空中から衝撃波を放ち大きく爆発した。

爆発を喰らったセルシウスは、大きく吹き飛ぶが空中で体勢を立て直して着地していた。

「カイト！ 説得は無駄のようだ。覚悟を決めろ！」

立ち上がるとミラに言われて、俺はセルシウスを見据えた。

やるしかない……でも、これはセルシウスを殺す為じゃない。俺は何が何でもあいつを助けるんだ。

「ジランド！ 絶対にセルシウスをお前から解放させるからな！ 文句言っなよ！」

「てめえみたいなガキに何ができる！ セルシウス、来い！」

ジランドが叫ぶとセルシウスがジランドの背後に立った。

「死ねよ！ パーフェクトバニッシュュ！！」

ジランドとセルシウスの2人が、それぞれが極太のレーザーを放ち周囲を掃射した。

威力は凄まじく、俺達は直撃こそは免れたけど、ダメージはひどい。

「エリー、大丈夫、か？」

「……だい、じょうぶ、です……」

なんとか大丈夫そうだけど、ダメージはかなりあるみたいだ。でも、なんとか立ち上がったエリーは、みんなを回復する治癒術を發動させた。

「くっ……ジランド！」

「まだ息があつたか？」

身体を起こすと、単身でジランドに突っ込むアルヴィンの姿が見えた。そして、それに続いてミラとレイアも突っ込んでいく。でも、セルシウスが割って入る。

俺も立ち上がって剣を握り直す。

「頼むよローエン！」

「分かりました！」

「砕ける闘気！ シコウバクサイジン 獅吼爆碎陣！！」

ジュードとローエンの共鳴術技が、リンクアーツ ジランドとセルシウスに直撃していた。

「ちいつ！ セルシウス！」
「させないよ！ 兎迅衝！」
トジンシヨウ

ジランドに近寄ろうとしたセルシウスを、レイアが棍で鋭く突いて妨害していた。

「クラッグワルツ！」
「ぐ、あああああ！」

そこにローエンの精霊術が直撃する。セルシウスは大きく吹き飛ばされていた。

「カタラクトレイ！」
ソウウシヨウ
「綜雨衝！」

ミラが光の剣をジランドに投げつけ、空中から追撃している間に、俺も無数の突きを放つ。

「ちいつ！ セルシウス！ 何をやっている！」
「あんたもこれで終わりだ！ ジュード！」
「行こう、アルヴィン！」
「リフレクトボミング！！！」

ジュードが瞬時にジランドの背後に回り込むと、アルヴィンがジュードに向けて火球を飛ばす。それを蹴り返したジュードは空に飛び、返された火球はさらにアルヴィンが斬り返し、最後にジュードが空中から火球をジランドに叩きつけた。

「ぐおおおお！」
カロウホウ
「さらにっ！ 臥狼砲虎！」

ジュードがサマーソルトからの落下して衝撃波をジランドに当て、ジランドの身体は後ろに大きく吹き飛んだ。

「まだまだあつ！^{サッゲキ} 殺劇！」

吹き飛ばしたジランドの先に回り込み、回し蹴りで受け止め怒涛の連撃を繰り出して、

「はああつ！^{ブコウケン} 舞荒拳！！」

右手に力を溜めて踏み込み、一気に殴り飛ばした。

「がああああああ！」

ジランドは吹き飛び、また立ち上がろうとしたけど片膝を着いた。セルシウスもジランドに駆け寄るけど、戦う力は無いだろう。

「ようやく源霊匣を生み出せたつてのに……くそ……」

悔しそうにジランドがそうもらした。

「あんたの目的はせいぜい、向こうのヤツらに恩売って、のし上がるためだろ。源霊匣とやらに何の意味があるって言うんだ」

「源霊匣は黒匣と違い、精霊を消費せずに強大な力を使役できる。だから、人と技術に溢れた、エレンピオスには必要なんだよ」

アルヴィンの問い掛けにジランドがそう答えた。

「どういう事……？」

ジランドは黒匣を取り出して話を続ける。

「エレンピオスは精霊が減少したいで……マナが枯渇し、消えゆく運命の世界だ」

「異界炉計画にそのような意味があつたとは……」

だから、マナや精霊があるここを燃料にしようとしたんだな。

「そんなの黒匣を使い続けたあなた達の自業自得じゃない……」

確かにレイアの言う通りだけど……俺の世界でも同じような事もあつたりするから……自分の事のように痛く聞こえた。

「源霊匣が広まれば、エレンピオス人もマナを得られる」

「今さら何を……二千年前、黒匣に頼る道を選んだのはお前達だ」
「俺じゃねえ！」

昔の人が楽な生活を追い求めた結果……その反動は現代人に襲ってくるんだ。

ジランドも……ただ悪い人間ではないのかもしれない。そう思っている、いきなりジランドが苦しみながら叫び出した。セルシウスも、身体が消えかかっている。

「おい、大丈夫か……？」

アルヴィンが駆け寄ろうとする所を、俺はすぐに駆け寄って、ジランドと持っている黒匣に手をかざした。そして、マナを送る。

「何を……」

「俺はあんたも死なせないし、セルシウスも消させはしない！」

戦った後でマナが足りるかは分からないけど……絶対に生かす！
だけど、ジランドは俺を蹴り飛ばした。その拍子に俺は黒匣を手
に掴んだまま床に転んでしまった。

「ガキに助けられるぐらいなら死んだ方がマシだ！」

立ち上がったジランドは、俺から距離を取った。

「俺が死んでもリーゼ・マクシアの運命は変わりやしねえ！ お、
俺達の計画は、断界殻がある限り、続けられるぞ！ ザマアみやが
れ！」

そう言い残して、ジランドは床に倒れてしまった。

くそ……セルシウスだけでも助けるからな！

「死んじやった……？」

「セルシウスを使った反動が出たのかもしれませんが」
「力を得るためとはいえ……高い代償だ」

みんなが呟く中、アルヴィンがジランドから何かを取っていた。

……あれは、拳銃？

そう思っていると、急に黒匣が光り始めた。

「な、何だ？」

「まさか、反動が？」

「カイト、それを手放して！」

いろいろ叫ばれるけど、俺はとっさに身動きが出来ずにいて、

そして光がさらに強くなって目が開けられなくなった。

光が弱まって目を開けると、そこにはセルシウスが立っていた。

「セルシウス……？」

「このマナは……まさかあなたは……」

「え……？」

何故か知らないけど、セルシウスが俺を見ながら驚いていた。
まあ、いいか……。

「……これでお前は自由だよ。どこにでも行くといい」

マナを使いすぎたからか足がふらついて、床にへたり込んで言う
と、セルシウスは首を横に振った。

「私はあなたに付いて行きます」

「……は？」

「あなたのマナで、私は大精霊と等しい存在になりました。その恩
をお返ししたいのです」

「いや……別に気にしないでくれていいんだけど……」

それに、どうせ付いてくなら精霊の主であるミラに付いて行けば
いいのに……。

そう思ってミラに視線を移すと、「いいのではないか」と言われ
た。

「……分かった。とりあえずよろしくな」

「はい、マスター」

……マスターって……俺はそんな柄じゃないんだけどな。

少し呆れていると、入口が開いてガイアス達が入って来た。もちろん、イバルは捕まったからここには居ない。

「既に決していたか」

ガイアスが倒れているジランドを見ながらそう言った。

「一足先にな」

「でも何だか、これじゃ……」

ジュードには何か引つかかる所があるのだろつ。俺も同じだけど、もうどうしようもない。

「リーゼ・マクシアの為に、アルクノアの野望は挫かねばならない」

そう言ったミラは、部屋の中央に歩いて行って何かの装置を操作した。すると、槍に吸収されていたマナだろうか。それが解放される。

ミラはそれから、以前見た四大精霊を召喚する為の魔法陣を描いた。そして、ミラの周囲に地水火風の大精霊が姿を現した。

あれが……四大精霊か……。

「お前達、無事で嬉しいぞ」

無事を確認したミラは、クルスニクの槍に向かって歩き出した。それをガイアスが呼び止める。

「こればかりはお前でも邪魔はさせない。破壊する」

有無も言わせない口調で言うミラが指示すると、四大がクルスニクの槍を取り囲む。

そして、槍を壊そうとした瞬間に、突然船が強く揺れ、とてつもない重圧が俺達を襲う。

「な、何だよ……これ……」

「お、押し潰されちゃいます……！」

エリーが心配だけど、ヤバいなこれ……身体が動かない。

「セルシウス……エリーを頼めるか？」

「わかり……ました……」

さすが精霊だ。この重圧の中でも、苦しそうではあるけど動く事は出来るみたいだ。

「この程度の術……破ってみせる！」

規格外な能力のガイアスでも、この重圧は苦しいようだった。床に倒れてないのはさすがだと思うけど。

「そうだ、クルスニクの槍を使うんだよ。あれは術を打ち消す装置なんだ！」

確かに……断界殻は精霊術で作られているんだから、それを打ち消すって事は精霊術を消せるという事だ。

だけど……、

「マナ……足りるのか？」

「残ってなかったらどうするの？」

「……ここに居る全員がマナを振り絞って槍に注ぎ込めば、あるいは……」

命懸け、か……。

確かにここに居る全員のマナを合わせれば、槍を起動させるだけのマナは十分過ぎる程あると思う。

だけど、それでこの重圧が消えるかは分からない。もし消えなかったら、それで終わりだ。

「はあああつー!!」

そんな事を考えていたら、ミラがこの重圧の中で立ち上がっていた。クルスニクの槍へと、一步、また一步と歩いて行く。

そうか……クルスニクの槍のマナ吸収機能。それはだれかがその操作をやらないといけない。それをミラがやってくれるのか。

「マクスウェル……槍を起動させる」

ガイアスがそう言う声が聞こえる。

そうして、ミラはクルスニクの槍のもとに辿り着いた。

「わざわざ皆が死ぬ危険を冒す必要はない」

みんなに聞こえるように、ミラがそんな事を言っていた。

何だよそれ……まさか……1人で槍にマナを注ぐ気なのか!?

「ダメだ……ダメだよミラ!」

重圧に耐えられなくなったのか、床に亀裂が入った。

「何故だ。あんたはその手で世界を……人々を守るんじゃないのか？　まだなすべき事が残ってるだろ！？」

「断界殻が消えれば……アルクノアの計画は完全に潰れる。そうだろうっ？」

アルヴィンの言葉に、ミラがそんな事を言った。

やっぱり……1人だけでやるつもりだ。

1人でやれば……確実に死んでしまう。そんな事……させるかよ！

「僕は……ミラが勝っても……居なくなっちゃうんじゃない……！」
「やめろ……」

俺よりも先に動き出そうとしたジュードの腕を、アルヴィンが掴んでいた。

「何言ってるんだよ、アルヴィン！　離してよ……本当にミラが死んじゃう！」

ジュードは行けそうにないか……なら、俺が1人でもミラに加勢するしかないだろ！

「こ、の……っ！」

両手両足に力を入れて、何とか立つ事に成功した。人間、やれば出来るもんだな。

足を引きずりながら、俺はクルスニクの槍に近付いて行く。

「カイト！　何する気ですか！」
「カイト君、ダメー！」

後ろでエリーとティポが叫んでるけど、振り返る余裕は無い。
一歩進むだけでも、かなり辛い。でも、確実に槍に近付いている。
そして、ようやくミラの所に着いた。ミラは今にもクルスニクの
槍にマナを注ごうとしていた。

「カイト！？ 何故来た！」

「言わなかったか？ 死なせないって……」

結果だけで言うと、助けられなかった人の方が多いけど、それ
も……。

「いいのか？ 死ぬかもしれないんだぞ？」

「それでも……人が……仲間が死ぬのは見たくない」

「そうか……君も……」

ミラが何か確信したように呟いた。

「カイト！ ダメ……です！」

背後でエリーが叫ぶのが分かって、俺は一度だけ振り返る。セル
シウスに支えられながら、エリーが俺を見ていた。

覚悟は決まってる。

「やだ、ミラ……カイト君……」

「ミラさん……カイトさん……」

エリーに続いて、みんなが叫ぶのが聞こえた。

「ミラが居なくなったら……僕は……」

「そんな顔をするな……」

ミラがジュードを見ながら微笑んだ。この状況でそんな事が出来るんだ。本当にミラは凄いよ。

「カイトッ……」

もう一度、エリーが俺を呼ぶ声が聞こえた。俺も……ミラのように笑えたら良かったんだけどな……。

「「はああああっ！！」」

2人でマナを槍に注いでいく。

だけど、始めてからすぐに、俺は膝を着いてしまう。

この時点で気づいた。戦闘、セルシウスへマナを渡す、この2つで、俺のマナはもう限界が近付いていたらしい。

すると、近くにセルシウスの気配を感じた。

「このマナはあなたのモノ。一時的にあなたに返します」
「サンキュ、セルシウス！」

セルシウスからまなを一時的に返還されて、もう一度槍に注ぎ込もうとしたその時、

「ッ！？ ミラ！」

俺は火の大精霊　イフリートに掴まれて、槍から遠ざけられていた。

「済まないな、カイト」

「な……ミラ！？」

槍にマナを注ぎながら、ミラは俺を見た。

「君が人の 仲間の死を見たくないのと同じように、私も仲間を死なせたくはないんだ」

「何だよそれ！ ふざけんなよっ！ 2人でやれば」

「カイトのマナはもう尽きている。無理だ」

首を振ったミラがそう言う。

そして俺は、イフリートに投げられて、重圧で床に叩きつけられた。

「ミラッ！！」

叫んだ瞬間、クルスニクの槍が発動した。のしかかっていた重圧が消える。

「消えた……？ ミラ！？」

槍の前に立っていたミラが、横に倒れそうになり、俺は急いで滑り込んで受け止める。

今にも消えそうだけど、マナを注げばまだ大丈夫かもしれない。そう思った時、ミラを中心に魔法陣が展開される。

「なん……だ……これ……」

展開されると、急に力が抜けていく。この感覚は……マナをいや、生命力そのものを吸われているような感じた。

しかもそれはクルスニクの槍にではない。ミラにだ。

やがて視界がブラックアウトして、何も見えなくなった。

何だよ……これ……何でミラに……？

だけど、すぐに吸われる感覚は無くなり、吸われていたのが中に流れ込んできた。

（これは……お前のものだろう？）

マナに乗せられて、ミラの言葉が聞こえてきた。

（君まで……マクスウェルに踊らされる事はない）

何言ってるんだよ？ マクスウェルは……お前じゃないか……。

（カイト……君は生きるんだ）

その言葉を最後に、俺の意識は暗闇に落ちた。
ミラの言葉の意味を、理解する事もなく。

第38話 決着（後書き）

主人公……人助けられ無さ過ぎじゃないかなあ……もう少し上手い具合に書ければいいんですがね。

結局ミラは死んじゃうし変な謎も残ったままとなります。ちなみに、セルシウスを生かしたという事は、他のあの精霊とかも出ちゃうかもしれないです。

とりあえず、次回もお楽しみに。

第39話 気付くコト

「ミラッ!? あれ..... ここは.....?」

気が付けば、俺はベッドの上に居た。辺りを見回すと、エリーが俺の寝ていたベッドに顔をうずめて寝ていた。

何だ..... あれからどうなったんだ.....? みんなは無事なのか!? 混乱した頭で状況を把握しようとしていると、扉が開いてローエンが入って来た。

「カイトさん。目が覚めたんですね」

「ローエン! あれからどうなったんだ!? ここは..... どこだよ? みんなは?」

「落ち着いてください。順を追って説明しますから」

俺が一気に問い掛けると、ローエンが俺を宥めるように言ってきた。

「まず..... 何から話しましょうか.....」

「ミラは.....?」

話すべき内容が多いのか、ローエンが髭を触りながら悩んでいるのを見て、俺は真っ先に知りたいミラの事を聞いていた。

「ミラさんは.....」

「..... 死ん、だ..... のか.....?」

ローエンは何も言わないけど、それこそが答えになっていた。頭のどこかでは分かっていたんだ。ミラが死んでしまったという

事は……。結局俺はまた……。ミラを助ける事が出来なかった……。力になるって……。死なせないって決めていたのに……。

「……ミラさんが死んでしまっても……。断界殻シエルは消えませんでした……」
「なっ……。!?」

ローエンが言った言葉が、信じられなかった。

ミラが……。マクスウェルが死んだら消えるんじゃないのかよ……。断界殻を消すために、みんなを守る為に敢えて自ら死を選んだのに……。

いったい……。何が起こっているんだ？

「……ジュード達は……？」

「ジュードさんは、ニ・アケリアへ1人で向かってしまいました」

「ニ・アケリアに……。何で？」

しかも何で1人で？

「ニ・アケリアなら　ミラさんが居た場所のなら、何か分かるかもしれないと思ったのではないでしょううか」

何かって……。何を……。？　ミラが死を選んだ理由？

「レイアさんもおそらくジュードさんを追いかけたのでしょうか……2人から連絡はありません」

「……アルヴィンは？」

「アルヴィンさんも……。お独りでどこかに……」

と言う事は、残されたのは俺達3人か……。

みんな……バラバラになったんだな。

「それで……ここはどこなんだ？」

「サマンガン海停の宿屋です。一度、カラハ・シャルへ戻ろうと思ひまして」

どうして？ 問い掛けようとしたら、エリーが目を覚ました。

「カイト、よかったです……」

「ああ、心配かけてはっかでごめんな……」

言いながら頭を撫でるけど、表情は悲しそうな感じだ。

ミラが死んでしまった事で……みんなバラバラになったんだな……。

……俺は、ミラの力になりたいって……なのに、また……。

「俺……また助けられなかった……。ナハティガルの時も……今回も……肝心な時に俺は無力だった……。これじゃ……何の為に強くなるうとしたんだか……分かんないな……」

俺は 俺達は……ミラに頼り過ぎていたのかもしれない……。

「カイトは、無力なんかじゃないですよ……」

「無力だよ……俺は何も出来なかったんだから」

俺を元氣付けようとしているのかエリーが言うけど、俺は否定する。

だってそうだろ？ 力があつたなら、ナハティガルも、ジランドも、ミラだって助けられた筈なんだから。

「違います！」

だけど、俺の否定をエリーは否定した。

「カイトはいつも、みんなを助けるのに全力で……例えば自分が死に
そうでも、人を助けてます！」

「けど！ 結果は誰も助けられてないじゃないか！ みんな……死
んでるだろ！ 結局俺は誰も助けられないんだよ！」
「皆ではありません！」

エリーに向かって叫ぶと、何故かローエンからそんな声が飛ん
できた。

「カイトさん……あなたは私の主 クレイン様を助けてくれたじ
やありませんか」

「だけど……助けられたのはクレインだけ……」

「それでも、人の命を助けたのには変わらないです……カイトは無
力なんかじゃ……」

言いながら、エリーは泣いてしまった。

ああ……何やってんだろ、俺……エリーまで泣かしてさ……。

2人は俺がこれまでしてきた事を、ちゃんと証明してくれてるの
に……。俺を信じてくれてるのに……。

「自暴自棄になってはいけませんよ、カイトさん」

「うん……ごめんな、ローエン……エリー……」

「分かってくださればいいんですよ」

そう言ってくれると助かるな……。

俺はエリーの頭を撫でながらもう一度謝る。

バラバラなんかじゃない。みんなを信じるんだ。

ローエンの言う通り、ここで自暴自棄になっちゃ駄目だ。ミラが居ない今、俺は俺のやるべき事をしよう。

と、ここで、ミラが最期に言っていた言葉を思い出した。

『君までマクスウェルに踊らされる必要は無い』って、そう言っていた。

どういう意味なんだ？ ミラがマクスウェルなんじゃないのか？ いや……何かがおかしい。そもそも、ミラは自分が死んだら断界殻が消えると分かっているのに、何でわざわざ自ら危険を冒して戦ってきたんだ？ この旅でも、死んでしまうかもしれない事は多かった。マクスウェルの使命と矛盾しているんじゃないのか？

ミラの最期の言葉は、まるで自分がマクスウェルで無いと、そう言っているように思える。もしかしたら……マクスウェルは別にいる！？

「カイト、どうしたんですか？」

「俺……俺も、ニ・アケリアに行ってくる」

ベッドから立ち上がって、俺はそう言った。

いつものように、考えてちゃ分かんないからとにかく行動あるのみだ。

「わ、わたしも行きます」

「いや……悪いけど、俺1人で行く」

「どうしてですか？」

当然ながら聞いてくるエリーの頭を撫でる。

「頼めるか、ローエン？」

「理由は話されないのですか？」

「ごめん……頭の中整理したいから……1人になりたいんだ……」

それは建前で、本当は理由なんか無かった。ただの我が儘だった。

「すぐに俺もカラハ・シャルルに向かうからさ。な、エリー？」

「……分かりました」

納得はしていないだろうけど、エリーは一応頷いてくれた。

そして俺は、1人で二・アケリアに向かう事になった。

* * * * *

サマンガン海停からイラート海停に向かい、そこから八・ミル経由で二・アケリアに向かおうとすると、海停の出入口で見知った後ろ姿を見つけた。

そいつはすぐに海停を出たから、俺は走って追いかけた。

「アルヴィン！」

その背中　　アルヴィンに声を掛けたのは、間道に出てすぐの所だった。

だけど、アルヴィンはこちらを向かなかった。

「1人でどっか行ったって聞いたんだけど、やっぱりアルヴィンも

ジュードを追って二・アケリアに行くところだったのか？」

そう問い掛けると、アルヴィンはようやく振り返った。
いつも持っていた銃を俺に向けて。

「お、おい……アルヴィン？」

「ミュゼと取引したんだ……お前達を殺せば、エレンピオスに帰してもらえる」

その言葉に、俺は目を見開いた。

「冗談……だろ……？」

問い掛けても何も答えない。ただ、銃口を俺に向けるだけだ。

アルヴィンの目を見て、俺は剣を鞘ごと放り投げて両腕を広げた。

「何の……つもりだ……？」

「撃ちたきゃ撃てよ、アルヴィン」

俺が言うと、今度はアルヴィンが目を見開いていた。

「お前、正気か！？」

「俺は正気だよ。仲間だし、信じてるし。アルヴィンこそ、本気で俺を　俺達を殺すつもりか？」

目に見えて、銃を持つ手が震えているのが分かった。

アルヴィンもきつと迷ってるんだ。殺したくなんか無いと思っ
ている筈だ。

「お前は……いつもそうやって！　オレを信じるとか言いやがって

！ 何でオレなんかを信じようとするんだ！ 疑ってくれば……
罪悪感なんか感じなかった！」

「人を 仲間を信じるのに理由はいらないだろ？」
「ッ！！」

アルヴィンが銃で俺を殴ってきた。

「ッ……アルヴィン！」

次は銃を持っていない右手で殴られ、さらに蹴り飛ばされて地面に転がった。

そして、アルヴィンは俺の両足に向けて銃弾を3発ずつ撃ち込んだ。

「があッ！？」

「……これではらく動けねえだろ……お前は最後に殺してやるよ……エリーゼと一緒に……」

「アル、ヴィン……！」

立ち上がるうつとしても足に力が入らない。

俺は歩いていくアルヴィンをただ眺める事しか出来なかった。

第39話 気付くコト（後書き）

少しばかり不安定な感じでしたけど、次回に続きます。

第40話 気付かされたコト

「……お前達を殺せば、エレンピオスに帰してもらえる……ミュゼと取引した」

アルヴィンが僕に銃を向けている。

「……ミュゼ」

……ミュゼ……ミラのお姉さん……。

思い出されるのは……ニ・アケリアで彼女と会った時の事だ……。ミュゼは、ニ・アケリアの人達を殺していた。ミュゼは……僕達を……。

『だって私は断界殻シエルを知ってしまった人を、殺すのが使命なんですもの』

僕達を殺すつもりだった。

「いいよ……もう、好きにしてよ……」

ミラも居ないんだ……。

そう答えると、アルヴィンは僕の胸倉を掴んで額に銃口を押しつけた。

「何でも受け入れて……そういうのがムカつくんだよ！」

押しつけてくる銃を持つ手が震えている。

撃つなら早くして欲しい……額の痛みが嫌だ……。

「ダメ！」

横からレイアがアルヴィンに掴みかかって、銃口を僕から離れた。

「このっ！」

アルヴィンは銃を撃ちながら、レイアを振り飛ばす。

レイアが床に倒れている間に、アルヴィンは銃に弾を入れようとしていた。けど、再びレイアに体当たりされて銃を床に転がした。

「来て！」

放っておいてほしいのに、レイアは僕の手を掴んで小屋の外に連れ出した。アルヴィンの怒声が聞こえる。

外に出るけど、僕は足に力が入らずに地面に倒れ込んだ。

「ジュード！ 逃げなきゃ！」

レイアが駆け寄って来て、僕の身体を揺さぶる。

「何の為にミラが命を懸けて使命を果たそうとしたのか、思い出して！」

そうして起き上がらされて、レイアに走るように言われる。

「ミラ……使命……」

ミラが……命を懸けたもの……。

リーゼ・マクシアの人々……精霊達……僕達……。

ミラの使命は……みんなを……守る事……。

『うふふ！ 彼女の使命？ おかしいっ』

ミュゼの笑い声を思い出した。

『彼女はジランドみたいな連中をおびき出す為に用意された、エサ。使命感や正義感なんて、ミラには全く無意味なの。それなのにがんばっちゃって』

……ミラの使命は無意味……。

「こっち！」

レイアに手を引かれて、ナツプルの木の上に登る。ほとんど、レイアに引っ張られて移動しているようなものだった。少し歩くと、柵が撃ち抜かれた。破片が飛び散る。

「見つけたぞ」

アルヴィンが追いついたみたいだ。

「ジュードは殺させない！　あたしが守るの！」

「逃がさない！　もう無駄だ！」

「そんな事無い！　もう目を覚ましてよ！　アルヴィンだって……」
「何もかも無駄な事だったんだよ！」

視界の端で、2人が武器を出したのが見えた。
走る音がして……金属音が聞こえた気がした……。

「無駄……」

無駄なんかじゃない……。

僕は……ミラと出会って……旅して……考えて……色んな事を教えてもらった……。
けど……。

『断界殻が消えて無い……何でだよ……』

アルヴィンが、空を仰いで言う。

『いつまで経っても空は赤いままだ……エレンピオスも見えない』

失笑をもらしながら、アルヴィンが僕を見る。

『これじゃオレ……何の為にミラを見殺しにしたんだ……？　無駄死にだ……』

ミラは……無駄死に……？

「そんな事無い！」

肩を押されて、レイアが後ずさってきた。アルヴィンからの攻撃を防いでいる。

「だって！ まだみんな生きてる！ エリーゼだってローエンだってカイトだって！ ガイアス達だってきつと……あたし達も生きてるじゃない！」

ガチツ！ 弾かれて、レイアが樹に背を着ける。

「……それで、どうすんだ？ あいつはもう居ないんだぜ？」

レイアが武器を弾かれてアルヴィンに殴られると、床に倒れ込んだ。

何でレイアは……こんなに必死に僕を守ろうとするんだろう？
放ってくればいいのに……。

アルヴィンがまた僕に銃を向ける。

「だめえっ……！」

レイアが撃たせまいとまたアルヴィンにしがみつく。けど、すぐに地面に倒れ込んだ。アルヴィンは倒れたレイアに向けて撃つ。とつさに避けたレイアだけど、床に大きく空いた穴で、僕達は地面に落ちて行った。

「オレ達はただの人間だ。あいつのようにには出来ない」

みんな……ミラが居るから頑張れた……ミラが居るから進めた……。

でも……みんなミラみたいには……。

『ジュードは気付いていました？』

再び、ミュゼの声がフラッシュバックする。

『ミラが断界殻を守るという使命と、死へ向かう行動の矛盾に悩んでいたのを』

……ミラ。

『うつつ、答えが出なくて当然ですよ。存在も使命も、与えられた嘘なんですから』

……ミラは、人間や精霊を大事に思ってた……平気で自分の心配なんか忘れちゃって……。

僕はそんなミラが……！

『生きていけるだけの価値を与えられたようで幸せでしたか？』

……違う……。

『これまで一緒に居た時間も、すべて無駄。あなたのその思いも』

『う終わりなのです』

……終わり……？　僕の気持ち……？

「ジュード！　早く！」

目を覚ますと同時に、レイアが僕の手を掴んで立ち上がらせようとしていた。

「ミラに助けてもらった命でしょ！　大切にしなきゃ！」
「ミラにもらった……命……！」

そうだ……ミラが……残していつてくれたものは……ここにあるんだ……！

「……ありがと、レイア」

そう、お礼を言った瞬間　銃声とともに血が飛び散った。
レイアが僕の方に倒れてきて、胸の上辺りが赤く染まっていたのが見えた。そして、僕の横に力無く倒れた。

「　レイア！」

向こうを見ると、銃を向けたアルヴィンが覚束ない足取りでこちらに向かっていた。

「い、今は……」
「アルヴィン……！」

とにかく、レイアを撃つたのが許せなかったのか、僕は走り出した。

僕がもつとしっかりしていれば……もっと早く大事な事に気付いていれば、こんな事にはならなかったのかもしれない。

「ジュード、お前がっ！」

アルヴィンも走って来て、僕達は互いに顔面を殴った。

「何で……何でなんだ！ アルヴィン！」

「何を今さら！ オレはこういう奴だろうが！」

「分からないよ！」

アルヴィンが振ってきた剣を後ろに跳んで避けて背後に回り込む。そこから攻撃に繋げようとするけど、アルヴィンの反応は早くて攻撃に移れない。

「分かれよ！ お前が目障りだったんだよ！ ずっと！ 頼むから消えてくれよ優等生！ いつもみたいに受け入れる！」

「消えられる訳ないだろ！ こんな事で！」

下段回し蹴りでアルヴィンの体勢を崩して、連続で殴りかかる。

ガロウホウ
「臥狼砲虎！」

「ぐっ！ ちくしょうがああッ！！」

「ッ！？」

僕が攻撃している最中に、アルヴィンが無理な姿勢から、炎に包まれた剣を振り上げて攻撃をしてきた。

「もう何もかも無駄なんだ！ 諦めろよジュードッ！-」
「うわああああああっ！？」

アルヴィンの最大の奥義をともに喰らってしまい、僕は地面に倒れ込んだ。

起き上がると、アルヴィンが銃を頭に向けている。

「オレは……エレンピオスに帰る」
「……………」

僕が黙っていると、アルヴィンが思い切り蹴り飛ばしてきた。

「お前のそう言う所が……ガキのくせに諦めのいい所が！ 気に食わないんだよ！」
「しょうがないじゃないか！ ミラ、居ないんだ！ もうどうしていいか……僕……………」

何をすればいいのか、分からないんだ……。

「お前だけだと思ってんのかよ！」

アルヴィンが、僕の前にしゃがんだ。

「あいつを犠牲にしてまで生き延びたつてのに……………」

アルヴィンも……同じ様に悩んでいたのかもしれない……。

「ミラにもらった命……僕達がしなきゃいけないのはこんなんじゃないのに……………」

「じゃあ……何すりゃいいんだよ！」

僕の呟きにアルヴィンが怒鳴りつける。

「オレには……使命なんて無い。あいつみたいには生きられねえよ……！」

「ミラはもう居ないんだ……！　僕達が考えなきゃ」

「どうやって！」

「誰も決めてくれないんだって！」

胸倉を掴んでくるアルヴィンを押し返す。

「誰も……もう僕達のやる事に責任なんてとってくれないんだ。ミラは……偽物の使命に生きたとしても……それでも……自分の命を賭けて責任をとったんだよ。出来る出来ないじゃない……やるかやらないかだよ」

だから僕達も……手探りでも前に進まなきゃいけないんだ……。

「お前に……何で、お前が……そうやって先に行くんだよ！」

手放していた銃を拾って、アルヴィンがまた僕に銃を向ける。けど、銃を持った手は震えていて、まともに僕を撃てる様子じゃ無かった。

僕がまっすぐアルヴィンを見ると、アルヴィンは苦しそうに、銃の引き金を引いた。

* * * * *

俺が着ているこの制服……素材はいたい何なんだろうか？ 撃たれた足は激痛が走るけど、血は出ていない。何故なら、この制服は何と防弾仕様だったからだ。なんてご都合なんだよ……とか思わないでもないけど、今はそれに感謝だ。

そうして痛む足を引きずりながらようやくハ・ミルに着いたと思ったら、村全体に響き渡るような銃声が聞こえた。

「今の……まさかアルヴィンが!？」

違うよな……お前は、仲間を殺そうなんて、しないよな？

一抹の不安を抱きながら、俺は急いで銃声の聞こえた所に行く。そこには、地面に座り込んだジュードと、血まみれのレイアが倒れていた。辺りを見回してみても、アルヴィンの姿は見当たらない。いつたい……なにがあつたんだ？ いや、今すべき事はそれを考える事じゃない。レイアを助けないとだ。

「ジュード！ 何ぼさつとしてんだよ！」

俺はとにかく、傷口に手をかざしてマナを送り込む。前とは違ってマナは万全だから、傷口は見る見るうちに塞がっていく。

そんな俺を見ながら、ジュードが驚いていた。

「え……か、カイト!? どうして……」

「んな事はいいから、レイアの手当てだ！ 早くしないと手遅れになるぞ！」

「!？ うん、分かった!」

ある程度傷口が塞がって出血もなくなったのをジュードが確認してから、俺達はレイアを前にエリーが居た小屋に運んでベッドに寝かせる。

俺がしたのはあくまで応急手当て。ちゃんとした治療はジュードに任せる事にした。とりあえず、命に別状はないらしいから、俺はホッと胸を撫で下ろした。

「それで……何があっただよ?」

俺も足を怪我している事に気付いたジュードに治療してもらいながら、ようやく本題を口にした。

「……アルヴィンが、来たんだ……僕達を殺せばエレンピオスに帰してくれるって……ミュゼと取引したんだって」

「……そうか」

それで……レイアを撃ったのか? 信じたくないな。

「でも……レイアを撃った時……アルヴィンすごく戸惑ってた」

「……本心から俺達を殺すつもりは無いんだろうな」

そうじゃなきゃ、俺もジュードも、レイアだって死んでる筈だ。

「そつだ、ジュード。ニ・アケリアに行って何か分かったのか?」

問いかけると、ジュードは俯いた。

「ミュゼが居たんだ……」

「……ミュゼか……」

ミラの姉とか言ってたけど、アルヴィンに俺達を殺せとか言うのは理解出来ない。

「断界殻を知った人を殺すのが使命だと言って……ニ・アケリアの人達を殺してた……」

「なっ……！？」

俺はジュードの言葉に絶句していた。

ニ・アケリアの人達を……殺していたのか、ミュゼは。断界殻の存在を知った人を殺すって事は、俺達も危ないのかもしれない。

「それと……ミラは、ジランドのような人達をおびき出す為の、エサだったんだって……」

「エサ？ どういう事だ？」

「分からない。けど、ミラの存在と使命は、『与えられた嘘』って言うってたんだ」

与えられた……と言う事はつまり。誰かがミラにそう指示してたって事だ。

「やっぱり……ミラとは別に、他のマクスウェルが居るのか？」

「カイトもそう思う？」

ジュードはその可能性に既に気付いていたみたいだ。

「ん……」

話していると、ベッドから小さく声が聞こえた。
ジュードが立ち上がってレイアの顔を見る。

「……良かった」

「……ジュード、怪我してない？」

「大丈夫だから、今は自分の心配して」

「……うん」

自分よりもジュードの心配をする辺り、何ともレイアらしいな。

「……アルヴィンは？」

「分からない。姿を消しちゃった」

ジュードが答えると、レイアはひどく悲しそうな表情をした。

「レイア、ありがとう」

「え……どうしたの？」

突然の礼に、レイアが驚いていた。

……と言うか、この空気でこんな事思うのはなんだけど……俺す
げーアウェーな……。

「ずっと見ててくれて、ありがとう」

「ジュード、何かあったの？」

違和感を感じたのか、レイアが身を起こして尋ねた。

すると、ジュードは立ち上がってテーブルの方に向かい、レイアの食事を用意していた。

「気付いたんだ。うつん、気付かせてもらったんだ。ありがとう、レイア」

「ジュード……」

「あのー、俺の存在、忘れてません？」

「わっ！ カイト君居たんだ？」

「うわぁー……完っっ全に空気扱いだったよ、俺。」

「カイトが傷口を塞いでくれたんだよ」

「そうだったんだ……ありがとね」

「それは別に気にしないでいいけどな」

「アウエーの空気には堪えられんですよ。」

「それでさ、僕、マクスウェルを捜すよ」

「でも、ミラは……」

「ジュードの言葉に、レイアが俯きながら呟いた。

「マクスウェルは他に居る筈なんだ」

「え……」

信じられないように、レイアが顔を上げる。

「そりゃそうだよな。ミラがマクスウェルだって俺だって思ってたんだから。」

「ミュゼが言った、ミラは断界殻を守るためのエサだって言う言葉……それって、誰か別の存在がミラを自分の身代わりにしたって事だと思うんだ」

言いながら、ジュードは料理をベッド近くの台に置いて座る。

「ミユゼじゃないの？」

「違う。俺達の前に姿を現したんだ。身代わりを作る意味が無いだろ？」

「それで、ジュードとカイト君は別にその……本物のマクスウェルが居ると思ったの？」

レイアが俯いて聞いた事に、俺とジュードは頷いた。

俺の場合はそれ以外にも、ミラの言葉のおかげで気付けたんだけどな。

「ごめんね。レイアは何度も作ってくれたのに、僕はひどい事した」

ジュードが料理を見ながら言うと、「ホントだよー！」と怒ったように言う。

何したのか分からないから、口をはさめない。

「で、いつ出発するの……？」

「レイアが元気になったら、すぐに発つつもり」

「あ、あたしなら、大丈夫だよ。ジョーブが取り柄なんだから」

そう答えるレイアを、ジュードは心配そうに見ていた。

レイアの強がりに、何か思う所があるらしい。

「ちょっと外の空気吸ってくる」

俺が居たら話にくい話かもしれないから、俺はそう言い残して小屋の外に出る。

「幼馴染、か……」

あの2人を見て、華紗音の事を思い出した。

結局帰る術は見つかっていない。一生このリーゼ・マクシアで過ごす事になるのかもしれない。

正直それは不満じゃないんだけど……一度。一度だけでもいいから華紗音と話がしたかった。

……マクスウェルに会えば……何か分かる気がする。何故かは分からないけど、そんな事が漠然とだけ分かる。そうしていると、小屋からジュードが出てきた。

「話、もういいのか？」

「うん。ごめんね……気を遣わせちゃったみたいで」

「そんな事、今さら気にすんなよ」

ここに来てから、ずっと一緒に旅して来たんだから。

あ……ずっとじゃないか。1ヶ月程は別行動だったか。

「とりあえず、レイアが治るまでは休む事にしたから。いろいろあったし」

「だな。焦っても仕方ないし、俺も足痛いし……」

とりあえず、しばらくは八・ミルで休むことになりそうだった。

第41話 希望を求めて（前書き）

ここら辺からようやくオリジナル設定の謎が増えたり明かされたり？

第41話 希望を求めて

「大丈夫？」

「うん！ カンペキ！」

レイアがベッドから立ち上がって仁王立ちで答えた。
数日休んだだけで治るつても、かなり凄い事だよなあ。

「それじゃあ、まずはどこ行く？」

「そうだな……」

『マクスウェルに会うのであれば、ニ・アケリアへ行けばいいと思います、マスター』

「そつか……ニ・アケリアか……って、居たのかセルシウス！？」

『私は常に、マスターのお側にいますよ』

いきなり話に割って入ってきたから、かなり驚いた。
てか……すぐ近くに居たんだな、お前。

「カイト……1人で何やってんの？」

1人漫才に見えたのか、ジュードがジト目で俺を見てきた。

「……セルシウスがマクスウェルに会うならニ・アケリアって言うけど？」

「セルシウスがここに居るの！？」

ジラントと戦っていた時の事を思い出したレイアが、驚きながら
そう言うと、セルシウスが姿を現した。そしてすぐに姿を消す。
何だ今のは？

「とりあえず……頼もしい仲間が居る訳だ。で、ニ・アケリアに行ってみるか？」

「そうだね。そこならイバルも居るかもしれないし」

「え、何でイバル？」

レイアが首を傾げて尋ねた。

「本当はミュゼに話を聞く方が一番なんだけど、太刀打ち出来そうにないからね。マクスウェルの巫子なら、いろいろ知ってると思うんだ」

……イバルだから……結構微妙な気がしないでもないけど……確かに他に手はないかもしれない。

ニ・アケリアに行つてすぐに本物のマクスウェルと会えるとは思えないし。

「でも……無事かな？」

「何だかんだで無事だと思うよ、あいつは」

「……だね」

俺が言つと2人は笑いながら頷いた。

* * * * *

ニ・アケリアへ行こうとハ・ミルを発つ直前、

「カイト君ッ！」

「へ……？」

声が聞こえた方を向くと、一瞬だけエリーが見えた気がしたけど、視界が真っ暗になった。

えっ……何これ？ 何のドッキリ！？

「ティポ！ 会えて嬉しいよ」

ジュードのそんな声が聞こえて、なるほど……今俺はティポに噛まれているのか。

引っ剥がすと、エリーがレイアに抱きついていた。

「わざわざ来てくれたの？」

レイアが驚いたように言うと、エリーがニコツと微笑んだ。

「でも……どうしてここに？ カラハ・シャルルに戻ったんじゃないのか？」

「ミュゼさんが各地で敗走しているアルクノアやエレンピオス兵を襲っていると、カラハ・シャルルに戻る前に噂で聞き及んだので、心配で来たんですよ」

そうか……ジュードも言ってたっけ。

ミュゼが断界殻シエルの存在を知った人を殺していたって。

なら、それはエレンピオスから来た奴らにも当てはまるし、俺達も結構ヤバい状態じゃないか？

「2人は大丈夫だった？」

「幸い、一度も見つかる事なく逃げれています。ジュードさん達は？」

ローエンが尋ねると、ジュードは俯いて口を開いた。

「アルヴィンが……来たんだ……」

「アルヴィンに会えたんだねー」

「うん、そうなんだけど……」

言葉を濁すジュードを不思議に思ったのか、エリーが首を傾げた。そして、これまでの出来事をジュードが話した。

「そうでしたか……アルヴィンさんが」

考えるようにローエンが呟く。

「それで、ジュードさん達はこれからどうするのですか？」

「マクスウェルを捜すよ」

「ミラに会えるんですか!？」

驚いたように、そして嬉しそうにエリーが言つと、レイアが首を横に振る。

「ジュードとカイト君が言うには、本物のマクスウェルが居る筈だつて」

「本物ー？」

意味が分からないと言う風にティポが呟き、エリーが首を傾げた。

「なるほど……それは考えませんでした。ですが、色々と説明が付きますね」

「有り得ない事でも、他に可能性が無いなら、真実になり得るからね」

出た。何とかの卵理論。

……何て言ったわけ？

ジュードの答えに、ローエンは嬉しそうに笑った。

「いつの間にか頼もしくなりましたね、ジュードさん」

一度にいろいろ乗り越えた。いや　乗り越えようと決意したからだろうな。

「でね、まずはイバルを捜そうって事で二・アケリアに行く話になってたんだ。ミュゼに会うのは怖いし……」

俯くレイアだけど……二・アケリアに行けば会う可能性があるんだよね……。それは言わないでおこうか。レイア自身も気付いてるかもしれないし。

「ジュードさん、ガイアスさんの話を聞きましたか？」

腕を組んでいたローエンが、ジュードにそう問い掛ける。

「ガイアス？　ううん、知らない」

「何か言ってるのか？」

「理由は分かりませんが、イル・ファンで大規模な動きを始めたらしいのです。その為、何度もミュゼさんに襲われているそうですが、

退けているとか」

あの空中戦艦を1人で壊せるような力を持った精霊とやり合って退けるなんて……もうさすがとしか言いようが無いな。

「どうするジュード？」

「うん。レイア、危険だけど大丈夫？」

わざわざ聞くまでもなかったみたいだ。ジュードがレイアに問い掛けると、「もちろん」と頼もしい一言。

「エリーは？」

「わたしも行きます！」

こっちも聞くまでもなかったようだ。

ローエンも頷く。

「2人とも……いいの？」

「ミラ君が嘘なのか、ちゃんと知りたいもんねー」

「はい、友達ですから」

「私も……ガイアスさんに会う理由がありますから」

ジュードが短く礼を言っつて、俺達はイル・ファンに向かう事になった。

「カイト、セルシウスって居るんですか？」

イル・ファンに向かう途中の船で、エリーがそう聞いてきた。

「ああ、居「お呼びですか？」るよ……って早いなお前！？」

まるで待ってましたと言わんばかりの早さで出てきたな、おい。
まあ、別にいいんだけどさ。

「私に何かご用ですか？」

「ああ、エリーが用あるみたいなんだ」

そう言つと、セルシウスがエリーに視線を動かした。

「ホントにいたー！」

「……何ですか、この面妖で可愛い物体は？」

「可愛い！？」

つてか……氷の大精霊でも面妖とか思うのか……ティポっていつ
たい……。

「ティポの可愛らしさが分かりますか！？」

「もちろんです、お嬢様」

「お嬢様！？」

どうしよう……セルシウスのキャラが分からなくなってきた……。
最初ジランドと居た時のあのクールさは束縛されていたからなの
か……。いやまあ、今もクールですけどね……。

「マスターの大切な方は、私にとってもお守りすべき大切な方です」
「そ……そうか……」

それはありがたいんだけど……何故だろう、腑に落ちないこの感

じ……。

「セルシウス……これからよろしく願いますね！」

「私の方こそ、よろしく願います。お嬢様、ティポ様」

……うん…… ツッコむのに疲れたよ。

上機嫌のまま、エリーとティポは去って行った。

「そっぴゃお前、体調は大丈夫なのか？」

「精霊に体調と言う概念はありませんよ、マスター」

「そうかもしれないけど、お前を解放した時はマナが不安定だった気がするからさ……」

それに、マナを一度俺に返してきた訳だから、途中で消えたりしないか不安だ。

「ご心配ありません。あれから少しずつ大気中のマナを取り込んでいるので、力は戻りつつあります」

「そっか……それ聞いて安心したよ」

胸を撫で下ろそうとした所に、セルシウスは「ですが」と続ける。

「一度大量に氷のマナを取り込まなければ、大精霊としての力は戻らないでしょう」

「……つまり……？」

「現状では大精霊には遠く及びません」

……マジか。

正直、ミュゼと戦う事になった時にセルシウスの力を当てにしていたんだけど……そう簡単にはいかないらしい。

「結局は自分らの力で何とかするしかないって事か」

「すみません……」

「お前が悪い訳じゃないだろ。気にすんな」

むしろ、他力本願になっていた自分が悪い。

まあ、もちろん頼りにはしてるんだけどさ……。

「カイトー、もうすぐで着くから降りる準備して」

次第に辺りが暗くなってきたのに気付いたのと同時に、ジュードのそんな声が聞こえてきた。

もうイル・ファンに着くんだな……。

* * * * *

船を降りて広場に行くと、何やら騒がしくなっていた。街の人々が逃げるように脇を走って行った。

「何？」

「誰か軍を！ エレンピオス兵よ！」

「エレンピオス兵！？」

誰かの叫び声が聞こえて、レイアが見回している。

「今や珍しくもないようです。兵は各地に出没しています」

「ジランドが居なくなつた所為なの？」

「それもあるみたいだけど……一番の要因はミュゼだな」

広場で暴れている兵士に視線を移して、俺は言った。

「そうみたいだね……」

「あの人たち、めっちゃひどいめにあつてゐるみたいだよー」

ジュードの話を聞く限りでもひどそうだな。断界殻を知つただけで殺されるんだから。

「とにかく、止めないと」

ジュードが言う直前、俺は剣を抜いて弓に変形させ、矢を兵士の両腕に装着されている黒匣ジンに向けて放つ。

矢は黒匣を貫通し、破壊した。

「な、なんだこれは!？」

「とりあえずおとなしくしてろよー」

いきなり黒匣が壊れた事に驚愕している兵士を、鞘で殴って気絶させる。

これで無力化は出来たと思う。

「いきなり矢を撃つからびつくりしたよ……」

「仕方ないだろ。あの距離だつたんだから」

そう話していると、違う兵士が2人走って来た。ラ・シュガルと

ア・ジュールの兵士だ。

「お前達動くな！」

これはもしや……俺達も拘束されるパターンか？

みんなで顔を見合わせていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「無事だったようだな」

「ガイアス！」

「この者を牢へ運べ」

気絶した兵士に視線を移してガイアスが言う。

「この者達はいい」

次に俺達を見ながらそう言うつと、さっき殴った兵士が何か叫んでいた。

無力化したと思ったんだけど……やっぱり甘かったか？

「貴様、口を閉じろ！」

「このままだとエレンピオスが死んじゃう。何が悪いんだ……俺達
は……！」

ジランドと同じ事を言いながら、兵士は連行されていった。

「ガイアス、凄い！ ラ・シュガル兵に命令出来ちゃうんだ」

「ラ・シュガルの民も、軍も、ナハティガル不在によって混乱していた。俺はそれを導いたに過ぎない」

「それがすごいんじゃないのー！」

レイアとティポの言う通り、言うのは簡単だけど、それを実際に行うとなるとかなり難しいだろうけど、ガイアスはそれを成し遂げられるんだ。

凄いつて言われてもいいと思う。

「ガイアスさん。イル・ファンで一体何をされているのですか？」

「ラ・シュガル軍と共同で、海中に沈んだクルスニクの槍の引き上げ作戦を行っている」

「今さらクルスニクの槍で何するつもりだよ？」

あれは攻撃には使えない。精霊術を無効化するだけだ。今さら使道なんか無い筈だ。

そもそも……あんな事があつてまだ壊れてなかったのかよ……。

「俺は異界炉計画を止める。アルクノアは消えたが、計画そのものが無くなったとは思えない」

ジランドも最期に言つてたな……断界殻がある限り、異界炉計画は潰えない。

「お前こそどうした？」

ガイアスが問い掛けると、ジュードが前に出る。

「僕達、ミュゼに会いたいんだ」

「ミュゼだと？」

訝しむように聞き返すガイアスに、レイアが頷いた。

「ガイアスがミュゼと戦つたって聞いたから、会いにきたの」

腕を組んだガイアスは何か考え始めたけど、兵士が1人、出航の時間だと言ってきた。

「ジュード、海停に來い」

「でも、僕は……」

「俺と來い。ミュゼに會えるかもしれんぞ」

ジュードの言葉を最後まで聞かずに、一方的にガイアスが話を終わらせて去って行った。

「チャンスみたいだな。行こうぜ、ジュード」

「うん」

ミュゼに會えるかは分からないけど、俺達はガイアスを追って海停に向かった。

「ア・ジュール兵にもラ・シュガル兵にも命令しちゃうガイアス、かつこよかったね！」

海停に向かう途中、レイアがそんな事を言っていた。

「確にかつこよかったけど、レイア、馴れ馴れしく話しすぎだよ」

「正直、ハラハラしました」

「あはは、思わずテンション上がったって……ガイアス、怒ったかな？」

「いつも無表情だから分かんないな……」

もし怒ってたら、問答無用で太刀抜いてそうだけだな。

「2大国をまとめる程の方です。大丈夫でしょう……多分」
「だよねー！」

レイアはあんまり反省していなかった。

「だからって、調子に乗らない方がいいと思う」
「だろうな……問答無用で打ち首とか洒落にならないよ？」
「……はい。以後、気を付けます」

* * * * *

海停に行くと、ウインガルの姿があった。

「陛下は既に乗船された。まもなく出航だ」
「あ、あの……」

乗り込もうとした時、エリーが前に出てウインガルに声を掛ける。

「……ジャオの事を聞きたいのか？」
「は、はい……」

ジャオの事、か……。

あの時に話したのはほとんどが俺の想像だからな。身近なウィンガルに聞くのはいいかもしれない。

「ジャオさんがどうしてあの時、わたしを助けたのか分かりますか？」

「過去に犯した過ちへのけじめだったのだろう」

「けじめ……ですか？」

過ち……エリーの両親を殺してしまった事だろうか。

「人は生きていなければ意味がないという者も居るが、それは個人の観点到過ぎない。人は社会の中でしか生きられない」

確かに……死んだら全てが終わりつて、そう思ってしまう。

でも……死んでしまっても残るものはある。

「その中では、死んでもなお、つけなければならないけじめもある」

ウィンガルはジュードを見ながら言った。

「……よく、分かりません」

視線で俺に聞いてくるけど……俺は正解を言えるか自信が無いな。

「たからこそ今は、子どもらしく過ごせばいい」

「子どもらしく？」

「ジャオがお前に望んだのは、子どもらしい幸せだった。それは間違いない」

人並みの幸せを願っていた。そういう事か。

「子どもらしく、ですね。考えてみます」

「それでジャオも浮かばれる」

エリーが考えながら俺の隣に来た。何も言えない代わりに頭を撫でる。

「ウインガルさん……」

「随分質問攻めだな」

エリーの質問が終わると、次はローエン。ウインガルはローエンが何を聞きたいのか分かっていたのか、ガイアスの事かと聞き返す。

「ガイアスさんは、リーゼ・マクシアをどうされるつもりですか？」

「陛下はいずれ、このリーゼ・マクシアを統一なさるだろう。あな
たの聞きたい事は、これで十分な筈だ」

エリーには結構話してくれたけど、ローエンには冷たいな。
話は終わったというように、ウインガルは船に向かった。

「……ありがとうございます」

短く礼を言うと、ローエンは髭を触りながら考え始めた。

「ローエン？」

「いえ、行きましょう」

何か引っかけた事があったみたいだけど、それは話さないで船に乗るように促した。

ここでそれを気にしていても仕方ない。

船に乗る事にした。

ミユゼは来るんだろうか。来たら……やっぱり戦うんだろうか…
…。

第41話 希望を求めて（後書き）

はい、謎がまた増えただけでした。明かされるのはもう少し後と言っ事で……。

それにしても、エリーとの絡みがほぼ無しってのは考えものですね……。どこかで絡ませるか（笑）

第42話 真実の欠片（前書き）

ミユゼが……何か怖いわあゝ

第42話 真実の欠片

船に乗って海に出ると、ガイアスにこれまでの事を話しておく事にした。とは言えアルヴィンの事は話す必要は多分無いので、ジュードがニ・アケリアでミュゼに聞かされた事を話している。

「そうか……エサとはな」

呟くガイアスに、ジュードが頷く。

「だから、本物のマクスウェルに会って、僕は真実を知りたい」

「マクスウェルの居場所……考えられるとしたら精霊界か」

「精霊界……そんなものがあるのか……？」

人が住む世界があるなら、精霊が居る世界もあってもいいかもしれないけど……。

「その場所を見た者はありません」

「確かに伝説に等しい存在だ。だが、精霊達は存在している。ならば精霊界は存在し、そこに繋がる道があると考えるべきだろう」

そうかもしれないけど……その道を探すのにどれだけの時間が必要になるんだ？ まるで雲を掴むような話だ。

「ニ・アケリアはー？ 精霊の里って言うんでしょー」

「うむ。あの地には霊山があったな。何があってもおかしくはない」
「だからか、セルシウスがニ・アケリアに行けって言ったのは」

どの道、ミュゼに会ったら行こうとしていたんだし、ちょうどよ

かったな。

「じゃあ、すぐに二・アケリアだね！」

「待て。船は槍の引き上げ場へ行くまで引き返せないぞ」

気合入った様子でレイアが言うけど、すぐにウインガルにそう言われた。

「えー、がっかり……クルスニクの槍なんてどうでもいいのに」

「仕方ないだろ。こっちは情報貰ったんだから。ちゃんと付き合わない」と

「分かってるよ」

肩を落としたレイアは、既に結構いい加減になっていた。

「ガイアスさん。先ほどの異界炉計画を止めるという話。クルスニクの槍を使いエレンピオスへ侵攻されるおつもりなのでは？」

微笑ましくレイアを見ていたと思ったら、ローエンがいきなりそんな事を問い掛けていた。

「全てはリーゼ・マクシアの為だ」

「待って。槍を使うには沢山のマナが必要だよ」

「そうだな。断界殻シエルみたいな巨大な精霊術を消すとなると、膨大な量のマナが必要になる。ガイアスだって分かってるだろ？」

それこそ、もういちどファイザード沼野の時と同じ人数が必要になるだろう。

「無論、人と精霊が犠牲になる事は本意ではない」

「迷っているんですか？　なら……」

「だが、誰かがやらねばならないのも事実だ」

確かに……犠牲を出さないように悩んでいても、いずれは異界炉計画が発動してしまふ。とは言え、こちらが動いてもこの世界に被害は必ず出るんだ。

誰かがやらないといけない事を、ガイアスはやろうとしてくれる。

「ガイアスも……想いを守ろうとしてくれるの？」

「そうかもしれない……いや、そうなのだろう。俺の中でも、あれだけ大きな存在となつた女は初めてだからな」

今まで自分と真つ向から対峙する人つてのは居なかった。そう言う事だろうか？

「だったら、エレンピオスの事も考えるべきだよ！」

「エレンピオスの心配だと？」

ジュードの言葉に、ウィンガルが明らかに不満を含んだ声を上げた。

「リーゼ・マクシアの人と精霊が犠牲になるやもしれぬ今この現実ときに！」

「どっちかが犠牲になるとか……そうじゃないと思うんだ……」

目を閉じたジュードは、「きっと……そう言うよ」と呟いた。本当に……ミラならそう言うかもしれないな。

「断界殻を無くしてみんな助ける。僕はそうしたい」

「お前……」

ガイアスの目を真っ直ぐ見ながら、ジュードが決心したように言った。

「俺もそうだな」

「カイト？」

ジュードの言葉に乘せられて。みたいな言い方になるかもしれないけど、この際どうでもいいか。

「言葉被るけど、リーゼ・マクシアもエレンピオスも、俺はどちらも助けたい。そう思うよ」

俺もガイアスの目を見ながら言う。不思議と怖さは無かった。

「報いたいのか？ 命を投げ捨てて、お前達を守ったあいつに」

ガイアスの言葉に、俺とジュードは同時に頷いた。

「変わったな」

「ジュードが、な」

俺はもともと、誰も犠牲にはしたくなかったんだ。助けられた人は少ないけどさ……。

「ジュード、カイト、お前達は俺のもとで……」

「陛下。まもなく到着します。ご準備を」

ガイアスが何かを言い掛けた所で、ウィンガルがそう言った。ガ

イアスは小さく頷くと、俺とジュードを一瞥してから去って行った。何を言おうとしたんだろうか……？ 考えても、その答えが出てくる事は無かった。

船が止まって、クルスニクの檣を引き揚げる作業が始まった。俺達は特にやる事も無い訳だから、ゆっくりと休息をとっていた。

あれから……ミラの言葉を何度も思い出すけど……全く理解が出来ていない。

本物のマクスウェルが居ると遠まわしに言っているのか？ とも思ったけど、それなら『踊らされる』と言っ言葉はいらない筈だ。それに……ミラは『君も』と言った。なら、他にも本物のマクスウェルに踊らされた人物が居るって事だろう。

あの状況で言ったんだ。まさか……それって……。

「カイト！ 話聞いてますか？」

いきなり近くで叫ばれて、声のした方を見ると、エリーが怒っていた。

「え？ あ、ごめん。ボーっとしてた……」

「ずつと上の空でしたよ」

「ああ、ホントごめん」

謝っていると、いきなり爆発音が聞こえた。

慌てて海を見てみると、何隻かあった船の内、一隻が球体の魔法陣に閉じ込められて、重力に押し潰されたようになって爆発していた。

「何事ですか!？」

「あれって……まさか……!」

「南東の空だ! 来たぞ!」

兵士が叫ぶのが聞こえて空を仰ぐと、ミュゼがとんでもない早さでこちらに向かって来ていた。

その間にも、船は押し潰されていく。

「ミュゼ、やめろ!」

空に居るミュゼにジュードが叫ぶと、ミュゼは急降下して近付いてきた。

俺達は武器を構えて、ミュゼと戦う事になった。

「見苦しく逃げだしたゴミを掃除しなきゃ!」

「簡単にはやられないよ! 三散華^{サザンカ}!」

「ずいぶん強気ね? 頼りにしていたエサは居ないのに!」

ジュードの三連撃は、ミュゼの髪で全部防がれてしまう。

「そうさ、こうなった理由を知りたいんだ!」

「お前こそずいぶん強気だな。大精霊だからって人間なめんなよ!」

「役立たずのクセに、偉そうなこと言わないで!」

役立たず?

確かに俺に向かってそう言ったミュゼは、正面に鋭く変化した髪を打ち付けてきた。

「自分の使命すらまっとう出来ないあなたは、エサ以下よ! グラヴィティ!」

「何の事だよ、ミュゼ！」

俺は自分に放たれた精霊術を避けながら聞き返す。

「カイトは役立たずなんかじゃありません！」

「役立たずよ。何も知らない愚かなね！」

エリーが叫んでくれたけど、ミュゼは俺を役立たず呼ばわりを続ける。

「どういう意味か、話してもらっぞ！」

「腕ずくでも教えてもらっよ、全部！」

「うふふつ、できるものならやってみなさい！」

笑いながら、ミュゼは竜巻を起こす精霊術を発動させる。俺達は一旦距離をとって回避した。

「あははっ！ 逃げてても無駄よ！」

「うわっ！」

だけど、ミュゼは瞬間移動で一瞬で俺の目の前に現れて、突進攻撃をしてきた。

あいつ……距離関係無いのかよ……。

「ジュード、行っちゃって！ シャープネス！」

「ありがと、レイア！ シンセンゴウ獅子戦吼！」

レイアの術で強化されたジュードの獅子戦吼は、さすがのミュゼも防ぎきる事は出来ずに、体勢を崩した。

「隙は与えさせませんよ！　ディフュージオナルドライブ！」

ミュゼの足下に水流が渦巻き、巻き上がって攻撃する。

「くっ……調子に乗らない事ね！　ファイアフルストーム！」

ローエンの術から逃れたミュゼが、闇の竜巻を発生させる。

「貫け、紫電の槍！　ヴォルトアロー！　そして、サンダーブレード！」

竜巻を避けてから、俺はすぐに詠唱する。ミュゼの周りに3つの雷球を生み出し、空から雷を降らせる。そして、強い雷を纏う剣を降らせ、放電させる。

これでどうだ？

「役立たずのクセに……早く死になさい！」

「カイト！」

ミュゼが怒り出して俺に鋭い髪で突いてきたけど、ジュードが横から割り込んできて受け流す。

俺はその隙に、ミュゼの背後に回り込んで斬りつけた。

「離れなさいッ！」

「ぐあっ！」

「うわっ！」

鋭くした髪を、今度は広範囲に広げて俺とジュードを吹き飛ばした。

「大丈夫ですか？ ナース！」

エリーが全員を回復させる治癒術を発動させる。
一撃のダメージが高い攻撃だから、エリーの回復は心強い。

「もう……猶予は与えない……エレメンタルムジーク！」

四方に地水火風の球体が飛ばされ、みんなはそれを避けようとするけど、何と球体は追尾した。

逃げきれずに、球体は俺以外のみんなに当たってしまふ。

「これで終わりよ。全てを飲み込み、渇きの地へ誘え！」

ミュゼの指先から、豆粒程の黒い球体が現れ、それは一気に巨大化する。

「虚数の牢獄！」

徐々に膨張していく黒球体。

まさか……あれが破裂するのか！？ そんな事されたら、船が沈みかねない！

……一か八か、やってみるか！ 間に合えよ！

「イベントホライズン！！」

そして、巨大化した球体が大爆発を引き起こした。

「ふふふ……死んだわね」

「まだだよ！」

「！？ 何故……今で死んでないの！？ 船だって……どうして

「!?」

俺達がまだ生きている事に、ミュゼは驚愕していた。

俺達と船が何で無事なのか、それはセルシウスの氷の力。爆発を喰らう所を、即興で分厚い氷でコーティングした。そして、俺達の目の前には氷の壁を作っていた。

正直言ってかなり危険な賭けだったけど、何とか防げたみたいだ。

「行くよ、カイト!」

「任せろ!」

驚いている隙に、俺はジュードの掛け声に合わせる。

「「翻弄する流舞!」
ムエイケンリュウブ霧影幻龍舞!!」

ミュゼの背後に回った俺は、ジュードと挟み撃ちでミュゼに連撃を叩き込み、最後に交差して攻撃をした。

「くうっ……!?!」

ミュゼが床に倒れ込み、船に乗っていた兵士が走ってきてミュゼを取り押さえた。

「な……何とか……勝ったか……」

「あかし達だけじゃなくてよかったね」

「ミュゼ……君はどうして?」

取り押さえられたミュゼにジュードが問い掛ける。

「……私は……私は……リーゼ・マクシアを守っているだけよ……」

「！」

思いがけない言葉が出てきたな。

「君の……リーゼ・マクシアを守るって何なの？」

「知るわけないでしょう！」

知らないって……訳も分からずアルクノアやエレンピオス兵、二・アケリアの人々を殺したってのかよ！？

「命じた者がいるな」

ガイアスが言いながら近づいてきた。

「ミュゼ、教えて。マクスウェルはどこにいるの？」

ジュードの問いに、ミュゼが目を見開き兵士達を吹き飛ばした。
まだこんな力があつたのか……さすが大精霊だな。

「マクスウェル様をどうしようというの！」

「本当に別のマクスウェルが居たのか」

ミュゼのその一言は、俺達の仮定を補強する所か、確信へと変えた。

「ミュゼ！ マクスウェルはこんな事をホントに望んでいるの？」

「当たり前よ！」

力強く断言したミュゼは、両腕を空にかかげた。

「これを望んでおられたのですよね！？ さあ、マクスウェル様！
この者達を裁く命を！」

空に向かって、ミュゼ自身はマクスウェルに語りかけているんだ
ろうけど、そう叫んだ。

俺達は反射的に身構える。

だけど……いくら待っても何も起こらず、ミュゼの表情が歪んだ。

「どうなってるんですか……」

「分かりません」

「ミュゼ……何をしようと……」

そうしていると、いきなりミュゼが空に飛んだ。

「ウインガル！ 出るぞ！」

そう叫んだガイアスが、いきなり船の外に飛んだ。そして、どこ
から飛んできたワイバーンに乗ると、ミュゼを追いかけて行った。
でも俺は、ミュゼに聞くべき事をまだ聞いていない。

「待て、ミュゼ！ 俺が役立たずってどういう事だ！？ ミュゼッ
！……」

もう聞こえていないのか、ミュゼは止まらずに空の彼方に消えて
行った。

ミュゼが消えた方を睨んでいると、ウインガルがガイアスを追え
と言う指示が聞こえてきた。

ミラが最期に言った事と……関係があるのか？ 俺が……役立た
ずだったのは……。

第42話 真実の欠片（後書き）

セルシウスの力が未だにどう書けばいいか分からないんですが…
…とりあえずこんな感じでどうでしょうか？ 船凍ったんじゃない？
というツツコミはスルーでございます。
次回はあのうるさい人が再登場！？

第43話 巫子との決別

ミュゼが俺に言った言葉は気になるけど、今やるべき事は別にある。

ガイアスを追って辿り着いたのは、イラート海停。おそらく、ミュゼは二・アケリアに向かったんだろう。何となく、そう思う。

「ガイアスとミュゼはどこ？」

「ここで間違いないんだよね、ウインガル？」

海停に着いてすぐ、ジュードがウインガルに問い掛けると、振り返ったウインガルの後ろから兵士が武器を持って走って来た。

何か様子がおかしい。そう思った時には、俺達はア・ジュール兵に取り囲まれていた。

「なっ!？」

「どうして……?」

「何の真似だよ……ウインガル？」

身構えるけどあくまで武器は抜かない。ウインガルの真意を確かめるまでは。

「なんのつもりだー! 黒ずくめー!」

黒ずくめって……まあ確かにそうだけど……ジュードも黒いぞ？

「ちゃんと理由、聞かせてくれるんだよね？」

「危険だからだ」

即答だったけど……意味は全く伝わらない。

「危険……僕達が？」

ジュードの問いに、ウィンガルは首を振った。

「違う、ジュード、カイト。お前達だ」

なおさら訳が分からなくなってきた。

「ジュードさんとカイトさんをマクスウェルに会わせたくない。そうなのですね？」

ウィンガルは何も答えないまま、踵を返した。

「僕達がガイアスの邪魔になるから？」

「絶対に逃がすな」

ジュードを無視して、近付いた兵士にそう指示して去って行った。

そして、俺達は兵士に拘束された。いや 正確にはされる途中だ。

こんな所で素直に捕まってやるかよ。

「えいやーっ！」

そう思っていたら、ローエンが兵士を殴って気絶させていた。さらに、エリーもティポで兵士を倒し、

「ティポ！」

「ヘーばりーつくー！ むにー」

いつも俺にやるように兵士の顔に噛みつき、一時的に息をさせないようにして気絶させていた。

あれ……耐性無い人にはキツイよなあ……。
と、俺も便乗しよう。

「よっ！ つと」

俺も剣を鞘に入れたまま兵士をぶん殴る。イル・ファンでやった時は気絶させられなかったか、今回は思い切り殴ってみた。
多分死にはしないだろ。兜あるし。

「えいつ！」

レイアも兵士の脳天を棍でぶつ叩いて気絶させ、俺達を囲んでいた兵士は全員地面に倒れた。

「エリーゼ、レイア！？」

ジュードだけが驚いた様子で俺達を見回す。

「さあ、ガイアスさんを追いますよ」

しれっとした様子でローエンが言う。

「でも、どこ行ったのかな？」

「十中八九、ニ・アケリアだろうな」

「霊山ですね！」

「はい、賭けるしかありません」

「みんな……」

俺達を見ながら、ジュードが少し呆れていた。

「やるならタイミング合わせようよ……」

だけどそんなジュードを、俺達は呆れたように見やる。

「僕が悪いの!？」

ジュードの驚きぶりに、俺達は思わず腹を抱えて笑ってしまった。

「さ、とにかく二・アケリアに行こうぜ、ジュード」

「そう、だね……ははは……」

微妙な笑みを浮かべたジュード。

とりあえず、俺達は二・アケリアに向かう事になった。

「なあ……どうして、ミュゼはあんな事言っただけなの？」

船で言われた事が気になり過ぎて、思わずジュードにそう問い掛けていた。

「役立たずって事？」

「ああ。使命を果たせなかったからって。でも、ミュゼに役立たずって言われるような使命、俺には無い筈なんだ」

そもそも、あいつと居た時間なんかかなり少ない筈だ。それなのに何であんな事を言われないといけないんだ？

「僕は、カイトが役立たずだなんて思わないけど。むしろカイトが居るから助かってるよ」

「そうです！ ミュゼ、間違ってます！」

ジュードに賛成するように、エリーも話に加わってきた。

「そうだよ。カイト君は頼りになるんだから」

「ええ。私も世話になりっぱなしですよ」

みんなに言われると……すごい気恥ずかしいな……。

「ありがとな、みんな。俺、ちゃんとやれてるんだな」

「うん、だから、あんまり気にしないでね。ミュゼの言った事」

「ああ、分かってるよ」

励ましてくれて、支えてくれる仲間が居るのって、嬉しいもんだな。

俺もみんなの力になれてるってのが、さらに嬉しい事だ。けど……ミュゼの言葉の真意は必ず確かめる。絶対に。

* * * * *

ミラが祀られていた社に着くと、社の前にイバルが腕を組んで立っていた。

あの状況でも、やっぱり生きてたんだな。

「あー、うるさいヤツだー！」

ティポ……ってかエリー……一応こいつはいい奴だぞ？

「イバルさん。ガイアスさんとミュゼさんがこちらに来ませんでしたか？」

ローエンがそう問い掛けても、イバルは動かない。

そう言えば変だ。いつもならジュードを見ればすぐに騒ぎ出すのに。

「2人だけじゃない。ウインガルも霊山へ向かった」

やっと話し出したけど、やっぱりいつもと違う気がする。

「奴はこうも言ったぞ。ジュードが来るかもしれないが、好きにしておかないとな」

それは……どういう意味だ？

「同じ黒ずくめ同士、大目に見てやるつもりだったのに。ゆるさないぞー」

「ティポ……」

緊張感無さ過ぎだ……。

「ガイアスに見放されたか、ええ？」

いつもと違う。けど、ジュードへの敵対心は変わらずあるみたいだ。

「イバル、分かってほしいとは言わない。けど、今は君と争ってる時じゃないんだ」

「黙れ！」

取り付く島もない。ジュードの言葉をイバルは一蹴した。

「ジュードは……彼女の想いを遂げる為にここに来たんだよ！」

名前は出さなかったけど、明らかにレイアはミラの事を言っていた。

「そんな事、どうだっていい！」

「何言ってるんだよ……お前？」

ミラの事が……どうだっていい？

巫子に誇りを持っていたお前が、何を……。

「ジュード、どうしてお前が！ お前ばかりが！」

敵対心を剥き出しにしたイバルは、両手に剣を握って構えた。

「みんな、先に……」

「仕方ないな……」

ジュードは俺達を先に行かせるつもりだろうけど、俺達はジュードを残して先になんて行く筈が無い。

「みんな……」

俺達を見回したジュードが、安心したように呟く。

「ハッ！ サシの勝負も受けられないのか！ 腰抜け！」

そんなジュードを嘲笑うイバルに、さすがにカチンと来た。

「さっき、ジュードが言いました。今は争ってる時じゃないって」

「そうよ！ ジュードには あたし達にはやる事があるの！」

「先に進まないといけないんだ！ こんな所で止まってるられない！ 分かれよ！」

「それを邪魔するようでしたら……私達がお相手するのは当然、でしょう？」

俺達が武器を出して構えながら言うと、ジュードが一步前に出て構える。

「通してもらっよう！ イバル！」

「上等だ！」

イバルが俺達に走ってくるのと同時に、上空からワイバーンが降りてきた。

「決着を着けてやるぞ、ジュード！」

「僕は偽物でいいよ！ だからそこを退いて！」

「本物か偽物か、もうそんな事は関係無い！ 俺はお前に勝てれば

それでいいのだ！」

ジュードに向けて斬り込みながら、イバルが叫んだ。
巫子は関係無い。ただ単にジュードを打ち負かしたいだけだっ
てのか？

「本気で言ってるの、イバル！？」

「ああ、これ以上ない程にな！
レッシンザン 烈震斬！」

空中に跳んでから地面に双剣を叩きつけ、前方に衝撃波を飛ばし
てきた。

「うわあっ！？」

「もらったあ！」

「させないんだから！」

一撃を直撃してしまったジュードに、イバルが斬りかかる。
俺は助けに行こうと思ったのに、ワイバーンの妨害で動けなかつ
た。代わりに、レイアがイバルの攻撃を防いでいたのが見えた。

「このっ……！ 引っこんでろ！」

剣に氷を纏わせて横薙ぎを2回繰り返す。そこからすぐに弓に変
えてワイバーンの下から氷の矢を無数に放つ。

ダメージはあるんだろうけど、まったく堪えない様子で尻尾を振
られて吹き飛ばされる。

「ぐっ……あんまし、聞いて無いのか？」

「それなら……」

「術で勝負しましょうか！」

ローエンとエリーが共鳴^{リンク}して、詠唱を始める。

「渦巻け深淵！」

「水霊を受継ぐ！」

「「メイルシュトローム！！」」

「ぐぐぐぐぐぐ！？」

地中から水流が湧き出しワイバーンを飲み込んだ。いや、偶然にも近くに居たイバルも巻き込まれている。なんて幸運だ。俺はこの隙に、剣に雷を纏わせ、走った。

「はあっ！ ^{マコウジン}魔皇刃！ からのっ、^{マオウライゲキハ}魔王雷撃波！」

水流に巻き込まれているワイバーンに向けて剣を振り下ろして衝撃波を喰らわせ、さらに回転しながら雷撃を放った。

「ジュード！ 例のヤツ！」

「分かった！」

「^{センハホウヨクタン}閃破封翼弾！！」

「ぐわっ！」

レイアがワイバーンとイバルを同時に打ち上げると、ジュードは空中から叩き落とすように火球をワイバーンとイバルに叩き付けた。地面に着弾すると爆発する。

ワイバーンの方はなんとか倒せたみたいだけど、地面に倒れたイバルは、それでもまだ立ち上がった。

「もうやめろイバル！」

「黙れ！ 俺は負ける訳にはいかないんだよおッ！！」

ドガッ！！ 片方の剣を地面に思いきり突き刺すと、辺りに衝撃波が走り、衝撃波は魔法陣を描いていた。そしてイバルは、空高く跳んだ。

「見せてやる！ 双剣に木霊せし万霊の咆哮！ 双牙煌裂陣！！」
ソウガコウレッジン

剣を構えながら落下したイバルが、魔法陣の中心に剣を突きさした。すると、魔法陣には亀裂が入り、爆発する。吹き飛ばされた俺達は、地面に倒れ込む。

「どうだジュード！ これが俺の力だ！ これでお前も……」
「うん……確かに凄いよ……でも、僕はこんな所で止まれないんだ！」

受け身をとっていたのか、ジュードは倒れてもなおすぐに立ち上がっていた。

「何故だ……何故倒れない！？」

立ち上がったジュードに驚愕しているイバルは、行動が遅れていた。

素早くイバルの懐に入ったジュードは、イバルの双剣を吹き飛ばしてからイバルの身体に強い一撃を喰らわせた。

「がはあっ！」

イバルが地面に伏せって、決着はついたようだ。

「どうして……どうして俺は勝てないんだ！ クソ！」

立ち上がりながらイバルが呻いた。相当悔しいのか、地面を叩く音が聞こえる。

掛ける言葉も見当たらず、みんなと同じようにイバルの横を通り過ぎる。

「俺はミラ様を守る使命を持った巫子！俺は特別だ！特別なんだ！」

同じ様に横を通り過ぎたジュードに向かって、イバルがそう叫んだ。

お前……ミラの事どうだっていいってさっき言ってたじゃないか……。

「……イバルも僕も、まだ特別な存在じゃない」

「なに！」

「僕はどうかしたら2人のように、特別になれるのか知りたい」

2人つてのは……やっぱりミラとガイアスだよな。

「貴様などになれるか！ミラ様を見殺しにしたお前が！」

それは違う。そう言おうとした時、ジュードが俺を止めていた。

「あの時、僕が特別な人間だったら、助けられたかもしれない……ごめん、イバル」

俺も……あの時一番近くに居ながら、何も出来なかった。それどころか、ミラに助けられた。

見殺しにしたのは、俺も同じなんだ……。

イバルはジュードを睨みつけながら立ち上がるけど、表情が一瞬だけ和らいだ気がした。

「……靈山は、社の先だ」

俯いてからそう呟いた。

「イバル？」

「さっさと行け！ 俺の前から消えろ！」

いつものようにそう叫びながら、自分から走り去って行った。

「自分から消えたー！」

「……そこはツツコンでやるな……」

でも、教えてくれたって事は、少しはジュードの事を認めたんじゃないか。

「イバル、よっぽど悔しかったんだね」

「彼にとって、いい薬となったでしょう」

2人とも……あんまりイバルに優しくない？

「次に会う時、どんな反応するか楽しみだね」

「イバル……もう来ないんじゃないかな。行こう」

何を思ってそう言ったのか分からないけど、ジュードはそれ以上は触れないで先に進もうと言った。

「え？ 待って、ねえ、どうして？」

レイアはその意味が分からずにジュードに問い掛ける。けど、ジュードは答える事はしなかった。

俺は一度だけイバルが去った方向を見て、「またな」と呟いてから、みんなを追った。

第43話 巫子との決別（後書き）

イバルはバカでムカつくけどそこまで嫌いじゃないキャラです。
以後ももしかしたら思い付きで登場させるかもしれません。……
多分。

第44話 四象刃との別れ（前書き）

別れとは言うものの、ウィンガルあんまり関係ないです

第44話 四象刃との別れ

社の中を調べると、隠し扉を見つけた。そこを通ると、霊山への道が見つかった。

「雨が降ってきたよ……このまま登るの？」

霊山を登り始めてすぐに、レイアが不安そうにそう言った。

「ここまで来たんだ。行くしかないだろ」

「……うん。危険だけど進もう」

山道で雨とか最悪だけどな……ここで止まるのは、イバルにも悪い気がする。

「足場が不安みたいだけど……大丈夫か？」

「はい、だいじょう きゃっ!？」

エリーが答えた瞬間、突然強い揺れが襲う。まるで山自体が揺れたようだった。

バランスを崩したエリーを支えて道の先を見ると、太刀を構えたガイアスの姿が見えた。

「みんな、隠れよう」

とりあえず隠れて様子見る事にする。

ガイアスはミュゼと対峙していたようだ。

「私がこんなに苦しんでいるのに……どうして、応えてくれないのよ！　ずっと！　ずっと！　ずっと！　マクスウェル様……！？」

ミュゼはガイアスを見ていなくて、ずっと空に向かって叫んでいた。

マクスウェルに話しているようだけど……マクスウェルが何も反応していないのか？

「精霊でありながら、なすべき事を自ら見いだせんのか」

「マクスウェル様のところには行かせない！　それが今の私のすべて！」

目を見開いたミュゼが、ガイアスに向かって重力の球体を数発飛ばす。だけど、狙いが定まっていないのか一撃も当たらない。

「愚か……いや、哀れだな」

ガイアスの言葉に、ミュゼは頭を抱え込んで飛んで逃げた。ガイアスはそれを追う。

余裕があれば出て行つてミュゼに聞きたかったんだけど……ミュゼが不安定過ぎて、見るに耐えないな……。

「あの2人が戦う音だったのー！」

隠れていた岩場から出て、2人が戦っていた所を見ながらティポが呟いた。

「かつて見たガイアスさんの力は、ごく僅かだったようですね」

確かに……山の形変わりそうだもんな……。

「ミュゼも、やっぱりどこか……」

「普通じゃなかったな……」

レイアに同意するように言う。

マクスウェルから何も声が聞こえてないんだろう。けど……それだけであんな不安定になるんだろうか？

「ですが、ここで考えても何も分かりません。今は先を急ぎましょう」

「マクスウェル、この山に居るみたいでしたしね」

「うん。間違いなさそうだね」

とりあえず、今はガイアスとミュゼは置いておいて、俺達は先に急ぐ事にした。

「ここが山頂みたいけど……」

ガイアス達を目撃してからまたさらに山を登って、ようやく山頂に着いた。

けど……何だろう……変な　いや、言葉に表せないけど……とにかく何かを感じる。

「なんたるこー、すんごいー！　びんびん感じるー」

「ティポ……つか、エリーも何か感じるのか？」

「……分かりません」

首を傾げるエリーは、戸惑ったように呟いた。

「あっち……誰かいるみたいだよ」

レイアが言っ指差した方には、確かに人影が見えた。
俺達がそこへ行くと、四象刃^{フョーグ}のアグリアとプレザ、そして

「ウソ……」

アルヴィンが居た。

「お前達……だったのか……」

何でアルヴィンが……四象刃と一緒に居るんだ？

「アルヴィン！ どうして……」

「ジュード……」

いつもの様子は無く、アルヴィンの表情は暗く落ち込んでいた。
レイアも、アルヴィンの姿を見てから黙り込んでいた。

「お二人まで……」

「また敵同士になれるなんて、喜んでいいのかしら？」

「アハハ！ またあんた達をいたぶれるなんてサイコー！」

俺達が驚いていると、アグリアとプレザがそう言う。

「おいブス！ あんたこの男に撃たれたんだって？」

アグリアがアルヴィンを指差しながら言う。
撃たれた時の事を思い出したのか、レイアは黙って俯いた。

「やめろ、アグリア」

その時の事はアルヴィンにとっても辛いんだろう。アグリアを止めるように言うけど、アグリアは高笑いを続ける。

「悪いけど、今度こそ死んでもらうわ」

「そうはいきません。私は、ジュードさんとカイトさんをマクスウエルに会わせなければならぬ」

ローエンは決意したようにそう言う。

「あなたがガイアスさん達を特別と感じたのは……あの2人が真に大人たる生き方をしているからです」

「アハハ！ ジイさんはしてねーけどな！」

「ローエンだって、ちゃんとしてるよ！」

俺が反論するけど、ローエンは首を振る。

「お恥ずかしい話。そうなのでしょう。そして、アルヴィンさん、あなたも」

「オレが……」

アルヴィンが俯く中、アグリアが武器を出した。

「ご託はもういいよ、ジジイ！ あんたは先にヘヴンリーしな」

そして、詠唱を始めた！？

あいつ戦う気満々だな！？ 話し合う気ゼロかよ……。
だけどアルヴィンがアグリアの前に立った。

「アル……」

「いや、オレはただ……」

プレザが視線を向けると、アルヴィンは気まずそうに俯いた。
今俺達を守ろうとしてくれたのは、もしかして反射的にだったのか？

「おい、ニイちゃん！ どけ！」

アグリアの術が発動して、アルヴィンに直撃した。
レイアが駆け寄ると、アグリアに視線を移した。

「アグリア！ どうしてあなたは！」

「うるせえ！ あたしはな、陛下を裏切る訳にはいかないんだよ。
ババア！ あんたも同じだろ！ あたし達の居場所はここだ」

アグリア……何を焦ってるんだ？

プレザに同意を求めると、俯きながら「そうね」と答えた。

「陛下は私達のようなゴミとされた人間まで傍においてくれた」
「プレザ……」

辛そうにしゃがんでいたアルヴィンがプレザに視線を移す。

「ごめん、アル……あなたはやっぱり私の敵っ！」

「ここで役に立てなきゃ、お払い箱なんだよ！」

2人が詠唱を始めた。

お払い箱って……ガイアみたいな人がそんな事をするとは思えない。

でも……2人の不安は本物のようで……今のその場所に必死にしがみついているようだった。

「全てを満たせ」

「灼熱の炎霧！」

「レイジングミスト！！」

空からは巨大な火球。足下からは強烈な水流。その2つを衝突させる精霊術は、俺達全員を巻き込むような広範囲の術だ。

俺はエリーを抱えて跳び退いて避ける。着地してからみんなを見ると、ちゃんとみんな避けれたようだ。武器を構えている。

足場が思ったよりも悪くて、気をつけておかないと滑って落ちるかもしれない。それに、ただでさえ地盤が脆いんだ。こんな所で戦って、もし足場が崩れたら……確実に死んでしまう。

「アル……私の手で殺してあげるわ！」

「悪いけど……オレは死ねないんだ……！」

大剣で攻撃を防ぎながら言うアルヴィンだけど、プレザに反撃をする気配は無い。

少しでも助けようと俺とジュードが割って入るけど、アルヴィンの動きが予想よりも悪くて防戦一方になってしまう。

「お前らに選択の余地は無いんだよ！」

「勝手に決め付けないでよ！」

回転する特異な剣を、レイアが棍で何とか防いでいる。ローエンとエリーが加勢しているけど、どちらも後衛向きだから、接近戦では手こずっていた。

「相変わらずクセエ台詞を吐きやがる！」

「無駄話はこちらまでよ！　ここから先へは行かせない！」

「分かってる！　ババアこそ遅れんなよ！」

防戦一方だった俺達から、アグリアとプレザが退いて詠唱を始めた。

またあの広範囲術か……！？　間に合えよ！

「ヴォルテックヒート！」

ほとんど無詠唱に近い速さで精霊術を発動させると、2人の近くに激しい熱風が吹き荒れた。

「きゃあ！？」

「このっ……ふざけやがって！」

熱風で体勢を崩した2人は、詠唱を止めて体勢を整えさせる。

何とか詠唱は止められたけど、改めて戦ってみると四象刃の強さは半端無いな。サシで戦っても勝てるか分からない。

数はこっちが勝って入るけど、こんな足場の悪い場所じゃ数も活かしきれない。

俺達だっでここで負ける訳にはいかないんだ。

「アルヴィン、何悩んでるか俺には分かんねーけど、覚悟決めろよ」

「なっ……！？」

「悩んでちゃ何も出来ない。俺、前にアルヴィンにそう言われたんだけど？」

アルヴィンが目を見開いていた。

これを言われたのはいつだったかな？ もう覚えてないけど……言葉は覚えていた。

「っははは……まさか、おたくに諭されるとはねえ……」

薄く笑ったアルヴィンが大剣に銃を取り付ける。

「覚悟は……決まった……！」

剣を握り直したアルヴィンがそう言った。

ならもう、アルヴィンは大丈夫だな。

「余所見してんじゃねえよクソガキがああっ！！」

「つつ……！？」

気付けば、いつの間にかアグリアが業火を纏う剣を構えて近くに居た。

避けようと跳ぼうとしたら、岩のぬかるみで転んでしまう。回転する突きはそれで避けられたけど、今度は俺の頭をめがけて剣を地面に突き刺そうと振りかぶっていた。

「カイトさん！ フリーズランサー！」

「邪魔はさせないわよ！ アクアバインド！」

「なんですとっ！？」

ローエンが放つ氷の槍が、水の膜のようなものに行く手を阻まれ

てしまっていた。

「くっ……間に合えよ！」

「させないって言ってるでしょ！ アル！」

「がはっ！」

俺の方に来ようとしたアルヴィンに向かって、プレザが水球で吹き飛ばしていた。

「ゲームオーバーだ！ 死ねえッ！！」

「カイトー！」

「ぐほう！？ なんだこりゃあ！？」

「カイト君から離れて！」

今まさに振り下ろされそうだった所で、ティポがアグリアの顔にへばりついていった。突然の事に慌て出したアグリアを、レイアが棍で横に薙いで吹き飛ばした。

「あ、ありがと、エリー、レイア、ティポ……」

今のはマジで死ぬかと思った。

「早く立って、カイト君！」

「ブス！ よくもやりやがったなあ！ フレアブレイヴ！！」

キレたアグリアが、剣に炎を纏わせながら回転させ、さらに回転の速度を速めて行き、俺とレイアに向かって巨大な炎の旋風を巻き起こした。

こんなもん……どうやって避けろって……いや、手はあった！

「炎を凍らせる！ セルシウス！！」

叫んだ刹那、俺達の目の前にセルシウスが現れて、迫りくる炎の旋風を文字通り凍らせた。

「な……なんだよ……これ……！？」

炎を纏っていた剣すらも凍らして、アグリアは動けなくなっていた。

「はあっ！」

その隙に、レイアがアグリアの懐に入り連撃を喰らわせる。

「ぐあああ！」

「エリーゼ、お願い！」

「了解です！」

連撃を喰らわせたにもかかわらず立ち上がるアグリアに、エリー
とレイアの共鳴術技が炸裂した。

「腕^{かいな}よ掴め！」

「終わらせるんだから！」

「闇^{エンセンゲツリン}旋月輪！！」

闇の力がアグリアを拘束して、レイアが連続で回転してアグリアを叩きのめした。

「がああああっ！？」

「アグリア……ッ！？」

アグリアが倒れた事に反応したプレザだけど、瞬時にアルヴィンが近付いていた。

「悪い……プレザ……！ 剛・紅蓮剣！」
「きゃああああ！？」

炎を纏わせた剣を地面に叩き付けて爆発を起こした。
プレザの身体がアグリアの事まで吹き飛んだ。

2人は傷つきながらもまだ立ち上がろうとするけど、地面に膝を着いて立ち上がれなかった。

「アル……」

岩場に手を着いたプレザが呟いた。

「たった数日間だったけど……あなたといわれて幸せだった……」
「プレザ、オレは……」

言葉が見つからないのか、アルヴィンはそこから言葉を失ってしまっ
た。

「よかった……アルヴィン。居場所……あなたにもあるの……気づ
いて」

散々アルヴィンの事をひどく言っていたけど……心の底から心配
していたんだな……。

その時だ。激しい揺れが俺達を襲ったのは。そして、プレザとア
グリアの居る足場に、亀裂が入った。

プレザの居る足場が先に崩れる。その直前、アルヴィンが走り出

してプレザに手を伸ばした。
だけど、一瞬間遅かったからか、手は届かなかった。プレザが落下し始める。

「アルヴィン！」

「え……なっ……！？」

「カイト！？！」

俺はアルヴィンの名を叫ぶと、迷わずに頭から崖から飛び降りる。後ろから驚いたアルヴィンとエリーの声を聞きながら、落下していたプレザの手を掴んだ。

その瞬間、俺の落下は止まる。

「アル……」

プレザが呟いた。アルヴィンが俺の足を掴んでくれたんだろう。俺達の横では、崖に落ちそうなアグリアの手をレイアが掴んでいた。

「アグ、リア！ 今、助ける！」

横目で確認すると、アグリアが目を見開いていた。

「おい、ブス！ てめーがいくら頑張っても、どうにもならない事ってのがあんだよ！」

叫んだアグリアは、レイアの手を自ら振り解いた。

「アハハハハ！ 絶望しろ！」

「セルシウスッ！ 何が何でもアグリアを助けるおおッ！！！」

「お任せを！」

現れたセルシウスが空中に氷を張り、アグリアを受け止めてから崖の上に戻った。

よかった……けど……このままじゃ頭に血が……いやいや、この手は死んでも離さん！

「カイト！ 今から引き上げるからね！」

「頼んだー！」

ジュードの声がしてからすぐに、引き上げが始まった。数分かけて、俺とプレザは崖の上に戻る事が出来た。

「お前！ 何考えてんだ！ 死ぬ気かよ！？」

戻ってすぐに、アルヴィンのそんな怒声が待っていた。

「死ぬ気なんかなかったよ。俺はただアルヴィンを信じただけ」

「オレが掴まなかったらどうするつもりだったんだ！」

「でも、掴んでくれただろ。と言うか、今は俺は置いとけよアルヴィン」

俺がプレザに視線を移しながらそう答えると、アルヴィンは怒りながらも呆れたようになり、一度大きく息を吐いた。

アルヴィンも、プレザという話をしてはいけないと思うかな。

「何で……助けてくれの？」

「身体が勝手に動いた」

実際は、死なせたくなかったんだけど、面と向かって言うのは何だかなあ……。

「おいテメエ！ 何であたしまで助けやがった！？」

「何で助けられたのに怒るんだよー！」

「あたしは助けてとか言つてねーだろ！」

叫ぶアグリアにティポが怯えて下がった。そんななるなら何も言わなきゃいいのに……。

「別に、そんな具体的な理由なんかないよ。でも、強いて言うならレイアが助けようとしたから」

「え……？」

驚いた様子で俺を見てくるレイア。

「レイアが助けようとしてたのに、わざわざひどい事言つて死のうとしたお前に腹が立った。それが理由かな」

「な……に……？」

アグリアも俺の言葉に目を見開いていた。そして、怒りでなのか身体を震わせていた。

「アグリア、行くわよ」

そんな中プレザが近付いてきてそう言った。

「ババアが指図すんな！ あたしは……！」

食いかかるアグリアだけど、プレザは無言で首を振った。

納得しないアグリアは、俺達から離れて行った。

「アルヴィンと話はいいいのか？」

「ええ、最後に話せてよかったわ」

最後？

聞こうと思ったけど、プレザはレイアに向き直る。

「無理かもしれないけど、アルの事……許してあげて」

「うん……分かってるよ……」

頷いたレイアに微笑んで、プレザは去って行った。

今この2人には、言葉以上に何かが交わされていた。そんな気がする。

「ジュードが……イバルともう会えない気がするって言った事……」

何となく、分かっちゃった」

「え……？」

それはもう……プレザやアグリアとは会う事が無いと、そういう事なんだろうか。

「ほら、カイト君。あたしよりアルヴィンの心配してよ、ね？」

「あ、ああ……」

レイアに背中を押されるように、俺はアルヴィンの所に向かった。目に涙が見えた気がしたけど……俺は触れないでおこう。

アルヴィンの所に行くと、ジュードが隣に居た。

「アルヴィン……行くところあるの？」

「聞いてどうすんだよ……」

「僕達と行こう……」

怒るように言うアルヴィンに、ジュードが言った。

「ガキに気遣わせたか……」

少し間があって、

「正直言つと……そう。レイアの事もあるから」

「……レイアには謝るよ」

「そうして……」

2人とも、消え入りそうな声で言葉を交わすと、ジュードが離れた。
た。

「カイト君、ぼくはアルヴィンやだよー！ また裏切られるー！」

そんな事俺に言われてもなあ。

どう答えていいか分からずに、俺はエリーの頭を撫でた。

「エリーゼは正直だな」

さっきの言葉が聞こえていたんだな。アルヴィンが言った。

「エリーは素直で正直な子だからねー」

ティポの言葉を聞くと、アルヴィンは去って行ったジュードを見る。

「あいつ……あんな大人みたいなマネするようになったんだ……本気で俺を嫌ってるんだろ？」

「そんな事」

「そうですよ。わたしもキライです！」

俺の言葉を遮って、エリーがそんな事を言っていた。表情を見るからに、本当に怒ってるみたいだ。

「エリーゼは……」

「何ですか？」

「お前はそうやって文句言ってくれ。そういう本音、案外嬉しいんだ」

そう言いながらアルヴィンがエリーを撫でようとして、やめた。代わりに額にトンと指で突いた。

「ヘンタイさんも嫌いです！ 行こ、ティポ！」

頬を膨らませて、エリーもジュード達の方に行った。

「お前も嫌ってくれていいんだぜ？」

そう言われたけど、俺は首を振る。

「俺はアルヴィンを信頼してるよ。頼まれたって嫌ってやらない」
「……サンキュな」

俯いていたアルヴィンがジュード達を見る。

「ローエンの言う通り……このままじゃ……」

その弦きは、自分に言い聞かせているようだった。

第44話 四象刃との別れ（後書き）

とにかくアグリアとプレザは死なせない事に。とは言え締めくくり方が何だかなー……。

もう少し上手く書ければいいんですがね……今後もしかしたら出てくるかも？

次回は爺さんが出て来るんじゃないかなと思います。

第45話 精霊の主 語られる真実

「よう〜！ 元気が、レイア？ また、よろしく頼むわ」

とにかくレイアに謝ろうと、不自然にならないようにいつものオレを意識して声を掛けたら、上擦った声が出た。

あれ、オレってどんな感じだったっけか？ と悩む隙も無く、レイアに訝しむような眼差しで見られた。

「…………何その声？」

やっぱり声が変わったか……。いや、変なのは声だけじゃないが…………。

「…………意識すると、いつものオレの調子って、難しいんだな」

「普通の神経なら当然だよ」

「そうなんだろうな」

あんな事があって…………あんな事をしてしまったんだ。

『いつもの調子』で話せる方がおかしいんだ。

「でも、意識はしてくれるんだ？」

「一応…………な。オレが撃った傷、大丈夫か？」

「大丈夫だよ…………一応…………カイト君が傷塞いでくれたみたいだし」

あいつが…………そう言えば、クレインの時もナハティガルの時も、あまつさえジランドの時も、あいつは傷を治そうとしてたな…………。
あいつのおかげ…………か…………。

「……すまなかった」

「も、いいよ」

「本当にいいのか？」

これ以上話すつもりがない。そんな感じで言われたからなのか、オレはさらに問い掛けてしまっていた。

「全部いいわけじゃないけど」

「そりゃそうだよな……」

人撃つて、ごめんなさいで許される程、世界は甘くない。それはリーゼ・マクシアでもエレンピオスでも変わらない。

表情を曇らせるつもりはなかったのに……オレが口を開く度に曇らせてしまう。

……信頼してるって……言ってくれたのにな……。

「でも……」とレイアが続けて、オレは顔を上げる。

「アルヴィン……前にあたしの事……」

「え？」

最後の方は声が小さくなって聞き取れなかった。だから、思わず聞き返してしまう。

「……何でもない！」

レイアが首を強く振って、怒ったように去って行った。

「……また、曇らせちゃったな……」

いっそ話さない方が、あいつは笑顔でいられるのかもしれない。

いや、『かも』じゃなくて断定か……。

「……どれだけ嫌われても……な……」

もう……オレには何もないんだから……。

* * * * *

レイアとアルヴィンが話し終わって、俺達は奇妙な霊勢の前に立っていた。

その霊勢は、おそらくマクスウェルの居る場所に繋がっているんだろう。

「ここ……怖いほど、精霊の力を感じます……」

「マナが溢れ出てるみたい」

その霊勢を見て、エリーが俺の服を掴んだ。いつもなら頭でも撫でてやるんだけど……この霊勢は俺には何故かキツイ……。

「奇跡的な霊勢ですね。僅かな変化で入り口が消えてしまいそうです。様々な偶然が、この場所を作り出したのでしょ」

「なら……今がチャンスだな……」

もしかしたら、最期の……。

「精霊術を使う時の魔法陣に似てる」

「あ、言われてみれば」

ジュードの言葉に、レイアが気付いたように呟いた。
言われてみれば、確かに似ているかもしれない。

「んな事より、ガイアスとミュゼの戦いで消えちまう前に行った方がいいかもな」

少し離れた所に居たアルヴィンが近寄りながらそう言う。
あの2人の戦いは霊勢さえも変化しそудだもんな。もたもたしてたら消えるかもしれない。

「オレから行くよ」

「あ、いいいいいよ。こういうのはあたしの役目だし」

気を遣つてというか……これまでの事があるからアルヴィンはそう言っただらうけど、レイアも気を遣って歩いて行った。
エリーはアルヴィンにあかんべー。不謹慎にも可愛いなあ、とか思ってしまった。

と言うか……この世界にもあかんべーあるのな？

「アルヴィン、行こうぜ」

「……ああ、分かってるさ」

俯いて意気消沈していたアルヴィンが、小さく頷いた。

「っし、俺一番な!」

「ええっ!?!」

ジュードが呆れていたのが見えて、俺は靈勢の中に飛び込んだ。

* * * * *

靈勢の中に飛び込んで、すぐに足場を感じた。

「ここは……」

何故だろう……懐かしい。いや、違う。けど……俺はこの場所を知っている？

「勝手に先に行かないでよ？」

ぼーっとしていたら、背後からジュードの声が聞こえた。

振り返ると、みんなが道を通って来ていた。辺りは真っ暗なのに、ジュード達の姿だけははっきりと確認出来た。

「この先に、マクスウェルが居るのかな？」

「分からない。けど、行こう」

視界がはつきりしない道に行くのは不安だけど、俺達は前に進むしかないんだ。

「エリー、俺から離れるなよ？」

「わ、分かってます……」

離れるなどか言いつつ、俺はエリーの手をぎゅっと握る。

この場所が……何だか恐い……。そんな思いがエリーに伝わってしまったのか、エリーも手をぎゅっと握り返してきた。

……これで安心できるなんて……俺って結構単純なのかもな……。

道なりに進んで行くと、奇妙な空間に出た。

辺りは鏡のような水面が広がっていて、水面には歯車のような輪が埋まっていた。水面に映っているのは星空のようなのに、空を仰ぐと早朝のような空だった。

「変な場所ですね……？」

見回しながらエリーが呟く。

「誰……？」

レイアが反応したその先には、変な台座に乗った1人の老人。

「私がつくり出した人間界と精霊界を繋ぐ唯一の途、ウルスカール世精ノ途」

この場所の名称を言う老人に、ジュードが近付く。

「あなたが……マクスウェル？」

「いかにも。私が精霊の主マクスウェル。ここまで来る人間が居る

とは……」

老人　マクスウェルが俺達を見回した。

「いや……1人人間ではなかったか……」

「それって、どういう……？」

レイアが問い掛けるけど、マクスウェルは答えなかった。
仕方なく、ジュードがここに来た目的を告げる。

「あなたに聞きたい事があるんだ。ミラの事……教えて欲しいんです」

「む………」

ジュードの言葉に、マクスウェルが訝しむような表情になる。

「ミラはあなたの身代わりにされたって聞きました」

「その理由を聞かせてもらえませんか？」

「なるほど、お前達がミラに供した者達か」

一瞬、マクスウェルが俺を見た。

「ミュゼと言い……俺が何だって言うんだ？」

「……僕はミラと出会って旅して……そして色々考えた……力の事、なすべき事……」

自分の中で整理した事を、ジュードは静かに語り出した。

「そしてミラが……ミラが死んで……僕はようやく気付けた。僕が本当にやりたい事！　やらなきゃいけない事に！」

「……なんだそれは？」

「断界殻シエルを無くして、リーゼ・マクシアもエレンピオスを助ける」

特に動揺もせず、マクスウェルはジュードを軽蔑するように見た。

「なんと愚かな！ 外には黒匣ジンがあふれている。リーゼ・マクシアを滅ぼすつもりか！」

「そんな事はさせない！」

リーゼ・マクシアも、エレンピオスも、どちらも助かる方法がきつとある筈だ。

それを伝えたかったのに、マクスウェルは自分の中で何かの結論を出していた。

「そうか。あやつの死の意図を読めずにおったが……今確信した……ミラが使命を忘れ、あのような真似をし、保険さえも機能させなくしたのは、すべてお前達の所為だったのだな！」

な、何言ってんだあの爺さん！？

ミラが使命を忘れたとか……保険っていったい……？

「そして此度……お前達は断界殻を消し去り、世界を滅ぼそうとしている」

「マクスウェル！ 話を……」

「この破壊者どもめ！ 我が世界より消えよ！」

こちらの話聞く気はなく、仕方なく俺達は武器を構えた。いきなり戦って……精霊の主としてどうなんだよ！

「天照らせ日輪！ 今こそ消滅の時！ レイジングサン！」

巨大な火球が空から落ちてきて、地面を焼いた。

「くっ…… 虎牙破斬！ 猛虎豪破斬！」

精霊術に耐えてから、俺はマクスウェルに斬り上げ斬り下ろしからの、連続斬りを繰り返した。

「レインバレット！」

「デиф्यूジョナルドライブ！」

上からは銃弾の雨。下からは激しい水流がマクスウェルを襲う。

「ウィンドスニーク！」

だけどマクスウェルは、自分に風を纏わせて瞬間移動をしたように移動した。

「トリニティチェイサー！」

そして、風の塊を3つ俺達に飛ばしてくる。

「避ける、レイア！」

「くっ！？」

飛び退いた筈なのに、風の塊はレイアを追尾していた。

「レイア！ ぐあっ！」

「アルヴィン！？」

避けきれないと判断したアルヴィンがレイアを突き飛ばして庇う。アルヴィンは大剣で攻撃を避けるつもりだったんだろうけど、予想以上に威力が高くアルヴィンは吹き飛ばされた。

「回復します！」

「さっせんぞ！ 始まりと終わりを知らず、時の狭間で遊べ！」

「ナース！」「ストップフロウ！」

エリーの治癒術とマクスウェルの精霊術が発動したのはほぼ同時。治癒術でみんなの傷が癒えたその刹那、身体が動かなくなった。

「レイジングサン！」

再び火球が俺達を襲い、膝を地面に着いてしまう。

「分かっているのか！ お前達のやろうとしている事の意味が！」

マクスウェルの問いに、立ち上がりながら答える。

「分かっておりますとも。だからです！」

「だから、あなたにミラの事を聞きたかったの！」

「リーゼ・マクシアの真実や、どうしてミラがエサと言われたのかをな」

「聞いてどうする？ それで何かが変わるというのか？」

俺達を嘲笑うように言ってきた。

「そんなの分かるかよ！」

「でも、知らないままじゃ何も変わらないのは分かる！」

マクスウェルが目を伏せ、真実を語り出した。

「二千年前、この世に黒匣が登場した。精霊が死に、自然が絶え、人間も消え行く運命の道へと進み始めたのだ」

当時から分かってたのか……黒匣が危険な物だったのは。

「そこで黒匣から離れる為に、救えるだけの精霊、動物……マナを生み出せる人間達を連れ、私はリーゼ・マクシアを創り、籠もった。この世界はエレンピオスが滅びるまで、降りる事の許されない箱舟だ」

エレンピオスが滅びるまで……マクスウェルは何もしないつもりなのか！？

「で、エレンピオスが滅びるのを待てって……か？」

「それがわたし達と精霊さんわ救う唯一の方法……なんですか」「そいう事だ」

他に手は無いんだろうか？

「けど、このままじゃ、エレンピオスの人は……」

「あんたは何もしなかったのか？」

「私は、黒匣がやがて滅亡をもたらすと、同胞であった人間に伝えさせた」

マクスウェルも……ちゃんと他の手を考えていたのか。

「だが、人間は黒匣を捨てなかった。それだけではない。奴ら、精

霊が絶滅しかかっている事を知ると、このリーゼ・マクシアを襲った」

「ひょっとして、二十年前の？」

「……断界殻にどでかい穴が開けられたんだな」

マクスウェルが頷く。

アルクノアが来た時の事が……。

「そこでここを離れられぬ私の代わりにミュゼを生み出し、敵殲滅の役目を与えた」

「だが、不運にもその時リーゼ・マクシアに入り込んでしまった奴らがいた……」

「……アルクノアか」

もう一度、マクスウェルが頷いた。

「彼の者達は巧みに私の追跡を逃れ、潜伏した。それ故、私は一計を案じた。彼の者達は私の命が消えれば、断界殻も消えると知っている。ならば、その命をエサとすれば潜んだ獲物を釣り上げる事が出来る、とな」

「命をエサ……ですと」

「それで……まさか……」

「ふざけんなよ……」

人の命を何だと思ってるんだ……こいつは……！

「その命を獲物にさらし、立ち回る存在を生み出したのだ。それこそが……」

「……ミラ」

「そんな……」

ミラの真実は、俺達に驚愕を与えるには十分過ぎた。

「けど……あいつ、自分が偽物だなんて知ってたのか？」

「抜かりはない。私の言葉を植え付け、己がマクスウェルだと信じ込むように育てさせた」

徹底して、ミラを『マクスウェルと思い込ませる』事をしたって事が……。

「だが、私とて万一を想定しなかった訳ではない」

「万一……？」

言葉の意味が分からなかった。

「万が一、ミラが死する程の致命傷を負った時、もしくは再起不能に陥った時、それを治す役割を課した存在」

初めに言っていたな。でも……それは機能しなかったって言った。

「お前だ、西風海斗 いや、身代わりよ」

「え……」

何を言われたのか分からずに、だけどそれが衝撃的過ぎて、俺は目を見開いて言葉を失った。

第45話 精霊の主 語られる真実（後書き）

今さらですが自分の中ではアルヴィンとレイアくっ付きちゃいなよ。な考えですよ（笑）

そしてマクスウェルに明かされる真実。

……もうちょっと上手く書ければと毎度の事を思いながら、次回へ続きます。

第46話 造られた存在

「俺が……ミラを……？」

ようやく出た言葉は、そんなものだった。

「気付いていないようなら教えてやろう」

耳を塞ぎたかったのに、言う事を聞かない。

「ミラを生み出して3年、私はある次元を発見した。そこは精霊も黒匣^{ジン}も無い世界だった。だが、それらを使わずともその世界は繁栄していた」

「それって……カイトが言ってた……」

「……二ホン？」

マクスウェルが頷く。

「私はその世界がリーゼ・マクシアに害をなすのか、それを見定めねばならなかった。そこで私は、我が使命の為の齒車をもう1つ造り出し、その世界に送ることにした」

「それが……俺だっけ言うのか!？」

マクスウェルがもう一度頷いた。

そんな……嘘だろ……俺が……マクスウェルに作り出されたなんて……。

「何故、^{ゲート}靈力野があるのか、不思議に思わなかった訳ではあるまい」

確かにそうだ……俺が居た世界ならば、靈力野なんかある筈が無いんだ。でも、俺にはあるって事は……そう言う事なのか!?

「本当に……俺はあんたに、作られたのか……」

「その通りだ。お前は私の使命の歯車」

「でも俺にはちゃんと！ 両親の記憶が！」

「そんなもの、いくらでも植えつけられる」

そんな……じゃあ俺の……父さんと母さんは……最初から居なかった……!?

「ひどい！ そんなの！」

「カイトも……そんな……」

レイアとエリーの声が聞こえた。

「西風海斗も私が与えた名。お前の真の名はフェイト」

「違う……俺は……」

「万一に残したお前までもが謀反を起こすとは……やはり、お前の役目は既に無い。消えよ」

「……ッ!？」

ガクンと膝を折って、俺は地面に倒れた。

まただ。またあの……力を吸い取られる感覚だ……。

……そうか……ミラはあの時、俺がマクスウェルに作られたことを知っていたのか。そしてミュゼも、俺がそう言う存在だと知っていたから、俺の事を『役立たず』と呼んだんだ。

そうか……辻褄は合うんだな……。

俺……このまま死ぬのか……?

そう思った瞬間、フツと身体が軽くなった気がした。

「何!？」

「え……?」

吸い取られる感覚が無くなって、俺が立ち上がると、そこにはセルシウスが居た。

「セルシウスだと……!？ バカな！ お前は二千年以上も前に死んだハズ……!？」

「私はこの方の優しさで、もう一度蘇ったのです。マクスウェル、あなたが生み出した存在に」

セルシウスも、もしかしたら気付いていたのかもしれない。

「カイト、大丈夫ですか？」

「ああ……」

でも……空っぽに感じた……。今までの俺が、全部作りものだったような気がして……。

「カイト……独りじゃないですよ？」

俺に腕を回しながら、まるでなだめるように、エリーが言った。

その言葉にハツとして、俺は回りを見た。

ジュードが居て、レイアが居て、アルヴィンが居て、ローエンが居て、エリーが居て、ミラだってきつと、今までの俺を　これからの俺を認めてくれているんだ。

空っぽなんかじゃない。作りものなんかじゃない。

俺が俺である為のモノは、全部みんなが証明してくれる。

「サンキュな……エリー、みんな……」

エリーの頭を撫でてから、俺はマクスウェルを睨んだ。

「あんたには礼を言わなきゃな……生み出してくれてありがとよ……
……だけどな、俺はあんたの使命の歯車になんかなくてやらない！
この意志は俺のものだ！ あんたの思惑通りには動かない！」

俺は俺だから。俺の意志は俺のものだ。

「あんたは絶対にぶん殴る！ 分かったかクソジジイ！！」
「なっ……！？」

俺の言葉に、マクスウェルだけじゃなくてエリー達も驚いていた。

「カイト君……相当キレてるね……」
「気持ちには分からないでもないですがね……」

レイアとローエンのそんな呟きが聞こえた。

「やはり変わらぬ。真実を知った所でお前達はいつも、感情にまかせて理解できないものを消し去ろうとするのだ！ 大局を見ようとせぬ愚か者どもが！」

もう一度武器を構えて、マクスウェルと対峙する。

「愚かなのはあなただ！」
「精霊の主たる私が愚かだと！？」
「あなたは人の……ミラやカイトの心が分からない愚か者だ！」

ジュード……ありがとな……。

心の中でそう感謝して、俺はマクスウェルに斬りかかる。堅いバリアみたいなので防がれるけど、そんなものの気にしないで斬り続ける。

「ウィンドスニーク！」

「くっ……！」

旋風に吹き飛ばされるけど、体勢を立て直して地面に着地する。

「飛天翔駆！」
ヒテンシヨウク

「チエイスキヤノン！」

ジュードが空中からの跳び蹴り。アルヴィンは追尾する闇の銃弾を放つ。だけどそれも、マクスウェルの前の障壁で防がれてしまう。

「何なのあの壁！」

「堅すぎです……」

何度が攻撃をしていたレイアとエリーもそう呟いた。

くそ……このままじゃ、あのジジイを殴るにも殴れないな……。

「何をやっても無駄だ。人間の力は儂く脆い。精霊の主に刃向かうと言う事がいかに愚かな事か……身を持って知るといい！」

叫ぶマクスウェルのマナが、一気に膨れ上がる。

「巡り踊れ地水火風、深奥に集いて我が鉄槌となせ！」

そして、マクスウェルの背後に巨大な魔法陣が描かれ、その中に

も地水火風の4属性の魔法陣が展開された。

「エレメンタルメテオ!!」

4つの魔法陣から、隕石を思わせるようなマナの塊が降り注いだ。吹き飛ばされた俺達は、地面に倒れ込む。

「分からない。何故齒車ミユをこのような者どもに狂わされたのだ」

倒れた俺達を見ながら、今にも頭を抱えそうな感じでそう言った。

「何言ってるの!」

「ミラ君はずっと変わらなかったよー!」

片膝をついてようやく立ち上がろうとした所で、レイアとティポが叫ぶと、マクスウェルは馬鹿なと一蹴する。

「分からないんですか!?!」

「そうだ! あなたは間違っている!」

「何!?!」

今度はエリーとジュードの言葉に目を見開いた。

「本当に何も知らないんだな」

「おたくさ、本当にミラの親? 一応カイトもだけど」

「そうですね。ミラさんに限ってそのような事……」

「なんだお前達!」

俺達の言っている意味が分からないマクスウェルは、さっきからそう叫ぶだけだ。

「ミラが使命を見誤るなんて、みんな、無いって知ってるんだ！」

足に力を入れて立ち上がる。

「では、あやつのは行動は何だというのだ。断界殻シエルを消すなど使命ではない！」

「ミラは、みんなを助ける為に命を懸けたんだ。自分の心に従って、懸命に生きたんだよ！ あなたの為なんかじゃない！」

「お前はどうかのだ！ 何故術が発動しなかった！」

マクスウェルが俺を見ながら言う。

術って……あの時の魔法陣か！？

「発動したよ。でもな、ミラは俺に生きろって言ったんだ。『君が踊らされる必要は無い』ってな。ミラはあんたの事、気付いてたんだよ！」

「馬鹿な……気付いていただと……！？」

俺の言葉に、マクスウェルは驚愕していた。

「でもな、ミラだってあんに踊らされていた訳じゃない。だってミラには、あいつには『みんなを守る』って使命があったんだからな！」

「ふんっ！ 戯言を！ 我が奥義をもって滅してくれる！」

そう叫ぶと、マクスウェルの乗る機械のような物の色が赤から水色に変化した。

「無慈悲なる白銀の抱擁！ アブソリュート！」

俺達の周りに冷気が集まる。結晶化する直前に俺達は飛び退いた。けど、次の瞬間に割れた氷の破片が、俺達に向かってきた。

エリーを守りながら、俺は破片を斬り落としていく。

「消えないよ……僕は……最期まで自分の意志に従って戦う！」

攻撃を避けたジュードが呟くように言った。

「集え！ 四大精霊！」

「ミラのように！」

マクスウェルに迷う事無く拳を振るうジュード。その気迫に押されたのか、一瞬だけ障壁が傷ついたように見えた。

「ちいつ……！ エレメントチェンジ 属性変化！」

再度機体の色が変化した。今度は青。

「シヨウソウゲキ昇掃撃！」
「センクウレッパ閃空裂破！」

アルヴィンとレイアが同時に上昇しながらマクスウェルに攻撃を仕掛ける。だけど、

「身の程を知れ！」

「ぐっ、あ……！？」

「何、これ……！？」

機械のアームが動くと、2人から何かを吸い取った。

「アルヴィン！ レイア！」

今、あいつ何をした？

2人は力を失ったように地面に倒れ込んでいる。

とにかく、倒れている2人からマクスウェルを離さないといけない。そう思ってマクスウェルに向かって走り出すと、いつの間にかマクスウェルの姿が見当たらなくなっていた。

「カイトさん！ 後ろです！」

「なっ……！？」

ローエンの声に慌てて前方に跳び退きながら振り返る。そこにはマクスウェルが居て、アルヴィン達と同じように俺から何かを吸い取ろうとしていた。

「遅いッ！」

すぐに飛び退いたからだろうか、少し吸われたようだけど、戦えない程では無い。

マクスウェルが吸い取っていたのは、マナだ。俺達からマナを吸い取って、何をしようと言っただけ？

「魔神剣！ 双牙！」

2発の衝撃波を放つが瞬間移動で、避けられる。攻撃に備えようと振り返っても、マクスウェルの姿は見当たらない。

「きゃあ！？」

「なにすんだよ……」

悲鳴が聞こえてその方向を見ると、エリーのマナが吸収されていた。ティポが力無く横たわる。エリーも地面に倒れ込んだ。

この状況はヤバイ……！ みんなのマナが吸収されたら、後は何も出来ずに殺されるだけなんじゃないか？

「こ、のおッ！」

マクスウェルに向かって雷の矢を放つ。だけど、まるで初めからそこには何も無かったかのように、マクスウェルは姿を消した。

次はどこに行った！？ 見回してみると、ジュードのすぐ背後に居た。

「ジュード！」

「ッ！？ テンホウ 転泡！」

瞬時に反応したジュードが全方位攻撃の回し蹴りを繰り返すが、これもまた避けられる。

「ぐう……！」

低い悲鳴が聞こえた。ローエンのマナまでもが吸収された。

「残りは……お前達だけだ！」

「……ッ！ 行くぞジュード！」

「分かってる！」

「ムエイゲンリユウフ 無影幻竜舞！！」

2人で共鳴術技リンクアーツを放つ。

「無駄だ！ クールアブソプト！」

刹那 俺とジュードからもマナが吸収されたのが分かった。

「う……はぁ……」

「く……そ……」

力が入らずに地面に倒れ込んだ。

「これで消し去ってくれよう！」

マクスウェルがマナを集中させた。俺達から吸収した……マナだった。

「世を形成せし八大元素よ！ 今こそ集い彼の者を達に鉄槌を！」

マクスウェルの背後に、先程とは比べ物にならないほどの巨大な魔法陣が描かれる。その中に、火・水・風・地の4属性に加え、雷・氷・光・闇の4属性の魔法陣も描かれていった。

「エレメンタルメテオ！！」

さっきの術と同じ名称。だけど……威力はきつと桁違いだろう。降り注ぐ隕石のようなマナの塊を一瞬間だけ眺め、俺は 俺達はなす術も無く攻撃に直撃して吹き飛ばされた。

第46話 造られた存在（後書き）

ついに主人公の秘密が明らかに！

もう少し自分に文章力があつたらよかったんですがね……

そして戦いは次回に続きます。まさかの3話構成です。ただ単に尺をミスっただけですが（笑）

とりあえず、主人公についてのまとめはいつかやります。……多分。

第47話 歪む運命（前書き）

尺ミスったマクスウェル戦、クライマックスです！

第47話 歪む運命

身体が痛い。

少しも身体が動かせない。

負け……たのか……？

きっとそうなんだろう。身体が動かないのがその証拠だ。

みんなは、どうなったんだ？ エリーは……？

「何度立つても同じ事よ！」

立……った……？

マクスウェルの声に、俺はハツとした。

俺は今、剣を支えにして立ち上がっていた。無意識に。

辺りを見回すと、横でジュードが立ち上がっていた。他のみんなは、地面に倒れていた。

けど……ちゃんと生きている。

俺達はまだ……負けちゃいなかった。

「お前達の命運は尽きた！ もう終わったのだ！」

立ち上がった俺達に向けて、またマクスウェルの背後に魔法陣が出現した。

俺達から吸収したマナはさっきので使い果たしたのか、今は4つしか魔法陣はない。

「終わったとか、勝手に決めつけんな！」

「そうだ！ あなたが決める事じゃない！」

そう叫びながら、俺達は構える。

「馬鹿者め！ 今のお前達は立っているのがやつと。もう私に抗う力など無いではないか！」

隕石が降り注ぐ。

確かに立っているのがやつと。戦う力も今の俺達には無いのかも
しれない。

でも 戦うだけの想いはあるんだ。

「……あるよ。僕は知ってる」

「それを教えてくれたのは……ミラだ」

「なんだと？」

隣に居るジュードと視線を交わす。

それだけで、意思是伝わった。ジュードの気持ちも。

だから俺達は、互いに一歩踏み出した。

ゆつくりと……マクスウェルに近付いていく。

「理解出来ん……こやつら……き、消えよ！」

マクスウェルの攻撃がさらに速度を増した。

だけど、俺達は前に進む事を止めない。

時折当たりそうになるけど、紙一重で避ける。そして俺達も、歩
きから走りに返る。

「うおおおおおおッ！」「」

マクスウェルの表情が引きつったのが分かった。

だけど、そんな事はお構いなしに俺は剣を右手に持ち替えて左腕
を、ジュードは右腕を大きく引いて思い切り、空高く跳躍した。

諦めない。ミラに教わった事だった。

俺とジュードが落下しながら拳を前に突き出す。

バゴンッ！ マクスウェルの前の障壁に拳を打ち付ける。

正直言っただけ。ジュードみたくグロブをしてる訳じゃないから、俺の手は素手だ。

出血したろうし、多分骨も折れた。だけど、俺はさらに拳を強く握り締めた。

障壁に弾き飛ばされないように、さらに力を込めた。

刹那 ヒュンッ！ 一閃が駆け抜ける。同時に障壁が砕かれて、俺とジュードはマクスウェルの顔面を殴り飛ばした。

宣言通り、ぶん殴ってやった。

だけど俺はそのまま地面に激突した。バランスがとれなくて落下したようだ。横ではジュードが上手く着地していた。

さっきの一閃……あれはまさか……！

そう思っただけで感覚の無い手を着いて必死に身体を起こす。立ち上がったジュードは目を見開いていた。その視線を追うと、そこに居たのは

「……ミラ？」

呟いた言葉を理解するのに数秒掛かった。

何でここに……いや、嘘……だろ？

信じられないけど、目の前に居るのは紛れもなくミラだ。幻でも何でもない。

「ミラ……なのか」

アルヴィンが確かのように呟く。

「「ミラ！」」

エリーとティポが嬉しそうに名前を呼んだ。

「まさか……ミラさん」

ローエンが信じられないというように呟く。

「ミラ……ミラ！」

レイアが嬉しそうに叫んだ。

ミラは少し離れたエリー達を一瞥してから、立ち上がったジュードに近付いた。ミラの名前を呼ぼうとしたジュードの唇を、ミラが指で押さえると優しく微笑んだ。

そしてミラは、マクスウェルを睨みつけながら口を開いた。

「すべてのものの未来を守るのが、マクスウェルの使命ではないのか？」

「何故……こんな事が……四大が謀ったというのか……」

「迷ったな。それでは本来の力が出ないぞ」

突然のミラの登場は、完全にマクスウェルの予想の範疇を超えているのだろう。

戸惑うマクスウェルに、ミラが力強く言った。

そう話していると、空に4つの光が見えた。それは俺達全員の周りを飛び回り、魔法陣を描く。

それは俺達を包み癒やす治癒術の魔法陣。怪我が全部治っていく。折れて血まみれだった左手も、支障はない。

4つの光はミラに近づくと、それぞれが形を成していった。それらの光は四大だったんだ。

「いいのか？ お前達」

確認するように問いかけるミラ。四大がなんと答えたのかは分からないけど、きっと俺達に力を貸してくれるんだろう。

「き、貴様！」

叫ぶマクスウェルに、ミラが剣を向けた。

「さあ、ジュード、カイト。行くぞ！」

「うん！ ミラ！」

「ああ！」

武器を構え直すと、エリー達が走ってきて武器を構えた。今なら負ける気はしない。心の底からそう断言出来る。

「恐れるものは何もない！ たとえ相手がマクスウェルであろうとも！」

「こ……こんな事が……」

ミラがいくつもの火球を作り出し破裂させ爆発を起こす。マクスウェルも同様に火球を爆発させて防いでいた。

だけど、未だ驚愕を隠せないマクスウェルが僅かに力負けしていた。

「僕にも信じられない……けど、それをやっちゅうのがミラなんだ！」

「あんたみたいに隠れないで、いつも正面突破だからな！」

俺とジュードも続けて攻撃する。先ほどまでとは違って、あの堅かった障壁は無い。

簡単に攻撃が通った。

「ぐうつ！？ 滅びよ！ レイジングサン！」

「何度も同じ手を喰らうかつ！ セルシウス！」

巨大な火球を作り出して放たれるその直前、俺はセルシウスを呼び出してその火球を凍らせた。

アグリアの時にはやったけど……これも正直言えば賭けだった。

「何ッ！？」

「がら空きだぜ？ マジユウバクエンザン 魔銃爆炎斬！」

「ぐおおッ！？」

隙の出来たマクスウェルに、アルヴィンが少し飛び上がり巨大な火球を放ち、真つ二つに斬って爆破させた。

マクスウェルが吹き飛ぶ。

「続けて、ヒエンシヨウセン 飛燕翔旋！ トジンシヨウ 兔迅翔！」

吹き飛んだマクスウェルを叩き起こしたレイアが、鋭い突きを放つ。

「ぐうつ……！？ 調子に乗りおつて！ 聖なる光よ！ 雫となりて降り注げ！ ホーリイレイン！」

詠唱がされると、空の彼方から光の雨が降り注いだ。

「やらせません！ 黒き超重力の深淵！」

「丸呑みー！」

「ブラックホール！」

そして、エリーが発動した精霊術が、その光を跡形もなく呑み込んだ。

同時に、マクスウェルさえも呑み込もうとする。

「噛み砕け！ 大地の顎あご！ レ・ディスラプション！」

引き込まれようとしていたマクスウェルに、ローエンが精霊術が発動した。

脇の大地が隆起し、マクスウェルを押し潰す。

「やるぞ、ジュード！」

「うん！」

「貫け閃光！ 天翔裂駆槍テンショウレツクンウ！！」

ジュードとミラがリンクし、サマーソルトで飛び上がったジュードの前に、ミラが魔法陣を描く。そしてジュードは魔法陣の力を乗せてマクスウェルを貫いた。

マクスウェルの乗っていた機械の一部が砕ける。

「おのれえ……！！ これで消え去るがいい！！ 結晶せよ！ 根源たる元素！」

マクスウェルが飛び上がり、再び背後に巨大な魔法陣が描かれた。だけど、さっきまでとは違って今回ののは地水火風の属性は感じなかった。

それでもその術の威力は知っている。みんなに緊張が走ったのが分かった。

けど ミラだけは違っていた。

「私の後ろに！ はあぁっ！！」

「メテオスウォーム！！」

言われるがまま、俺達がミラの後ろに行くと同時に、マクスウェルの術が完成し、隕石が降り注ぐ。

けど、ミラは同時に巨大な障壁を作って俺達を攻撃から防いでいた。

「す、すげーな……」

思わず呟いた。

あれだけ俺達を苦しめていた、強力な精霊術の嵐。それをミラは1人で真正面から防いでいるんだから。

「くっ……何故だ！？」

「だから言っただろう？ 迷った状態では本来の力は出せんとな！」

全ての攻撃を防ぐと、ミラは剣を構えながら叫んだ。

ミラ……何だか強くなってるかい？ 今までも強かったけど、なおさら。

「合わせろ、カイト！」

「了解！」

戸惑っているマクスウェル。

決着をつける為にミラは俺と共鳴した。リンク

「「受ける！ 豪炎の翼！ 翔鳳烈火！！」」ショウオウレツカ

弓に変形しながらマクスウェルを斬り上げ、強力な炎を撃ち放つ。

「ぐおおおッッ!？」

吹き飛んだマクスウェルは機械から落ちて、地面に倒れ込んだ。
とりあえず、一件落着つて所か。

「ミラ……」

「ジュード……」

互いに名前を呼び合い見つめ合った。

嬉しそうに、だけど驚きを隠せないのはジュードだ。

ミラは安心した様子だった。

「ミラー!」

そうしていると、レイアが後ろから、エリーが前からミラに抱き
ついた。ついでにティポも。

「エリーゼ、レイア」

「このかんしょく、本物だー」

感触分かるのかよティポ!?

「これほど嬉しい事にまた出会えるとは。長生きしてみるものです
ね」

「信じられねえ……けど、現実なんだよな」

「元気そうだな、2人とも」

ミラがローエンとアルヴィンに向き直って言う。

「良かったよ……また会えて」
「私もだ、カイト」

改めて何を言えいいのか分からなかったから、素直な感想を言
うと、ミラは優しく答えた。

「おかえり、ミラ」
「……ただいま」

喜びを噛み締めるように2人が言つと、どこかで何か音がした気
が……。

そう思つて見回すと、倒れていたマクスウェルが空中に浮かび上
がった。

まだやるのか？
身構えるけど、戦意は無いように見えた。

「ま、まだやるかー、相手になつてやるぞ、このー！」

言葉とは裏腹に、何か腰が引けてる感じた。無意識に安心させる
ようにエリーの頭を撫でた。

「分からん……何故だ……四大……どういつつもりだ」

誰に言うでもない呟きのように思えたけど、マクスウェルの前に
四大精霊が姿を現した。

……つて、何気にセルシウスまで居るし！？

「すまぬ。俺はもう我慢が出来なかった」
「うん。だから僕達ミラを助けちゃった。精霊界に連れて行ってね」

セルシウスがそうだから、つてのであんまりツツコまないけど…
…他の精霊が喋るとちとビックリだな。

マクスウェルはイフリートとシルフの言葉を聞いて、「そのような指示、出してはおらぬ」と呟く。

「盟主。私達に心があるように、誰しもそれを持っています」

「道具扱いするのはダメでし。それが世界の為でも」

「私のマスターも同様です」

ウンディーネ、ノーム、セルシウスに言われて、マクスウェルが押し黙った。

そこにミラが一步前出る。

「マクスウェル、私の使命はあなたのものだったが、同時に私のものでもあった」

ミラが言う。

同じ作られた者なら、俺も前に出て何かを言う事は出来るだろう。

「俺はあんたからの使命なんか知らないけど、自分の心に従ったつもりだよ」

押し黙っていたマクスウェルが俺とミラを見た。

「自らの意思……お前達の心が決めた答えだというのか」

「うむ」

「ああ」

同時に頷く。

「あなたの言う世界は、ただ存在する為だけの世界に感じた。でも、それは生きるとは言わないんじゃないかな」

俺達に並んだジュードがマクスウェルに言う。

「僕は……僕達は生きたいんだ」

ジュードの言葉にミラが一瞬驚いていたけど、すぐに微笑む。

「それもお前の行動を解せぬ原因か。人の心は時として難解よ……」

今まで固かった表情が和らいだ気がした。

「それをないがしろにした結果、途を誤ったという事か」

俺達の言葉に納得したかのように呟くと、

「……断界殻シエルを解こう」

衝撃的な事を言った。

「本気マジなのか？」

それに一番驚いたのはアルヴィンだった。

そりゃそうだ。今まで苦労してきたのに、あっちから解こうと言
い出したのだから。

「断界殻を解けば、断界殻を形成していた膨大なマナを世界中に供給する事が出来る。さすればしばらくの間、世界中の精霊を守る事が出来るだろう。数年……いや、長ければ数十年の猶予は稼げる」

それはつまり……リーゼ・マクシアとエレンピオス。2つの世界を救う術を探す時間が確保されるという事だ。

「そしてフェイト いや、カイトよ。お前に掛けた術も解こう」
「術？」

俺があからさまに嫌な表情をしたからか、マクスウェルは俺の名前を言い直してそんな事を言ってきた。

「ミラが瀕死の時に、強制的にマナを送るってやつか」
「そうだ。ミラにマナを送る為、必要最低限のマナは使われる事の無いよう、枷をつけていたのだ。それを外そう」

枷って事は……俺は今までマナを抑えられていたのか？

「必要最低限って……どのくらいだ？」
「クルスニクの槍1発分、と言えば分かるか」

思わぬ返しに、質問したアルヴィンはもちろん、俺も含め全員が驚いていた。

クルスニクの槍1発分って事は……断界殻を一度消せる程のマナ。つまり ファイザード沼野で吸収された量と同等。

……ははは……実感わかねー……。

「そ、そう言えば、俺のマナは何で治癒術と同じ効果があるんだ？」
「私がマナ自体に治癒術を刻み込んだからだ」

ああ、なるほど……かなり簡単で分かりやすい回答が返ってきた。

「じゃあもう1つ。何で俺はリーゼ・マクシアに飛ばされたんだ？」
「ミラの死の可能性が高まったからだ」

そう言われて考えてみる。

俺がミラと最初に会ったのは、ミラがイル・ファンから逃げる時だった。多分その時には、既に四大の力は無かった。

なるほどな……四大が居れば万が一にも死ぬ可能性なんかありはしないだろう。

だから俺は……^{あそこ}リーゼ・マクシアに呼ばれたんだな……。

「それでは、枷を外そう」

マクスウェルが言うと、パキンと音がした気がした。

刹那 急にマナが溢れ出してくる感覚に襲われ、片膝を着いた。分かりやすい感覚を言うならば、気持ち悪くなったみたいな感じだ。

「ど、どうしたんですか？」

「なにしたんだー」

「急激なマナの増加に、身体が付いていけないのだろう。すぐに慣れる」

そりゃ慣れるだろうけどさ……これはちとキツイぞ……。
でもまあ……礼は一応言っとくか。

「ありがとな、じいさん……」

それを言うだけで、何となく楽になった気がした。

「断界殻の事もありがとう」

俺を気にしていたジュードがマクスウェルを見ながら言った。

「考えるから！ エレンピオスも、リーゼ・マクシアも、みんな一緒に生きられる方法を！」

数十年なんかあつという間かもしれない。けど、やらなきゃならない。

これで全部が一件落着。誰もがそう思った所に、あいつが現れた。

「この世界の神に等しい座を降りるといのか。マクスウェル」
「ガイアス！」

そう。声の主はガイアスだった。

ガイアスはミラを一瞥すると、マクスウェルを睨んだ。

「答える、マクスウェル」

「人の心に振り回されるのに、いい加減疲れたのだ」

本当に疲れたように言うなよ……本当に年寄りくさいぞ。

「お前がリーゼ・マクシアの神の座を降りるのであれば、俺がそこに座ろう」

ガイアス……お前何を企んでるんだよ？

「ただの人間がマクスウェルになるだと？ 笑い話よ。貴様など資格をもたず」

「資格の有無ではない。覚悟をもったものだけが認められる話だ。お前がやらないのであれば、俺がやる」

マクスウェルになる資格つてのもどうかと思うけど……ガイアスの言葉も頷けない。

「その話、私も認める訳にはいかないな」

「悪いけど、俺も賛成は出来ねーぜ？」

「お前達に認められる必要などない」

取り付く島もないな……。

ガイアスが何か合図を出すと、ピシッと空間に亀裂が入った。

「この力……まさか」

そして割れた空間から出てきたのは、なんとクルスニクの槍だった。

「クルスニクの槍！？」

「何でこんなトコに！？」

みんなが驚愕していた。

確かにガイアスは槍を引き上げていたけど……なんたってこんな所に……。

「仕方なかったのです……だって……あなたは私を導いてくれませんもの……」

「ミュゼ、気は確かか！」

そう。クルスニクの槍の上に、ミュゼが不敵な笑みを浮かべていた。

ミュゼはクルスニクの槍から浮く。その瞬間、嫌な予感がした。

「断界殻を消すなんてヒドイ！」

「マクスウェル、貴様は世界の礎となれ」

刹那、マクスウェルの意表を突いたミュゼが、マクスウェルを魔法陣で縛り、槍の照射口に貼り付けた。

「私には断界殻を守る役目が大事……大事、大事なの！」

やっぱり、ミュゼはどこか壊れたようだった。

「放せ、これは命令だ」

「あなたは全て……遅すぎる！」

そして、クルスニクの槍が開いた。

「うごおおあああ！？」

マクスウェルのマナが、槍に吸収されていく。
その間に、ガイアスがミュゼを呼びつけていた。

「よいな？」

「あなた様の御心のままに」

言うと、ミュゼの胸元に空間が開いた。ガイアスは手を入れると、異様なまでの力を発する太刀を抜き出した。

魔剣　そう称してもいいぐらいだろう。

「やめ……ろ……解放する……気か……」

マクスウェルが途切れ途切れに言うが、ガイアス達は聞く耳をもたない。

「これこそ、ミュゼの持つ力、時空を斬り裂く剣だ」

剣を向けながら言うガイアスに、俺達は身構える。
時空を斬り裂くだって？ マジで魔剣じゃねえかよ！

「二度と会う事はないでしょう。さようなら、ミラ。そして役立つ、あなたはいつか殺してあげるわ。大事なモノも一緒に」

「ミュゼ、お前！」

「どういう意味だ！」

問い掛けるけど、ミュゼは黙って微笑んだ。

大事なモノ……？ 一番最初に出てきたのはエリーだ。無意識にミュゼからエリーを庇うような位置に移動する。

「どうして僕達が！ ガイアス！」

「俺は死んでいった者の為にも、エレンピオスへ行く！ お前達はリーゼ・マクシアで大人しくしている！！」

ガイアスの一閃。それは俺達から逸れたと思ったら、俺達の背後の空間を斬り裂いた。

「空間を斬りやがった！」

斬り裂かれた空間が、俺達を引きずり込もうとし始める。

「あ……あ……、だ、だめ……引つ張られる……」

「が、がんばれエリー！」

ティポが叫んだ瞬間、エリーの身体が浮き上がる。俺はとっさに手を伸ばし、エリーの手を掴んで引っ張った。しっかりと抱きしめる。

「大丈夫か、エリー」

「あ、ありがとう……です……」

とは言え、このままじゃいずれはあの穴に引きずり込まれるのは目に見えている。

「マクスウェル！」

ミラが名を叫んだ瞬間、別の場所に穴が開いた。

「何、どうなってるの！？」

「こっちにもかよ！」

「行け！ この者にマクスウェルの名を与えてはならん！」

「マクスウェル！」

どうやらマクスウェルがあのだけを開けたらしい。

その証拠に、ガイアスがマクスウェルを睨みつけている。

「ジュード、みんな！」

マクスウェルの言葉通り、あの穴にミラが飛び込もうとした時だった。

バチバチバチィッ！

ガイアスが斬り裂いた空間。
マクスウェルが開いた空間。
その2つの穴の間に、何かのエネルギーが流れ始めた。

「こ、今度はなにー！」
「いったい何が!？」

レイア、ローエンが呟いた瞬間、3つ目の穴が開いた。
しかも、俺のすぐ横に。

「うわあああああッツ!？」
「きゃあああああッ!？」

何の抵抗も出来ずに、俺とエリーはその穴に吸い込まれた。

* * * * *

「カイト！ エリーゼ！」

2人が吸い込まれた穴に向かって、ミラが叫んだ。

「その空間は……まさか！」

マクスウェルだけはどこに通じているのか分かっているようだった

だが、今のミラ達にはそれを問い掛ける余裕は無い。

「ミラ！ 行こう！」

ジュードの叫びに、ミラは頷いた。

「みんな！ 2人の後を追うぞ！」

ミラは叫んで穴に飛び込む。ジュードも後に続いた。

「レイアさん！ アルヴィンさん！ 行きますよ！」

「分かってる！ 行くぞレイア！」

「う、うん！ 分かってるよ！」

そして、ローエン、アルヴィン、レイアも穴に飛び込むと、その穴は最初から存在しなかったかのように消えた。

第47話 歪む運命（後書き）

人1人を完全に治す程のマナはやっぱりクルスニクの槍と同等かと。

次回はついにエレンピオスへ？　いいえ、ここでまさかのオリジナル編です（笑）

ただの思い付きです。

第48話 元居た世界（前書き）

ここからオリジナル・東京編が始まります。

実在する都市名ですが、街並みは明らかに別物ですのでご了承ください。単に自分の東京の知識が足りないだけなんです。

つまり、東京と言う名の別の都市。と認識して頂ければ恐らく大丈夫です。

第48話 元居た世界

まず冷たい風が頬を撫でて、俺は意識を取り戻して目を開いた。最初に見たのは雲が散り散りな青空。少しだけ赤みを帯びているその空は、とても快晴とは言えないけど曇りとまではいかない。そんな空だ。

背中にはゴツゴツとした堅く冷たい地面。ようやく自分が倒れている事に気がついた。

そして自分の腕には、エリーが抱かれていた。

抱きしめてエリーの温もりを感じながら、何があつたのかを思い出そうとすると、よく分からない違和感を感じた。

あれ……何かが足りないような……何か懐かしいような……いや、気のせいかな。

とりあえず、このまま寝ている訳にはいけないから、俺はエリーを背中に担いで立ち上がった。

辺りは木ばかりで、葉っぱは緑から次第に赤く染まりつつあった。

そして、その景色の中にあるこじんまりとした社を見て数秒、俺は目を見開いた。

「嘘……だろ……？　だって……そんな筈は……！」

誰に問いかけるでもなく、呟きながら社に近付く。やはり見覚えがあつた。

一旦社にエリーを降ろしてから踵を返して走り出した。

ここが俺の知っている場所ならば、ここから見える筈だった。

少し走って石造りの階段を見下ろして、俺はもう一度目を見開いた。

「……戻って……来たのか……？」

俺の目の前に広がる光景。それは、リーゼ・マクシアへと飛ばされる直前まで、俺が住んでいた街だった。

「でも……何で……？」

そこで思い出した。

そう言えばあの時、変な空間の割れ目に引きずり込まれたんだっけ。マクスウエルも世精^{ウルスカー}ノ途から俺をここに飛ばしたんだから、あり得ない話では無い。

「って……今は何でここに居るのか考えてる場合じゃないな」

慌ててエリーの所に駆け寄ると、エリーが目覚めますのは同時だった。

「カイト……？　ここ、は……？」

「ちよつと、説明が面倒だから、みんな集まってからでいいか？」

問い掛けるとコクリと頷いた。そして、ある異変に気付いたエリーは慌て始めた。

「ティポ！　どこー！」

「うわあーん！　エリー！　カイト君ー！」

「ていぶふお！？」

いきなり噛みつかれて一瞬パニックに陥りそうになったけど、この感じ……明らかにティポだ。

「よかつたー、ティポ」

俺の顔から離れたティポをエリーが嬉しそうに抱きしめた。

「他のみんなはー？」

抱き締められているティポの言葉を聞いて、俺は思わず固まってしまった。

「……見かけてない……」

俺達だけしか引きずり込まれなかったんだろうか？
でも、ミラやジュードなら俺達を追ってきている気がするんだけど……。

「あああああああああ！？」

「へ？」

突然聞こえてきた叫びのような声。

次の瞬間、バキバキバキ！ 木の枝が盛大に折られていく音が聞こえてきた。

な、何……今のは？

「何ですか……今のは？」

不安そうにエリーが裾の端を掴んで俺の後ろに隠れた。

俺も少し警戒しながら、エリーをその場に待たせて音の聞こえた方に向かう。

茂みになっている所を覗いてみて、

「……………」

俺は思わず言葉を失った。
そこに居たのは、ジュード達だった。

なんやかんやで合流出来て、俺達は状況把握の為に社の前に居た。

「まず、ここは日本の東京　俺の住んでいた街だ」

俺が言うと、みんなが息を呑んだのが分かった。
いきなり異世界だからな。気持ちには分かる。

「ホントなの？　ここがリーゼ・マクシアとは違う世界なんて」
「カイトの言う通りだろう。現に精霊を感じる事が出来ないからな」

レイアの問いにミラがそう答えた。

そうか。俺の感じた違和感は、精霊を感じなかったからか。
リーゼ・マクシアのように、精霊のいる環境に慣れていたからこそ、感じた違和感だったんだ。

でも、ミラは「しかし……………」と続ける。

「2つ程……………妙な気配を感じるな」

「妙な気配？」

「精霊関係か？」

ミラは首を横に振りながら、「分からない」と答えた。

「とりあえず、今はその気配は置いておき、今後どうするのかを考

えましよう」

「リーゼ・マクシアに帰る方法、ですね」

そうだ。

ここでモタモタはしてられない。

早くしなければ、ガイアスがエレンピオスに何をするか、分かったもんじゃないからな。

「話は長くなりそうだし、俺の家に行こうぜ」

「うむ、その方がいいだろうな」

みんなの了承も得られた所で、俺は自宅に向かおうと歩き出そうとして、動きを止めた。そして踵を返して、みんなの姿を眺める。

……明らかに注目を集めるよな……特にミラは……。

「どうしたんですか？」

「いや……この格好のまま動くと、確実に怪しまれるなあ……と」

問い掛けてきたエリーにそう答える。

俺がリーゼ・マクシアに行った時も結構怪しまれたし……その逆も十分ありえる。

「怪しまれないような服装なんかあったか？」

「どうだろう？ 見てみないと分からないね」

と言う事で、荷物を漁ること数十分。

出てきたのは男女各1人ずつの服だった。

「これ……僕には合わないかな……」

「そうですね。アルヴィンさん向けです」

「オレか……まあいいけどな」

と言う訳で男子は素早くアルヴィンに決定。

「はいはい！ あたし着てみたい！」

「レイアがですか？」

「私は異論はないよ」

そんな訳で女子の方も素早く決まっていた。

着替えの為にアルヴィンとレイアが別にフェードアウト。しばらくして、何故かレイアがミラを茂みから呼んでいた。

茂みで2人が何やら話すと、ミラじゃなくてレイアが戻ってきた。

「どうしたんだ？」

「……………サイズが合わなかった」

何故か落ち込んで言うレイア。

「サイズピッタリだったと思うんだけどな」

「それイヤミ!？」

「なして!？」

だって、ホントパツと見合いそうだったし……。

そんなこんなでアルヴィンとミラの着替えが終わった。

服の事は俺はよく分からないので、説明は省く。漆黒の羽根と交換して貰った服装だと言えば分かってくれろと信じてる。

「じゃあ、俺とアルヴィンとミラでみんなの服買ってくるから、ジュード達はここで待機な」

言って気づく。

この人選……仕方ないとは言え大丈夫なのか？

「気を付けてくださいね？」

「まあ……エリーが心配するような危ない世界じゃないから大丈夫だよ……」

……多分。

「ミラも気を付けてよ？」

「心配するな。私を誰だと思っている？」

ミラだからこそ心配なんだよ……。とジュードの表情は語っていた。

まあ、気持ちは分からんでもないけど。

「ほら、ミラもアルヴィンも武器置いて。さっさと行くぞ」

「武器を置いて行くのか！？」

ミラにめちゃくちゃ驚かれた。

「危険じゃないの？」

「いくら街中とは言え、無防備では？」

「大丈夫だから！ 魔物とか武装した兵士とか出て来ないから！」

むしろ武器持ってたらこっちが怪しまれるから。

「銃も？」

「ダメ！ 郷に入っては郷に従え！」

ことわざが通じるかは分からなかったけど、アルヴィンとミラは
渋々武器を置いて、俺達はようやく街に向かうのだった。

* * * * *

とりあえず手近のコンビニのATMで、いくらか資金を引き下ろす。

コンビニを物珍しそうにするミラとアルヴィンは、正直恥ずかしかった。

気持ちは分かるよ。俺もリーゼ・マクシアに行った時にはそんな感じだったんだろう。

ある意味注目を集めながら、近くの百貨店に着いた。

「それじゃあ、一応手分けしようか。アルヴィンはジュードとローエンの服。ミラと俺はレイアとエリーの服を買おう」

「何でオレ1人？　ってか、女物ならカイト行っちゃ駄目だろ」

俺の提案に真っ先にアルヴィンが反論してきた。

「俺だって……出来るもんなら行きたくないよ。でもな……そうなのと服を選ぶのはミラだぞ？」

「……あ……」

気付いたようにアルヴィンがミラに視線を移した。

すると、ミラが明らかな不満を表情に浮かべた。

「何か問題でもあるのか？」

「い、いや、別に」

慌てて俺達が言葉を濁すと、さらに不満を強めた。

「言っておくが、買い物ぐらい1人で出来る！」

一応二十歳って設定なんだから、それを往来のド真ん中で叫ぶのはどうかと思う。

ほら、くすくす笑いながら通つてく人が……。

「ま、ミラ様がこう言ってるんだ。任せてみねえ？」

「アルヴィン……面白そうか思っただろ？」

「いんや……そんな事思ってたねえよー」

明らかにニヤケ顔なんだけど……ツツコンだら負けか。

「ほら、アルヴィンもこう言っているだろう？ 私を信じて金を渡せ」

「強盗か己は！？」

もしくは悪徳商人か！？

まあ……ここで言い争って注目を集めるのも嫌だし、ここはミラを信じるか。

明らかにおかしいのは却下すればいいだけだし。

「……分かったよ、ミラに任せた……」

結局折れたのは俺だった。

百貨店に来る事はリーゼ・マクシアに行く前でもほとんど無かったから分らなかったけど、女性服と男性服が違う店で売られていた。

この店が特殊なのか、それともそれが普通なのか、俺には分からなかった。

「じゃあ…… 4万渡すから。ちゃんとレイアとエリーの服買ってよ？ サイズも確認して」
「分かってる。任せろ」

めっちゃ不安なんすけど……。

「ほくらカイト君、オレ達も行こうぜ」
「買い物終わったら店の前で待っててな。迎えにくるから」

アルヴィンに引っぱられるようにして店に行く直前に、ミラにそう叫んでおいた。

そうして俺達も店に到着。さっそくジュードとローエンの服を探す事に。

ちなみに、今回買うのは1着だけだ。本当なら2〜3着は必要だろうけど、一学生に3着×6人分の服とか買える筈がない。

だから、後必要なものは、この世界で最も信頼出来る人に頼む事にしよう。

……。

……………。

………何か言い方が大袈裟になった気がするけど、まあいいか。

「カイト、こんなのどうだ？」

「何、アルヴィ……って袴！？」

ボーっと考えている内にアルヴィンが持ってきたのは、真っ黒な袴。

「……一応聞くけど……誰が着るの？」

「ジイさんじゃね？」

やっぱりか。

まあ……確かに似合うのかもしれないけど。でもこれで道を歩くのか……？ どうかの組長みたいにはならないだろうか？

「まあ……とりあえず保留で。他も見てみようぜ」

とは言つものの、一応値段は見ておこうか。

4千円。

即買い決定。

常識なんか知らない。

そんなこんなでジュードの服も購入し、2人分合わせて1万と2千円。安い方じゃないかと思う。

「遅い。待ちくたびれたたぞ」

ミラを拾おうと店の前に行くと、壁に背を預けていた。手には買った服が入っている紙袋。足下には……………誰コレ？

「み、ミラ……その足下で伸びてる奴は何だ？」

おそろおそろアルヴィンが尋ねると、ミラはいつものように軽く答えた。

「いきなりしつこく話しかけてきて、いきなり腕を掴んできたから投げ飛ばした」

やっぱり何かやらかしやがったか！？

買い物も不安だったんだけど、正直こっちの方が不安だった。

倒れている人に気付いたのか、次第に道行く人々が足を止めてこちらに注目してきていた。

そして、警備員の姿を視界の端に捉えた時、俺は2人に叫んだ。

「ミラ、アルヴィン、逃げるぞ！」

「む、何故だ？」

「いいからこっち！」

「やっばこうなのかよ！」

俺は不思議そうにしているミラの手を引いて、アルヴィンは叫びながら、俺達はジュード達の所に走って戻った。

結局、ミラが何を買ったのかはこの時点では見る事が出来なかった。

* * * * *

「お疲れさま。何があつたのかは……聞かないでおくよ……」

社の前で、肩で息をしている俺達を見ながらジュードが言った。

「と、とりあえず……怪しまれないで行動出来そうな服買ってきたから、さっそく着替えてくれ」

紙袋に手を入れて、ジュードとローエンに服を手渡した。

……今さらながら、何で袴なんて買ったんだろう？ 怪しまれはしないかもしれないけど、注目は集めるよな。

それに比べてジュードは俺が選んだ無難な服、Yシャツとジーンズだ。この組み合わせは普通だろう。多分。

「これはどうやって着るものなのでしょうか？」

「あ……着方は教えるよ……ミラも、早くレイアとエリーに服渡して」

「うむ、そうだったな」

ガサゴソと紙袋を漁り始めたミラ。そしてレイアとエリーに服を手渡した。

「ちよっ……な、なな何これ!？」

「何が……って、え……」

レイアが持つて広げた服に、俺は絶句した。

……あれってまさか、所謂ブルマと言うやつでは……？

「か、カイト君！？　これ何！」

顔を真っ赤にして俺に問い掛けてきたレイアの声にハツとして、俺はミラに尋ねた。

「ミラ、何であんなのを！？」

「店員に動きやすいものはないか？　と聞いたら出てきたのだ。動きやすいのであれば、レイアの動きにも支障はあるまい？」

……店員、何考えてやがんだ？

いや、ミラも考える点がなんかおかしい……。

「これ、服なんですか？」

レイアの広げた旧世代体操服を見て、エリーが言った。

「体操服って言って、動きやすい設計がされてるんだ。でもそれはかなり昔の話で、俺も実際に見るのは初めてだよ」

「そ、そんなの何で買ってくるの！？」

「いや……買い物は1人で出来るとミラが強く言うから……」

確かに買い物はちゃんと出来たと思う。けど……ブルマはねえよ……いろんな意味で。

ちよっと涙目になったレイアが、助けを求めるように俺を見てきた。

けど、もう服を買う金もあんまり無い。

「……俺の家まで我慢してくれ……」
「そ、そんなあゝ」

レイアはガツクリと肩を落とした。

「どうした、レイア？」

「ミラ……それはないよ……？」

呆れた様子でジュードが呟いた。

「……って事はまさか、エリーも？」

おそろおそろ聞いてみると、首を振った。

「わたしはこれです」

「……………」

広げられた服に、今度は違う意味で言葉を失った。

簡単に言えば白いワンピース。むしろそれ以外に表現が分からない。
い。

普通に エリーには似合いそうだと思う。どこかのお嬢様みたいな感じで。

店員……本当に何を考えているんだ……？ ワンピースとブルマの差はいつたい！？

「ミラ……？」

「エリーゼのは、子どもが着る服を教えてくださいと」

ああ、なるほど。

何となく納得してしまった。

「と、とりあえず、エリーとレイアも着替えてな」

「はいっ」

「あうう……」

レイアにはドンマイ以外の声を掛けられなかった。

トラブルはあったけど、全員着替え終わって集合した。

「なかなか似合ってるじゃないか、ジュード」

「そう、かな……ありがとう、ミラ」

照れながらジュードが言う。

まあ、地味な感じになると思ったけど、本当に似合ってるな……。俺のセンスが悪くなかったらもっと良くなっていいそうだ。

「ローエンも、何か威厳を感じるよね」

「これを着ていると、気持ち引き締まりますよ」

そして 首領^{シド}が居た。

もう首領と書いてローエンと読んでいいんじゃないかという具合に。

「……な、何、アルヴィン？」

「え……いや……何でも……」

「……………エッチ」

「どうしてそうなる!？」

恥ずかしそうにもじもじしながらレイアが言った。アルヴィンはレイアの足でも見ていたんだろうか？

俺も初めてブルマ見るけど……あれは確かに恥ずかしいだろうな。……今思っただけ、レイアっていつもスパッツなんだから別に変わらないんじゃない？

「わ、わたし、似合ってますか？」

顔を赤くしながら、エリーが上目遣いで言ってきた。

「うん、似合ってる。可愛いね」

「~~~~~っ」

「カイト君のたらしー」

「何で!？」

素直な感想を言ったのに。

でも……ワンピース寒そうだな。

さっき携帯見て確認したけど、今は10月。少しずつ寒くなる季節だ。さらにもう日は暮れそうだ。肌寒いは通り越してる。

だから俺はそつとブレザーをエリーに掛けた。

恥ずかしそうにしていたエリーは、さらに顔を赤く染めた。

「さて、そろそろ俺の家に行こうか」

俺はみんなに促して、みんなで自宅に向かう事にした。

* * * * *

俺の家はセキュリティー完備の1LDKのマンションだ。

学校にも近いって事でここにしたんだけど、家賃は結構キツかったり。まあ、幼馴染の両親が少しだけ援助してくれてるから大丈夫なんだけど。

ま、そんな話はどうでもいい。

逃げるようにして街を移動したけど、やっぱりこの異様なパーティは目立った。不幸中の幸い、日が暮れて来ていた事もあったから下校中の学生とかも少なくて済んだ。

そうしてようやく着いたマンションの入口。エレベーターの前で俺は見覚えのある背中を見つけて足を止めた。

うつすら赤み掛かった茶髪。それを左右に結った少女。服装は俺が通っている公立校に指定されている女子用のブレザー。

……まさか……。

「どうしたんですか、カイト？」

俺が動かない事を不審に思ったエリーが俺の名を呼ぶと、少女の身体がピクリと震えた。そしてゆっくりと振り返り、俺と目が合うと目を見開いた。

「え……海斗……？」

俺の名を口にした少女を、エリー達が見やる。

少女は信じられないと言うように、目を見開いたまま涙を流した。

そう。俺の目の前に居た少女は

幼馴染の華沙かさね音だった。

第48話 元居た世界（後書き）

ついに幼馴染が登場！

正直この東京編は思い付きの産物なので、賛否両論になるかと思いますが、最後まで読んで頂けると幸いです。

次回からしばらく更新が少し遅れると思いますが、なるべく1日更新を目指します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0784x/>

テイルズオブエクシリア ～異端の迷い人～

2011年11月24日17時58分発行